
ソリオンの八ガネ

伊那 遊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソリオンのハガネ

【Nコード】

N7255S

【作者名】

伊那遊

【あらすじ】

異世界の魔術の進歩により、日本と異世界ソリオンが繋がってしまった！

舞台は異世界の玄関口、セイラン王国のパルミナの街。一部で日本人の移住も始まったこの街にある、剣と魔法を教える騎士学校に神谷鋼は入学を果たす。かつてこちらの世界で共に過ごした、仲間との再会のために。誤字や細かい表現など気付き次第修正しています。展開等に関わる修正を行った場合はここに明記します。

2011.6.30 15話の日本人の剣術経験者数に矛盾があ

つたので訂正

はじめに

当小説は作者の趣味と自己満足で書かれております。

至らない箇所が多々あると思われませんが、それでも構わないという方はどうぞお読みくださいませ。

誠に勝手ではありますが、当小説では感想の受け付けを致しておりません。

これはひとえに作者のキャパシティ不足、メンタル面の余裕の無さに起因するものでありまして、一つ一つの感想に丁寧な応対をなさっている他の小説執筆者さんの処理能力を、きっと自分は真似できないと考えた次第だからです。

多くの方の意見を受け止める余裕が作者にはなく、あれこれと悩んで筆が止まるよりはと、このような措置になりました。ご了承承ください。

のんびりと不定期の更新を予定しています。温かい目で見守って下されば幸いです。

0 異世界

異世界ソリオン。

そこは剣と魔法が支配する大陸で、怪物じみた魔物も多数住まうという。

初めての帰還者が現れたのは二十年ほど前の事だ。

彼が語った話はまともに取り合われず、記憶の錯乱として片付けられたとある精神科医のカルテに記述が残っている。ニユースにもならなかった事件とも呼べぬ一件だが、それが日本という国が異なる世界の存在を感じ取った最初であるようだ。

これ以降、同じような現象は起き続けた。最初の彼と同じく、かつて行方不明となり消息を絶っていた日本人が、時をおいて帰ってくるという出来事が少しずつ頻発するようになる。帰ってきた者達は口を揃えて、「ここではない知らない世界」にいたというのだ。メディアは神隠しだと騒ぎたて、週刊誌は彼らの語る異世界の様子を面白おかしく書き連ねた。

当時の価値観ではそれは冗談のような話だった。

地球外といった概念とは根本的に違う、物理的な距離にはない場所。異世界としか呼びびよらない空間がどこかに存在しているなど、子供の作り話以下だと断じる声も多く出たという。

結論から言えば、それは確かに存在していた。

それから時と共に帰還者は増え続け、これまで日本でも毎年出ている行方不明者のうち、一部はどうやら異世界に入り込んでいたようだと言明していく。

六年前にはとうとう異世界人の存在も確認された。向こう側の住

人、異世界ソリオンの技術者が世界の壁を越えてやって来たのだ。

両世界の間にはなんらかの欠陥的構造があり、何かの拍子にこちらから向こうの世界へと落ちてしまう人が昔からいた事。その逆は自然発生せず、だから地球の側では異世界の存在が察知できなかった事。世界の壁を破る研究が向こうの世界で進むにつれ、帰還できる者が最近になって現れだした事。様々な事が分かっていった。

日本政府は行方不明者帰還のためと研究の支援を確約し、これにより正式に異世界の存在が認められた。

そして、三年前。

それまで一握りの個人、それも一部の異世界人のみが自由に行き来できた異世界と地球との間に、持続する世界間トンネル『門』が開通したのである。

こうして地球の国日本と異世界ソリオンの王国セイランは、世界を超えて国交を結ぶに至ったのだ。

0 異世界（後書き）

異世界モノです。主人公無双系、ハーレム物といった性格の作品にしていく予定ですので、それらの要素、あるいはご都合主義など苦手な方はご注意ください。

1 夢の中、かつての自分

夢を見ていた。

こちらはもう一人だというのに、鉤爪を振りかざして醜悪な悪魔達がこちらに殺到してくる。

悪魔、といってもそれは見た目で抱いた勝手なイメージであつて、実際これらがどんな生物なのかはよく知らない。ホンモノの悪魔だろうが宇宙生物だろうが関係なかった。重要なのは、この化け物はちゃんと生きている存在であり、殺せば当然のように動かなくなるという事実のみ。

悪魔は小さな人型をしていた。全長は一メートルほどで、首はなく胴体の延長のように顔がついている。縦長の丸い体からは、ひょろりとした細い手足が伸びていた。肌は茶色がかったくすんだオレンジ色で、質感はなめらかな皮のようになっていた。

明らかに地球には存在しない生物だ。十匹以上徒党を組んだその悪魔に、追い詰められつつある。

しかしこれ以上は下がれない。もう後が無いのだ。ここを通してしまえば、もっと多くの悪魔と戦っている仲間達のもとへ合流を許してしまう。できる、できないの問題ではない。やらなければ全滅するという状況だった。もはや壊滅一步手前の人間チームは、あつという間に食い尽くされ蹂躪されるだろう。

この場所は地獄だ。悪魔がうるつき、救いなんてありはしない。こちらの戦力はたかだか二十人ほど、それが百を超える悪魔達に包囲され、孤立している。

恐怖を押さえ込もうとし、上手くいかない。手に握った剣の先は震えていた。

ちよこまかと動く二足歩行の小悪魔の一匹が迫り、こちらに向かって飛び込みながら爪を振るう。

あ、死んだわ、俺。

不吉な確信と共に諦めが心中を占める。地獄にいてもいまだ捨てられずにいた、死にたくないと思死に思う気持ちはどこかへ行ってしまった。

そんな心など、結局何の役にも立ちはしなかった。

襲い掛かる爪を横から掴み、小悪魔を投げ飛ばす。これで数秒くらはいは延命できたわけだが、まぐれを喜ぶ気にはなれなかった。

どうせ、死ぬまでいつまでも奴らの攻撃は続くのだ。どうせここで死ぬのだ。

多分、自棄になってたんだろう。死んだつもりで腹をくくれば、皮肉な事に緊張も恐怖も忘れた。

左から踊りかかってきた悪魔を縦に斬り伏せる。さんざん使いまわして切れ味が落ちていたのだと感触で実感できた。

挟み撃ちするように攻撃が来たので、あえて一匹に近づきそいつの攻撃以外をかわす。

目の前の敵の爪は剣で受け、そのまま胸に突き刺した。これだと鈍った刃でも奴らの体を通ってくれた。

剣を抜き出しつつ、背後から来た敵の目に柄部分を叩き込む。怯んで縮こまった悪魔を踏み台に、囲まれつつあった状態から脱出する。

まだ、生きてる。

不思議だった。命を諦めた途端、今までよりもなめらかに動けた

気がする。

ああ、そうか。

諦めて、開き直って、気付いた。これまで自分は、命が大事だから安全に戦おうとしていたのだと。

それはそもそも戦いではないのだ。一瞬先の自分が死ぬ可能性を受け入れるからこそ、命懸けの駆け引きが出来る。そうして、死ぬしかない状況でも自らで変えていく。

悪魔のあまり硬くない足を切り落とし、蹴飛ばす。移動が困難になった離れた敵は、もはや何の脅威でもない。

攻撃の密度が増せば、こちらは後退しながら奴らの伸びてきた手を狙う。切り落としした手がこちらへ転がってくる。

奴らの爪付きの手はもはやなまくらの剣よりも殺傷力がありそうだった。拾い上げ、それを武器に体重をかけてぶち込む。そしてねじる。一匹を絶命させた。

要は相手を無力化できればいいのだと知る。どこかで見た通りに剣を振り下ろすしか知らなかった自分には、それは目から鱗が落ちるような発想だった。

幸運なことにそういう才能には恵まれていたらしい。

気付けば悪魔は全て地に伏していた。

そうして敵を皆殺しにした後も、息を潜めた悪魔からの奇襲を警戒し続ける。生き残れた喜びは一欠けらも感じていなかった。

この時、ようやく実感として思い知っていたのだ。安全など気にするだけ無駄で、悪魔の住処にいる限りいかなる時でも命は脅かされているのだと。

戦闘が終わっても安堵できず、敵を殺す事だけを考えるようになった昔の自分を。

夢を見る今の自分が、無感情に見下ろしている。

単に、環境へ適応しただけとも言えるだろう。なんとか生き延びて日本へと帰ってきてからは、さすがに四六時中物騒な思考が浮かぶなんてことは無くなった。だからこれは、一時だけの異常な精神状態だったに違いない。

それでも、この時を境に自分は大きく変わってしまったのだと思わずにはいられないのだ。

また日本で暮らし、平和な生活に適応しなおしても。こびりつくような違和感を覚えずにはいられなかった。また悪魔の巢に放り出されて、命のやり取りをしたいかと訊かれれば自分はNOと答えるだろう。しかし、これから先何者にも脅かされない穏やかな生活を一生送り続けたいかと訊かれれば、それにもNOと答えるだろう。自分は人になりたいのか、獣になりたいのか？

答えの出ないその問いこそが、異世界での経験がもたらした彼の悩みだった。

そして、神谷鋼^{かみやいづ}は目を覚ます。二度目にやってきた異世界の朝は、こうして始まった。

2 騎士学校の入学式

寮から学園の間にはさしたる距離もない。

本来なら徒歩で三分足らずの通学路を、ことさら時間をかけて神谷鋼は進んでいた。それが隣を歩く同行者の要望だったのだ。

「うわー、やっぱりいいよねえ、この光景」

その同行者、各務日向かがみ ひなたがきよるきよると辺りを見回しつつ感嘆の声をあげた。異世界の朝の町並みは、今日が初登校の鋼達にとってはまだまだ見慣れないものだ。

レンガ造りのパン屋の店先では、素朴な木綿のシャツとロングスカートの売り子の女性が朝食向きのパンを並べている。騎士学校の日本人生徒には早くも人気なようで、数人の列が出来始めていた。反対側の路肩では行商人のような風体の男性が、小間使いらしい少年と共に馬車の中へと荷を運んでいる。道をゆく通行人達の中には、いかにも屈強な肉体の傭兵のような姿もあって、そんな彼らの腰や背には鞘に納まった剣も見受けられる。

日本とはかけ離れた街の様子を日向は興奮した面持ちで眺めていた。

「ただの街だろ。どうせすぐ慣れる」

「もう！　すぐそうやって夢の無い事言う！　現実主義もいいけど、こういうのは景色一つとっても楽しんだ者勝ちなんだから！」

この場合負けたのは自分なのだろうか。勝ち負け、という基準に少し釈然としないものを感じながらも、あまり気にせず鋼は頷いておく。

「ねえルウちゃんー！」

もう一人の同行者に日向は同意を求めた。あはは、と苦笑を返して村井凜は明言を避けた。

「寮の朝ご飯もいいけど、学校行く途中で買い食いもアリかなあ」のんきに日向はそんな事を言う。そうしてゆったりとした歩調で三人が歩いていると、間もなく目的地の門が見えてきた。

二メートルほどの高さの白い石造りの塀が左右に続いている。丁度鋼達の正面だけ塀は途切れ、そこが正門となっている。立派な日本語で校名が彫られていた。

パルミナ騎士教育学園。

それが本日から、鋼達が通う事になる学校の名である。

門の両脇を固める異世界人の門番二人は、厳密にチェックしていないのかそれとも鋼達が胸に着けている騎士候補のバッジに気付いたのか、門をくぐる際特にこちらに反応も示さなかった。「おはようございまーす！」と元気良く日向が、鋼と凜も控えめにだが挨拶を投げかけると、兵士達も笑みを浮かべて「おはようございます」ときつちり返してくれた。

通学路もそうだったが、学園の敷地内にも今日の入学式のために登校する少年少女の姿がちらほらと見られる。彼らのうち何人かはこの後クラス分けで一緒に教室になるのだろう。皆入学案内のパンフレットをその手に、一つの流れとなり同じ方向を目指している。

「さて……クラス分けはどうなるかな」

「三人一緒だといいいけどねー。さすがに無理かな」

鋼と日向のやり取りに凜が微妙に悲しそうな顔をした。彼女は普段からあまり口数も多くなく、自己主張も弱いめで、有体に言えば人見知りである。言葉にせざとも同じクラスになれない可能性を悲嘆しているのは、付き合いの長い二人には読み取れる。

見渡す限り、そして案内の地図を見る限りでは学園の敷地は広大だった。

前庭、とでも呼べばいいのか、正門から最も近い校舎との間には芝生のスペースが取られている。その先の校舎の壁は大きな吹き抜けになっていて、その正面玄関から中庭のほうへと直接通じている模様。玄関をまっすぐ抜けずに建物内で左右に曲がれば、それぞれの方向へ伸びる校舎の中を歩ける事だろう。

地図によると今見えている大きな校舎の壁部分は、カタカナの「口」の形の底辺にあたるようだ。

これが学園のメインとなる建物で、あとは講堂に食堂に図書館、離れの校舎であるらしい尖塔などが敷地内の外周に配置されている。入学式が執り行われる講堂へ向かうべく、正門を抜けて左へと鋼達も歩き出した。

「広い学校だねー」

「そりゃ日本と比べたら土地余ってるだろうからな」

人口密度が異常に高い日本に比べて、ここセイラン王国を含むソリオン大陸は圧倒的に広い。手付かずの土地も多く残っている。この世界はまだまだ発展途上なのだ。

こちらの文明レベルは中世の西洋に近い。ただし地球には無いソリオン独自の文化、魔術というものが根付いているし、ただの動物以上に強力な生命である魔物も住んでいる。日本がこちらから学べる事が多いのも事実で、技術交流の一環として一年前、パルミナ騎士教育学園は設立された。

今のところ、日本人が日本国籍を持ちながら通える唯一の異世界の学校だ。そこに鋼達三人は揃って二期生として入学してきたのである。

歩いている内、ほどなく講堂が間近に迫ってきた。その途上で鋼は足を止めている生徒の集団を発見した。

「なーんか揉めてるな」

少し歩幅を緩めつつ、注視する。

講堂の入り口から二十メートルほど離れた位置に、何やら剣呑な

雰囲気を放つ生徒が五人集まっている。見たところ全員日本人で、鋼達と同世代の男女である。白を基調とした彼らの制服は鋼達が着ているのと同じもので、恐らくは新入生かと思われた。

いかにも柄の悪そうな、『俺は不良です』と自己主張している感じの男子が三名。見る限りでは、そちらが残りの二人に絡んでいるようである。

絡まれている方は男子と女子が一人ずつで、男子が女子を庇い、それを不良達が揶揄している、という図に見える。

「あの、どうしましょう」

集団と鋼とを見比べながら凜がおずおずと尋ねてきた。見るからに揉め事という雰囲気を察してか、気まずそうに新入生達は迂回して通り過ぎていく。さすが事なかれ主義の日本人らしい対応で、鋼もそれを見習う事にした。

「どうするも何も、放置でいいだろ？ 殴り合いの喧嘩してるわけでもないんだし」

「でも今にも三人のほうが出しそうじゃない？」

日向がそう言うので改めて視線を向けてみたが、聞き耳を立てずとも険悪な声ははつきり聞こえている。

「だから俺らはそいつに話があんだよ。お前は呼びびじゃねえって」不良の一人が男子生徒に言っている。目当ては女子生徒で、不良達が彼女に声をかけたところに男子生徒が割って入ったのだろうか。見てみれば女子のほうは人並み以上に整った顔立ちをしていて、雑誌の表紙を飾っても違和感が無いくらいには綺麗な子だった。徒党を組んで調子に乗った三人組が、初対面の少女に軽々しく声をかけた様子がありありと想像できる。

ただ事態はもっと複雑なようで、女子も不愉快そうに不良達に文句を返している。むしろ喧嘩になりそうなのを通りすがりの男子が一人で押し止めているのかもしれない。近づくにつれてより詳細に彼らのやり取りは聞こえるようになったが、出来る限り聞き流し、鋼は連れの二人に目配せして無視する事に決めた。

「ああ！？ 喧嘩売ってんのかてめえ？」

「はあ？ あんたらが売ってきたんでしょ。喧嘩売るのも三人群れてようやくみたいけど！」

かなりヒートアップしている。

入学初日なのだしもう少しお互い自重すればいいのに、と完全に他人事として考えながら鋼は少し離れた場所を通り過ぎた。

その時。

「何の騒ぎだこれは！」

大喝が空気を震わせた。

これには講堂へ歩いていた他の生徒達も何事かと足を止め、日向も凜も振り返る。二人が止まったので鋼も立ち去るのは諦めて、事態を見守るのに巻き込まれてはかなわないと彼女達をもう少し離れさせる。

教師でもやって来たのかと思いきや、予想に反して声の主は制服姿の少年だった。しかしその身なりは日本人のものとは違った。

「往来で何を騒いでいる！ お前達、新入生か？」

金色の髪にグリーンの瞳。あまり大柄ではないかめしい顔つきの少年が、鋭く新入生達を睥睨している。これが地球上であれば外国人と見紛うところだが、この学園の入学資格を持つのは地球では日本人だけだ。日本国籍を持った外人だとあり得るのか知らないが、普通に考えて異世界人だろう。

パルミナ騎士教育学園は技術交流のため日本人を受け入れているとはいえ、何も全員がそうというわけではない。生徒のおよそ三分の一は異世界人。つまりこの国、セイラン王国の人間である。

ただ教育を受けるためだけに入学した懐に余裕のある平民層もいれば、将来の道が約束されているような貴族階級の子女も通っているそうだ。このあたり色々と複雑で、階級差による貴族と平民の間の線引きや差別意識等、日本人にとってはあまりピンと来ない問題

も多く含まれている。貴族と問題を起こすと非常に面倒な事態になる、とはあらかじめ日本の役人には何度も釘を差されている事柄だ。威風堂々と現れたセイラン人の男子生徒の高圧的な態度に、貴族かもしれないと感じ取ったのだろう。五人の新入生は全員勢いを失った。

「新入生かと聞いている」

「……ええまあ、そうですね。全員」

絡まれていた側の男子が関西弁っぽい訛り口調で五人を代表して答える。

「僕は名はマルケウスニル・ガンサリット。見たところお前達、二ホン人のようだが」

セイラン人の人名は地球の欧米諸国と同じで、個人名が先に来て家名が最後にくる。そしてその間にもう一つ名前が挟まっているなら、それはこの王国では貴族である事を示していた。

「ええと、自分の名前は長谷川省吾はせがわしやうごです」

関西弁の少年が先んじて名乗り、隣の女子生徒のほうへ視線を送る。いがみ合いを止めようと割って入っただけあって一番冷静なのも彼だったようだ。貴族が名乗った場合、こちらも名乗らなければ失礼にあたる。すぐさまそれに思い当たり、他の日本人達にも気付かせるよう率先して口を開いたのだろう。

女子のほうも察した。

「私は有坂伊織あさか いおり……、です」

明らかに同年代のマルケウス少年に迷った末に敬語をつけ、彼女は次に不良三人組を見る。渋々、彼らもそれぞれに名前を述べていく。

「それでお前達、これは何の騒ぎだ」

「いやあ、些細な行き違いですわ。つまらん事で口論になって、みんな頭に血昇ってしもつて。もう頭は冷えましたわ、騒いでもせんなあ」

長谷川という男子がまた代表して答え、任せたほうがいいと判断

したのでろつ他の四人も口を挟まなかった。

「ニホン国には貴族というものが無いが、皆教育を受けている者達だと聞いている。相応の敬意は払うつもりだったのだが、お前達は違うのか？　こんな往来で聞くに堪えない罵り合い、育ちが知れるというものだ」

上手く長谷川が誤魔化したように思えたが、どうもこの貴族の少年、やや粘着質なようだ。

嫌味つたらしい台詞に有坂や三人組は露骨に面白くなさそうな顔をしたが、長谷川は角が立たないよう柔らかく受け流すに留める。

「仮にも今日から騎士候補生になるなら、皆の規範となるような節度ある行動をしてもらいたいものだな。お前達のせいで他の騎士候補生の品位も疑われるんだ」

「ほんとすんません。次からはしっかり気いつけますわ」

「ふん。まあいいだろう」
さすが貴族、無駄に偉そうだ　なんて横で感心していたのがいけなかったのだろう。

「お前達もだ、そのニホン人」

貴族少年の矛先が、唐突に鋼達のほうを向いた。

「え、俺達？」

「揉め事の横をこそそと見てみぬ振りで通り抜けようとは、騎士候補生が聞いて呆れる。臆病者がなれるほど騎士は甘くないぞ」

よくもまあ、ここまでイチャモンがつけられるものである。二人の少女がちらりと視線を寄越すので、先ほどの長谷川のような役目は鋼が請け負う事にした。

「いやあ、別に見なかった振りはしてねえよ。とことん言いたい事言い合ったほうが今日が初対面の生徒同士、相互理解も深まると思っただ」

他人事だしどうでも良かった、というのが本当のところである。

マルケウス少年は探るような胡乱な目つきで鋼をしばらく見た後、日向と凜にも一瞬だけ目を向け、あごを講堂のほうへ向けた。

「……ふん。さっさと行け」
「どーも」

タメ口についても何か一言あるかなと構えていた鋼は拍子抜けしたものの、日向と凜を連れて歩みを再開する。

五人の日本人も一緒に許しが出たようで、不良三人組がすぐさま鋼達を追い抜かずかと早足で講堂へと入って行った。マルケウス少年は動かさず、まるで新入生の監視が己の義務だという風にもので直立している。貴族というものはよく分からない。

残った生徒二人、関西弁の男子と強気な女子は鋼達の隣に並ぶ。しばらくは皆、無言を通した。

講堂に入り貴族少年と十分な距離が取れてから、強気な女子、有坂が口を開く。

「……何あの偉そうな貴族のお坊ちゃん。嫌味言う相手でも探してたの？」

「まーまー、周りに迷惑かけてたんは確かやし」

関西弁の男子、長谷川がそれを宥めている。

講堂の広さは鋼が通ってきた日本の小学校や中学校の体育館とさほど変わりはない。採光のための大きな窓がいくつも並び、日本の学校なら校長が長話をする際に使うであろう壇上にあたる部分が豪華に装飾されているのを除けばほとんどそのものと言えた。建物も基本は木造で、この学園が建てられる際日本政府の技術協力もあったと聞くから日本の体育館そのものをイメージして造ったのかもしれない。

講堂内に据え付けられた時計を見る限り、式の時間まではまだ二十分はある。それでも新入生はあらかたこの場に揃っているようだ。生徒達が立ち並び、話し声でそこそこ騒がしい。順番などの案内は見当たらなかったがそれぞれ勝手に日本人とセイラン人に分かれており、更にセイラン人はどうやら貴族と平民とでも分かれているようだった。

「ねえ、これって勝手に並べってこと？」

「そうだな、教師っぽい大人も奥で忙しそうにしてるし。日本と違っってはこっちはどういうの、適当なんだろ」

「でも貴族の人もいるのに、こんなアバウトでいいのかなあ」

日向と鋼がそう話していると、凜もおおずおおずと発言した。

「多分、貴族の子弟にだけ目付け役の教師がついているんだと思います」

「へえ。さすが身分の差というか……」

凜の言う通り、よくよく見れば貴族生徒の集団の周りにだけ大人が二人張り付いている。列に加わろうとした平民を追い払ったりする役目でもあるのだろう、多分。実際どうだかは知らないが。

日本人生徒の列へ加わろうとした矢先、長谷川が気安い口調で話しかけてきた。

「なーなー、一緒させてもらってもええ？」

「ああ。……お前らも構わないよな？」

元からの同行者二人が頷き、それで新たに二人を加えた鋼達は列の最後尾へと歩み寄った。列と言ってもどう見ても立ち位置は適当で、かろうじて四角形を保っているだけの雑然とした人ごみに近い。先程の不良三人組だけが列から離れた後方のスペースに陣取っており、一応彼らからはなるべく離れておいた。

「いやー、良かった良かった。知り合いもいてないし、一人寂しく並ぶ羽目になるとこやったわ」

「ってことは、そっちの有坂とも知り合いじゃないのか」

「ちやうよー。さっきのは女子がなんか性質たち悪いのに絡まれてんなー思っつて、わいが勝手に首突っ込んだだけやで」

「どうでもいいが、鋼は一人称が『わい』な関西人を初めて目にした。

「ねえね、さっきのは何である人達に絡まれてたの？」

日向が有坂に訊いた。

「さあ……？ 講堂前で溜まってゲラゲラ笑ってるから、どこにでもこういうのっているんだなーって見てたら、なんか寄ってきたの。

無視してたらキレだして」

「有坂さん美人だから、ナンパ的なノリだったのかもね」

「ありがと。言っても、あなたもそっちの子も、あたしよりずっとモテそうだけど」

「えええ！ ルウちゃんはそりゃあ綺麗だけど私なんか全然普通だよ！」

まあ、同じ学校だった鋼の知る限り、この日向という少女はおよそ色気や恋などとは無縁であるが。しかし人気者だったのも確かで、有坂の言い分にも頷けるものがある。

外見だけで言えば日向はかなり可愛い女の子だ。幼馴染の鼻屑目ではなく、これは周囲からそう認識されていたのを鋼は知っている。ただ、モテるのは少し方向性が違うのだ。

当時から平均より低かった彼女の背は今も高校生に見えないくらいにちびっこいし、それに合わせたかのように胸もない。その上童顔。可愛らしい顔立ちをしても、その多少子供っぽい澆刺とした性格も合わさって、中学の時は惚れられるというよりは可愛がられるマスコツト的扱いを受けていた。

「そっちの子ルウちゃんっていうの？ 名前訊いていい？」

「え、ええとあの、村井凜といいます」

「ルウって文字はどっから来たのよ」

有坂の当然の疑問に「え？」と凜が固まった。言葉を紡ぐと口をぱくぱくさせるのを見かねて鋼は口を出す。

「地元だと『リン』って呼び方じゃ他の奴と紛らわしくてな。それでその日向が、『リ』と『ル』は似てるからとか意味分からん事言い出してあだ名になった」

「そうそう！ というわけで私は各務日向ね。こっちの口悪いのが神谷鋼」

流れるように日向も自己紹介して、ついでに鋼の分も済ませてしまった。口が悪いはどう考えても余計である。

だがそれよりも別の事が気になるようで、有坂も、そして長谷川

も驚いたように目を丸くした。

「なー、自分ら皆知り合いなん？」

「ん、まあな。同じ学校」

「それで三人とも今年のパルミナに受かったんか！？ 凄まじいなあ……」

「ほんとにねえ」

有坂もまだぼかんとした表情のまま感嘆している。

「日本中から志願者殺到して、去年より競争率すごかったのね。私の中学でも何人が受けたみたいだけど、受かったの私だけだったのに」

パルミナ騎士教育学園を進路に希望する中学生が今年になって激増したのは有名な話で、これには学校側が急遽受け入れ人数を倍にしたというオチがつく。学園が創設された直後の去年度はまだ異世界の情報があまり出回っておらず、未知の場所と敬遠されたか志願者はそれほど多くなかったのだ。

「ああ、いや。実はそんな自慢できる話でもないんだ」

すごいんだなあこの人達、みたいな視線にさすがに罪悪感がこみ上げて、鋼は正直に白状してしまう事にした。

「帰還者推薦で受けたんだよ」

「え、嘘、初めて見た！ へー、神谷君って異世界経験あるんだ……」

この文脈でいう帰還者とは、門を介さずに異世界に一度来てしまいい、そして日本に帰って来られた人間を指す。

異世界の存在が知られる以前から、日本では不慮の事故で異世界ソリオンに落ちてしまう人間がときたま現れ行方不明者として数えられていた。帰還が叶うようになったのは最近の話なので、帰還者であるならつい近年にソリオンの地を経験している事になるのだ。

鋼の知る限り、確か帰還者はまだ五十人もいないような希少な存在だ。丁度この学園に入学できる年齢の者など一握りしかなく、そのたった数人のためにわざわざ用意されているのが件の『帰還者推

薦』であつた。

早い話、帰還者にはこの学園への入学がほぼ約束されているのだ。他にも帰還者は、その経験を買われソリオン関連の就職の際にはだいたいどこでも厚遇されている。文化の違う異世界に連れ去られ、少なくとも時間を拘束された帰還者達が、突然日本に戻って来られても元の生活を取り戻すのは簡単ではない。彼らのためのサポートの一環として、そういう特別扱いは公然と認められている。

「それじゃあお二人さんは、推薦とつた神谷を追っかけて一緒に受けたんか？ もっといっぱい地元からは受けたけど、通つた人は二人だけやったとか？」

「ううん、そうじゃなくて」

日向が長谷川の勘違いに気付いて首を横に振つた。

「私モルウちゃんも、帰還者なんだ。三人とも推薦」

「へ……？」

驚くのも無理はない。今度こそ硬直した長谷川と有坂を見て、鋼はそう思う。

「ふふふ、びっくりしてるね？ 政府の役人さんに聞いた話だと、三人一緒に異世界行つて、三人一緒に帰つてきたのって現時点で私達だけなんだって！」

どこか得意げに日向は言うが、三人一緒という偶発的な要素には彼女の意思など何ら介在しておらず、どうして得意そうなのかは謎だ。

「はー……。いや、うん、びっくりした。三人ともつてすごいわね。推薦で受かつた人数つてそんな何人もいないでしょ」

「……六人つて聞きました。私達含めて」

ぼそりと凜が言う。興味があつたので、鋼達の面接を担当した役人に訊いてみたのだ。

「じゃあここにもう半分揃つてるのね……。つていうか推薦つて面接あつたんでしょ？ その時に他の帰還者は見なかつたの？」

「んー、面接つて言つても家に役人が入学案内持つてきて話を聞く

「ただだったからな」

その場に日向と凜も同席し、明らかに最初から合格が決まっている感じに説明だけされ面接は終了した。手抜きへの対応としか思えない。わざわざ役人の方から出向いてくれたのも、出張費目当てではないかと鋼は密かに疑っていたりする。

「何それずるい！」

そう思われるのも当然だろう特別扱いなので、あんまり鋼も帰還者である事は大っぴらに喧伝するつもりはない。長谷川や有坂は気にしなさそうなので口にしたが、真面目に試験をパスした生徒にとって面白くない話だろう。

「うわーええなあ。多分自分らだけやで、日本から知り合い同士でここに入学できたん。でもちよつと納得したかも」

「納得？」

「なんか見た感じ、三人ともキャラ違うやん？ でも結構仲良さそうやから、三人一緒にこの世界来てたつて聞いてなるほどなあ」と

「仲良しだよー！」と元気よく即答する日向に、鋼も凜も苦笑を漏らす。否定はしないが、堂々と宣言する事かと。

「ああ、そういえばこっちはまだ自己紹介してなかったわね」

有坂が思い出したように言っつて、ぴつと自分を指差す。

「外で聞いてたとは思っけど、あたしは有坂伊織。得意は剣道。よろしくね」

「気負いない台詞だが、どことなく得意げな表情。見た目はからつとした雰囲気的美少女であるが、歩き方や贅肉など無さそうな引き締まった体つきを見る限り、本当に強い剣士なのではないかと鋼は思った。異世界での経験から、鋼は相手の力量を読むのにそれなりの自信がある。

「剣道！？ すごーい！ それで騎士を目指してるの？」

「まあね。騎士じゃなくてもいいんだけど、日本じゃ剣の腕なんて使い道ないから。魔法とかもあるみたいだし、こっちの世界で色々自分の可能性探ろうかなーってね。あんたは？」

問われた長谷川は「わいの番か」と胸を張る。

「わいは長谷川省吾。省吾とかシヨウちゃんとか好きに呼んでや。得意は……んー、なんやる。勉強よりは運動やけどな」

なはは、と笑う。人好きのする笑顔で、裏に悪意を隠しているとかそういう印象は受けない。背が高いがあまりがっしりした体軀でもなく、いい意味で周りの力を抜いてくれる少年だった。

「あ、そうそう。ネタバレしてまうと、実はわいも帰還者やからよろしくなあ」

「「え……」」

油断している時にさらりと爆弾発言が出たものだから、あやうく聞き流しかけた。

「ちよ、ちよつと何それ！？ あんたも推薦？ つてことはここにもう六人中四人いるじゃない！ あたし以外全員だし！」

「そうなるなあ。あとの五人気になってたから、もう三人出会ってびっくりしたでほんまに」

「あたしもびつくりしたわよ！ じゃああんた達、こつちの世界の魔法とかも知ってるわけ？ どんなのあるのか教えてよ」

「魔法も学校で習うんちゃうか？」

「学校でやるようなの以外も興味あるの！ 特に実戦で使えそうな奴」

「物騒やなあ……。自分異世界飛ばされてたら絶対わいより適応しそつやで」

意外な事実にも鋼達は「はー」と感心しつつ。テンションを上げる有坂に水を差すように、講堂内に教師と思しき大人達が入ってくる。そろそろ時間なので、さすがに列の整理などをやるらしい。壇上にも教師が現れマイクのセッティングを始めた。時計もそうだが、日本産の技術はちゃんと取り入れられているようだ。

私語を慎むように、というお達しがなされ、いかつい教師が生徒

達を睨みすえるので、新入生同士の会話はそこでお開きとなった。
少し待たされ、そして入学式が始まる。

最初はほんの少し期待していた鋼だが、五分も経つ頃には気付いてしまった。『異世界の』と頭についても、所詮は入学式だと。

つまり日本のものと何ら変わらず、非常に退屈な行事であった。

クラス分けはどうなるだろう？

こちらでも定番らしい校長の長話を、あくびをかみ殺しながら聞き流しつつ。鋼はそんな事を考え続け、退屈な時間をやり過ごした。

3 満月亭

さて、クラス分けの結果である。

日本の大半（というかほぼ全部、だろうか）の高等学校と違い、セイラン王国ではクラス別に分けられるという慣習は特に無いらしい。日本の大学と似たシステムで、授業は基本的に選択制。全員が受ける必修の授業や、用意された選択肢のうち二つ以上は取らなければいけない、といった選択必修の授業もあるが、本来ならクラス分けなど必要無いのである。

しかし、今年は志願者殺到という事態で生徒数が増員している。具体的に言えば日本人生徒が五十人ほど。大人数になった対策として便宜的に日本の学校制度を取り入れられる形となり、二つだけとはいえ所属するクラスが今年から分けられるようになった。例えば必修の授業などは、教室ごとに分かれて行われる。

さすが異世界の文化の違いというか、その呼称はシルフ組とノーム組というもの。

鋼達五人は見事にバラバラとなった。

凧・有坂がシルフ組で。

鋼・日向・長谷川がノーム組だ。

「まー相当運良くないと分かれるわよね。じゃあ村井さん、あたしと一緒に行く」

シヨックを受けて打ちひしがれる凧を、有坂が誘ってシルフ組教室へと連れて行った。有坂がいてくれて助かったと鋼はしみじみ思った。

こちらは長谷川と連れだって、三人でノーム組教室へ。

一目見て浮かんだ感想は、なんて広い教室だろうというものだった。

た。

まあ、二つに分けたとはいえ、それでも七十五人が同時に必修授業を受ける教室だ。狭いはずがない。

「……。ていうか、増員前の百人だったら教室一個だったのかよ……。ありえねえ」

「なははは。言ってるな！。日本の学校ほど一人一人面倒見てくれへんってことやな」

「ねえね、あそこ。講堂の外で会った貴族の人がいる」

日向が小声で指差した先には先程会った貴族少年がいた。

「……新生だっただのかよ」

席は自由のようだがここでも日本人・セイラン人平民・貴族でグループ別になっていた。マルケウス少年は入り口から最も離れた一角にいたのでどうやら気付かれていない。

鋼達は適当に日本人グループの近くに陣取り、最初の必修授業としてやって来た二人の教師から授業等の説明を聞く。重要なので聞き流すわけにもいかず、一時間以上を費やしたその初授業が終わる頃には教室中の人間がぐったりしていた。心なしか、貴族達でも。

「鋼さん。選択授業どうします？」

昼休みに合流して開口一番、凜が訊いてきた。

「さあな。まだ全然決めてねえ。とりあえず剣術・魔術・経済関連つてとこか。薬学も気になるが」

「意外なラインナップやな！。剣術か魔術系は日本人ならほとんど取るやろうけど。経済ときたかー」

実は一人、鋼達の同行者が増えている。遅まきながら凜が気付いて、慌ててぺこりと頭を下げた。

「あはは、ルウちゃん気付くの遅いー！ クラスが離れたの寂しくて、今鋼しか見えてなかったよね絶対」

「か、からかわないで下さいヒナちゃん！ それで、そちらの方は

……」
「ノーム組で私の隣に座ってたからさらってきたの！」

とんでもない紹介をして、日向は所在なさげに立っていた女子を手で示した。人付き合いに物怖じしない日向がぐいぐい話しかけ一緒に昼食を誘ったのだが、さらってきたという表現はなるほどの射ている。

「か、片平かたひら、雪奈ゆきなです」

おさげの髪に眼鏡をかけた、良く言えば落ち着いた、悪く言えば地味めな少女が緊張した面持ちで名乗りをあげる。鋼の見たところ彼女は凜と張り合うレベルの人見知りだ。失礼ながら、恐らく最初からの知り合いがないだろうこの学園で自分から友人を作るのは難しいと思われるタイプ。

「よろしくねー。あたしは有坂伊織。もっと気楽でいいと思うわよ？ あたしだってこの面子今日が初対面だし」

「あの、私は村井凜といます。よろしくお願いします」

「片平さん、聞いたらびっくりするわよー。他は初対面だけど、この子と、その神谷君と各務さんの三人は元々知り合いでね。三人一緒に異世界行って帰ってきた仲らしいわよ」

「へ、え、あの？ それって、旅行という意味ではなく？」

門が出来て以降、ビザさえ下りれば日本は異世界旅行さえ可能な国となった。人数の制限を兼ねた入国審査があるのでそうほいほいと来れる場所ではないが、移動時間や物理的距離の観点で言えばこの街はどこよりも近い外国であるといえる。日本から唯一船も飛行機も使わず行ける国とあって世間の注目度は高かった。

「うん、旅行って意味じゃなく。三人揃ってこっちに落ちた帰還者なんだって」

「ほ、ほんとですか！？ すごい！ じゃ、じゃあもちろん魔法とか、実際見たことも……！？」

片平がすごいテンションの上がりようで反応するので、鋼はちょっと体を引いた。対応は日向に一任する。

「あるよー。簡単なやつだったら私使えるし」

「ええ！？ み、見てみたいです各務さん！」

これには片平だけでなく、有坂も強い興味を示した。

「うっわー。やっぱり使えるんだ……。帰還者なんだしおかしい事じやないのになあ、なんかすごい意外に思う」

「各務さん、もしよければ見せてもらいたいなー、と」

「んー」日向がちらりとこちらを見る。好きにしろ、という意味を込めて鋼が肩をすくめると、小さく頷いた。

「うん、大人の人達にあんまり公共の場所で使うなって言われてるから、また外に出た時にね！」

「んじゃ、廊下でいつまでも立ってるわけにもいかねえし。誰も昼食の予定決まってるなら、どうせなら外へ適当にメシ屋探しに行くか？」

学園に食堂もあるが、外で食事をとるのも自由である。

全員が鋼の提案に賛成の意を示して、六人は学園の外を目指して歩き出した。

異世界の玄関口、パルミナ。

それが鋼達、騎士候補の日本人がこれから暮らしてゆくことになるこの街の名前である。

門の完成と共に著しい発展を遂げたセイラン王国の一都市であり、門が現状一箇所にしかない以上ここは異世界を訪れる日本人が必ず最初に足を踏み入れる地となっている。パルミナ騎士教育学園を始めとする日本関連の施設は全てがこの街に集中しており、日本との技術交流の中心地だ。

当然ながら科学との文化の融合が最も進んでいるセイランの都市でもあり、講堂で見られたようなマイクや時計など多くの地球産の技術を目にする事が出来る。最近では携帯電話も使用が可能となり、門を越えた日本へいつでも連絡をとれるようになった。

パルミナと、門の日本側の出口である門出市は通称『出島』とも呼ばれる。現時点でその二つの都市だけが、異世界人の移動や移住が認められている地域だからだ。

門は、両国を今よりも発展させるだろう画期的な発明である事は間違いない。

だが違う文化、違う技術の根付く広大な世界同士が繋がるというのは、それ以上に危うい一面も持っている。自由に人が物が行き来すれば、互いの世界にどこまで大きな影響が出るのか分かったものではない。この点で日本政府とセイラン王国は同じ恐れを抱いたように、両国は慎重に調整しながら、少しずつ文化の交流を進める事に決めたようだ。

交流が出島に限定されているのはそういう訳で、パルミナから日本人が外へ、あるいは門出市からセイラン人が外へ出るには、特殊な事情でもない限り許可が降りない。出島はいわば門を中心とした中立地帯であり、実質の国境は出島の外縁部と考えていいだろう。

ただまあ、本当にまずいのは日本人が集団で移住して勢力圏を拡大するだとか、技術を次々持ち込んでソリオンの商業を乗っ取るのかなので、旅行くらいならいいのでは？ という声も強まってきている。年内にはセイラン王国内に限り、公式のガイドを付ければ観光旅行の許可も下りるようになるとか、ならないとか。

「旅行できるようになるとえーなー。わいが前落ちた時に世話になった人らに会いにいききたいし」

登校の際に通った学園前の大通りは避け、一つ横の路地へと食事を求めて六人はやって来ていた。

この辺の通りの構造はかろうじて記憶していても、どんな店があるかなど全員さっぱり分からない。学園の日本人生徒が異世界入りのしたのはほんの昨日の事なのだ。

歩きながら雑談していると出てきた観光旅行の話題に、省吾がし

みじみとした様子でそう言った。ちなみに彼が「下の名前でええわー」と言うので、鋼も同じ事を言ってから呼び方を改めている。

「そついやあんたも帰還者だもんね」

その言葉に片平が大きく反応していたが、今度は皆スルーする。

「なんて場所に飛ばされてたのよ？ まああたし、パルミナ以外の地名知らないけどさ」

有坂でなくとも普通はそうだろう。セイラン王国の情報でさえ日本で手に入るのは断片的なもので、その周辺国の情勢などを日本で知るのには難しいのだ。

「わいが落ちたんはトリルってとこなんやけどな」

「もしかしてトリル共和国ですか？」

片平が当然のように出したその名前に、省吾だけでなく鋼も少し驚いた。彼女はどうかやら騎士教育学園に通うにあたって、万全の下調べをしてきたらしい。

「よー知ってるなあ。そうそこ。このセイラン王国の隣にあるちっさい国や。ちっさいゆうても、セイランと比べてやけどな」

「え、それじゃあさ。旅行が近々許可されそうなのってこの国に限ってでしょ？ あんたが会いたい人たちに会いに行くの、かなり難しいんじゃない？」

「難しいやるなあ。まーでも、出来やん事はないと思うんで？ こっちの世界はかなーり適当やからな、国境とか戸籍とか。セイランとトリルは戦争しとるワケちゃうし、日本の許可なくとも全然普通に行けると思うんで？」

「公式のガイドとやらがそれを認めてくれるかってのが唯一の問題か」

「そーゆーこと」

鋼が指摘した点に省吾も頷きながら、視線をこちらに向ける。

「自分らは？ ソリオン来た時どこに落ちたん？」

見れば、わくわくとした面持ちで片平も鋼・日向・凜の三人組を見つめている。

この少女、異世界に並々ならぬ興味があるらしかった。

日向と凜が視線を鋼に向ける。言ってしまうといいのか、鋼に伺いを立てるように。そんな思わせぶりな動作をするものだから有坂は何やら怪しんでいるようだ。かつての異世界で鋼がリーダー役を務めていた影響か、馴染みの二人の少女は判断に困ると鋼を頼る傾向がとても強い。

そして確かに、あまり正直に言いたい場所でも無かったので少し鋼は嘘をついた。

「……その、な。あんまり他の奴ら、特に異世界人には言わないで欲しいんだが。ルデス山脈って所だ」

「？　なんで言っちゃいけないの？」

「悪い意味でこっちの世界じゃ有名な場所なんだ。言ったら多分、冗談の類だと思われるような」

有坂はふーん、とひとまずは納得したような声をあげて、一番の懸念だった省吾もしきりに首をかしげているが思い当たるものは無いようである。

しかし安心するのは早かった。何故か、目を見開いて驚愕した奴が一人いたのだ。

「ルデスって……、もしや『亜竜山脈』では……？」

「……」

下調べ万全すぎる。

「あのさ、なんで帰還者でもない片平が知ってたんだよ……」

片平が出した正式名称よりも通りのよい名に、今度は省吾までも反応してしまった。

「あぁっ！　なんか聞いた覚えあると思うたら、そっちの名前はわいも知ってるで！」

「何？　どんなとこなわけ？」

「魔物ばつかりの超・危険地帯や。生きて帰って来れたら一流の冒険者、みたいに言われとるほどでな」

「冒険者、ね。そっというのがあるのはあたしもちよっと調べたから

知ってるわ。え、何、神谷君達そんな場所にいきなり落ちたの？」

「ああ。何が起きたかも分かってないのに周りには見た事ないバケモンがわんさかだぞ？　これがゲームのスタート地点なら間違いないく糞ゲーっていう場所だった」

「それは……、災難だったわね……。ていうかよく生きて帰って来れたわね」

「全くだ」

運良く生き延び、その山脈に居を構える変わり者の魔術師に出会い、逆召喚という魔術で日本へ帰って来られたという過去の異世界体験を簡潔に鋼は語った。

一般人が普通帰って来られる場所ではないので、ルデスに落ちたと言えば異世界人には変に疑われたりするかもしれない。お世話になった魔術師が隠棲を望んでいるのもあり、あまり口外するつもりはないのだと言い含めると、省吾も有坂もなるほどと頷いてくれた。残るは片平だが……。

何故か彼女は、亜竜山脈の名を出してからふるふるすると震えるばかりで発言していない。

「ど、どしたの雪奈ちゃん」

能天気な日向でさえ戸惑いがちに訊くような、異様な空気を片平は発している。と思えば勢い良く顔をあげ、日向のほうへ詰め寄ってきた。

「も、もしかしてその時、亜竜も見たんですか!？」

「ま、まあ何匹か……」

「ぜひとも詳しく聞かせて下さい!」

泣きそうな顔で日向がこちらを見上げてくるが、鋼は任せたと笑顔で伝える。そして彼女を質問攻めにする片平から少し距離を取った。

「地味な印象と思いきや、濃いキャラが来たな……」

「あの子はつまり、異世界オタクなわけね」

「魔法とかも興味津々やったしな!。異世界に憧れてこっち来たク

ちやろうなあ」

「学園の日本人生徒はほとんど皆そういう理由なんじゃないですか？」

安全圏から二人を眺めながら、好き勝手にあとの四人は語り合っていた。

「ていうかさつさとメシ屋決めようぜ。この際もう適当に決めていいか？」

人通りは多い。パルミナの主要な街路である大通りから一つずれただけなので、この辺りもかなり賑やかだ。ご飯時でどの店も混んでいるだろうから、どうせ待たされるならさつさと決めてしまいたい。

偶然目についた小さな看板の軽食屋を鋼が指差すと、そこでいいと皆も頷いた。

満月亭、というのがその寂れた軽食屋の名前だった。

外では人が行き交い活気に溢れているというのに、不自然なほど店内に客の姿はほとんどない。一步踏み出せば街の喧騒が遠のき、小さな異界に迷い込んだような錯覚を鋼は抱いた。

立地的に申し分ない条件のこの店に客足が少ない理由は一目で知れた。柄の悪そうないかつい男どもが、唯一の客として店内中央のテーブル席に陣取っている。

柄が悪いと言っても、今朝学園の講堂前で見たような不良三人組とは比べ物にならない。ぼさぼさに伸びた髭、大柄な体、おまけに剣や斧といった物騒な刃物も傍に立てかけられている。こちらでは日本のような武器の所持を禁止する法律は無いが、普段からそれを持ち歩く人種はある程度限られている。

職務中の騎士や兵士。他には冒険者、傭兵、そして盗賊などの犯罪者だ。

この男達は見た目でいえば一番最後の、お近づきにはなりたくない類の雰囲気をつんぷん放っていた。控えめに言ってもゴロツキの

その男どもは四人いて、昏間っから酒でも飲んでいのか赤ら顔で笑っている。しかも内一人がこちらに気付いた途端顔をしかめてあからさまに舌打ちした。

「やっぱ店、変えへん？」

省吾がそう言うのも頷ける話で、彼を臆病だと思つる者は同行者の中にはいなかった。

「いらっしやいませー！ お食事ですか？」

そのまま回り右して帰ろうとした時、まだ二十歳にもなっていないさそうな少女が店の奥から慌しくやって来た。

無理して元気良く出したような声で訊いてくる。お客さんを逃がしてなるものか！ という気迫が瞳で燃えている気もする。

「ここって酒場？」

その少女を前にして帰るのは誰もが気まずそうだったので、鋼はそう訊ねた。

酒場だと答えが返ってきて、知らずに入ってしまったと言い訳して帰る、という作戦が一応はあったのだが。しかし少女は首を横に振る。

「いえ、軽食屋です。以前はお酒も出したんですけどね」

「へ？ あそこの人達が飲んでるのはお酒じゃないのか？」

「あちらの人達が自分で持ってきたお酒で……」

店としても困っているようで、少女はふと疲れた表情を見せた。

すぐに笑顔に切り替わり、男達から一番離れた席へと案内してくれようとする。

「……ここでもいいか？」

今更店を変えるのもそれはそれで気まずく鋼の言葉に皆も首肯する。

嫌いなものが無いか全員に確認をとってから、六人分適当にお任せで、と省吾が慣れた様子で注文した。

「いつでも全く同じもん頼める日本とはちゃうからな。勝手やおもたけど注文させてもらったで」

「ああ。俺はこういうところに入った事ないからよく分からんしな」
かつての鋼は人里離れた危険地帯から出る事なく日本に戻ったので、異世界の街はこのパルミナが初めてだったりする。省吾のほう
が経験豊富だろう。

店の少女が厨房の誰かに注文を伝えている。その隙に、というわけでもないだろうがゴロツキの男どもがこちらを睨んできた。

「うひゃあ……、居心地悪ー」

囁くような小さな声で有坂が言って、片平がこくこくと何度も頷く。頷いて、それからはずと何かに気付いたように日向を見る。

「そうだ！　ここだったら魔法見せてもらっても大丈夫ですか？」

「悪いが全く居心地が悪そうには見えなくなつた。」

「別にそれはいいけど。あの人達、絡んできたりしないかな？」

「むしろ魔法使えるって知らせたほうが近づいて来ないんじゃないかねえか？」

「それもそだね」

私は簡単なやつしか使えないんだけど、と前置きして、日向は人差し指を天井に向けた。彼女の魔力が活性化したのを鋼は感じ取る。魔術文化の無い地球人類であつても、魔力に触れる機会が何度もあればこういつた兆候くらい感知できるようになる。

「ほう、と指先に炎が宿つた。」

「っ！？」

有坂と片平が驚愕に目を見開いて、まじまじとそれを凝視した。

魔法を嗜む者なら誰だつて出来るだろう、基本中の基本である火を熾おこす魔術だ。指がロウソクにでも変化したかのように、指を動かせば炎も一緒についてくる。地球の物理法則から外れた光景を帰還者でない日本人二人は言葉を失つて眺めた。

「タネも仕掛けもない、ホントの魔法……」

魔術はこちらでは理論的に説明出来る技術なので、タネが無いというわけではないのだが。日向より魔術が得意な凜も、感嘆する女子二名を微笑ましそうに眺めていた。

いまだ指先に火を灯す日向が解説する。

「これは酸素集めるとかそういう上級テクを使ってるわけじゃなくて、魔力自体を燃やしてるって言えばいいのかなあ。とにかく簡単な魔術だよ。簡単って言っても練習は必要だと思うけど、練習さえすれば誰でも出来るようなの」

そこでようやく火が消えた。

「誰でも……。ああ！早く魔術の授業受けたいです……！」

「やっぱり鋼も村井ちゃんも、今のくらい出来るんか？」

「そりゃな。魔術があるなら、使ってみたいと思うのは日本人として当然だろ。その様子だと省吾もどうせ普通に出来るんだろ？」

「んー。わいは本職じゃない人にちょこちょこ教えてもろただけだな。出来るんは火点けると、暗いとこ照らすんと、物冷やすくらいやで。あ、筋力強化もやな」

省吾が挙げた魔術はどれも基本中の基本、みたいなラインナップだ。

日常生活で便利なのは総じてこういうもの達で、魔術師にしか使えないような複雑なものはあまり需要が無かったりする。冒険者にもなりたいたいなら使える魔術は多いに越した事は無いのだが、魔術以外の手段で代用できる事も多い。

筋力強化という単語に今度は有坂が強烈に食いついた。

「魔術で肉体強化ってやつぱりあるの！？ズルっ！基礎能力底上げなんてされたら勝てないじゃん！」

「いや、そりゃ使えん人と使える人やつたら断然ちやうけども。そんな難しい魔法ちやうし、女の人もそれで男の筋力に追いつけるかなあ。有坂ちゃんにとってはイイ話やで？それあるから、こっちの世界は女の騎士やら冒険者やらも普通にいてるし」

「そっいえばそうね。うん、そりゃいい話だわ。こっちのほうに女性が男に勝てる可能性があるんだものね」

「結局元の筋肉は男が勝ってるから、男有利ちやうん？て、わいに魔法教えてくれた人に訊いたことあるんやけどな。筋力の分不利

やからか知らんけど、平均とつたら魔力は女のほうが多いらしいんや。あくまで平均らしいけどな」

「へえー」

目を輝かせて有坂と片平はその話を聞いていた。

「ねえねえ、各務さんは今長谷川君が言った魔術は全部使えるんですか？」

「無理無理！ 暗いとこ照らすのと、物冷やすのはやった事ないし」「え、意外やなあ。さっきの火灯すんとかメツチャ上手かったやん。わいはあんなに出来やんのに」

疑問を顔に浮かべたのは有坂だ。点火は出来ると省吾本人が言っただばかりなのに、矛盾しているように聞こえたのだらう。

「ちよつと待つて。あんたさっき、出来るって言ったじゃない」

「あの、多分、長谷川さんが言っているのはもう一つのほうの魔術だと思えます」

この中では誰よりも詳しい凧が恐る恐る口を挟んだ。

「もう一つ？」

「火を点ける魔術自体は、とても簡単なものなんです。けれどさっきのヒナちゃんみたいに、指先に灯し続けるのは少し難易度が上がるんです。普通なら指を火傷しますから」

「あ、そっか。自分で出した火なら影響ないのかなーってなんとなく思ってたけど……」

「日本のゲームとかだとありがちですよ。燃える剣を使っても使用者には熱が行かなかつたり。実際はそんな事は無いので、何らかの対策が必要になってきます。ヒナちゃんの例だと、火を灯し続けるために《防熱》という魔術を同時に発動していました。熱を遮断する術式です」

凧先生の魔術授業にほうと頷く三人。何故か省吾もしきりに感心していた。

「そんなん同時に使ってたんかあ。各務ちゃん、わいより全然すこいじゃん」

「使ってたんかあ、て。あなたどういう理屈なのか分かってなかったの？」

「全然。なんであれで火傷しやんのやるなー、て不思議に思ってた。各務ちゃんも村井ちゃんもすごいんやな。いや、鋼も出来るゆうてたか」

「あはは、ありがと。でも私はそんなに魔術、上手じゃないみたい。練習出来る時間が結構あって、覚える魔術をいくつかに絞って、どうにかこうにかって感じ。だから明るくするのとか、基本のやつみたいだけどやった事ないんだ」

「でもヒナちゃん、明るくする必要ないじゃないですか。《暗視》使えるんだから」

「暗視？」

「夜目が効くようになる魔術です」

そんな事をわいわい話していたおかげか知らないが、店内の男どもが絡んでくる事もなく。そのうちにいい匂いを漂わせ、料理が到着する。

地球上では日本はトップクラスに食事が美味しい国として知られているほどだ。日本人が海外旅行をした際、現地の食事が口に合わないというのはありふれた話で、だから鋼はこちらの世界の食事にもそれほど期待していなかった。現に昨日と今朝食べたパルミナの料理はさほどおいしいとは思えないものだった。

けれども運ばれてきた料理は中々においしそうだった。パンにスープ、ポテトのサラダに鳥とキノコのソテー。贅沢を言えばパンよりご飯のほうが嬉しいが、予想していたラインよりは遥かに上等な食事である。

「うおっ、うまそーやなあ」

「ウチは料理が自慢ですから」

誇らしげに店員の少女は胸を張った。店の奥とこちらを何度か往復し、湯気の昇る六人分の料理をテーブルの上へ並べていく。料理

人らしい格好の年配の男が料理を運び出す手伝いをしているのがちらりと見えた。少女の父親だとすると、家族で細々と経営している店なのだろう。

味のほうも申し分なかった。鋼はそれほど食べ物の良し悪しに執着がない夕子だが、雰囲気の悪い男達に尻込みせず入って良かったと思つたほどだ。これはいい店を見つけたなど、他の五人と笑い合う。満足度の高い食事となった。

ただ、少し気にかかった事がある。

勘定を済まし、店の少女に見送られ、鋼達が満月亭を後にする際、先客の男どもがこちらをまた睨んでいた。

食事中何度も感じた視線だが、最後のその時だけは何か違う気がしたのだ。鋼はそこに、とても嫌な気配を感じ取った。

4 夜間外出

中学二年生の五月。

神谷鋼は異世界に『落ちた』。

高所から落下したとか、変な場所に近づいたとか、そういった行動がきっかけになったわけではない。前触れなく、学校帰りの路上で鋼は自分の視界が歪むのを感じた。何かに引っ張られ、周囲と自分がズレていく。貧血を起こして倒れる感覚にそれは最も近かった。落ちたとして表現できない唐突さで、気付けば見知らぬ土地に横たわっていた。

異世界人の存在が初めて日本で確認されたのがその三年前。ゲートはまだ存在しておらず、少しずつしか情報が入って来ないせいかメディアも今みたいに異世界特集など大々的にやったりはしていなかった。異世界なんて単語がテレビで出てもそれこそ遠い世界の出来事だった。

だから知識としては備わっていても、この現象が世間でいう『神隠し』なのだと、そしてそれに己が巻き込まれたのだとは中々理解できなかった。

当時は今ほど仲良くなかった、その日たまたま一緒に帰り道だった日向と凜も共に倒れていて。彼女達がいなければ鋼は自分の置かれた状況を夢だと思ったに違いない。

霧の立ち込める不気味な森。もちろん住宅やアスファルトの路面なんてどこにもない。視界いっぱいに映るその風景の意味が本気で分からず、途方に暮れたのをよく覚えている。

ただ、危険地帯に突如放り出された不運と果たして釣り合うかは分からないが、鋼達にとって幸運な事が一つあった。

魔物の巣窟であるその森には鋼達以外にも人間がいたのである。地獄のようなその場所にそれぞれの事情で迷い込んだ遭難者達により集まり協力し、生き延びるため日々戦っていたのだ。彼らとの出会い無くして鋼達は万に一つも生き残れなかっただろう。

その集団に拾われ、魔物との戦い方を覚え。

鋼にとっての異世界の日々は流れるように過ぎていった。こちらの世界の人間でもそうは体験できない、濃密な時間だった。

仲間にも恵まれた。特に、日向と凜を含む最後まで共に戦った四人は鋼にとって掛け替えのない友人となった。一生の友を得るといふのはすごく幸運な事で、それだけでも異世界で死に掛けた甲斐はあったと思うのだ。まあ、結果的に生き延びられた今だからこそそう思えるのだろうが。

日本へ三人で帰ってくる際に、後の二人とは別れたきりだ。また会いたいと強く思うし、再会も約束している。

だからパルミナ騎士教育学園の推薦の話は大変に都合が良かったのである。鋼も日向も凜も、迷わずそれに飛びついた。

人探し。

結局のところ鋼達三人が再び異世界の土を踏んだ理由は、省吾と同じ目的なのだった。

パルミナ騎士教育学園には寮が四つもある。学園の敷地内にある男子寮と女子寮、そして学生の増員により急遽^{きんきょ}用意された、敷地外にある第二の男子寮、女子寮だ。

宿屋というものを実際に目にした事はないが、この第二男子寮は寮というより普通の宿屋を改装したような印象だ。公共の施設のくせに妙に庶民的な雰囲気があり、凜と日向の話によると第二女子寮

もそつという感じらしい。

簡素な造りの木製の壁など見ていると、王立の学園の寮生活というよりは民家に下宿しているような気持ちになる。

夜。

夕食を済ませ二階の自室で鋼が出かける準備をしていると、ルームメイトから声がかかった。

「……今から出かけるのかよ？」

「ああ、ちよつと出てくる。一、二時間で戻らと思うがその間に寮監が見回りとかしてきたら、止める間もなく出て行ったと言つてくれ」

寮は二人か三人部屋で、鋼はこのなみやまきょうへい崎山恭平と二人で部屋を使っている。入学式前日に初めて顔を合わせたこの少年とはまださほど親しくないが、案外気が合いそうだ。口数は多くないが遠慮なく言いたい事は言うようなタイプで、鋼にとつても付き合いやすい。

「わりいな、なるべくならバレてもそつちには迷惑かからないようにするつもりだが……」

「……止めはしないが、一応行き先だけは言つて行け」

寮生の夜間の外出は禁じられている。どうしてもという事情があるなら寮監に説明すれば許可は下りるかもしれないが、鋼にそうするつもりはない。

入学初日から寮の規則を破ろうというルームメイトを黙認してくれる事がありがたさを感じつつ、崎山に正直に告げた。

「仲介ギルドに行つてみようと思つてな」

「仲介ギルド？」

意外そつに聞き返してくる。

「あれか、冒険者やら傭兵やらが、バケモン倒したりする依頼もらう受付みたいなところか」

「ああ。冒険者やつてるはずの知り合い探しててな。行つたところでどれくらいの事が調べられるか分からんが……」

「……こつちの世界に知り合いいんのか？」

「あつと、言つてなかつたか。俺帰還者でさ、二年くらい前までこつちの世界にいたんだよ。その時のダチでな」

「へえ……、帰還者か。驚いたな。まあ、行き先も聞いた。行つてくればいい」

「助かる。んじゃ、行つてくるわ」

たいした準備をしていたわけでもないのですが、鋼はそう言つて窓のほうへと近づいた。訝しげに眉をひそめた崎山が、こちらがドアを使わず出て行くつもりなのだと思つて呆れた表情を見せる。

一見無愛想な、しかし気のいいルームメイトに見送られ、鋼は開けた窓から飛び降りた。

真下から空気抵抗という風を受けつつ落ちる。所詮は二階程度の高さなので一瞬で終わるが、この空気を体で切り裂く感じは嫌いではない。

地面に降り立ち、足を若干曲げて衝撃を逃がす。日本に帰つてからも多少は鍛えていたから、これくらいなら魔術による身体強化も不要だった。

寮の窓から見つかる心配はあるものの、外には人影は見当たらない。素早く鋼は敷地内と外とを隔てる二メートルほどの塀へと駆け寄つた。ここからは男子寮を挟んでいるので見えないが同じ敷地には第二女子寮があり、この塀は二つの寮をぐるりと囲っている。

最初にこの寮を訪れた時、四角い土地に三階立ての建物がぼつんと二つあるだけのなんと寂しい光景を見て、急いで建てたんだろつなあと感想を抱いたものである。

「……」

近くでまじまじと見て、確信した。

目の前の塀に沿つて、その上あたりに魔力の流れを感じる。何らかの魔術的措置が施されていた。

専門家でない鋼はここから術式を分析するなんて真似は到底出来

ないが、状況から考えて明らかにセキュリティの類の魔術だろう。人が出入りすればどこかに報せが行くとか、そういう程度のものだと思うが。外国の生徒を多数預かる寮なのだから、何らかの侵入者対策はされていて当然だ。

「通ろうとしたら電気が流れるとかじゃねえだろうな……」

電気の文化にあまり馴染みがないソリオンでは、その系統の魔術はほとんど発達していない。さすがにそれは杞憂だろう。

だがまあ、堀の上に高圧電流の流れる鉄線があるくらいの気持ちで挑んだほうがいいに違いない。

鋼は五秒ほど悩んだ。そして、どうせ失敗したとしても死ぬはずもなし、と気楽に考え直し、直感に従って行動を始めた。

魔力をほんの少し活性化させる。後は言葉にすれば至って単純な動作。第二男子寮の壁を利用して、三角跳びの要領で鋼は跳んだ。

それだけで五メートル以上の高さに達し、セキュリティごと堀の上空を軽々と飛び越える。

日本人の多くが憧れるか目を疑うかするだろう、地球の常識では考えられない跳躍。それを成した《身体強化》が難易度の低い魔術と知れば、馴染みのない日本人でもすぐさま理解するはずだ。魔術の有無がどれほど人間の性能に差を与えるか。

こちらで習得した魔術がもし地球でも使用できたなら、相当の混乱を招いただろう事は想像に難くない。実際は地球は「魔力非活性化地域」であり、極僅かな例外を除き魔術を使う事は出来ない。だから実は、魔術に限って言えば日本にとっては学ぶ意義の少ない技術といえる。

しかしさすが日本人のオタク気質というべきか、それを分かった上でも魔術への憧れを失わなかった少年少女は政府の予想を超えて多かった。その結果として学園の生徒が増員し、こうして二つ目の男子寮・女子寮が建てられたのであるが。

それはともかく。

先程よりも長い間空気を体で切り裂いて、路地を挟んだ向かいの

民家の屋根へと鋼は静かに着地した。

恐らくセキュリティには引つかかかっていない。こつそり外出するには助かるが、これほど簡単に抜けられていいのかと不安にもなる。それなりの魔術師なら、学園に生徒が出払う昼を狙えば簡単に空き巣に入れるのではなからうか。

一応鋼は《身体強化》以外にも《隠身》という魔術を使用している。これは体の周囲から外に向かう光の波長を弱めるという、一般人にはあまり縁がない術式だ。

例えば二十メートル離れた位置から他人がこちらを見ても、五十メートル離れているかのように見えづらくなる、といった感じに効果としては現れる。要は視認されづらくなる魔術で、今のように夜間に使うのが効果的だ。

ちなみに余談だが、出来うる限り効果を強くしたところで外からは真つ黒な塊となって映るだけなので、どう工夫しても透明人間にはなれない。

普段人が意識しない上空での、《隠身》を使った上での一瞬の移動。誰かに見咎められる可能性はかなり低いと鋼は踏んでいた。

あとは屋根の上から人に見られないタイミングを見計らって、こつそりと路地に降り立つだけである。もちろん問題なく実行し、鋼は夜の街に紛れた。

「……一応、ルウにメール打つとくか」

規則を破って鋼が夜間外出するのを知れば、日向はともかく凜は止めるかについて来るかするだろうと思われる。だから知らせていないのだが、後で勝手に行動したのを知ればむくれるだろう。

もう外にいると明記し、事後承諾でメールだけ打っておく。異世界の街に携帯電話という取り合わせはとて違和感のある光景で、目立ちたくないのだから屋根の上で打てば良かったと後悔した。

パルミナの街には日本から持ち込まれた電灯が設置されている。主要な街路でも光の届かない場所が点々と存在するほどまばらな数しかないが、それでも夜の街の治安に少しは貢献しているらしい。

目立たぬよう光の届く場所でメールを打ってからマナーモードにして携帯を仕舞う。

夜間に外出している日本人、というだけでも通行人に不審を抱かれる恐れがあるのだ。鋼は明るい大通りから離れるべく横道へと入って行った。

電灯の強い光から逃げた先ではこちらの世界での一般的な照明が変わらず活躍していた。

ランタンや魔石灯のぼんやりした光が弱々しく周辺を照らし、そこに民家から漏れ出た小さな明かりの数々が加わっている。薄暗い歩くのに困るような事はほぼ無いといえる程度で、今日のような月の出ている晩だとこれで十分なように感じられた。

実は、鋼は仲介ギルドの場所を知らない。

ある程度大きな街であれば普通どこにでもあるらしいという情報だけは知っているが、日本人向けのパルミナのガイドマップには載っていないかったのだ。

学園の日本人生徒にはギルドの冒険者を志望する者も多いはずで、なのに記載が無いのだから、興味本位で行くべきではないという事なのだろう。確かに傭兵が出入りするようなアウトローな場所だろうが。おかげで人探しの前にまずギルドの所在を突き止めなければいけない。

歩いていると真つ暗な細い路地をいくつも目にした。二十四時間活動するような文化はパルミナには無いので、ランタン等の明かりが灯っているのは夜間でも人の出入りがある所だけのようだ。

仲介ギルドも恐らくは夜遅くまでやっているはずで、明かりが多いエリアをひとまず目指す事に決めた。

ふと、そこで鋼は足を止める。

向かう先でなにやら怪しげな集団が屯^{たむろ}っているのを発見したのだ。それまで一人か二人組の通行人の姿をちらほらと見かけていたが、大きな影が四人ほど密集しているのは異様に映る。

「さつさと済ませて飲み直すぞー」

「ほんとに面倒なだけの仕事っすよね。大人しく差し出せばいいものを」

そんな会話が聞こえてくる。まるで今朝の、講堂前の光景の再現みたいだった。

違うのはその集団が誰かに絡んでいるわけではない事と、学生の不良より圧倒的なお近づきになりたくない雰囲気がある事。どうやら全員男だが、そこまで見てとれる距離まで来て鋼は気付いた。

見覚えがあるように思ったのだ。よくよく見れば昼に軽食屋を占拠していた男どもである。

更に気付いたが、彼らの立っている位置はその軽食屋、満月亭の前だった。

「おい、何見てんだコラ」

思わず立ち止まった鋼を男の一人がぎろりと睨みつける。

「いやー、その、何してるんだろうなと思って」

これでも鋼としては面倒が起きないよう、丁寧な対応をしたつもりであった。

だが彼らからしてみれば、怖がる様子もない少年の態度は生意気に見えた。相手を怯えさせ好き勝手に振舞うのは、暴力でメシを食っている人種にとっての特権である。男達はそう考える手合いだった。

「ああん？ てめえには関係ないだろガキ？」

ぞろぞろと四人が鋼を囲むように近づいてくる。夜の街に繰り出して五分も経たないうちにこれとは、パルミナの治安は大丈夫なのかと鋼は不安になった。

「ん？ おい、てめえもしかして、昼間の二ホン人のガキか？」

「そうそう、だから何やつてるのかちよつと気になってさ」

「……口の減らねえガキだな」

やや呆れを含んだ声。少しは警戒を解いてくれたかと思いきや。

「……二ホンじゃ怖いお兄さんには近づくなつて教えてくれないら

しい」

ずい、と威圧するように一歩踏み込み、至近距離まで迫ってきた。鋼の身長は日本の男子平均よりやや高い程度だが、この四人は全員それよりも高い。地球基準で言えば日本人の平均身長は他の外国に比べても低いので、年齢差も考えればおかしな事ではない。外人の顔から歳を判断するのは難しいが、彼らの見た目は二十代後半から三十台前半くらいだろうか。

「もう一度言うぞ？ てめえには関係ねえ。大人しく帰って寝ろ」
「関係無くはないぞ。この店結構気に入ってるんだ。何か起きたのなら、俺も知つときたいと思つて」

「……今の状況を分かつてねえようだな」
ぐい、と胸元を掴み上げられる。他の三人が大人しくしているのを見るに、鋼の正面に立つこの男が四人組のリーダー格らしい。

「平和ボケしたニホンのガキでも分かるように伝えてやるう。痛い目に遭いたくなかつたら、今すぐここから消える。そして二度この店にも来るな」

「この店にも来るなって、営業妨害もいいとこだろ」
言い返すと、その言葉よりもこちらの態度が男を刺激したようだった。

「……ちよつとシメとくか」

「いいんですかい兄貴？ こいつニホン人でしょ」

下つ端的ポジションらしい男の一人が問いかけるが、リーダー格は気にした風もない。

「外からの移民なんざこの街にやいくらでもいるだろうが。貴族とかにも見えねえしな」

「そついやニホンには貴族いねえらしいつすよ」

「へえ。なら心置きなく痛めつけられるな」

勝手に話が進んでいくが、もはやどう転んでも穏便には済ませられそうにないと鋼も悟る。

これは自分の対応にも問題があつたんだろうなとひそかにため息。

昔から鋼は生意気だとか口が悪いとかよく言われるのだ。敬語は苦手だし、不遜な印象を与えるらしく真面目な教師などには特に受けが悪い。この性格というか態度は、自分でももう少し直したいとは思っているのだ。

あまり危機感は抱いていなかった。男達も多分魔術で体を強化できるだろうが、不意を打てば逃げ出すくらい問題ないだろう。

そういつた緊張感の無さが男どもには面白くないものとして映っているのだが、そこまで鋼は気付いていなかった。

「何やってるの！」

若い女の声が響く。男どもが舌打ちした。

頭上、満月亭の二階の窓だ。少女が身を乗り出し、こちらを見下ろしながら力強く宣言する。

「それ以上するなら警備兵を呼ぶから！」

「……ずらかるぞ」

手が鋼から離れる。リーダー格は小声で指示を出し、足早に夜の街へと消えていった。

去り際に睨んでいくのも忘れない。それまでの苛立った様子とは根本から異なる、敵意に満ちた視線だった。

思い出した。昼間、この軽食屋を去る時に感じたもの。あれと今の視線は同じものだ。漠然とした苛立ちではなく、こちらを明確に意識したはつきりとした敵意だ。思い返せば、あれはそう、確か他の皆と「また来たい」とか話していた最中ではなかったか。

思考を一旦脇に置き、見上げてみれば助けてくれた少女がいなかった。代わりに建物内からばたばたとした気配。

入り口ドアを開けて顔を出したのは、つい今しがた二階にいた少女だ。昼に鋼達の対応をしてくれた店員である。

「大丈夫だった!？」

「ああ。ありがとな、助かったよ」

「？ あれ、もしかしてお昼に来てくれたお客さん？」

たかだか客の一人だったというだけなのに、男どもも彼女もよく覚えているなと感心する。いや、もしかしたら鋼達以外に誰も客が来なかったのかもしれない……。

異世界人をさほど見慣れていない鋼には比較対象が少ないが、印象としては素朴な感じの少女だった。昼に見た時は後ろでまとめていた、やや暗い金色の髪は今はほどかれ、肩口まで流れている。不思議そうに首をかしげ、緑色の瞳が鋼を見つめていた。

「よく覚えてるな」

「そりゃあ唯一のお客さんだったし……」

悲しいことに予想は大当たりだったらしい。

「というか、あなた達って二ホン人だと思ってたんだけど」

「ん？ そうだぞ、全員」

「え、じゃあどうしてこんな時間に外を歩いてるの？ 騎士学校の生徒じゃないの？」

「……えーと」

パルミナ騎士教育学園は全寮制である。迂闊にも口を滑らせてしまった鋼は、言い訳を数秒考えた。

途中で面倒になった。

「実はこっそり外出中」

「……」

ぶつちやけた鋼に呆れたような視線が突き刺さる。小さくため息をつき、気を取り直した少女は話題を変えた。

「もしかしてウチに何か用だった？ 見ての通りもう閉店してるんだけど……」

「いや、たまたま前を通りかかったただけだ。そしたらさっきの奴らが店先で何かやるうとしててな」

「……あの人達、また……」

「前にも何かされたのか？」

こくりと頷き、満月亭の少女は彼らがやったという証拠はないが

と前置きした上で、今までの被害を語ってくれた。

いわく、店の前に異臭のする生ゴミが散乱していたり。脅迫じみた文書が残されていたり。ひどい時は動物の血らしきものが撒かれていた事もあったとか。

そういった嫌がらせ行為はあの男どもが常連として居座るようになっってから起こるようになったらしい。

「地上げか……」

「ジアゲ？」

学園に近いこの場所は、立地的に店を構えるのに有利なのは一目瞭然だ。ここを確保したい誰かがあの男達を雇い、立ち退かせようとしているのではないかと想像を働かせる。

なんとも、面倒で微妙な問題に遭遇してしまった。

これは見過ごせない、と息巻くような性格の鋼ではないが、さりとて見なかつた事にするのも気分が悪い。

「ありがとね。あなたが気付いてくれたから、今夜の嫌がらせは防げたみたい」

「結局俺も助けてもらったんだしお互い様だろ。あいつら見つけたのも偶然だしな」

そういえばここで現地の住人に会えたのは都合がいい。ついでに、仲介ギルドの場所を知らないかと訊いてみる。

「冒険者ギルドのこと？」

「そうとも言うのか？ 日本にいる時調べた感じじゃ仲介ギルドって聞いてたんだが」

「商売人用の組合のほうとややこしいからじゃない？ 正しい名前なんて知らないけど、冒険者とか傭兵とか集まってる所だったら皆冒険者ギルドって呼んでると思う」

アニメや漫画の設定でいかにもありそうな呼び名である。

日本育ちの若者としては多少なりともわくわくせずにはいられない。

「場所は……ここから結構遠いわよ？ 確か、東門からすぐ近くの

大通り沿いに……」

なるべく詳しく行き方を話してもらおう。行ってみて分からなければ、また道行く人にも訊けばいい。

日本人の鋼にとつては、街から出るための門は東門に限らず通行できない。そこが実質の国境だからだ。しかし門を超えない限りはどれだけ外縁部に近づこうが問題は無かったはずだ。日本人学生に配られている異世界での注意点が記された冊子にも、特に言及は無かったように思う。

「ギルドには何しに行くの？」

「知り合いの冒険者を探しに。俺、前にもこつち来た事あってさ。

その時のな」

「ふーん。会えるといいわね」

「ああ。絶対見つける。また会おうって約束してんだ」

戦友の顔を脳裏に思い描き、鋼は懐かしげに笑った。

5 銀の少女

名前も知らない満月亭の少女と別れてから十数分後。

「よし、まだ開いてる」

目当ての建物を発見した鋼は、いまだに人が出入りしているのを見て安堵した。

現在の時刻は夜の7時54分。セイランでは夜の商売以外は、たいていもう店じまいしている時間である。しかし仲介ギルドとその周辺は例外のようだった。

街のほぼ中心の学園のある地区からここまでは、あの少女の言う通りそれなりに遠かった。

こんな短時間で移動できたのは《身体強化》と《隠身》の魔術を駆使して民家の屋根の上などを駆けてきたからだ。さすがにこればかりは問題行動だろうと思うのでこの移動手段を常用するつもりはないが、何しろ一つの街の中央から端は歩くには遠すぎる。

もしかするとセイランの法には触れていない可能性もあるのだが、人に知られないのは勿論、多用も禁物だろう。

建物の看板には剣と宝石のロゴがあり、『冒険者・傭兵仲介ギルド パルミナ支部』の文字が踊っている。

石造りの立派な二階建てで、日本の役所並みには広そうだ。ギルド支部の隣には酒場があり、向かいには武器や防具を扱う系統の店が軒を連ねている。いまだ営業している店が目立ち、周辺一帯はラントンや魔石灯によりこれでもかと照らされていた。

修理した武器を受け取りに出向く者、一仕事終えギルドに報告に行く者、これから一杯やろうかと酒場へ入っていく者。そういった人間達が行き交って、他の寝静まった地区とは比較にならないほど

この地区はいまだ賑やかだった。

セイラン人には珍しい鋼の風貌もそれほど目立っていないはずだ。黒髪黒目は日本だけでなく、セイランの隣国にあたるグレンバルド帝国の人間にも見られる特徴で、鋼も恐らくは帝国系の移民か、帝国系の血筋が入ったセイラン人、と見られるだけだと思われる。

まさか騎士学校に通う『ニホン人』だとは思えないだろう。

入ってみたギルド支部は予想以上に雑然としていた。お堅い役所というより日本の居酒屋の雰囲気に近い。鋼はそんな所に入入りした事はないので、なんとなくのイメージだが。

広い部屋だった。正面にカウンターがあり、そこだけ見ると郵便局か銀行だ。受付には女性が一人座っているだけだが、空いた席を見るにこの時間帯だからだろう。

カウンターのこちら側は木製の椅子と机がごちゃごちゃ並んでいて、席についた幾つかの集団が食事をしつつ歓談中だ。鑑定所と書かれた別のカウンターもあるが、彼らの食事の出所は謎だ。右の壁には巨大なボードが埋め込まれていて、依頼が書かれた紙が幾枚か張られている。

これは事前に仕入れた予備知識もあり、推測できた。

例えばある魔物の毛皮を欲している商人がここにその依頼を出せば、ボードを見た不特定多数の冒険者・傭兵から誰かがその依頼を引き受け、その魔物を狩りに出かける。剥ぎ取った毛皮を冒険者がギルドに納品すれば、仕事はそこで完了となり報酬が支払われる。残る依頼人とのやり取りなどは全てギルドが代行する。そういうシステムだ。

仲介ギルドとは実にそのまんまな名称なのだ。

わざわざ依頼を出すという性質上、ここでやり取りされるのは市場に安定供給されていない物ばかりらしい。手に入れるためには危険を冒さねばならないような。しかし物が無い訳ではないので、命さえ賭ければ誰でも一攫千金を夢見れる。冒険者とはそういう職業

だ。

「おい、その少年。一人でこんなところに何の用だい？」

ボードの前にいる数人の冒険者達をなんとなく眺めていたら、後ろから声がかかる。

振り向くと冒険者と思しき五人の集団がテーブルを囲んで座り、鋼のほうを見ていた。全員二十台半ばくらいだろうか、男三人女二人という構成で、気心の知れた仲間同士のアットホームな雰囲気を感じることなく感じる。

声の主はその内の一人、茶髪碧眼の青年だ。清潔な身なりでチンピラじみた空気など微塵も感じない。彼らに頼ってみる事にした。

「あのさ、冒険者やってるはずの知り合い探してるんだ。どこで活動してるのかも情報無いんだが、一番可能性が高いのがこの街でさ」
戦友二人が鋼達との再会を望んでいるなら、日本人が唯一出入りできるパルミナに来てくれるはず。根拠はたったそれだけだ。

「どの街が拠点かも分からないじゃ難しいぞ？」

青年が渋い顔をする。見ず知らずの子供の言う事なのに、真面目に悩んでくれている。その隣に座る赤毛の女性が訊いてきた。

「受付で聞いても調べてくれるかは微妙よね……。探してる相手の名前は？」

「ダリアっていう銀髪の女と……」

もう一人の名前を出そうとしたところで、鋼は場の空気が変わったのに気付いた。

五人全員が驚いたように鋼を注視している。

「お、もしかして当たり？ あんたら知ってるのか？」

「知ってるも何も……」

初っ端から知っている人物に行き当たるとは幸先がいい。それにしても、五人とも妙に大袈裟な反応だが。

茶髪の青年が説明してくれる。

「この街を拠点にしてる有名な冒険者だよ」

「へー。名前知られてるなら探しやすいな。……にしても、なんか

驚き過ぎじゃないか？」

「いや、疑うわけじゃないんだけど……。あの『銀の騎士』と知り合いと聞けばさすがにねえ」

「……何その変な二つ名みたいなやつ」

「二つ名だよ。それだけ有名なんだ」

同席して、どういう理由で有名なのか詳しく聞く。なんでも凄腕の冒険者らしい。

腕がいいだけなら他にもいるが、単独で活動する、しかも女性の冒険者は少なくとも同じ街には他にいないのだとか。それでいて近寄りがたいほどの美人で、パルミナにやって来た当初は冒険者グループからの勧誘が後を絶たなかったそうだ。

それらをすげなく断り続け、単独で活動しているのにいまだ死んでいないという事で腕も確かだと知れ渡り、今では素性不明の孤高の戦士という扱いになっている、との話だった。いつも堂々とした態度を崩さず、ついたあだ名が『銀の騎士』。

「その彼女と知り合い、て聞いて驚いた僕らの気持ちがあったかい？」

「まあ少しは。色々参考になる話ありがとな」

「どういたしまして。それで君は、これからどうするつもりだい？」

「この街を拠点にしてるって分かっただけでもでかい収穫だし。のんびり探すよ」

しかし、単独の冒険者というところがどうにも引つかかる。一緒にいないのなら、もう一人の戦友は何をしているのだろうか。

「そっか。ちなみにこれは興味本位だけど、どういう知り合いか訊いていい？」

言いたくなければいいんだけど、と更に言い添えるところに、この青年の人の良さが表れている。なんとも荒々しいイメージからは程遠い冒険者だった。その彼と行動を共にしている他の四人も信頼できそうだと、思ったところで。

「あ……」

驚いたように、青年が口を開けたまま硬直した。

「噂をすれば……」

その視線は鋼の後ろに注がれていた。鋼の向かいに座っている他の冒険者二人も同様に、こちらの後方、ギルドの入り口を見ている。予感に駆られて、鋼もゆっくりと振り向いた。

ああ、全く。少し見ない間に随分と、まあ。

少女と女性の間くらい、年若い女がギルドへ入って来たところだった。

黒いローブをまとったその女は、輝かんばかりの銀の髪をなびかせ金色の瞳で前だけを見据え、威風堂々と鑑定カウンターに向かっ
ていく。鋼のもの以外にも建物内からは無遠慮な視線が集中しているが気にした風もない。

ぞくりとするような作り物めいた美貌だ。よく見知っているはずの鋼でさえ、気後れしそうになるほどの。

二年という時間は彼女に見違えるくらいの成長をもたらしたようである。

そこにいたのは間違いなく、鋼の探し人の一人。

ダリアクレインという名の少女だった。

その男、ロア＝レーダルは同業からも冒険者には見えないとよく言われる。

体は細いし、強面でもないし、争いごとには向いていない性格だともよく評される。

周囲の反対を押し切って冒険者となったのが数年前だ。

慎重さと臆病さが幸いしてか、どうにかこうにか命を食い繋ぎ今に至っている。ぼつりぼつりと一緒に組んで依頼をこなす冒険者が

増え、気付けば五人グループのリーダーになっていた。

気楽に、安全に、堅実にが合言葉の、お世辞にも名前が知れているとは言えない弱小グループだが、それなりに上手く日々をこなしていると思う。グループが安定しているのは個々人の実力やリーダーの統率力ゆえではなく、仲間達の人の良さがその理由だろう。

腕の良さやどんな技能を持っているかより、一緒に仕事が出来たら気分がいいだろうなあという基準で仲間を選んだのは間違っていないと、そう素直に思える気のいい仲間達なのだ。その境遇もあり、ロアは人との関わりを人一倍大切にしている性質だった。

仲間達もそれをよく知っており、ギルドに入って来たまだ二十にもなっていない少年に声をかけたロアを、またこの人はと苦笑しつつ見守ってくれていた。

その黒髪の少年はいかにも場違いだったのだ。まだ子供と違っていい年齢の冒険者がいないわけではないが、どこかのグループの見習いのような立場なのがほとんどだ。たった一人でギルド支部に入りする子供はどうにも目立つ。放っておけずいつい声をかけてしまった。

話を聞く。人を探しに来たらしい。

見ず知らずの冒険者達を前にしても少年は物怖じする様子もなく、肝の据わった子供だなあとロアはひっそり感心していた。

探し人があの『銀の騎士』だと判明するに至り、ロアの仲間達も俄然興味をひかれたようだった。

輝かしい経歴と共に知られる熟練の冒険者はいるが、彼女のようには素性不明のまま名を知られている存在は非常に珍しい。目に見えた功績があるからこそ人の口の端にのぼり、名前が伝わっていくのが普通だというのに。

銀の騎士と親しくしている冒険者はロアの知る限りいない。だが依頼の張り出されたボードは公開されているのだから、彼女がどういった依頼を受けているのか他の冒険者にも推測が可能だ。彼女がパルミナで活動を始めた頃、ある好奇心旺盛な同業者が聞き込みな

どでその内容を調べてみたらしい。

『あの女は普通じゃない』

ロアも知るその同業者は、酒の席で彼女をそう評した。

熟練の冒険者集団でも達成が困難な、やり遂げれば一気に名の売れるような依頼だったわけではない。中堅どころの冒険者達を選ぶような、それなりに危険でありふれた依頼を彼女は好んで受けるようだった。

普通じゃないのは、彼女がたった一人でそれを完遂する事にある。冒険者は徒党を組んで依頼にあたるのが通常なのだ。それでいて一人二人と命を落とすのはありふれた話なのだ。単独でそれが可能なら誰だってグループなど組まない。人数がいるだけ、報酬は分割されるのだから。

共に行動する者がいないから彼女がどれほどの強者なのか、誰も知らない。しかし並みの実力であるはずがない。一年以上、彼女は頻繁にギルドに依頼を受けに来ている。だというのに命を落とすどころか、依頼を失敗した話すら聞かないのだから。

推察できる実力の高さ、相手を怯ませるほどの美貌、他の冒険者に勧誘されてもなびかない孤高の精神性。どれ一つとっても印象としては強烈で、そりゃあ皆の記憶にも残るし有名にもなるだろうと思う。

そして今、ロアの眼前ではタイミングよく銀の騎士が現れ、黒髪の少年が彼女に気付き驚いているところだった。

相変わらずため息をつきなくなるほどの美人だ。その外見に加え、超然とした態度に気が引かれるのだろうか？ つい動きを目で追ってしまいそんな存在感が彼女からは放たれている。

ギルド内の他の冒険者達も話し声を若干落とし、ひそやかに注目しているのが分かる。銀の騎士はいつもの通り、それら視線をもの

ともせずカウンターへ歩み寄った。大きな背負い袋を背負っている。依頼完遂の報告だろう。

少年が立ち上がった。

銀の騎士が依頼内容だろう魔物の部位を取り出し、鑑定カウンターに渡している。その背後に少年は近寄って行く。

事情を軽く知るロア達も、そうでない冒険者達も、何が起きるのかと静かにそれを見守っていた。

「どうなると思う？」

ロアが仲間達に訊ねてみると、ノリのいい赤毛の女マーリエが「ふむ」と口に手を当てる。

「あの子は前に彼女に命を救われた事があって、その時惚れちゃったんじゃないかしら。それでお礼を言うために探していた、と」

「想像力たくましいなあ……」

「でも実際会つとやっぱり美人だし気後れしちゃって、お礼だけ言つて告白は出来ずに帰ると予想するわ」

呆れを含んだ口調で、冷静な金髪の男ヨキがぼそりと呟く。

「……まあ、命の恩人っていうのはありそうだが。それだと知り合いとでは言わんだろう」

その部分に関してはロアも同意見で、さて正解は、と一同は少年達に集中する。

数歩分の距離を置いて少年が立ち止まった。

足音や気配で察していたのだろう、「何か用か？」と訊きつつ女騎士が振り返る。

「よお」

そして少年の姿を認めた瞬間、ぴしり、と固まってしまった。

予想外の反応である。どういう知り合いであるにしろ、淡々としたり取りを想像していたのだが。ちょっとした知り合い、という雰囲気には見えない。

「元気でやってたか？」

「……コ、ウ？」

呆然とした声。ここまで平静を失った彼女をロアは目にした事がない。

いつだって崩れない彼女の超然とした態度も、酒の席で語り草になっっているほど知られているのだ。彼女だって感情に左右される自分と同じ人間なのだと、ロアはたった今初めて知った。

「コウ！」

ダリアはそう叫ぶやいなや一直線に少年の胸に飛び込んだ。

この展開にはロアも完全に度肝を抜かれた。

建物内の冒険者はきつと皆、同じ驚愕を共有しているに違いない。ただただ呆然と成り行きを見守る。

「会いたかった……っ！ 久しぶりだな！ 二年ぶりか？ いつこっちに？」

ひし、と少年を抱き締め、彼の胸に体を預けたまま顔を上げ、ダリアは矢継ぎ早に言葉を繰り返す。

見る者を魅了せずにはいられないような、喜色満面の笑顔だった。あれほどの美人にそんな表情を引き出させる少年に、同じ男として羨望を感じずにはいられない。

「昨日来たんだよ。ヒナもルウも来てるぞ」

「おお！ 会いたいな、今は一緒じゃないのか？」

「ほんとは夜に外出るの禁止されててな。置いてきた」

ダリアは普段よりもぐつと幼く見えた。相変わらず彼女はあどけない少女の笑顔を至近距離で少年に向け続けている。『銀の騎士』のイメージとはあまりにかけ離れたその様子は、実際に目にしているのにいまだ信じがたい光景だった。

「見ないうちに背も伸びたな！ ふふ、それは私もか」

「あー……、感動の再会のところ、悪いんだが」

「？」

少し困ったようにコウと呼ばれる少年が言い、少女が首を傾げる。

「場所が場所だし、そろそろ解放してくれねーかなと」

「んー。これくらいはいいだろう？ 二年も離れていたんだから」

ダリアが口を尖らせるが、コウはじとつとした視線で彼女を見据える。どんな無言のやりとりがあったのやら、根負けしたように少女が一步身を引いた。

「……仕方ないな。場所を移すか。換金するまでちよつと待っていてくれるか？」

「ああ」

冒険者達と同じくぼかんとしていた職員の元に戻り、ダリアはせつつくように素材の鑑定を再開させている。それを横目に少年も口ア達の傍へとやって来た。

「んじや、この通り見つかったんで俺は帰るよ。話聞かせてくれて助かった。ありがとな」

今の場面を見られておいてここまで堂々と振舞えるのには感心するしかない。驚きやら何やらで思考が麻痺していたロアは、なんとか頷きだけは返して少年を見送った。

そこで自分の流儀を思い出し、少年の背に向かい慌てて名乗った。「僕はロア・レーダル！ 冒険者だ。縁があれば、また」

「ああ、悪い。俺も名乗ってなかったな。神谷鋼だ。またな」

振り返った少年もまた名乗り、ダリアの横へと向かう。

と、いつか。まさか、二ホン人？

そのうち依頼の完遂が確認され、報酬を手に二人は連れ添ってギルド支部を後にした。

それまで奇妙な静寂に支配されていた支部内は、当事者二人の退場を機にどつと騒がしくなる。少年と話したロア達にも他のグループから視線が集まっただけで、中々に座りが悪い。

「こりやあ予想外だったな……」

悲しくなるほどリーダーより常に冷静なヨキですら、そう言っている顔は驚きに満ちていた。ロアも似たようなものか、それ以上の顔をしているのだろう。

「いやあほんと、……すごいものを見てしまったなあ」

「結局あの二人はどういう関係だったの！？ 恋人？ 二年間離れ

ていた恋人なの!？」

「落ちて着けマリ……」

仲間達も騒ぐ中、ロアは二人が去っていった入り口をぼけっと眺める。

目撃者はロア達を除いても十を軽く超えている。ここで起きた出来事はきつと、誇張交じりにこの界隈の冒険者達に広まっていくのだろう。

彼女を何度も勧誘していたグループにあの少年が逆恨みされなきやいいけど。

同業には殺伐とした人間も多くいるのを知っているロアは、そんな心配を抱くのだった。

6 『もう一人』の行方

夜のパルミナの街を二人して歩く。

ギルド支部を出てからしばらくは、無言の時間が続いた。

気まずい沈黙ではない。それは二年の空白を埋めるためにお互いに必要な時間だった。

「しょーじきな、さつき一目見た時、別人かと思ったぞ。すげえ美人になりやがって。クーのくせに生意気だ」

ダリア。本名、ダリアクレイン。だから鋼は彼女をクーと呼んでいた。

「そ、そんな言いがあるか！ し、しかしそうか、び、美人か、うん……」

顔をやや赤くさせ、もによもによと口ごもる彼女の頭をぽんぽんと撫でる。

「ま、中身はあんまり変わってないようで結構安心したけどな」

二年離れていた事による『ズレ』は、そろそろ鋼の中から完全に消えようとしている。鋼を認識する前の、凜とした表情でも彼女がしてみせればまた違った印象になるかもしれないが。話していて、ああやっぱり、こいつはあのクーなのだなあと思うばかりなのだ。

「……これでも、一年以上は冒険者をやってるんだぞ？ 精神的にも、少しは成長したと思うのだ」

「言い方が悪かったよ。二年の間に性格も別人みたいになっただけで、安心したって事だ」

「それは私もだぞ。コウがコウのままできてくれて私も嬉しい」

ストリートな発言と素直な笑顔に、うぐ、と鋼は怯みそうになった。無邪気な言動はかつてと同じでも今やられると破壊力が違うのだ。

だが鋼は努めてなんでもない風を装った。これは以前リーダー役だった頃の意地である。

中々抜けない悪癖なのだが、クーに限らず戦友である彼女達の前では、鋼はややカツコつけになつてしまふ傾向がある。隙を作りたくないというか、情けないところを見られたくないというか。自分でも自覚はしていた。

もちろん彼女達に心を許していないわけではないのだ。決してそうではない。ただの下らない、意地と見栄だ。

「にしても、銀の騎士だっけか？ 随分な名前で呼ばれてるみたいじゃねえか」

「銀の騎士？ それはなんだ？」

首をかしげるクーは、本気で意味が分からなさそうで。

「……。ああ、そういうことか……。教えてくれる奴が誰も周りに……。」

ロアという冒険者から聞いた『銀の騎士』の話进行を思い返せば、おのずと結論は出る。

二つ名をつけられた本人だけがその事を知らないとか……。

「お前『ぼっち』だもんな……。話を聞く限りは」

「待ってくれ！ そのボツチとかいう意味は分からないが、何か今憐れみの視線で見られてるのは分かるぞ！？」

「大丈夫だ、お前は気にしないでいい事だからな」

安心させるように鋼が笑ってみせると、反対にクーは顔を若干ひきつらせた。

「そんな顔で言われると逆に気になるんだが……。」

知らぬが仏、という日本語を彼女に教えてやるべきだろうか？

その後も歩きながら、軽く近況などを語り合う。気付けば三十分以上も時間が過ぎていた。

寮に帰らねばならないので鋼もあまりゆっくりは出来ない。

「……んじゃ、そろそろ一番訊きたかった事を訊いてみるけどよ」

その質問がくる事はクーにも分かっていたようだった。

「……すまない。つい説明を後回しにしてしまった」

「まあ、お前が中々話さない時点である程度想像はついてるんだが……。『あいつ』は今、どうしてる？」

名前を出すまでもない。それで通じる。

あと一人いる、再会したい戦友の所在を鋼は問いかけた。

「その……、すまない」

再度謝り、そこで言葉が途切れる。俯きがちなクーの言い辛そうな表情を、鋼はただじつと見つめる。

無言の催促に耐え切れず、それでクーは白状した。

「彼女がどこにいるのか、分からないんだ」

「分からない？ 俺達と別れた後、お前達も別れたのか？」

「いや、あれから二ヶ月くらいはニールのところと一緒にいたんだ」

ニールは鋼達を送り還してくれた魔術師の名だ。ルデス山脈に隠棲し、魔道の探求に勤しんでいる。

「しばらくは魔術を習っていたんだ。世界を渡れるような魔術があれば、鋼達にもまた会えるし……。結局は難しすぎて、使えるようにはならなかったが」

鋼も少し聞いた事がある。例えば巨大な炎を放つ、といった魔術はもちろん難易度も高いのだが、あくまで一般的な魔術の延長上にあるものだ。しかし世界の壁に干渉するような魔術となると、もはや別次元の難しさとなるらしい。

どれだけ努力しようが大半の魔術師にとってはそもそも不可能だそうだと。よほどの適性があり、魔術の技能自体も超一流。そういう人種が全力を注いで初めて成功する類のものだとか。クーが習得できなかつたのは当たり前である。

「それで弟子入りして二ヶ月ほど経った頃、ふとした事でこのパルミナの噂を聞いたんだ。近くの街に降りて色々訊いて回ったら、異世界と行き来できる門が出来たという話でもちきりだった。難しい魔術に頼らなくても鋼達に会えるかもしれないと思って、行く事に

決めたんだ」

鋼達が日本に帰れたのだから、クームニールを頼ればいいのでは？ と、ここまでの話を聞いた者がいるなら思うかもしれない。

実際はそれは出来ない。ニールが扱える世界に干渉する魔術は《逆召喚》といって、ソリオンに落ちてきた者を送り返す事しか出来ないのだ。

世界間の移動のあとには穴のようなものが残るそうで、それを逆に辿らせて戻す、という原理らしい。よくは分からないが、世界に干渉する系の他の魔術よりは比較的難易度が低いらしく、恐らくかなり優秀な魔術師らしいニールでもそこまでが限界だと言っていたのを覚えている。

「だが彼女はニールのところに残ると言っただけ。鋼と再会できるか調べてくれるのは、私一人に任せると……」

「でもあいつは今、ニールのトコにもいねえのか？」

「でないところにいるか分からないとは言えない。クームは神妙に頷いた。

「ああ……。門があるという確証を得て私も一度ルデスに戻ったんだ。いたのはニールだけだった。聞けば私が出て行って少しした後、彼女もいなくなったらしくて……。残されていた手紙を見せてもらった。『やりたい事があるから旅に出ます、心配は要りません』とだけ書いてあったな」

「自由に生きてんなあ……」

呆れるしかない。彼女らしいと言えはらしい行動なのだが、せめて連絡手段など書き残して行って欲しかった。

「彼女は家族のいない天涯孤独の身だと聞いていたし、探そうにも手がかりすら無くて……」

「あのさ、もしかしてお前責任感じてんのか？ そりゃどう考えてもあいつが自由過ぎるのが原因だろ」

「だが！ しばらく一緒にいたのに、私は彼女に『やりたい事』があったのすら気付けなかつたんだ！ 考えてみても心当たりすら浮

かばない。探しようが無いんだ。これじゃあもう二度と会えないかもしれない……」

このあたりでさすがに鋼は気付いた。

鋼の知る限りクーは、これほどネガティブな少女では無かった。自虐的な傾向も無かったように記憶している。「彼女」の不在でクーも参っているのだ。

「生きてればまた会える。お前が思い詰める必要はねえだろ」

鋼と同じくらいの身長のコウが、今は少し小さく見えた。

「その後はずっと冒険者に？」

「……ああ。ニールの家で待っていてもいつ帰ってくるのかも分からなかったし。先に鋼達と再会できれば、と思っ……でも、去年の騎士教育学園の生徒を調べても鋼達がいなくて……」

「あー、そりゃ悪かったな。前にこつち来た時はまだ中二でな、日本じゃ高校扱いになってる騎士学校に入るのに、二年待たなきゃ駄目だったんだよ。……って中学とか高校とか言っても分からんよな。まあとにかく、待たせて悪かった」

「ほんとだぞ！ ニホンへ探しに行きたくても、身元の保証が無くて国境を越えるのは無理だと言われるし……。お金があれば解決できる問題かもしれないと、思っ……冒険者としてお金稼ぎながら、ずっと探してたのに鋼達はいないし。入れ違いになるかもしれないから、この街から離れるのも怖くて……」

「……」

途切れ途切れに語るクーはもうほとんど涙声だった。その思い詰めた表情をなんとかして打ち消してやりたくて、だがそういった事に疎い鋼には気の利いた言葉が出てこない。

以前によくそうしていたように、無言で頭を撫でた。それくらいしか出来る事がなかった。

「うっ……！」

堪えていたものがそれで決壊したようにクーがこちらに縋り付いてくる。

嗚咽交じりの声は胸に痛かった。

「うう、うああ……っ！ コウ……！ ほんとに、本当に、また会えて良かった……っ！ わ、私、このままもう会えないかもって何度も、思ってた……っ！ 皆私を置いてどこかへ行っちゃうって……！」

「……んなワケ、ねえだろ」

あの、魔物の巢で。

共に戦った協力者達には、訳ありの者が多かった。余程の事が無いとあんな人里離れた地獄に迷い込むなどありえない。ダリアクレインもその最たるものだろう。

彼女には帰る場所が無い。ダリアクレインという本名も、あまりおおっぴらには名乗れない。

鋼達が日本へ帰還する時クーも一緒に来たがったのだが、《逆召喚》という魔術の都合上そうもいかず。ニールや『彼女』がいるなら寂しくは無いだろうと、再会を約束して別れたのだ。

こんな事になっていようとは思いつかなかったが。

「ちゃんと約束通り会いに来ただろ？ これからもお前を置いて勝手にどっか行ったりはしねえから、な？」

「うん。うん……！」

抱きついたまま離れようとしないうクーの気が済むまで、好きにさせておく。その間考えってしまうのは、この少女を放って消えてしまったもう片方の少女についてだ。

『彼女』は察しの悪いほうでは無い。自分がいなくなればクーが寂しがるのを分かった上で、いなくなったのだ。

ただ単に、勝手な都合でクーの事を考えずに旅に出たのかもしれないが。果たして『彼女』のやりたい事とはなんなのか？

その内容すら知らせずに消えたのが妙に気にかかる。

ここまで順調にクーとは再会できたが。あとの一人との再会は、そう簡単にはいかないかもしれない。

本心を隠すのが上手かった少女を思い返しながら、鋼はそんな予

感に駆られていた。

日向は部屋でプリントを見下ろし、むむむ、と唸っていた。

本日騎士学校で配布されたものだ。記載内容は選択授業についてで、これを見て三日後までには受けたい授業を決めないといけない。学園での一年間は前期と後期に分かれていて、今決めるのは前期の半年分の授業だ。これが中々に悩ましい。

剣術と魔術に関連するものはなるべく選ぶつもりだが、他にも色々受ける必要がある。例えば鋼が興味を持っていたこちらでの経済学や薬学、他にはソリオン大陸での世界史だとか、いかにも学校らしい授業も多くあるのだ。

日向は勉強がニガテである。さすがに中学校のレベルで赤点スレスレの低空飛行、というほど悪い成績ではなかったのだが、良いほうだとは間違っても言えない。大多数の学生がそうであるように、筆記用具を片手に教科書を読むのを苦行と感じる一人だ。

というか、そもそも。

私は何かを考えるのに向いてないんじゃないかなあ。

自分ではそう思っている。体を動かすほうがずっといいし、勉強しなければいけないならまだ暗記系科目のほうがマシというもの。

本来なら選択授業を決めるのも、将来を見据えて色々考えてからのほうがいいんだろうけど。考えてすぐ結論が出るなら苦労はない。そもそも何からどう考え始めればいいのかも分からない。日向は考えるというのがとても下手だ。

いっそもう適当に決めてしまおうか。いやでも後で鋼に「そういうのはしっかり悩んで決める馬鹿」とかお叱りを受けそうだ。

「うーん……。ルウちゃんはもう、決めちゃったんだよね？」

「はい」

気分を変えてルームメイトに話を振ってみると、すぐに答えは返ってきた。

日向のルームメイトはラッキーな事に凜である。三人部屋の場合もあるみたいだけど、日向達は二人でこの部屋を使っている。

鋼は「偶然じゃねえだろ、多分」と言っていたので、帰還者同士固めてくれたのかもしれない。くじ引きで決めたというよりはありそくな話である。部屋割りを決めた人には感謝の念を送りたい。

「私はどうしよっかなあ……」

「どれにしようか迷っているなら、一緒に授業にしませんか？」

「うーん。それもいいんだけどねー」

どの授業を凜が受けるかも分からないのに、即決するのは躊躇われた。それに全部が全部、同じ授業でなくてもいいだろう。

やっぱり明日にでも、鋼に相談してからちゃんと決めよう。

この件に関しては凜の意見は参考にならない。彼女はどうか既に決めているけども、どの授業か決めているわけではないのだ。

部屋に帰ってきた時の事を日向は思い返す。

早速選択授業について相談しようとした矢先、凜は軽くプリントを流し読みしてから言ったのだ。

「私は全部コウと同じ授業にします」

至極あっさりと言いつ放つものだから、日向はコントのようにガクツとなった。

まあ、考えてみればそうなる可能性は高かった。それで日向は相談するのを諦めて、一人で唸っていたのである。

「うん、明日鋼に相談してから決めるよ。経済学とか一緒に受けても仕方ないしねー。こっちで役に立つ知識だったら、後で鋼がルウちゃんに教えてもらえばいいんだし」

これから先も、出来るなら鋼や凜と一緒にいたいと日向は思っている。だから全員が習わなくても、集団の誰か一人が知っていれば十分なものは学業優秀な仲間任せにしてしまおう方がいい。適材適所だ。「そうですね……。それなら私が受けなかった授業で面白いものがあれば、ヒナちゃんも教えて下さいね」

「うっ……。人に教えるの私って下手っばいからなあ……。頑張ってみるけど」

人にもものを教えるのに関しては、実は鋼が上手かったりする。テスト前はよく勉強を見てもらったものだ。

「ところでさ、ルウちゃん。話は変わるんだけど……」

ゆっくりと視線を凜の手元に下げていきながら、日向はいい加減気になっていたので訊ねてみる事にした。

「？　なんですか？」

「なんでずつと携帯で遊んでるの？」

凜はさつきから手に握った携帯電話を、時折傍に置いてはまた掴んだり、もう片方の手に移したりと忙しく動かしていた。

「……あ」

「無意識だったんだ……」

今気付いた風な凜に、日向は脱力気味に言い添えた。原因は予想できるというか、どう考えても一つしかない。

「そんなに鋼についてきたかったの？」

「べ、別にそういうわけでは……。ただその、遅いなと」

寮の規則を初日から破り、鋼はギルドを探しに出かけている。それを知らせるメールが凜に届いてからそろそろ一時間が経つ頃だ。

「まだ一時間くらいじゃん。それに帰って来たらメールするって書いてあったんでしょ？」

「ええ、はい。そうですねですけど」

携帯からは手を離れたが、それでも凜は落ち着きが無かった。心配しているのとも少し違って、なんだか心ここにあらずだ。

「……やっぱり鋼について行きたかったんじゃないの？」

「……違います」

「あー、それじゃあ置いてかれたのがショックなんでしょ？」

「……同じ意味じゃないですか」

ああ、なるほど。だいたい正しく把握できた気がする。

日向と凜にとっても重要な事なのに、手伝わってくれと頼んで来ない鋼に拗ねているのだ。

「別に私達の手伝いが要らないってワケじゃないと思うよー？ 初日で何の情報もないし、もう夜だし、ギルド見つけても今日再会は無理だろうって思ったから、無駄足になりそうで付き合わせるのは気が引ける……って鋼は思ったんじゃないかな？ メールは来たじやん。後で私達にも手伝わせるつもりだよきつと」

どうせそんなところだ。日向は仲間達の中でも鋼との付き合いが一番長いというのもあって、彼の考えは結構分かるつもりだ。

「……ヒナちゃんはコウの事、よく分かってるんですね」

「いやー、まあでも普通に違うかもしれないし」
「なんだか凜が羨ましそうに言うてくるので日向はそうお茶を濁した。」

というか、頭の良い彼女に日向が察しの良さで勝っているはずが無いのだけど。凜は鋼の事になると、冷静さやら思考能力やらが極端に落ちるように思う。もちろんその理由に思い当たらないほど日向は鈍感ではなかった。

鋼だつてそれほど鈍感じゃないと思うんだけどなあ、となんとなく考えていると、凜の携帯が震えた。

日本での某ミリタリーゲームにおける無線の着信音が流れる。サブカル大好きないわゆる『オタク』と呼ばれる人種な凜が、鋼からの着信音として設定しているものだ。

それはもう見事としか言いようの無い速さだった。気付けば凜は携帯を耳に当てている。

「コウですか？ どうしました？」

今のはワンコールよりも短いタイミングだっただろう。日向がそ

う感心していると彼女は驚愕の表情を見せた。

そんなに驚くような知らせなのだろうか？ その疑問は次の声で氷解する。

「……クーちゃん！」

凜が相手に呼びかけた、その名前で。

三人でソリオンに来た目的の、少なくとも半分が達せられたのだと日向も知るのだった。

7 日本人街と、事件の始まり

「ほお、前にこつち来た時の友達なんか」

「ああ。一緒に魔物と戦った仲でな。ダチというか戦友というか」
翌日。

クーの事をそんな風に説明しながら鋼は学園の廊下を歩いていた。日向に省吾に片平、そして合流したシルフ組の凜に有坂という、昨日も一緒に過ごした面子が揃っている。

双方の世界の文化の違いを学ぶ、異文化という必修授業を今しがた終えて六人は合流したところだった。選択授業が始まるまでたいした授業はなく、ほとんどは今のよう自由時間である。

昼食には少し早いので今から街を散策しつつ選択授業をどうするかを話し合うのはどうか、と省吾から提案があったのだが、実はクーを校門で待たせていた。折角なので彼女を紹介したいと思い、簡単にだが事情を話している。

「……っていうか、よくバレずに外出れたわね。そっちの寮は警備とかヌルいのかしら」

「嚴重ではなさそうだぞ。窓から出たら守衛室の前は通らなくて済むし、あとはセキュリティの魔術に引つかからねえようにするだけだ」

「あー、そういう魔術はやっぱりあるのね……」
自分も夜に抜け出してみようかと目論んでいたのか、有坂はがっくりと頂垂れた。有坂と省吾が住む学園敷地内の第一寮の警備体制がどうなっているか鋼も知らないが、急造の第二寮よりザルな事はあるまいと思う。

少なくとも最低限、魔力の有無は感じ取れないと抜け出すのは無理だろう。こちらで生活し普段から魔術に触れていれば、日本人で

もすぐに魔力に対しての感覚は身についてくる。

「え、あの寮にそんな魔術がかかっているんですか？」

「はい。塀の上部分に沿って魔力が流れていて、術者以外の魔力を異物として察知する、というタイプの結界型だとは思っていますか？」

……

これは片平と凜の会話だ。昨夜抜け出そうとして初めてその結界とやらの存在に気付いた鋼とは違い、凜はその術式を読み解く段階まで理解が及んでいるようだ。

しかしなんと、迂闊である。

「……もしかして村井さんって、魔術についてかなり詳しくかったですか？」

少し声のトーンが変わった片平に、凜もそこでしまったという顔をした。

「え、あ、いえ！ 私なんか全然！ 全くたいして詳しくないですよ、はい」

「でもきつと私より詳しいですね！ なんで魔術の内容と型式が分かったのか詳しく教えて下さい！」

すぐるような目つきで凜がこちらを振り返るが、それ以外の鋼達四人は諦めると首を横に振った。

凜を質問攻めにし始めた片平をちらりと見て、有坂も鋼に訊ねてくる。

「でも本当にあの子、詳しくそうな感じよね。普通はその、結界？とか、見て効果が分かるものなわけ？」

「俺も日向も無理だな。ここに結界つばい何かの魔術がある、程度で分かるくらいで。しょぼい感じだとかなんかすげー効果ありそうだとか、それくらいならまあ、ちょっと注意すりゃまだ判別できるが」

「素人が 例えば私がこれから勉強して、村井さんみたいに結界の効果見破るレベルの魔法使いになるのにどれくらいかかりそう？」

「……」

答えるのに気を遣う質問だった。その逡巡だけで察したのかは有坂は頷く。

「どれくらいかかるか分からないくらい離れてるのね？」

「いや、というかだ。魔術師っていうのはかなり才能と適性で左右される。ルウに出来ない事が、その辺の素人が魔術を習い始めてすぐ出来る可能性もある。だがその場合でも、他の魔術はどれだけ努力してもルウのように出来なかつたりしてな」

「得意・不得意が人によって色々変わるから、同じ事が出来るようになるか分からないってわけね。そういうのいいわねえ。自分がどの分野に適性あるのかって楽しみがあつて」

その期待に水を差したくはなかつたが、鋼は一応忠告しておく。魔術を習うならどうせ知る事になる世知辛い現実を。

「言つとくが基本的に才能がものをいう世界だぞ。適性の高さは皆まちまちだからな。例えばだ、風系魔術の適性たけえ奴を集めたとすれば、ゲーム的に言やあ『風レベル2、炎レベル1』って感じのがほとんどなわけだ。だが才能ある奴には『風レベル3、炎レベル5』みたいなのがいたりする。こいつは分類すりや炎系が得意な魔術師になるが、ほとんどの奴より風系も強いつて事になる」

「うわ、やな話聞いちゃつた」

嫌そうな顔をするのは、自分は魔術の才能の無い側だろうと自分で思っているからだろうか。有坂の反応は興味深い。

この話を日本人が聞けば、自分がその才能溢れる魔術師の卵だったらと夢想する奴が多いのではなからうか。

中学校で鋼に魔術についてやたら訊いてきた同級生達はそういう反応の者が多かった。パルミナに志願者が殺到したのも同じ理屈に違いない。

「……ルウのレベルで術式を見破るには、分析とかそういう系の適性がかかなり高くないとそもそも無理だな。その適性があつても素人には多分難しい。それくらい高いレベルの技能だよ、あいつは当然のように言つたが」

「結局私には無理そう？」

「仮に平均くらいの適性でも、何十年か努力すりゃいけるかもしれん。俺もたいして詳しくないからはつきり言えんが……」

「何十年って……」

凜の適性はかなり高く、更に修練を積んでいる。追いつくにはまず、同等以上の適性がある事が大前提なのだ。

「……ねえ。そっついえばさつき、村井さんに出来ない事が素人でも出来る可能性がある、て言ってたわよね。そもそもそんな言い方するって事は、もしかして彼女、間違っても素人とは呼べないレベルだったりする？」

鋭い指摘だ。隠してもしょうがない情報ではあるのだが、特に言うつもりも無かった。完全に鋼の失言である。

「……ああ。結構マジで、ルウの魔術の腕は素人とは呼べんレベルだ。あいつならこつちの世界で魔術師として食ってけると、ルデスで俺達に魔術を教えてくれた師匠も保障したくらいだからな」

有坂も、横で話を聞いていた省吾も、驚きと感嘆のこもった目で凜を見やった。一時的に異世界に行っていただけの日本人が、まさかそれほど魔術に通じているとは思いもしなかったのだろう。

「そんなすごかったん！？ 十代の魔術師とかフツーはおらんって、前にわいもこつちで聞いたで。自分の適性に合った一系統の魔術を使えるだけやったら魔術師って名乗れんのやろ、確か」

「いやそれは俺も知らんが……。魔術学校の卒業生とかなら、十代でも複数系統使えるヤツいそうなもんだがな」

フィクションでありがちな魔術を習うための専門施設、いわゆる魔術学校なるものもこちらの世界には存在している。パルミナにはそれ専門の教育機関は無いそうだが、魔術の授業も受けられる騎士教育学園がその役目も果たしているようだ。

凜は魔術の才能と適性、更にもう一つの重要な要素である魔力容量にも恵まれており、今の時点でも鋼や日向が追いつくのを諦める高みにまで達している。時間をかけて学校で魔術を勉強すればどれ

だけの魔術師になれるか。それは日向と二人で密かに楽しみにしている事だった。

話しながら、校舎から前庭へと鋼達は出て行く。

昼過ぎまでずっと休憩時間が続くので、学外に出るのに外出許可は必要ない。昼休憩と放課後だけは申請が不要で、今の扱いも昼休憩になっっているからだ。

それ以外は全て許可が要る。例えば休みの日の外出であっても寮で行き先を申告しなければいけない。全寮制なので仕方ないのかも知れないが、煩わしい規則だった。他にもまあ、これは当然の措置だが異性の寮にはいかなる時も立ち入り禁止だったりする。

そうやって色々と行動を制限されている故か、この時間帯は外へ出かける生徒達が多いようだった。日本の都市部の学校よりは生徒数が全然少ないのでそうたいした人の波ではないが、目につく生徒は全員正門に向かって歩いていて。

校門をくぐる際いつもこいつも妙に足が鈍るのが気になったが、ほどなくその理由は知れた。出てすぐの通りに、悠然とした立ち姿のやたらと目立つ美人がいたからだ。

こちらに気付いたクーに軽く手を上げると、きりつとした表情がぱつと笑顔に切り替わる。

「え……、もしかしてあの人なの？ こっちの友達って」

尻込みしたように言う有坂と同様、省吾も片平も彼女を見て硬直している。あれほどの存在感となると同性でも怯ませる効果があるらしい。

「わー、クーちゃん久しぶりだなあ。でもなんであの人といるんだろ？」

日向と凜は昨夜、鋼の携帯を使ってクーと話しているので二年ぶりの直接の再会とはいえ冷静だった。それでも抑えきれないとばかりに歩調を速める日向は、隣に立つ人物に首をかしげている。

「久しぶりだなヒナ！」

「わぶ！」

前に立つやいなや、問答無用で日向はクーに抱きすくめられる。小柄なので相手の体に完全に埋まっていた。

大人びた表情は既になく、クーは快活な笑みを見せている。

「あんまり成長してないな！　ちゃんと食べてるのか？」

「食べてるもん！　牛乳だって飲んでるし！」

久々に会った姉妹みたいで微笑ましい場面だった。クーが手を離し、次の獲物に視線を移す。

「お久しぶりです、クーちゃん」

じり、とさりげなく一步下がった凜に対して、クーは構わず二歩踏み込んで抱きついた。

「ああ、久しぶりだ！　元気にやってるようだな！」

「あ、あの、クーちゃん。ここは天下の往来ですし、その……」

往来どころか学園の真正面、大通りの真ん中だ。

学園生徒からも通行人からも、何かと注目されているという状況を察して凜はあたふたしている。普段から他人の視線に慣れているせいだろうか、クーは全く気にした様子もない。省吾達三人は後ろで小さくなっていて、視線の中心に巻き込んだ事を少し申し訳なく思う。

抱擁の最中、クーは何か気付いたようにはっとなり素早く凜から離れた。

解放されて安堵する凜の胸元に恐る恐る視線を送る。……やはり当然、気付いてしまったようだ。

「これは、また……。ヒナとは違い、恐ろしい成長を……」

「！　へ、変な事言わないで下さい！」

体の前面を両手でかばい、凜は顔を真っ赤にして抗議の声をあげる。どこがとは言わないが、正直手で隠しきれしていない。

「次はコウだな！」

さらりと流して次はこちらへ抱きついて来ようとするのを、相手の額を手で押さえつける事で鋼は阻止した。クーはもっと近寄ろう

とぐぐつと力をかけてくるが、当然鋼もぐいぐいと押し返す。

「……そもそも昨日会ってるだろうが」

「いいじゃないか減るものではないし」

口を尖らせて可愛く言っても無駄だ。これ以上周りから注目される要素を作りたくはない。

その状態のまま鋼はクーの横に立っていた学園の男子生徒に視線を向ける。

「昨日会ったマルケウス、だったよな？ こいつと知り合いなのか？」

金髪緑眼のソリオ人。入学式の日、講堂前でイチャモンつけてきた同じクラスの貴族少年だ。

「いや、僕は……」

「彼はマルケウスというのか。学園前でコウ達を待っていた私に、学園の者に用件なら取り次ぐが、と声をかけてくれたんだ」

昨日とは違いなんだか歯切れの悪いマルケウスに代わりクーが答えてくれる。これがただの男子生徒なら、ああナンパかと思うところだが、なにせ生徒五人の揉め事に堂々と首を突っ込んだ少年だ。偉そうに見えて案外、困った人がいれば放っておけないという性格なのかもしれない。

ただどう見てもクー相手にがちがちに緊張しており、下心が全く無かったわけでもなさそうだったが。

ようやくクーは鋼に抱きつこうとするのをやめ、マルケウスに向き直って微笑んだ。

「この通り待ち人が来たので私も行くよ。親切にありがとう」

「！ いや、いや。当然の対応をしたまでだ。探し人が見つかって、良かった」

銀髪美人の微笑をくらい、上ずった声で貴族少年はそう返した。それから視線を逸らし、まだ何かを言い足りなさそうにもう一度クーを見、言葉を呑み込んで学園内へと去っていった。

彼女の笑顔に吞まれそうになる気持ちは鋼としてもよく分かる。

あいつもやはり健全なただの男子生徒なのだなあと、なんとなく温かい心境になってマルケウスの背中を見送った。

「改めて自己紹介させてもらおう。この街で冒険者をやっているダリアだ」

人の目が気になっている者も多いようだったので、あれから少し移動して。大通りから一つ外れた、満月亭のある通りの片隅に鋼達は立っていた。

「ええと。わいは長谷川省吾。騎士学校の日本人や」

「私は有坂伊織よ。その、同じく騎士学校の日本人」

「わ、私は片平雪奈です。騎士学校で日本人です」

初対面の省吾達三人もそれぞれに名乗ったが、どうにも緊張を隠せていない。

はい、と有坂が手をあげる。

「神谷君達はクーちゃんって呼んでるみたいだけど、その呼び方はどこから来たんですか」

微妙に敬語が混じっているのはクーが年上と推察しての事だろう。そもそも、言っていないが鋼達も帰還者であるせいで中学を一年やり直しており、実は有坂より年上だったりするのだが。

「私の名前は本来ダリアクレインと言う。そこからとったあだ名だな」

いいのかと鋼が視線を送ると、クーはそれに小さく頷く。

「訳あって普段はダリアと名乗る事になっているんだ。人がいるところでは本名のほうは出さないで欲しい。クーかダリアのどちらからかと呼んでくれ」

「えっと……？　つまり、本名のほうはこっちの世界では有名だったり？　……するんですか？」

「別に無理に敬語にしなくていいぞ？」

いや、特に有名というわけでは無いんだ。ただソリオンではこれは少々変わった名前だな

知っている者からしたら、そこから私の出身地を推測出来るかもしれない」

「その出身地がこっちの世界では有名なのね」

そうだとも違つとも言わず、クーは微笑するに留める。それ以上を言つつもりがないのは表情から明らかだった。

「出身を言つわけにはいかない謎の女冒険者……！ これはキタかも……！」

なにやら小声で呟きながら興奮している片平を、ちらりと見て誰もが無視する。クーもだ。中々に正しい判断だった。

「それでだ、連絡するのに便利だし、日本人街でクーの携帯を買う予定でな。せつかくだし一緒にどうだ？」

学園のあるこのエリアの北西にそう呼ばれている区域がある。鋼の提案に、日本人は皆目を光らせて反応した。

「日本人街……！ まだちゃんと行ってないのよね」

「異世界にコンビニ建ってるんやもんなあ……」

別にそこは日本人だけが暮らす住宅地というわけではない。パルミナ内でも特に日本関連の施設が集中しているエリアがそう呼ばれているだけだ。

メジャーなコンビニチェーンが一通り並び、ファミリーレストランや携帯電話ショップ、銀行もある。他にも様々な店舗が日本から進出しており、日本の雑貨を扱った土産物屋はセイラン人に大人気だそうだ。一般人にはおよそ関係ないが、領事館、送電所、携帯電話の基地局等の重要施設も全てそこに固まっている。

何より、日本への門がある場所だ。

だから異世界入りした初日に皆一度は通っているが、ゆっくり見て回ったりは誰もしていない。提案に省吾達も賛成し、七人でまずは携帯電話ショップへと向かう事になった。

学園に戻らなければいけない時間は当分先で、長い自由時間を鋼達は存分に楽しんだ。

意気揚々と買った携帯を操作しようとし、難しい顔になったクーに皆で使い方をレクチャーしたり。

本国と比べてファミレスやコンビニの値段がかなり高い事を知り、クー以外の面々は驚いたり。

片平が冒険者についての話をクーから聞きたがり、結局他の全員も興味深く彼女の話に耳を傾けたり。

ファミレスと悩んだ拳句、昼食はまたもや満月亭でとった。例の男達がまた店内で大きな顔をしていたのだが、こちらを睨んだ際クーに強く睨み返され、動揺した拳句すごと退散していったのは胸がすいた。冒険者として有名な彼女の顔を知っていたのだろう。店員の少女にかなり感謝されクーは照れくさそうにしていた。その頃には省吾・有坂・片平の三人とも打ち解けてきていて、昨日よりも和やかなムードで鋼達は食事を終える事が出来た。

事件が起きたのは、その帰り道だった。

そろそろ学園に帰らなければいけない時間になり、一同は満月亭から外に出た。

クーが浮かべる名残惜しそうな表情に鋼は罪悪感を刺激されつつも、表面上はなんでもない風を装って別れを告げる。彼女は騎士学校の生徒では無いのだから、こればかりは仕方なかった。

学園へ六人で歩き始め、有坂が憧れを含んだような口調で言う。

「クーさんってまさに頼れる大人のお姉さん、て感じよね。あいつらひと睨みで退散させちゃったのは驚いたわ」

「名前が知られてる冒険者らしいからな」

それにしても、大人のお姉さん、とはまた鋼の持つクーのイメージにはそぐわないと思う。きりつとした表情の時はかなり大人びて見えるのは知っているのに、何故こんなに違和感が付きまとうのか。少し考えて、鋼はある事実を思い出した。

「そっぴやクーって今いくつだったっけ」

日向と凜のどちらでも良かったが訊いてみる。日向が鋼の記憶通りの答えを教えてくれた。

「もう。それくらい覚えとこうよ！ 私達の「コ下じゃん」

「「「え」「」」

今日彼女と知り合った三人の時が止まった。

「あー、やっぱりか。いや、マジで忘れてたわけじゃねえんだが。見た目大人びてるから、どうもな。年下なのを忘れかけてた」

鋼や凜ならまだともかく、ちびっこい日向がクーより年上と言われて、知らない人間の何割か信じてくれるだろう。ちなみにこの場の女性陣の誰よりも、クーは背が高い。

「それ……、ホンマなん？」

省吾も簡単には信じられないようだった。

「マジだぞ。まあそもそも、日向と比べるから余計信じがたい事実になってるんだが」

「クーちゃんが成長し過ぎなの！」

そんな雑談の最中。

ふと妙な感覚が走り、鋼はちらりと視線を横に向けた。

ほぼ同じタイミングで、凜も同じ場所へ 二十メートルほど離れた、小さな路地の入り口へと顔を向けるのが横目に見える。

そこには黒い外套を着込んだ長身の人間が立っていた。フードを目深にかぶっており、性別すら判然としない。

こちらを見ている。それに気付いた瞬間、ひやりとしたものが鋼の背筋を駆けた。

周囲の人通りは多い。こんな真っ昼間の街中で、何か危険な事が

起きるとは思えない。だというのに嫌な予感めいたものが膨らんでいく。その人影と鋼の間に通行人が誰もいなくなり、ぽっかりと空白が生まれた瞬間、それは最高潮に達した。

唐突に発生する、魔力が活性化する僅かな気配。

日向や道行く人の一部がそれを感じ取り、人影の方向へ初めて目を向ける。それは間違いなく、魔術を行使しようとする際に発生する気配だった。

活性化から発動まで一秒にも満たない。

人影が突き出した手から鋼に向かい、炎の弾丸が発射された。

8 街中の襲撃

標的の二ホン人が、同じ学園の生徒達と共に帰路についている。

唯一の障害だった『銀の騎士』とは先ほど別れた。手を出すなら今を置いて他にはない。

慎重に様子を伺い、学園までのルートを先回りする。待ち伏せながら、人ごみを挟み遠目に観察を続けた。

二ホン人の女つてのは、やたらと上玉ばかりだな。

男はそんな感想を抱く。標的の他には男一人に女四人。好みの年齢より少しばかり若いのが、生意気そうなのと胸がでかいのの二人の女はかなりの美少女だった。あとは地味な少女やら子供みたいな奴やらいたりもするが、女四人連れで街を散策とはいいいご身分だ。一緒の男二人には、依頼に関係なくとも何か不幸をプレゼントしてやりたいところである。

とはいえ標的はその内の一人だ。少女達と雑談しているその少年に、せいぜい今だけは楽しんでおけと呪詛を送る。その楽しい時間はもつすぐ終わる。男が、終わらせる。

魔力の活性化はぎりぎりまで控えないと他のセイラン人に気取られる恐れがある。それでも予めやっておける準備として、術式を繰り返し想起し、イメージを固める。あとは魔力さえあれば魔術が発動する状態だ。これを維持しつつ、あとはただ待てばいい。

そして機が来た。

標的がこちらを見、そして男との間に空白が出来る。

その瞬間魔力を活性化させ、組み立てていた魔術を解き放った。

《火矢》。

炎を矢のようにして標的へと撃ち出す攻撃魔術だ。標的の少年は

集団の先頭において、障害物は何もない。

文字通り矢の速さで炎が少年に迫った。その顔にはまだ驚きすら浮かんでいない。それだけこの魔術行使が早業だったのだ。魔力を少なめにし威力を絞ったため、通常よりも速く発動している。

これは当たる。

その確信と共に結果を見届けた男は、次の瞬間には脳裏に無数の疑問符を浮かべる事となった。

「……は？」

意味が分からない。理解不能の現象がたった今、目前で起きた。

混乱し始めた男の脳が、今見た映像をもう一度繰り返す。見たままを素直に表現しよう。

胸のでかい少女が、瞬間移動した。

想定外の不意打ちに、驚かなかったわけではない。

それでも迫る脅威に対して体が硬直してしまうような、平和の中だけで生きてきた人間では無かった。さすがに日本に戻って二年が経っているとはいえ、怪しい人影を見つけた時には無意識に《身体強化》の準備も始めていた。

前に落ちた異世界は、その程度の心構えなく生き残れるような甘い場所では無かったのだ。

同じタイミングで警戒していた凜が動くのを肌で感じ取る。だから鋼は炎の弾丸が迫ってくるのに対し、何もなかった。安心してそれを見守っていた。

目の前に割り込んできた影が、片手で炎を握りつぶすのを。

「は？」「え」「へ？」

省吾・有坂・片平が、三者三様の戸惑いの声をあげる。こちらを狙う危険が他に無いか周囲に注意を向けながら、鋼はついでに三人の様子も見守っておく。

省吾と片平が呆気にとられた顔で凜を見ており、次にさっきまで凜が立っていた場所へ何故か視線を移してから、その場所と凜を戸惑ったように見比べる。瞬間移動したわけでもあるまいし、なんとも大袈裟なりアクションだ。

有坂のほうはただじっと、硬い表情で凜を見つめていた。

ちなみに日向は目をぱちくりさせてこちらを見ていた。……誰に言い訳するわけでもないが、こんなでも一応こいつも共に地獄を生き残った仲間である。三人中一人だけ襲撃に対応できていないこの状況だけを見れば、残念な子に見えるかもしれないが。

大丈夫だと視線で日向に伝え、物騒な魔術を仕掛けてきた相手を見据える。通りを行き交っていた人達も足を止め、一部は襲撃者を指差し騒ぎ始めていた。

黒ずくめの人物が逃走に移った。小さな路地の奥へと駆けて行く。

「……捕まえてきます」

その背中を睨み、凜がぼそりと呟いた。

「向こうも明らかに殺す気は無かった。やりすぎるなよ？」

「はい」

短い返事。そして。

凜は先程と同じように、《身体強化》を体に宿して動いた。上昇したスピードを生かし襲撃者を追いかける。彼女の速度と比べれば、逃げ切る気がないのかと疑うほど襲撃者の足は遅い。

「は、はやっ！？ え、うそお！？」

省吾がその台詞を言い切る前に、凜の姿はとうに路地の向こうに消えていた。省吾の素っ頓狂な悲鳴は魔術をよく知らない日本人ならではのだろう。実際あの襲撃者が放った炎の速度より、凜が走るほ

うが速いのだ。

逃げる際の《身体強化》も相当下手なようだったし、あの人物の正体はあまり腕の良くない魔術師か、そのなりそこないといったところか。だから安心して凜一人に任せられた。

凜が視界から消えてから十秒ほどだろうか。その間魔力の波動がびしびしとこちらまで届いていたが、ほどなく彼女が路地の向こうから現れた。ずるずると先程の黒ずくめを引きずっている。

ついさっきとは違う意味で、にわかには場が騒然となる。

「軽く痛めつけた程度で、まだ意識はあります。どうしますかコウ」
鋼の前まで戻ってきた凜が、襲撃者を冷ややかに見下ろしながら訊いてくる。さすがに基本弱気で人見知りな彼女でも、完全な敵対行動をとった者に遠慮を示すほど甘い性格はしていない。

「お疲れ。まあ、ひとまずは普通に訊いてみるか。襲ってきた理由を」

呻き声をあげ蹲る人物の、フードが取り払われた。

現れた男の顔に鋼は思わず顔をしかめる。昨日今日でもう三度は見た、昼にクーに睨まれ退散した四人組の一人だったのだ。

「コイツ、あの店にいた奴らの一人じゃない！」

「……というか、わいは何がどうなつてこうなつたんか、よう分かってないんやけど。いきなりなんや、火の玉みたいなん撃ってきたんよな？」

有坂が怒りの声をあげ、省吾は困惑気味に確認してくる。男は息も絶え絶えで、いまだ受け答えできる状態では無さそうだ。

「ああ。炎を撃つ魔術……《火矢》とかいう奴だったか？ 死ぬような威力じゃ無かったとはいえ、人に撃つていいもんじゃねえのは確かだな」

「意味分かんない。日本で言ったら刃物持った男に街中で襲われたようなものでしょ？ さっきの八つ当たりにしてもこいつ頭おかしいわよ」

「……それにしても、なんでこんなボロボロなん？ 村井ちゃん何

「やったん？」

「その、風の魔術で少々全身を滅多打ちに……」

どこか恥じ入るように凜が告げる。可愛らしい表情ではあるのだが、台詞が物騒すぎて何かもう台無しだった。訊いた省吾も顔を引きつらせている。

「まあいいさ。話が出来るようになるまで少し待つか」

「すみません……。もう少し、手加減すれば良かったんですが」

「ルウちゃんの風は殴るより威力あるもんねー」

日向が明かした凜の魔術の攻撃力に、有坂と片平も納得したように、あるいは哀れむように倒れる男を見下ろした。

よせばいいものを男が再び魔力を活性化させる。愚かな行為だとしか言いようがなかった。

「畜生……っ！ クソがあっ！」

まだ自身のダメージも抜けていないのに、男は叫んで手をかざす。既に囲まれ目撃者も多数いるこの状況で、まさかまだ逃げられる目があるとも思ったのだろうか。

不意打ちにすらなりはしない。男が鋼に放った《火矢》はまた、凜が横から掴み取ってしまった。

「……せつかくコウが、あなたみたいな人相手でも穏便に済まそうと回復を待ってくれていたのに、それですか。慈悲をかけてもらっている立場なのだと理解できてないんですか？ 『これ』を返して差し上げれば、さすがに理解してくれます？」

今度は握り潰さず、軽く握った凜の手の中には男が放った《火矢》が留まっていた。それを示し、一段低いトーンで凜が無感情に咳く。

「いかん。多分、これはキレる一歩手前だ。」

「なっ、なんだそれ！ どうやって俺の魔術を掴んでるんだよ!？」

凜の手中で炎が大きさを増すと、わめいていた男は真っ青になり硬直してしまった。その燃え盛る手が少しずつ近づいてくるのだから、嫌でも理解出来た事だろう。己の立場というものを。

とはいえ、まさかそのまま男を燃やしはしないだろうが、これ以上は周りの目もある。本当に脅して何かを吐かせるにしても、そういった役目を凜に押し付けたくは無かった。

「……ルウ」

「はい」

鋼の一言で即座に《火矢》は握り潰され、火の粉を飛び散らせながら消え去った。

張り詰めていた場の雰囲気が一気に弛緩する。省吾達だけでなく野次馬達もほっと胸を撫で下ろしていた。

「畜生……、こんなの聞いてねえぞ。二ホン人は魔術が使えないんじゃないかったのかよ……」

「さすがにもう、抵抗する気は無いと思うが。一応言っとくぞ。次逃げようとするか魔術を使おうとしたら、足を片方折るからな」

鋼の宣告に顔を硬くさせ、僅かに頷く男。

やがてすぐに街の警備兵が駆けつけてきて、この場はなんとか収まったのだった。

三十分ほど後には、鋼達六人の姿は学長室にあった。

警備隊からの連絡でさきほどの魔術による襲撃はすぐにパルミナ騎士教育学園の知るところとなり、帰ってきて早々呼び出しを受けたのだ。

まさか入学式で長話をしていた学園の最高責任者と、翌日にこうして顔を合わせる羽目になるとは人生何があるか分からないものだ。ラガートン学長は眼鏡をかけた金髪のおじさんで、あまり厳しくは無さそうな人だった。並べられた椅子に促されるまま着席した鋼達は、襲撃の際の状況の説明を求められ、訊かれるままに答えている。もっとも受け答えるのはほとんどが鋼だ。

「うーん、なるほど。直前に昼食をとっていた店で、その男も食事

していたのだね？」

「ああ、いや、はい。そうです。入学式の日も、同じ店で出くわして、妙に睨まれましたね」

敬語すごい不自然だよ、と日向が笑いをこらえる表情で見ているのを、うるせえ、と無言でちらりと睨んだりしつつ。慣れない敬語でどうにかこうにか鋼は話していた。

室内には鋼達と学長以外にも、四人の人間がいる。

一人はかなり背の高い赤毛の若い男性で、学園で剣術の授業を教えているマイトックシンド教官だと紹介を受けている。小難しい顔で腕を組んで、ずっと無言で室内の会話を聞いている。

もう一人も学園の教師で、こちらは三十くらいに見える女性だった。魔道学者のシグリーペイル・クオンテラだそうだ。魔術師とその役職がどう違うのか鋼は知らないが、つまり魔術の授業の担当教師らしい。

後の二人は街の警備隊の人間だった。これは日本でいう警察の役目を担っている組織だ。

凜が路上で襲撃者を無力化した、あの後。

鋼達は通報を受けてやってきた警備隊の兵士に襲撃者の男を引渡し、後で話を聞きに行くからと言われるまま一旦学園へ戻ってきた。すぐにこの二人が派遣されてきて、学長と二人の教師の立会いのもと、事情聴取のようなものをここで受けているわけである。

「そっいや、……そっいえば、襲い掛かってきたあの男にそれまでに会った時、いつも他に三人の男がいたんですが」

「四人組だったという事かね？ 昨日も今日も、その三人は同じ顔だった？」

「同じ面子です。剣とか斧とか、持ち歩いてたんで冒険者が傭兵だと思っただんですが」

「ふーむ……」

受け答えの相手はだいたい学長で、警備隊の人間は時折、もっと細かい部分を横から訊いてくるだけだった。主導権を握っているの

はどう見てもラガートン学長で、警備隊よりも権力的に上、という事なのだろう、恐らく。

警備隊二人の内、年かさの男の方を見て学長が訊ねる。
「捕まえた男の他には、周囲に怪しい人物などはいなかったのかね？」

「目下、確認中です。ただ襲撃者が一人だったのは通行人の証言でも一致していますので、その三人については分かってても話を聞くだけになると思われます」

「そうか。それは仕方が無い。ただ、その三人が捕まった男の仲間だとしたら、報復が少し怖いね。その三人の素性についても確認を頼むよ」

「了解しました」

「他に訊きたい事はないかね？」

もう鋼もあらかた話し終えたのを見て取って、学長が最後に確認をとる。警備兵の若い方の男がちりと興味の視線を凜に向けたのだが「いえ、十分です」と年かさの方が答え、退室する旨を告げた。「賊の逮捕、ご協力感謝します。それではこれで、私どもは失礼します」

「うん、ご苦労」

ご協力感謝します、の部分は年かさの警備兵も凜を見て言っていた。明確に自分を見据える視線に二度晒された凜が、かちこちに緊張しながら小さく頷くのが横目に見え鋼は笑いそうになってしまう。賊を捕らえた時の勇ましさ、その半分でもこの人見知り少女に普段からあれば、無い物ねだりだとは分かっていても、思わずにはいられない。

学長の労いを受け、警備隊の二人の男は退室して行った。

「君らも災難だったね。怪我がなくて本当に良かった。君が皆を守ったそうじゃないか？」

「あ、いえ……。なにぶん、咄嗟の事で……」

居心地が悪そうに小さな声で答える凜。もっと堂々と胸を張って

くれたほうが、鋼としても嬉しいのだが。凜がそんな調子なものだから代わりに鋼がほとんど事情聴取に答える羽目になったのだ。警備隊の人間に『あの少年今回の事件で別に何もしてないのに、なんで六人の代表みたいな顔して答えるんだらう?』とか思われたかもと想像すると、軽く死ねる。

「君　ムライ君と、そちらの彼、カミヤ君と、カガミ君は同じ場所に落ちた『異界の迷い子』　そちらでいう『帰還者』なんだつてね。以前こちらの世界で、魔術を習った事が?」

「あ、はい……少しだけ」

謙遜も度が過ぎれば場合によっては嫌味になる。彼女の実力を知る鋼からすれば『少しだけ』というのは悪い冗談にしか聞こえない。完全に悪気が無いのは分かっているので、凜にはもう少し自信をつけてもらえればと鋼は常日頃から思っていたりする。

学長も苦笑を浮かべた。

「謙遜しすぎるのは二ホン人の悪癖だ。見た人の話では《火矢》を素手で掴んだそうじゃないか。私も魔道全般に通じているとはとても言えない人間だが、それが高度な技能と複雑な術式によってなされた事くらいは分かるよ」

なんと答えていいか分からず、凜は俯いてしまった。

全くもう、見てられない。口を出したい。だがいつもそうやって甘やかすから、いつまで経っても彼女は人見知りなんだと自分に言い聞かせ、鋼はなんとか耐え抜いた。

「見た事の無い魔術だった、という話がちらほらと出ているみたいだね。良ければどういった原理なのか、教えてくれないかい?」

顔を更に硬くした凜に、学長は慌てたように手を振った。

「ああ、別にその内容を触れ回ろうというわけではないよ。生徒の習得している魔術がどんなものか知りたいというだけの、私個人の興味に基づいた質問だ。答えたくないものを無理やり訊き出そうという気は、誓って無いからね?」

数秒ほど硬直してから、凜は鋼のほうへちらりと視線を寄越した。

……本当に。どうしていつもいつも、判断に困るところこちらを見るのか。

内心でため息をつきながら、よくそうするように、お前の好きにすればいいと視線を送ってやる。果たしてそれだけで都合よく意図が伝わっているのか、本当のところは鋼にも不明だったりするが。

「言え」とか「言うな」とか別の意図で伝わったとしても、それは彼女が受け取りたいように勝手に受け取ったという事なので、まあ問題は無いだろうと軽く考えている。

「その、特に複雑な術式というわけでは、ないです……」

凜は話す気になったようだった。なんだかんだで魔術に関しては一家言あるような奴なので、自分の術式を解説できるのは嬉しいのだと思う。

「《圧風》と《防熱》が使えれば、誰でも出来ます。手に《防熱》をかけておいて、その上から《圧風》で空気圧の膜をまとわせるんです。出ていかないように調整するのは少し難しいですけど、隙間なく空気圧で覆ってしまうえば炎を掴んで固定できます。そのままだと燃え尽きてしまうので、私の場合はそこに《空調》で周りの酸素を流し込み続けて燃やすことで、手の中に固定し続けました」

風系適性の高い魔術師にとって、風圧を操る《圧風》はかなり基本的な魔術だ。炎系魔術師にとっての《火矢》のようなもので、風系攻撃魔術では恐らく一番難易度が低い。

だがその応用範囲は広く、非常に奥が深い術式でもあった。《圧風》は凜が最も得意とする魔術で、襲撃してきた男を無力化させた『風のパンチ』の正体もそれだ。

「……ふむ」

流れるような解説に、場が奇妙な静まりを見せる。学長が神妙な様子で魔術教師に訊いた。

「クオンテラ君。彼女の言った通りに実践すれば、他の者でも同じ芸当は可能かね？」

「《火矢》を素手で払うくらいなら、魔術師志望の上級生にも出来

ると思いますが……。掴んで固定となると、それなりに練習が必要でしょう。《空調》も使つて燃やし続けるとなると、更に難易度は上がります。生徒の中でも出来るようになる者が一人か二人、出ればいいほうかと……」

「そこまで難しいのか」

学長が驚き、シシド教官も目を瞠っている。

「何度か挑戦して、一度だけ成功すればいい、というものではありませんから。三種類の魔術の併用が、咄嗟に危なげなく出るだけでも驚きなんです」

実際は《火矢》を掴むため《身体強化》も同時に使っていただろう。この場で鋼も言いはしないが。

「なんとまあ、それは」

魔術の教師を驚かせるほどの技量の持ち主に視線が再び集まり、凜は怯えたように体を硬直させる。

つい鋼は視線からかばうため、凜の前に出そうになった。学長の様子もつと険しいものだったならそうしていただろう。

実際は険しいどころか、学長が浮かべたのは穏やかな笑みだった。「将来が楽しみな生徒じゃないか。魔術や剣術、人の持つ技術が人を助けるとするのは、教育者として胸がすく話だね。カミヤ君と力ガミ君も、同じくらい魔術を修めているのかな？」

「いやいやいや」

つい敬語も忘れて鋼は日向と一緒にあって手を横に振った。

「あー、ルウ、じゃなかった、凜の奴と一緒にされちゃ困ります。

それはまあ、ただの日本人よりは俺もこいつも、魔術に通じてますが。こつちの凜はもうなんというか別格なんで、そこんところ勘違いしないでもらいたいですね」

「私達《空調》なんて使えません……」

「ははは、覚えておこう。さて、関係ない話ばかりで悪かったね。

君達に魔術を放った男については、警備隊が適切に処理するだろう。後は彼らに任せなさい。男の仲間からの報復がもしあったとしても、

学園が可能な限り君達を守ると約束する。安心して勉学に励みなさい」

「はい」

「カミヤ君」

これはもう帰っていいのだろうかと思っていたところに、何故か名指して鋼が呼ばれる。

「私の個人的な意見だけどね。君はムライ君を別格で、一緒にされると困る言ったが。そういう言い方をすべきではないと、私は思う。最初から線を引いて区別するのは、追いつくのを諦める言い訳にもなってしまうからね。これから努力を重ねてムライ君と同じ事が出来るようになる可能性も、ムライ君とは全く違う分野の魔術師として大成する可能性も、君の中には眠っている。君が魔術師志望かどうかはこの際、別の話としてね」

君達も、と学長は言って、残りの面々を見やった。

「人はたくさんの可能性を抱いて生まれてくる。才能があると言われる者には目に見えて分かりやすい道が用意されているだけで、誰にだって無数の未来は広がっている。進みたい未来を見つけ、なりたい大人になりなさい。学園はそれを手助けする場所だよ」

穏やかに笑い学長はそう語った。

9 戦友はルデスへ旅立つ

「……おい」

「ん？」

「また今日も出かけるのかよ」
自室にて。

呆れたような声に振り返れば、崎山恭平のこれまた呆れたような顔がある。

「わりい、また見逃してくれね？ 昨日と違ってすぐその路上でダチに会うだけだ」

「昨日再会したっていう冒険者の知り合いか？」

「ああ」

崎山は顔をしかめる。何か小言でも言おうとしたが、そういう事情ならと呑み込んでくれたらしい。

「……お前、外が危ないからとかでしばらく外出禁止なんじゃなかったか？」

そうなのだ。

外でまた襲撃される可能性があるのです、しばらく外出は控えるように言われている。寮から学園へ登校・下校する際は、男子寮の守衛室に常駐している護衛官に付き添ってもらおうという徹底振りだ。

「よく知ってるな。昼にちよつと、外でトラブルがあつてな」

「聞いている。耳の早い生徒が騒いでて、お前と一緒に出かけてた女子二人が質問攻めにされてたぞ」

そういえば崎山は凜・有坂と同じシルフ組なのだった。改めて所属クラスを紹介しあつた訳ではないが、クラスが二つしかないのに鋼のノーム組で彼の姿を見ないのだから、当然そうと分かる。

そこでふと鋼は気付いた。よくよく考えて見れば入学式の日に見

た不良三人組を、あれから一度たりとも見ていない。あの三人も全員シルフ組のはずだ。

有坂とまたトラブルになったりしてないのだろうか。

「どっちにしても関係ねえさ。元々夜は原則外出禁止なのを、分かって破ってるわけだし」

「俺は話を小耳に挟んだ程度で何があつたかちゃんとは知らんが、今夜出かけるのに危険はないのか？」

「んー、そりゃ大丈夫だと思うぞ。強盗の四、五人くらい出ても、今から会うダチだけで返り討ちだ。どうも、この街じゃ名前が知られてる凄腕の冒険者らしいからな」

「そいつはまた、頼もしい事だな」

結局は止めたところで鋼は出て行くだろうと思っっているのか、岐山は小さくため息をついた。

「一応、気を付けろよ」

「ああ。んじゃ、ちよつと行ってくるわ」

もちろん、向かうのはドアではなく窓だ。

「一度私は、ニールのところへ戻ってみようと思う」

クーは寮の場所を知らないから、待ち合わせに妥当な場所が他に無く。鋼達は満月亭前の路上で落ち合っていた。

昨夜とは違い集まっている人影は四つもある。そのうちの一つ、凜が訊いた。

「『あの人』が戻ってないか、見に行くという事ですか？」

凜が言う『あの人』。もちろんそれはあと一人だけこの場にいる、姿をくらしめている少女を指す。

ここには身内しかいないが、それでも用心するに越した事はないのだ。ここは外で、誰に聞かれるか分からない。『彼女』の名前を口に出さないのはこの面々における不文律だった。

クーの事情とは訳が違う。

万が一にも、『彼女』の名前は人に聞かれてはいけないものだ。
「もちろんそれもある。が、皆と再会できた事を知らせておきたい
と思っただけだ」

「クーちゃん、一人で大丈夫？」

ニールの隠れ家があるルデス山脈は、獰猛な魔物溢れる危険地帯
としてソリオンでは有名なほどだ。日向が心配するように、普通は
冒険者が一人で立ち入って無事で済む場所ではない。

……その前提で考えると、あそこに一人で住むニールも相当どう
かしているのだが。

「ああ、大丈夫だ。知ってるだろう？ 私は魔物には負けない」

クーは何の気負いもなく、それが当たり前前の事実であるかのよう
に断言した。

鋼だつてももちろん知っている。誰だつて言葉通りには受け取らな
いだろう、ただ意気込みをそう語っただけだと思われるであろう、
今の台詞が。本当に、事実なのだ。

「確かにお前のあの『対魔物術式』がありゃルデスでも安全だろう
よ……」

鋼の感想としてはあれはもう反則技に近い。単独で冒険者を一年
やっていようが、あれがある限り本当の意味での危険には一度も遭
いしなかっただろうと思われる。

「ニールのとこ戻るのは反対はねえが。この街からあの山まで、お
前の足でどんくらいかかるんだ？ こっから地理的にどうなっ
てんのか俺はよく知らねえんだ」

山脈はパルミナより北の方だという事くらいは鋼も知っている。

だがそれだけだ。地図で見た場合どのあたりにニールの住処があ
るかなど分かるはずも無かった。以前のソリオンはルデスから直接、
地球に帰還したのだから。

「途中最低限の寄り道しかなければ片道十日かからず行けると思
う。ルデスに着いてからニールの住む地域を見つけるのに、少し手

間取るかもしれないが」

「結構遠いんだな……」

この中の誰より足の速いクーでそれならば、魔術師でもない大抵の一般人の足なら相当かかるといふ事だ。

やたらと詳しい片平に訊けばキロメートル換算でのだいたいの距離も知っているかもしれないな、となんとなく思う。

「だが、コウ達は騎士学校を卒業するまでパルミナの外には出れないんだらう？」

「ああ。この卒業資格がそのままこつちでの国籍つつーか、正式な身分証扱いになるみたいな話らしいからな。日本人がパルミナ以外の街へ行くには、騎士学校を卒業するのが一番手っ取り早い」

年内に旅行が許可されるかもという話はあくまで観光ビザのような扱いだ。だがここを卒業すれば、日本に関係なくこちらでも正式に身分が保障される。もちろん日本からの物品の持ち込みなどの制限はついて回るが、かなり自由にセイラン内を行き来できるようになるのだ。

鋼達が入学したのもそれが目当てで、別に騎士になりたいわけではない。騎士の学校と言っても卒業生が皆騎士になるわけではなく、というか騎士になんてなれるのはほんの一握りなので、ほとんどの生徒はこちらの世界で何か別の仕事に就くはずだ。

日本人がなりたい職業トップツーツーは恐らく、冒険者と魔術師だらう。

「コウ達が二年もこの街から動けないのなら、私も時間を有効に使わないとな。皆がここにいと分かっているのだから、私も安心してパルミナを離れられる」

「そうか。手紙でも書いてお前に渡しておいたほうがいいのかもしれんが……、そんなガラでもねえか。ニールにはよろしく言っといてくれ」

「了解した。明日にでも出発しようと思う。帰って来たらあのケイタイとやらで連絡を入れよう」

「あれ、この街以外じゃ使えねえからな？ 外に出たら電源切つてよ」

「デングン？ 何度か聞いた単語だったな……」
不安になる反応だったが仕方がない。電子機械の類は元々、こちらの世界には全く無い技術なのだから。

日向と凜と三人がかりで、最低限覚えておいたほうがいい知識だけは覚え直させた。電源とオンオフの概念、電話のかけ方、そして街の充電スポットの場所。それだけでも覚えていれば、はぐれてしまいいえなくなる、という事態にはならないはずだから。

教えられた事を忘れまいと、クーはかなり真剣な様子で聞いていた。

「んな心配しなくても。忘れたとしても学園に来ればいいんだからな？ 誰かが取り次いでくれるだろ」

「……そう、か。そうだな」
心の底からほっとしたようにクーは頷く。

どうもまだ、二年近く一人でいた事を引きずっているようだ。なんとなく安心させるように頭を撫でてみると、彼女は気持ち良さそうに目を閉じてじっとしていた。

「……」
凜と日向が無言でそれを見守っている。妙に気まづくなり、鋼は撫でるのをやめた。

「……もう終わりなのか？」

「……いや、続けて欲しいのか？」

つい二年前のように手が動いたが、さすがに背の高さがほとんど同じ相手を子供扱いはどうなのだと、今更ながら鋼は思ったわけで「もちろんだ」

何故かきりつとした表情でクーが即答した。

「いやお前……」

「私はしばらく、コウ達に会えないのだからな。それくらいしてくれたっていいだろう？」

口を尖らせながらも、その目の色はどこか切実だ。

甘えられる相手に飢えているのかもしれない。

この少女には家族どころか、ある程度以上親しい人間が鋼達とニールしかない。この二年間で新しく知り合った人間がいるのなら話は別だが。しかしロアという冒険者の話では、顔見知りくらいならともかく仲良くしている同業者はいなさそうな口ぶりだったのを思い出す。

「全く……」

結局鋼が折れて、要求通りもう一度彼女の頭に手を伸ばす。日向と凜の前で改めてそうするのはやたらと気恥ずかしかったが、そこは無駄な男の意地で冷静さを装った。

さわさわと撫でると、クーが目を細めて嬉しそうに小さく笑う。そんな無防備な表情を見せられると、鋼もすぐにやめるのは気が引けてしまう。

そもそも女の子の髪に触れるなどそうは無い事だから、何と比較できるわけでもないが。彼女の銀の髪はなんだか手触りがよく、没頭しないように鋼は気を付ける必要があるほどだった。

「んん……」

ぼんやりしたクーの声に思わずどきつとなり、気まずさを誤魔化すように鋼は視線を他に向けた。日向が笑いをこらえた目で、凜が顔を赤くさせて鋼達二人を眺めていた。

……何の罰ゲームだ、これは。

思わず鋼は天を仰いだ。そして無意識に行ったその動作をすぐに後悔する事となった。

「……」

目が合ってしまったのである。

すごいものを見てしまったという表情で固まっている、満月亭の二階から顔を出している少女と。

「……………」
手だけは直前の動作にならない、無意識でもクーを撫で続けている。
「んー」とか甘えるような声が、視界の下から聞こえてくる。

鋼の心の中で冷や汗がたらたらと流れた。

一秒、二秒。

互いに無言で見つめあった後、やがて店員の少女がゆっくりと顔を引っ込めていき、平行して鋼も視線を下ろしていく。

「……………」

パルミナの夜は今日も静かだった。

明らかに無理があつたが、もはやこれしかない。鋼は自分に何度もこう言い聞かせた。

今、俺は誰も見なかった。

クーは翌朝、パルミナを出たそうだった。

シンド教官を偶然廊下で見かけたので、学長がどこにいるか尋ねてみると今日は不在との答えが返ってきた。

それで代わりに教官に用件を言つと、案の定渋い顔をされてしまった。

「外に出たい？」

「すぐ近くの軽食屋で昼食をとりたいんです。無理っすかね？」

「お前な、昨日の今日だぞ」

そこをなんとか、と鋼は頼み込んだ。昨日《火矢》の襲撃を受けたばかりなのは承知の上だ。

「駄目だ。最低でもあと数日は認められん。学園の食堂を使えばいいだろう？」

「《火矢》を撃つてきた男含む四人組も食事していた店なんです。様子を見ておきたくて」

「自分から危険に顔を突っ込みに行くようなもんだろう、それ」
呆れたように言われてしまった。だがどうしても気になるのだ。

「あー、その。証拠が無い話なんで、学長室では言わなかったんですが。店員に聞いたんですけど、ここしばらくその店、その四人組に嫌がらせされてたみたいなんですよ。ずっと店に居座って、入ってきた他の客を威嚇してたようだし。でもいい感じの店なんで潰れて欲しくなかったし、気にせずそこで昼メシ食ってたんです」

「……それで目をつけられたんじゃないのか？」

「俺もそう思います。あの男達の目的があのお店を潰す事だとしたら、俺らが常連客になるのは防ぎたいはずで。あの時の《火矢》が死ぬような威力じゃなかったのは、ただ怪我だけさせて逃げるつもりだったんじゃないっすかね。人の目があるところで襲ってきたのも気になるし」

そこで一旦言葉を切り、鋼はシンドを見る。

街で怪我だけさせて逃げるのに何の意味がある、なんて質問は来なかった。

ほんの少し考え込み、それから呆れたような面倒そうな、複雑な表情でこちらを見返してくる。

「……そんなあからさまに人を試すもんじゃない。誰彼構わずやるようなら、そこらに敵を作るぞ」

「あー、気をつけます。次からはもうちょっとさりげなくを心がけます」

シンドが頭痛をこらえるような顔をし、ため息をついた。

「ふてぶてしい生徒だな、お前は」

「剣術はとるつもりなんで、授業で教官に直してもらえるのを期待しときます」

「他人事か。そこまで開き直ってる奴が何を今更。……ああもう、お前のせいで話が逸れた」

ちなみに今現在鋼は一人だった。学長に用があるから昼メシは先に食っててくれと日向達に伝えて教室を出てきたのだ。いつものメンバー、と言えるくらいになってきた五人とは、今日も特に約束をしていたわけでも無かったが、多分今頃は食堂あたりに集まって食事中だろう。

そちらに合流するつもりは無かった。これ以上、省吾や有坂、片平をこの件に巻き込むのは気が引けたから。

「……だいたい、お前の言いたい事は分かった。昨日襲ってきた男は、あえて街中で二ホン人生徒に怪我を負わして騒ぎにするのが目的だったと疑っているんだな？ 実際はムライが犯人を捕まえてしまったが、本来はその男も逃げるつもりだった。生徒から怪我人が出て犯人が捕まらなければ、今回の事件はもつと大きな騒ぎになっていたし、生徒が狙われているとなれば学園もしばらく生徒全員の外出を禁止にする。それが相手の元々の狙いだと？」

「いくらなんでも潰したい店の客を来れなくするために、そこまでするのかっていう疑問もありますかね。……あんまり頭良くもなさそうだったし、その店を立ち退かせたい誰かが男達に依頼したとかだったら、報酬のために手段を選ばないかもしれませんし」

それに言っていないが、夜に外出した際にもあの四人組には会っている。あの時の敵意に満ちた視線を思い返せば、鋼は特に目をつけられているはずだったし、《火矢》で真っ先に狙われたのにも納得がいく。

その直前には満月亭でクーに追い払われているわけだし、何故か有名冒険者とコネがある二ホン人を排除するのに、他に方法が無かったとも考えられた。

「それは分かったが……。結局それで、どうしてお前の外出許可という話になるんだ？ むしろそういう事情なら尚更許可できんぞ」
「俺達が客として来れないだけじゃ、あまり意味がないでしょ。結局俺達は外出禁止になったわけで、あの店に何か大きな嫌がらせを仕掛けるなら今日からの可能性が高いと思って。少し様子を見るだ

けでいいんです。メシ食って帰ってくるだけなんで、なんとか許可もらえないっすか」

「無理だ。諦める」

にべもない。だが鋼もしつこく食い下がった。

「俺は『帰還者』です。魔物との交戦経験もある。自分に対する危険には敏感なつもりだし、やばそうならもちろん逃げます。それでも一人は危険というなら、護衛官をつけて下さい。あるいは各務日向と村井凜にも同行の許可を」

「家元を離れて入学する生徒が、自分の家で雇っていた護衛を一緒に連れてきた場合に用意される肩書きが護衛官だ。職務として学園の警備もしてもらっているが、それぞれに護衛するべき対象がいる。お前の都合で連れ出していい存在じゃない」

「だったら日向と凜に同行してもらいます」

「その二人はお前と同じ場所に落ちた『迷い子』だったか？ 護衛官の代わりに務まるとは大層な自信だが……、そういう問題じゃない。」

「ならどうい問題っすか」

引く気は無かった。それを察したのか、シンドはぐしゃぐしゃと髪をかき上げ、深いため息をつく。

「……どうしてお前は、そこまでこだわるんだ」

「……」

彼からすればこの強情さは不可解に違いない。鋼だってその理由を、はつきりと上手く言葉にしづらいのだ。

それでもなんとか試してみる。この教官は、こちらが誠実である限り誠実に応えてくれる人な気がする。

「……その。入学初日に少し、その店の人に助けられて。たいした事ではないんですが、借りがあるんです。それが理由の一つ。で、まあかなり食事が美味しい店なんで潰れて欲しくないってのもあります」

鋼は別に熱血漢でも、正義を目指す騎士志望でもない。潰れそう

な店を見つけて助けたいと即座に思えるほど人の良い性格ではない。だが初日の夜に、ギルドの場所を教えてもらった。絡んできた男達も追い払ってくれた。そうたいした事では無いかもしれないが、そのおかげですぐにクーと再会できたと思えば感謝の気持ちは大きかった。

「……それに昨日、襲ってきた男を捕まえています。仲間を一人失った残りの男達はどんな行動に出るでしょうね。俺達への逆恨みを募らせて、でもその怒りはあの店に向けるんじゃないかって俺は心配しています。俺達のせいであの店に何か酷い事が起きるのなら、寢覚めが悪いでしょ？」

「だが捕まえたのはお前ではないだろう」

「狙われたのは俺です。元々俺はあいつらに目をつけられてた。心当たりもあります。だから少しは、俺にも責任がある。放っておく事はできません。外出許可を、それが無理なら許可をもらえる方法を教えて下さい、教官」

さすがに即座には断りづらかったのか、シンドもかなり渋面を作っている。

もう一押しだ。鋼は冗談めかして言った。

「騎士候補として最低限の責任を果たさせて下さい。こっちの国でも、騎士は困っている人を助けるものでしょう？」

本当にそれは軽い気持ちでの発言で、騎士の責任なんて大それたものを感じているわけでもない。シンドだって分かっている。だが建前上は、この学園の生徒は皆『騎士候補』なのだ。そのほとんどが結局は騎士にならなくても。

だが。

その時、背後から。

「よく言った！ 騎士候補たる者、そうでなくてはな」

聞き覚えのある少年の声がした。

鋼が振り返ると、少し離れた位置に立っていた男子生徒がつかつかと歩いてくるところだった。

いやいや、いつから聞いてたんだこいつ。

講堂前の時のような、いかめしい顔つきで。しかし瞳は暑苦しく輝かせながら。

「教官。自分が護衛官を連れて、彼に同行しましょう。それなら構わないでしょう」

貴族の少年、マルケウスはそう言い放った。

「教官に個人的な用件があり待たせてもらっていました。が、それは後日に改めます。話は聞かせてもらいました」

いや聞くなよ、とは思ったが、協力してくれるようなので鋼も口を挟まなかった。

「見上げた志ではないですか。民を脅かす輩がいるとなれば、自分も放つてはおけません」

「ガンサリット。それは騎士の職分じゃない」

ガンサリット？ ああ、マルケウス少年の家名だったか。

窺^{たしな}めるようにシッドが言えば、マルケウスも力強く反論する。

「職分です！ 騎士とは王を守り、国を守り、そして民を守るもの。騎士が悪を見過ごせば、それはすなわち国が悪を見過ごしたという事に他ならない！」

高圧的な貴族のように思っていたが、それは鋼の全くの勘違いだったようだ。

かなり暑苦しい、いや、熱血な少年のようである。

「自分も未熟ながら護身術を身につけておりますし、護衛官も一緒ならば何も問題は無いはずでしょう」

「いや、しかしな……」

「教官！」

学園の食堂に日向達は来ている。

鋼が学長に用事らしいので、残りのいつものメンバーもなんとなく

く自由行動みたいな雰囲気になった。長谷川省吾と片平雪奈は本日はルームメイトと昼食を共にすると言って別れており、日向は凜と有坂伊織と、そして伊織のルームメイトの四人で食堂の窓際の席に座っていた。

といつてもどうせ昨日一緒だった面子は外出を禁止されているので、皆食堂を使う事になる。省吾とそのルームメイト、雪奈とそのルームメイトの二組もすぐに食堂にやって来て、こちらを見つけて近い席に腰を落ち着けた。

そこに、各々のルームメイトをきっかけに、その子と親しい別の生徒もやって来たりして、今現在この周辺の席はかなり大変な事になっていた。見る限りに大人数で埋まり、新入生だらけの一角と化している。

それぞれ話しかけてきては自己紹介してくれたりするので、名前を覚えるのでいっぱいはいっぱいだ。どうやら昨日の《火矢》襲撃事件の噂が既に広まり、その詳細に誰もが興味津々らしい。

「ヒナちゃんが窓際の席にしようって言うてくれたのは正解でした……」

凜と同じシルフ組の生徒も混じっているとはいえ、見知らぬ生徒と言っていい集団に囲まれ彼女は目を回していた。けれど席は窓際なので全方位を囲まれるという状況にはなっておらず、それがかるうじて助けになっているらしい。

人見知りの彼女にはこの場はとても疲れるようだ。別に窓際を提案したのは全然違う理由なのだけど……。

「いやー、注目の的だね！ やっぱり帰還者は皆すごい気になるみたい。しかも三人揃ってこっちに落ちたんでしょー？」

あっけらかんと発言したのは伊織のルームメイトである魚住真紀ういずままことという女子生徒だ。彼女はだいたい寝ぼすけらしく、入学式の日も遅れそうになり、業を煮やした伊織が見捨てて先に講堂に向かったそうだ。それである時伊織には同行者がいなかったらしい。

聞けば、最初からの知り合いがないこの学園の日本人生徒は、

まだ入学して日が浅いのもありルームメイトと一緒に行動する人が多らしい。同室・同クラスかは関係なく一緒にいる日本人は現時点では珍しいらしく、そういう意味では日向達は目立っていて、彼女も話しかけてみたかったのだとか。

「いおりんに話聞いてたからさー。私も魔法の事とか色々聞いてみたかったんだよね」

「皆魔法大好きだよねえ。私はあんまり詳しくないから、話せる事も少ないと思うよ？」

伊織は真紀には『いおりん』と呼ばれているらしい。伊織を見るとなんだか諦めた表情で、一応そのあだ名は本人公認みたいだ。

「でもでも、ヒナっちも手から火を出したり出来るんでしょ？ やり方とか教えて欲しいんだけどダメ？」

「ごめん、この子にこの前見せてもらった火の魔術話したら興味津々みたいで」

真紀が懇願し、伊織が少しすまなさそうに謝る。日向は全然未熟だし、もっと専門家の凜に丸投げするのは彼女の性格的に可哀そうという事情もあるけども。残念ながら別の理由からその頼みは聞けないのだった。

「うーん、私なんかでよければ教えてあげたいとこなんだけど。でもごめんね、魔術って結構危ないし、好き勝手に初心者練習したがるけど何が起きるか分からないからって、そういうのは教えないように言われてるんだ。せめて魔術の授業を皆が何度か受けるまではやめてくれて、学校から」

その返答に、聞き耳を立てていた周りの日本人もしょんぼりと肩を落としていた。

「そっかー。じゃあこっちの世界に来てから、魔術使えないかなーって色々自分なりに試してるんだけどさ。それももしかして、アウト？」

どうなんだろう。ちゃんとした知識もなく、感覚で使ってみようと独力で頑張るだけで火が出たりするなら、ソリオンの一般の人達

にとつても危ない事ではないだろうか。実際に使える魔術があつても理論的な下地に乏しい日向には、判断がつかない問題だった。

「……あの。アウトでは、ないですけど。ただ、もし実際に何かの現象として発現しそうだったらすぐに練習をやめて、誰か魔術が使える人に相談するべきだと思います。他人の力を借りずに素人が自主練習しても、そう危険な事も起きないとは思いますが……」

この分野では頼りになりすぎる凜が代わりに答えてくれた。言われてみればそうだったかもしれない。最初は魔術が使える他の人に干渉してもらつて、自分の中の魔力を操る練習をするのが一般的とか、そんな話をニールから聞いた覚えがあつたような。

「リンリン詳しい！！ そっか、自主練くらいだったらだいじょぶなんだ」

「え……、リンリンって私ですか？」

「やっぱリンリンすごいなー。襲つてきた奴返り討ちにするくらいだもんね」

名前に關しては堂々たるスルーだった。伊織の諦めたような表情の意味が日向にも分かつた気がする。

昨日の凜の活躍については何故かその日のうちに真紀の耳にも入つたらしく、教室で凜と伊織は色々訊かれまくつたらしい。この場にいるノーム組の生徒の中にはまだ知らなかつた人もいたみたいで、真紀は嬉々としてその人達にも昨日の事件について語り出していた。もちろん凜の活躍の事も。

凜がおろおろとやめて欲しそつに真紀を見ているが、事実なんだから諦めなさいと伊織に同情するように諭されている。

そんな中、日向はこつそりと窓から外を見ていた。

実はこの席からは正門が見えるのだ。

凜、伊織、真紀の三人の位置からは、向きや角度の問題で見えていない。他のこの場の生徒達も外には注意など払っていない。だからたつた今、神谷鋼という男子生徒が正門から出て行った事は、こ

の場では日向しか気付いていない。

お人好し。

声には出さず口の中だけで、日向はその背中に向けて思わず呟いていた。

満月亭の様子を見に行くのだろう。彼からは何も聞いていないが、学長に用事という時点でそういう目的だろうとは思っていた。許可が下りたのは意外だったけど、一緒に出て行った意外すぎる面子がその要因なのだろう。

鋼は、口が悪い。

ちよつとしたルールを平気で破るし、あんまり他人には興味がない唯我独尊タイプに見えるし、現実的な考え方と厳しい基準を持って物事を見ている。

だから相当分かり辛い。あの少年が本質的に、かなりのお人好しだという事は。

きつと鋼にどうして満月亭をそこまで心配するのかと訊けば、食事がそれなりに気に入ったからとか、あの店にいた男達がなんとなく気に入らないからとか、理由を色々と言ってくれるだろう。

結局それは、鋼があのお店を助けるための口実に過ぎない。助けたと思った相手はなんだかんだと理由をつけて何が何でも助けるのが、日向の知る鋼という少年だった。

「……あ。コウからメールが」

電子的なメロディが場に流れ、凜はそう言っただけ自分の携帯を開いた。彼女の携帯はメールも電話も、鋼からだった場合だけ別の着信音に設定してあって、その音の時だけ彼女はやたらと反応が早い。

「取り出すの早っ！」

その速度は真紀が驚くほどらしい。ちなみにメールの着信音は某ミリタリーゲームにおけるゲームオーバー時の音楽で、聞いた周りの生徒は『なんか聞いた事あるなあ』という顔をしたり、知っている

る人は意外そうに凜を見たりした。そして特に強烈に反応したのがすぐ近くの席に座る雪奈だったりした。

「む、村井さんってゲーム好きなんですか!？」

「好きだよー。ルウちゃんって結構そういう趣味だからね」

メールを読む凜に代わり日向が答えておいた。やがて凜が携帯を畳む。

「用事が長引きそう、て？」

「はい。いつ戻るか分からないから適当にしてろって書いてました」
「そりゃまあ、たった今学園の外に出かけたのだから、すぐには戻って来れないだろう。鋼は凜にも日向にも、満月亭に行くのは秘密にしておきたいようだ。」

それについて特に腹が立ったりはしない。鋼が知らせなかったなら、その必要は無いと判断したというだけの事だ。本当に困った事態になったり何か危険があったりすれば、鋼は素直にこちらを頼るだろうと日向は信頼している。

まあ、凜の場合は頭ではそうと理解しても、納得はできずに鋼の後を追いかけて行きそうな気もする。鋼がこちらに知らせないのはそれが理由だろうと日向は当たりをつけていた。昨日の男を捕まえた凜を連れて行って、満月亭にいるかもしれない仲間の男達を無駄に刺激するのを、鋼はよしとしなかったのだ。

昨夜クーと会った場所がああ店の前だったのも、襲撃があった日のうちに一度様子を見ておきたかったからだろう。ああ店の店員にギルドの場所を教えてもらった時、店の前で四人組にも絡まれたのだと少しだけ日向も聞いている。鋼の性格から考えて、彼がトラブルを完全に避ける気であったなら、昨夜ああ場所には長居しなかったはずだ。

「ねえね、そのメールのコウ君っていつも一緒にいる男の子の事だよね。前にこっちの世界と一緒に落ちたっていう」

「はい、そうですけど」

目を光らせる真紀に対し素直に頷く凜。 ああ、あれは獲物を狙う

ハンターの目だ。

「……二人って付き合ってるの？」

「へ？」

予想外の直球の質問に固まる凜を、周囲の男子生徒達はどこか固唾を呑んで見守っているように見えた。はっきり言って凜は美人なので、男子達には気になる話題だろう。

「そ、そそそんな、付き合ってたなんて……！」

「違うのー？ 今だって、用事が長引きそうってだけでわざわざリンリンにメールしてくれてるじゃない。前にこっち来た時もずっと一緒にいたんだったら、お互い気になる存在になつてて、みたいな展開はむしろ自然でしょ」

「い、いえ、ヒナちゃんもクーちゃんも、……他の人だってよく一緒でしたし」

「あ、そんな何人も一緒に行動してたんだ。で、結局リンリンはコウ君とは付き合っていないの？」

まだ凜と鋼が付き合っている疑惑は真紀の中で継続中らしい。何故日向よりも凜がそこまで疑われるのか、長く一緒にいる日向にはその理由がよく分かった。

「付き合ってたなんて、ないです……。そんな、私なんか恐れ多い……」

顔を赤らめてもじもじと恥ずかしそうに言う彼女を見て彼女の想い人に気付かないなら、そいつは相当な鈍感であると日向は思っている。

「私、『恐れ多い』なんて言葉口に出して言う人初めて見たわ……」
頷く伊織はやっぱりというか、既に気付いていたような感じだ。

これはいじり甲斐があると見たのか、真紀が「じゃあ相手から付き合ってくれって言われたらリンリンは受けるつもりなのー？」なんて風にかなり際どい質問を飛ばし始めている。必死に誤魔化そうとする凜に、あんたそろそろ自重しなさいと真紀を窘める伊織。周囲の日本人生徒達もそれぞれが雑談を始めていた。

それらを眺め、自然と笑みが込み上げる。

なんと平和な光景だった。

ここに鋼がないのを、それどころか彼が平和とはかけ離れた状況にいるかもしれない事を、日向は残念に思った。

マルケウスの護衛官は、いかにも執事、といった風情のおじさんだった。

護衛として凄腕なのかどうかはよく分からない。弱くはないだろうが、戦いが本職でも無さそう。とにかく、使用人という印象の男性だった。

マルケウスの安全を第一と考える人であれば、今こうして外を出歩きつけかけとなった鋼にもいい感情を抱いていないだろう。それでもマルケウスが決めた事だから、嫌な顔一つせずむしろ温厚な態度で鋼達に同行していた。

「しかし、今更ながら僕は詳しい事情を何も知らないんだが」
なのに一緒に来たのか……。

ツッコミどころ溢れるマルケウスのその台詞をきっかけに、道中で昨日の襲撃事件の事などを手短かに話す。

話し終わるとマルケウスは、
「そんな暴漢の仲間が巷には野放しにされているのか……！」
と憤ってみせた。まず最初に思う事がそれらしい。無事で良かったとか、災難だったなとか、そういう言葉を期待していたわけでもないが……。

改めて思うが正義感の塊みたいな奴だ。護衛官のターレイは慣れているのかすまし顔で、シシド教官はどこか疲れたような無表情で黙ってついてきている。このシシド教官、護衛官だけで十分ですと

主張したマルケウスと鋼の組み合わせを見てよほど不安に思ったのか、同行を申し出たのだ。

護衛官がついていようと鋼は外出禁止だと言い張る事も出来ただろう。だがマルケウスの方には元々何の制限も無いのだ。あの場の勢いとこの性格から考えると、貴族少年は護衛官と二人だけでも満月亭に行こうとした可能性は高かった。シッドとしてもこれは苦渋の選択だったに違いない。

心配のし過ぎですよと励ましてあげたいところだが、しかしどうも、そうはいかないようだ。

見られている。

学園前あたりから、ずっと何者かが自分達を監視しているのを鋼は感じ取っていた。

なんとなくそう感じているというだけで、怪しい人物を発見しているわけでもない。しかし鋼は確信に近いものを抱いていた。

直感というものは馬鹿に出来ない。

理屈で説明できなくても、それは確かにあると鋼は信じている。かつてそれに何度も助けられた身としては。

他の三人は気付いていないのだろうか？ あるいは気付いていて、その素振りを見せていないかだ。直感なんてあやふやなものを無理に信じてもらおうという気も起きず、鋼は淡々と、マルケウス達を連れて満月亭に向かう。

結局何も起こらずに店の前に到着してしまった。ただし見られているという感覚も継続中だ。

「お前も昼飯はまだなんだろ？」

「ああ。僕は普段、こういう場所で食事をとらないから何か新鮮だな」

会話を交わしつつ中に入ろうとしたところで、店内から誰かが飛び出してきた。

「うおっと」

ぶつかりそうになったのをかわす。小さい人影だった。というか、子供だ。想定していたあの男達の誰かではない。

連れの三人の間をすり抜けて、その子供は通りを駆けていく。何故か引きずるように椅子を掴んでいた。

「ちよっ、ドロボー！ 待ちなさい！」

聞き覚えのある声と共に、次は店員の少女が入り口に姿を現す。

鋼達四人に気付き驚いて立ち止まった。

「すみませんお客さん！ 今ちよっと」

「事情はおおよそ理解しました！ 自分達が捕まえますのでご安心を！」

え？ と鋼が首を傾げる間もなく、当然のようにマルケウスがきつぱりと請け負う。

ターレイが諦めたように嘆息し、シシドが何か言おうとし、それよりも早くマルケウスは身を翻した。

「窃盗を見過ごすわけにはいきません！ 協力を」

鋼達の返事すら待たずにマルケウスは通りを走り出す。

「待てガンサリット！ つ、ああチクショウ！」

シシドが毒づき、目が合った鋼と頷きあう。マルケウスに続いてすぐさまターレイが駆け出し、少し遅れて二人も追う。

複数の魔力活性化の気配を鋼は感じた。マルケウスもターレイもシシドも、皆当然のように《身体強化》の魔術を発動させたのだ。

そして逃げた子供も、驚いた事に同じ魔術を使っている。その小柄を生かし人ごみの隙間をすすると抜けていき、進路を曲げて細かい路地へと入っていく。

こちらのみすみす見逃すほど甘い面子ではない。離される事なくそれに続く。もちろん鋼も《身体強化》を己にかけ、三人と同じ速度で追走していた。シシドが様子を伺うようにこちらを振り返るのに頷きを返し、大丈夫だと視線で伝える。

やはり昨日の襲撃者はこの魔術が相当下手だったのだとよく分か

った。今回の子供はいくらかマシだ。

マルケウスはともかく、護衛官のターレイや教官のシンドの限界速度はいくらなんでもこんなものではないだろう。そう判断して、細い路地に入った途端に鋼は静かに足を止めた。幸いにもシンドは気付いた様子もなく、そのまま子供と三人は行ってしまふ。遠くでまた横の道に曲がり、完全に視界から消えた。

あちらは任せておいても問題なさそうだ。

「貴族だからほっとくわけにはいかないんだろうな……」

あの二人は多分子供を追いかけているのではなく、マルケウスについて行っただけだ。満月亭の事はそれほど深刻に考えていないのだろう。

その場で十秒数えてから、鋼はそつと路地から通りに顔を出した。遠いがなんとか確認できた。

全くの想像通りだった。

三人組の見覚えある男達が、満月亭の前に姿を現していたのだ。

「あんたらもここで昼メシ？」

声をかけると、いざ店内へと入ろうとしていた男達の背が跳ねるように反応した。

驚愕の表情で振り返る三人組。昨日捕まえた男の仲間三人で間違いない。

「てめえは……」

「俺もこの店気に入ってさ。今日もここで食うつもりなんだよ。で、入んねえの？」

男達は警戒するように顔を見合わせた。先日鋼に突っかかってきたリーダー格らしい男が、鋭く辺りに視線を送る。他に鋼の仲間らしき人間がいないか探っているのだろう。

「お前さっきあのガキを」

「入るさ。俺達もこの店で食おうと思っただとこでな」

別の男が言いかけたのをリーダー格が遮った。あの泥棒の子供とこの三人が無関係でないのはもはや明らかだが、それでも建前上は咄嗟に隠すくらいにはこの男も頭が回るらしい。

「だがその前に、てめえとは話したい事があったな。ここで会ったのも何かの縁だ、ちよつとツラ貸せよ」

にたりと笑みを浮かべぬけぬけと言う。

「ここじゃあ駄目なのか？」

「人に聞かれたくない話でなあ」

男達がゆっくりと鋼を囲うように動き、リーダー格があごで進む先を示す。大人しく鋼は彼らについて行った。

数分ほど歩いただろうか。鋼が案内されたのはうらぶれた酒場ら

しき建物だった。

裏道のような場所にその酒場はひっそりと建っていて、昼間は営業していません、と言われても信じられそうな寂れ具合だ。

「怖がらなくていいんだぜえ？ 立ち話もなんだから、ちよーっとそこで話をしたいだけなんだよ」

店に入ると、意外にもそこそこ客が入っていた。ただしまともそうなのが一人もない。鋼を連れる男達と明らかに同種の雰囲気、ゴロツキっぽいやら傭兵崩れっぽい男達が昼間から酒を飲んでいゝる。そのほとんどが入店してきた鋼達を意味ありげに注視している。こゝという人間達が一般人を連れ込み萎縮させ、色々脅しついたりするのによく利用されているのかもしれない。

「まあ座れよ」

誘導されたカウンター席は店内の中央奥だ。他のテーブル席からも見やすい位置にあり、鋼が何かすれば店内の他の男達も動くかもしれないと気に留めておく。

「わざわざ来てもらって悪いな。魔術師の女に『銀の騎士』、今日は貴族にその護衛。つくづくてめえは、他人の後ろに隠れるのが得意らしいからなあ。てめえが一人の時に、こゝやってゆっくり話かしてみたかったんだ」

全く悪いと思っていなさそうにやにや顔で男がそんな事を言った。

「話、ねえ？」

「おいおい疑ってるのか？ 本当に話をするだけだ。ま、二ホン人は知らないかもしれないねえが、この国じゃ『話をする』つつつのはこゝういう意味だけだな！」

席の前で男がいきなり拳を振るった。

狙いはこちらの腹。

なお、セイラン王国では『話をする』が『殴る』という意味に置き換わっているという事実は無い。全くのデタラメだが、とにかくいきなり殴りかけたいほど恨まれているのはよく分かった。

「そりゃ勉強になるな」

繰り出されたパンチを鋼も片手で掴み、受け止める。

攻撃を止められたリーダー格の男が舌打ちをし、《身体強化》を発動させる。この程度の術式に一秒もかかるのかと驚きながら、鋼もわざと同じ時間をかけて魔術で強化を果たした。

そのまま固定し、鋼は雑談でもするような気楽な調子で言葉を続ける。

「ああでも、こっちの国でも『拳で語り合う』って表現はあるんだぜ？ そんなに俺と語り合いたいなら、乗り気じゃないが仕方ない話があったらお前の頼み、聞いてやるよ」

「ぐっ……、く、この……っ！」

強化に振り分ける魔力を男が徐々に大きくしていくのが分かるが、男がどれだけ力を込めても鋼の手からは抜け出せない。鋼が感じ取ったところによると、この男の《身体強化》は昨日の襲撃者より少しマシな程度だ。

二年と少し前、ニールに魔術を教えてもらっていた時期の事を鋼は思い返す。それが出来るほど今の状況には余裕があった。

『お前はどうかやら、《身体強化》の適性が極端に高いようだ』

その魔術を多用していた鋼に色々と質問した後、ニールが言った台詞である。

まあ魔物との戦いにおいては実用的なので、そう言われて素直に嬉しかったのは事実だ。だが《身体強化》は練習すれば誰でも出来るレベルの基礎術式なので、鋼は適性の高さを生かした自分だけの魔術というものに憧れてもいた。自分だけ、というのは望みが高すぎるにしても、誰もが使えるわけでは無いような、適性が必要とされる魔術を使えないのは寂しいものだ。

それであり魔術方面では自分の能力に期待せず、《身体強化》の適性の話もあまり深く考えていなかった。

だが今、目の前の男が鋼に力負けしている現実がある。

「この前こつちに来てからどいつもこいつも、『身体強化』が下手くそだと思ってたが。下手なんじゃなくて、俺の適性が高いだけなのか？ なああんた、世間知らずの『二ホン人』の俺に教えてくれよ。あんた強化魔術はかなり下手な方か？ それとも上手いほうなのか？」

鋼の感覚では、この男の力は情けないほど貧弱だった。体重をかけて両手がかりで、恐らくは鋼の片手と釣り合うだろう。

正直、魔力を込めて力を込めるだけの事でどうしてここまで差がつくのか鋼にも分からない。強化された筋肉を使いこなして動くのが難しいというなら分かるが、こうして力を入れるだけなら誰だった似たようなものになると思っていた。これまでは。

「ぐっ、お……、く、そ。てめえ……っ！」

残る二人と周囲の客はただ呆けたようにこの『語り合い』を見つめるのみ。拳を握られたまま身動きできない男が、もう片方の手も振りかぶろうとする。

鋼はそれまで固定しているだけだった右手を、初めて握り締めた。

「ぐああ……っ！！ お、おお……っ！」

めきめきと骨が軋み、男は脂汗を流し苦鳴をあげるだけになる。

そこでようやく硬直していた二人の男も動き出した。

「このガキ！」

拳を握っている男を引き寄せ二人の男へ突き飛ばす。詰め寄ろうとしていた二人が慌ててそれを受け止めた。

「ちよつと絡まれたってだけなら俺ももう少し穩便に済ますんだがどうせアレだろ。俺が連れてこられたの、お前らの仲間を捕まえた奴について訊こうとしてたんじゃねーのか？ 俺の仲間が逆恨みで手出されるかもしれねえとなると、さすがに見過ごすのはな」

「く、そ……！ 馬鹿力め……っ！！ 二ホン人のクセしてなんで強化できんだよ！」

「で、さ。物は相談なんだが。あんたらに別に興味は無いし、俺の

知らねえとこで悪い事してようが知ったこつちやねーし、俺と俺の仲間に今後は手出ししねえってだけ約束してくれね？　じゃあもう俺、このまま帰るからさ」

「ナメんなこのガキが！　おいてめえらも手を貸せ！　俺らに逆らったらどうなるか教育してやるぞ！！」

意外だったのはリーダー格が連れの二人だけでなく周囲に向けてもそう言った事で、もっと意外だったのは、結構な数の客がそれに応えた事だった。

どうも、この場の客は全員同じ一味みたいなものらしい。乗り気じゃないのか反応しない奴もいるが、助太刀するとかかりに立ち上がった客は七人だった。鋼を連れて来た三人と合わせれば十対一になる。さすがにこの人数差は鋼にも危機感が募る。

「やっちまえ！」

全員がこのリーダー格くらい弱ければ問題無いだろうが、そう甘くはないだろう。

魔術で肉体を強化し、手近にいた男二人が飛び掛かってくる。殴りかかる一人の手を反射的に掴んで止め、もう一人に鋼は蹴りを繰り出した。間髪入れずに掴んだ男も投げ飛ばす。

強化されているはずの二人がそれだけで壁まで吹っ飛び、動かなくなった。

「……いやいや。」

残る八人の男達が動きを止め、場を一時静寂が支配する。攻撃した本人もあまりに容易くこうなつた事に驚いていた。

「……ああ。そういう事が。あんまし強くないから、徒党を組んでカバーしてるわけだな」

鋼が思ったままを言うと、男達は無言で自分の武器を抜いた。しまった、怒らせようとしたわけではないのに。

個人が強くないなら集団で、というシンプルな思考はとても合理的で、鋼は嫌いではない。むしろニュアンス的には感心していたくらいなのだが、今の言い方は確かに挑発と取られても仕方が無い。

迂闊な発言や態度で相手を怒らせてしまつ自分の悪癖はやはり直した方がいいと、小さく鋼はため息をつく。その動作がまた、男達の怒りに油を注いでいるとは気付かない鋼だった。

男達にもはや手加減などする理由はなく、そうして八対一の戦闘が始まつた。

鋼から離れた位置にいた客の男二人から、魔力が活性化する気配を感じ取る。

一般的に《身体強化》などの己の肉体にのみ干涉する魔術は、内向きの力であり活性化の気配もあまり外に漏れない。しかしこの時の二人からは、昨日の襲撃者同様はつきりした魔力の波動が感じ取れた。

魔術を補助とする剣士ではなく、魔術主体で敵を攻撃する魔術師タイプの敵だと鋼は判断。予想通りに次の瞬間二人から放たれた《火矢》を少し体をずらすだけで回避しながら、強化された身体能力を生かしそのまま術者達に接近する。

鋼の動きに反応すら出来ていないようだったので、片手で一人ずつ掴んで近くの壁へと投げ飛ばす。

他の敵を見てみると、さっきまで鋼がいた場所に向かっていまだに構えている奴がほとんどだった。驚愕の視線でこっちを見ているが、体全体は鋼の移動に対して全く対応できていない。鋼の姿を見失っている奴すらいる始末だ。

ここまで速度に差があるのなら、武器の有無など問題にならない。近くにいる敵から順番に、近づいては蹴り倒していく。術者達に近づいた時とは違い、接近するのに《身体強化》は使っていないというのに、何も出来ずに男達は床に伏していった。これは別にわざと手加減しているわけではない。魔力の節約はルデスで戦っていた頃から身に染みている習性だ。

魔術に頼らない速度で接近して、蹴る瞬間だけ強化。 たったそれ

だけの繰り返しを男達は誰も止められなかった。剣で防ごうにも、それより速く足を動かせば体のどこに対してでも好きに攻撃できるのだから。

「このガキ殺すっ！！」

残るはリーダー格と知らない男の二人になったところで、相手が攻勢に出た。リーダー格が長剣を手に、その後ろからもう一人が小剣を構えて斬りかかってくる。明らかにこちらを殺す気の気迫があった。

長剣を持つ手を掴み、もう片方の手で殴ってやろうとしたのだが、鋼は咄嗟に飛びのいた。もう一人の小剣使いが剣を突きこんで来たのだ。

誰もが全く反応できなかった攻撃の速さに対応したのだから、いい目を持っていると言えるだろう。多分この小剣使いが十人の男の中で一番強い。強化や速度に差があっても、この男のように集中力が十分なら相手に対応くらいは出来るものだ。

「あんたみたいなマシンなものいるが、基本は寄せ集めって感じが」
突きこんできた小剣を避けながら足で蹴り上げる。男が小剣を離れた。離さなければどの道手を傷めてしばらくは戦えなくなっただろう。

体勢を立て直して再度斬りかかろうとしていたリーダー格の男の腹に、鋼は加減した飛び蹴りを叩き込んだ。

今までの男達の中で一番吹き飛び、吐瀉物を撒き散らしながらカウンターにぶつかる。そのまま伸びてしまった。

後はただ、静寂だ。

手をあげて戦意がもう無い事を必死にアピールする小剣の男に鋼は苦笑を向けた。

「別にあんたには恨みはねえから、安心してくれ。その男にもな。手を出されたから警告を兼ねてやり返した、そんだけだ」

蹴り倒した男達も、別に気を失うほどの威力で蹴ったわけではない。意識を失うほどのダメージを負っているのは今しがたのリーダー格の男と、最初の方で攻撃してきたその連れの二人と、《火矢》で攻撃してきた二人の計五人である。他は奴らは既に起きだしており、しかしもはや誰の目にも戦意は無くなっていた。

「まあ、あんたがもうちよつと俺にとつて脅威だったら違ったがな。自分の命が本気で脅かされても笑って許してやるほど、俺は聖人君子でもない。もっとあんたらが明確な殺意でもって、しつこく挑んでくるようだったらつい殺してたかもしれん」

先日の《火矢》襲撃以来、鋼はこちらの法律に関して自分なりに調べていた。

それで知ったのだが、例え自分より強者が相手だとしても、武器や魔術を人に向けた時点でセイランの法では殺されても文句は言えないらしい。殴ろうとしただけの相手を殺したとして、それくらいの事例でようやく過剰防衛だ。しかもその場合でも相手が前科のある犯罪者だったり複数がかりだったなら、殺される危険もあったとして結局は正当防衛と見做みなされるのがほとんどのようだった。

今は人殺しなどする気はなかったが、殺されそうになってまで不殺を守るうとは鋼はさらさら思っていないかった。それは法的にも何の問題もない。小剣の男も鋼の言葉を表面上の脅しとは受け取らなかつたようで、怯えたように微かに頷いた。

「そいつが起きたら言っと思ってもらえるか？ もし次に俺達に手を出してきたら、最低でも一生剣を握れない体になつてもらつて。」

……まあ、そいつが思ったよりもまだ馬鹿だったら俺の仲間を今度は狙うかもしれんが。俺にすら勝てないようじゃ、俺の連れをどうにか出来るわけがねえしな」

誰に向けたわけでもない風を装った最後の呟きに、今度こそ意識のある五人の男達の顔が恐怖に染まる。一体この少年の連れとやらは、どれだけ恐ろしい奴らなのだろうかと。

とりあえずは狙い通りである。鋼より戦友達の方が更に強い、と

思い込んだなら、仕返しして来るにしてもそちらを襲う事は無いだろうから。

日向の気の抜けた暢気な顔を思い返せば、きよとんとしたまま不意打ちに対応できない姿は簡単に想像できる。もし彼女達が標的にされるような事があれば絶対クロス、と胸の内ですげう鋼だった。

しかし、まあ。

この喧嘩とも言えない騒動では収穫もあったと言えよう。

魔物との交戦経験は豊富な鋼だが、こちらの街で起こした事が無いのでどうにも知識や常識が偏っている自覚があった。そこらの冒険者よりは修羅場をくぐった自信はあれど、それで十対一の喧嘩で勝てるかは別問題だ。他の異世界人と比べて自分の能力はどうなのか、相対的に測る常識の物差しが鋼には足りていない。

だがどうやら、得意とする《身体強化》はこれぐらいの悪党相手なら十分過ぎるほど通じるようだ。それが分かっただけでも結構な収穫だった。

最近この街の治安に関しては若干の不安を抱いていたのだが、これならもう少し肩の力を抜いたっていいかもしれない。

そろそろ、帰るか。

目的は果たした。

泥棒の子供を追いかけて行った三人はもう満月亭に戻っているだろうか。シシドのむっつりとした困り顔が目につかぶ。なるべく早く戻ろう。

そう決意した矢先だった。

ばん、と入り口の簡素な両開きのドアが開いて、子供が外から飛び込んできた。

そして。

「とうとう追い詰めたぞ！ さあ、盗んだものを返せ！」

次に現れたのは見覚えのありすぎる騎士学校の男子制服だった。

鋼は頭痛をこらえるような仕草を試してみる。なんとか顔を隠せないかなという、無駄な努力である。

「ガンサリット！ 不用意に屋内に踏み込むんじゃない！」

マルケウスに注意しながら、続いて入り口から顔を出したのはシドだった。ほぼ同時に護衛官のターレイも店内に踏み込んでいる。ちらっと見たが、入って来た子供はさっきの椅子泥棒で間違いなさそうだった。

そして三人は、散らかった椅子や変な体勢で転がったまま動かない男達に絶句する。

「……なんだこれは」

ぼつりと言ったシドの台詞に、店内の誰もが沈黙を返した。やはり男達と同じ一味だったらしい泥棒の少年も、驚愕に目を見開いて気絶している男達の中心点を凝視した。

迂闊な事にそこからまだ、鋼は動いていなかった。

「……どうしてお前がここにいる、カミヤ。……というか、いつから別行動をしていたんだ？」

ずっと鋼の不在に気付かず子供を追い回していたらしいマルケウスに鋼はがくつとなった。前へ前へと進む勢いが強い分、後ろは全く見えないという性格らしい。

「これは……、お前がやったのか？」

この質問はシドだった。ターレイは目を細め、ただ黙ってマルケウスの隣に侍っている。

「いや、俺が来た時にはもうこうなっていましたよ。俺にも何がなんだか」

「どうやって先回りした？」

「へ？ いやいや、偶然っすよ。教官達について行けずに俺、置いてかれたじゃないですか。つーかそれすら気付いてなかったなら割とひどいと思うんですが。まあそれで、先に店に帰ろうにも周りを

見たら知らない道だし、色々彷徨ったあげくついさっきこの酒場に
来たんです。帰り道を訊こうと思って」

疑うどころか嘘と断定しているような、凄みのある表情でシシド
はただじつと見つめてくる。

全く気付いていない素振りです。鋼は笑いかけた。

「ま、でも運良く合流出来たんだから良かったですよ」

「……。本当に、これをやったのはお前じゃないんだな？」

「俺がこんな事出来るように見えます？ ……なあ、その人」

武器を失い立ち尽くしたままの小剣の男に呼びかけると、「は、
はい！？」と上ずった声が返ってくる。……そうあからさまに怯え
られると、いかにも白々しい演技に見えてしまいそうだが仕方が無
い。

「あんたからも言ってくれよ。ここでどんな派手な喧嘩があ
ったのか知らないが、俺が来たのはついさっきで倒れてる人達とは
関係無いって。ちなみにこの人達、騎士学校の護衛官だったり教官
だったりするから、嘘は言わないほうがいいぞ？」

これで通じないならもう知らん。嘘がばれて困るのは鋼ではなく、
先に手を出してきた上に刃物まで持ち出したこの男達だ。

「！ は、はい、そうですよ！？ その人はいさつき来たところ
で……！」

「……なるほど」

怪しまれているだろうが、ひとまずはシシドも納得したフリをし
てくれた。

「……教官。それよりもまずは盗まれた物を取り返しましょう」

「ん？ なあ、マルケウス。取り返すって言うてもそいつはもう椅
子持ってねえじゃん」

マルケウスの進言に鋼が横から口を挟む。話題に上った泥棒の子
供はびくりと身をすくませた。

「椅子？ 逃亡の邪魔だったのか逃げる途中で道に放っていたな」

「いや盗品それだろ」

「何を言っている。椅子なんか盗んでどうするんだ。カミヤ、二ホ
ンでは意味が違うのかも知れないが、泥棒というのは金品を盗み取
る輩の事を言うんだぞ」

偉そうに説明してくれるマルケウスの隣でターレイは気付いた表
情を見せた。

「マルケウス。貴族はそんな事想像もできんのかもしれんが、椅子
一つ満足に買えない貧乏人にとっては椅子も立派な『金品』だぞ」

「椅子一つ買えない？ 何を馬鹿な」

一笑に付そうとしたマルケウスが、椅子泥棒にきつと睨みつけら
れ戸惑ったように言葉を途切れさせる。まさか、本当に？ とその
顔は語っていた。

ここの一味と関係あるならどう考えてもまともな育ちでないだろ
うその子供が、貴族少年のその反応に怒りを見せるのは当然だろう。
それでもまあ、盗んだ側が悪いのだが。

しかし多分、今回はこの子供は椅子が欲しかったわけではなく、
男達の指示に従っただけと思われる。満月亭から店員を外へ引つ張
り出すためか、マルケウス達を引き離すためかは知らないが。その
男達はこうして床に伏せているので、もはやどっちでもいい。鋼と
してはさっさと満月亭に帰って昼食にしたかった。

「細かい話は後でいいだろ。その子供連れてさっさと満月亭に戻る
うぜ。椅子以外に盗まれた物が無いか確認してから、そいつをどう
するかとか決めりゃいい」

ターレイもシッドもそれに異論を唱えず、店内の人間が静かに見
守る中、そうして四人は子供連れ名も知らぬ酒場を後にした。

12 魔術実技の授業

「鋼はさあ、自己評価がすごく低いと思うんだ」

「そうかあ？」

「だってチンピラ十人相手に勝ったって聞いても私はふーん、としか言いようがないし。全然意外じゃないじゃん。魔物二十四匹に囲まれても余裕な人が何言ってるのって感じだよ？」

「いやでも、人間は魔物を駆除する側だろ。知恵もあるし。魔物十匹と人間十人だったら、人相手の方が難しい戦いにならねえか？」

「んー。そう……なのかな？」

朝もやの中、そんな会話が交わされている。

鋼と日向だ。

「そういう問題じゃない気がするけどなー。私達がいたとこって普通は生きて帰ってこれないとかで有名な場所なはずじゃん。そこで戦い続けてたんだから、もうその時点でこっちの冒険者のトップクラスくらいに強いつて事にならない？」

「魔物との戦いに限って言えばそうかもしれんが……」

「ちょっと賢くて人の形に似た魔物に置き換えて考えるとさ、やっぱり鋼が勝てないのって想像つかないんだよねえ。人相手でも」

「そりやお前、さすがに俺を買いかぶりすぎだ」

鋼が苦笑すると、向かいで腰を下ろしている日向もまた苦笑した。「そーゆーところが自己評価低いと思うんだけどなあ……」

自分より強い人も当然世界にはごろごろいる。そんな当たり前の考えにすら『自己評価が低い』と言われるのは、こちらも納得できるものではない。鋼から言わせれば日向こそ、鋼に対する評価が実際よりも高いし自己評価が低い。

まあ、この話題にこだわったところで意味もない。

「……おいルウ。そろそろ機嫌直してくれよ」

一人離れた場所に座る凜に鋼は呼びかける。だが彼女は拗ねたようにそっぽを向いた。

「別に、機嫌を直すも何も私は普通ですけど？」

「事前に相談しなかったのは悪かったよ。でも俺一人でも十分だったろ？」

「そういう事を言ってるんじゃないです！ 十対一でも二十対一でも、コウが負けるなんて思いませんし！」

「やっぱり怒ってるじゃねえか」

きつとした目つきを向けられ、鋼は減らず口を叩くのをやめた。

見慣れているので普段はそう意識しないが、美少女と言って差し支えない奴なのだ。令嬢めいた美貌に睨まれるのはそれなりに迫力があつたりする。

「……危ない事するならなるべくお前らにも言うつもりだがな。なんでもかんでも報告し合うってのはまた違うだろ。確実に危険があるって分かってたわけでもねえし、今回の事くらいは大目に見てくれよ」

「それは……分かってます。ヒナちゃんが既になんとなく察してたのに言ってくれなかった事は、微妙に納得いつてないですけど。私が腹を立てているのは別の事です」

「別の事？」

「コウは甘すぎます！ 凶器を向けられたんですよ！？ そんな笑って済ませられる話では無いでしょう！？」

烈火のごとき怒りを見せる凜に、気持ちは嬉しいのだが少し身を引く鋼。彼女は怒ると結構恐いのだ。

「私がその場にいたなら……！ コウは自分の命に無頓着すぎます。最低でも全員の四肢を折るくらいはするべきでした！」

「言う事がこえーよお前……。結局は危なげなく対処できたんだし、もういいじゃねえか。な？」

「当たり前です！ もしコウが本当に危なかったのなら、私はその

店を潰してます。物理的に」

滅茶苦茶言つなコイツ……。

それからも続いた凜からの文句をひとしきり聞き終え、彼女が落ち着いてきた頃に日向が改めて訊いてきた。

「それで鋼、その話をするために朝に集合つてのは分かるんだけど、なんでここ？」

まだ朝日も昇りかけの早朝だった。周囲一帯に他の人影はない。それもそのはず、地面に腰を下ろす三人がいるのは学園の敷地内なのだ。

「ああ、下見も兼ねてな」

「下見？ 何の？」

「部活よろしく、朝練でもしてみようと思ってな。ここ、剣術の授業とかで使う場所っぽいな。結構いい広さだ」

見回した付近は、芝生の地面が続く広い空間だ。日本でいう校庭にあたる場所だと思われる。

「朝練？」

「日本でも自主トレやってただろ？ こつちじや魔術も使えるし、ちよつと本格的に体術とか魔術の訓練しようと思つてな」

鋼達が逆召喚で日本へ帰ってからの学園に入学するまでの二年間は、それはもう平和な日々だった。その反動か、この三人はなるべく筋トレを欠かさなかつたし、時には組み手をして実戦トレーニングのようなものも行っていた。

あの死にかけながらも必死に戦い続けた日々を経験が、風化して色褪せていくようで怖かつたのだ。地獄の日々だったからこそ、そこで得た経験が生かされないままただ失われていくのはあまりにも勿体無い損失のように思えた。

鋼はその自主トレをもつと本格的な訓練にしたいと考えている。今回の酒場の事件はいいきっかけだった。

「俺が得意とする魔術は《身体強化》と、あとは魔力の塊をそのま

まぶつける事くらいだからな。正直自分じゃもう、魔術に関してはあんまし期待してなかった。だがまあ、今回の事で《身体強化》やら、自分の適性やらを見直しとくべきかなと」

元々こちらの世界で自主トレ自体はしようと思っていたのだ。寮生活で場所の確保も難しく、保留にしていたのだが。ここで訓練を行うなら寮からの無断外出と学園の敷地への不法侵入、二つの規則を破り続ける事になってしまいが、その決心もついていた。

「その訓練の下見のためだけに、学園への不法侵入を手伝わされたんですか？」

「ルウは留守番のほう良かったか？ 学園の関係者にバレたらかなり怒られそうだし、無理に付き合えとは俺も言えんが」

ここで「悪いな、こんな事手伝わせて」なんて言ったら鋼の経験上、多分こいつは怒る。「そんな水くさい事言わないで下さい！」とか言つて。

人見知りの大人しげな優等生に見せかけて、実は結構ルール破り上等なのが鋼の知るこの少女だ。

「もちろん留守番のほうが好きです。鋼がここで毎日訓練するのなら、私も一緒にします」

「日向は？」

「ん？ 私も付き合うよ。訓練って大事だと思うしね」

戦ったりするのはあまり好きではないのに、日向も軽く頷いてくれる。

「……お前らと付き合っているとあまり悪い事はできねえなつづくづく思うわ」

いつもこの二人は鋼のやる事についてきてくれる。窃盗・暴行などの犯罪行為はさすがに諫めてくれると信じたいが、鋼が悪事に手を染めると、こいつらも影響されてその道に落ちるんじゃないかと微妙に心配なのだった。

現に学園のセキュリティを破って侵入するのに、二人は理由も聞かずについて来たわけで。

「ところでさあ。魔術の適性見直すって言っても、どうやるの？
ルウちゃんが先生役？」

「もちろんお前らのアドバイスも欲しいが、自分で色々考えて試す
つもりだ。学長が言ってる？」

「なんだっけ？ 可能性の話？」

「ああ。どの魔術が得意かとか、そういう事しか今まで俺は意識し
てなかったからな。自分じゃ気付いてない使い方だとか、他にも色
々魔術の可能性はあるだろうに。学長に言われるまでは気付かなか
った」

「……え？ 学長ってそんな意味で言ってたっけ？」

「違ったか？ まあ細かい事は気にすんな」

そういうわけでこの日から、早朝から日の出までの僅かな時間こ
こで訓練する事が決定した。

以下、余談だが。

「ルウは得意な風魔術で何かアイデアないのか？」

「私ですか？ そういえば最近、ふと考えたのがありますけど」

「おお。お前は漫画とかゲームから色々アイデア引っ張って来れそ
うだしな」

「拳銃の原理ですね。落ちている石ころなどを筒状の風圧から撃
ち出せば、少ない魔力で遠距離から一方的に攻撃できそうだなと…

……」

さすが、凜だ。考える事がエグい。

ちなみに『エグい』は鋼の中では褒め言葉だ。

数日が過ぎていた。

あれ以降満月亭は、男達が来る事も嫌がらせをされる事も無くなつたらしい。

おいしい軽食屋の話は鋼の周辺から他の生徒達にも広まり、そこそこの客入りになっているとか。

いまだ鋼は外出禁止が解除されていないので、人から聞いた話なのだが。

選択授業も始まり、いよいよ異世界の学園生活は本格的なスタートを切っていた。

「魔術とは」

魔道学者という肩書きの三十くらいの女教師、クオンテラがチョークを手に解説する。

「人間の体内、空气中、この世界のあらゆる場所に存在する『魔素』を利用し、これを消費する事で他の現象に置き換える技術です」

かつかつと音を立てながら、黒板に次々と文字が書かれてゆく。

その様子は日本の学校の授業風景とさして変わらない。

その内容を無視すればだが。

「魔素とはつまり、火を燃やすための薪であり、体を動かすための栄養でもあるほぼ万能の物質です。二ホン人の生徒には万能のエネルギーと言ったほうが理解が早いでしょう。このエネルギーとはあらゆる運動・現象の元となる原動力を指すあちらの世界の言葉ですが、魔術においては今日正式（こんにち）に使われるようになった単語でもあるので、こちらの出身の生徒も覚えておくようになさい」

エネルギーに相当する単語は元々こちらの世界では無いらしい。ちよっと奇妙な気分になる。

こちらの世界の大陸で広く使われている言語は『ソリオン語』と

いうのだが、日本人がこちらに来て言葉の違いを意識する機会は少ない。何故なら日本人にとってこちらで話されている言葉は日本語としか思えないものだからだ。

異世界人からしても同じである。不可思議な事に、日本語とソリオン語はそのまま互いに通じてしまうほど似通った言語なのだ。

一応その理由を説明できる学説はある。

いわく、世界というのは地球やソリオン以外にもそれこそ無数にあるのだが、世界を隔てる壁は厚く、通常繋がってしまう事はない。しかし似た言語が話されている地域同士は、その壁が薄いのではないか、という説である。

これだと繋がった別の世界が同じ言葉を話すのは、偶然なのだが必然でもある、と説明できるのだ。証明する手段が無い学説だし真相などどうでもいいが、言語を一から覚える必要がないのはとにかく助かっている。日本でセイラン王国が『海外より近い国』と紹介される理由は、物理的な距離だけではないのだ。

「この魔素はさつきも言ったように、ほとんどどこにでも存在します。空気中にも、地面や石の中にも、我々が食べる食事にも、です。その環境の中で生きていますから、当然我々人間もこれを持っています。この人が持っている魔素を一般的に魔力と呼びます」

この授業は『魔術教養』という必修授業だ。基本的過ぎて多分凜々と退屈な授業だろうが、ちゃんと習っているわけではない鋼には新鮮な驚きに溢れていた。

教室内を見てみれば、どの生徒もそれなりに真面目に授業を受けている。特に日本人生徒は傍から見ても分かるほどの気の入れようで、なんだか面白かった。

余所見はやめて鋼もすぐに授業に意識を戻すが、やはり周囲の席からは浮ついた熱気を感じる。板書されたものを写すだけの本来のこの授業だけなら、これほど皆気合を入れはしないだろう。次の授業のために、少しでも魔術に関する知識を増やそうとしているのだ。

日本人お待ちかねの選択授業、『魔術実技』が次に控えていた。

魔術に関連する授業は必修・選択を問わず複数ある。

魔術を一切使えない素人のみが取れと言われた『魔術基礎』の選択授業を除き、鋼は選べるものは全て取っている。魔術基礎を既に受けている片平や有坂に訊いてみたところ、教師の力を借りて自らの体内にある魔力を自覚できるようにするための授業らしい。

魔力を自覚し、意識してそれを操れるようになって初めて、魔術を使うためのスタートラインに立ったと言える。指先から火を出すなんてのはまだまだ先で、魔術基礎はひたすら集中するだけの精神修行みたいな内容だったそうだ。

日本人が憧れるような魔術の実践的な授業は、今回の魔術実技が最初となる。

芝生が広がる学園敷地内の校庭で、生徒達の正面に複数の教師と助手らしき人が立っていた。

「当学園では、魔術師を志望する生徒でなくとも魔術基礎の授業は取らせます。卒業するまでにはどの生徒も基礎的な魔術は使えるよう教育する方針だからです。これは入学の日にも説明があった事だと思います」

魔術教養に引き続き、生徒達を前にして場を取り仕切るのはクオンテラ教師だ。今回は何故か、片方の目だけにかかった眼鏡、多分モノクルとかいう奴を装着している。

「基礎に関してはそちらの授業で行いますから、この魔術実技では実践をまじえた専門的な授業を行います。事前に配られた説明書きにも注意してあったように、あくまで魔術師を志望する生徒に合わせた内容です。まず言っておきますが、軽い憧れや興味でこの授業を取った生徒には厳しいものとなるでしょう。授業内容についていけないようなら、授業以外の空き時間に担当の教員か助手に訊きに

来ても結構です。自分で選択したからには、それぞれ意欲を持って授業に臨むように」

「中々厳しそうな先生だよな」

それにお堅そうというか、あまり融通も利かなさそうな印象だ。近隣の生徒にのみ聞こえるような小声で鋼が言つと「真面目そうやし良さそうな先生やんか」と省吾からは返ってきた。鋼はこういった教師とは反りが合わない事が多いので苦手意識が先行していたが、確かにちゃんと習いたいのなら真面目な先生のほうがいいなと思ひ直した。

選択授業なので、あくまで二クラス合同だ。日向や凜、省吾に有坂に片平といったいつもの面子は、生徒の集団の端のほうでひっそりと固まっていた。

「生徒数が多いのでいくつかのグループに分けて授業を行います」
クオンテラがそう言ったのに対し有坂は苦笑していた。

「いくらなんでも多過ぎだものね……」

本来この授業は、例えば騎士を純粹に目指している生徒は選ばないような専門的分野を扱うものだ。事前のプリントにもかなり注意書きがされてあったのを鋼も覚えている。騎士が魔術も使えるに越した事はないのだろうが、これ以外にも魔術に関する授業はあり、普通ならそちらで十分補えるのだと。

これは本気で魔術師を目指している生徒のためだけの授業なのだ。しかし驚いた事に、いや驚きでもなんでもないが、この専門的な選択授業でさえ日本人は一人残らず全員受けていた。さすがは漫画やアニメで世界的にも有名な我が国日本と言うべきだろうか。

周囲を見渡せば人、人、人だ。選択授業のくせに必修の授業より生徒がうじゃうじゃと多くてなんかもう鬱陶しい。その内訳は日本人が百人全員に対し、セイラン人十数人といった感じであり、この場の生徒はほぼ日本人といっても過言ではなかった。

クオンテラ以外にも魔術の教師は二人いて、この授業での助手だと紹介された若い男女にいたっては五人もいる。その中でも特に同

世代くらいに若そうな二人は、もしかするとこの学園の上級生かもしれないが、とにかく教える側の人数が今まで経験したどの授業よりも多かった。

多分、事前のプリントにもあれだけ注意が書かれていたのだから、去年もこんな感じに日本人ばかりだったのではないだろうか。予想はしていたが改めて見るとすごい人数だ、みたいな感じに助手達は苦笑しつつ、授業の準備を進めていた。

「グループを分ける前に、ニホンの生徒達のほとんどはまだ魔術というものに馴染みが薄いでしょうし、一つ実演してもらいましょうか。初歩的なものでいいので、今の時点で魔術を使える生徒は前に出てきなさい」

鋼達は顔を見合わせる。この六人の内、有坂と片平以外が該当していた。

「それじゃあ、ちょっと行ってこよか」

「もしかすると使える人と使えない人でグループ別になったりするのかな？」

「あるかもな」

鋼、日向、凜、省吾はぞろぞろとクオンテラに向かって歩き出す。セイラン人ならともかく、魔術を使える日本人には否が応でも視線が集まっていた。

百人ほどの生徒達の真正面に立つ頃には、凜など緊張でかちこちに固まっていた。鋼の影に隠れるように身を小さくしている。日向と省吾はいつも通りののんびりした表情に見えた。

前に出てきた生徒の中には鋼達以外にも日本人が二人いた。帰還者は六人いると聞いているので、つまりこの場に全員揃っているらしい。

そしてセイラン人はやはりほとんどが前に出てきた。全員でなかった事はむしろ驚きかもしれない。

「この中で《身体強化》を使える者は？」

クオンテラの質問に、顔を見合わせたりもしつつ鋼達は小さく手

を挙げる。前に来た者全員だった。

「結構。なら、そうね。あなた、カミヤ君と言ったかしら？」

突然名指しされ、鋼へと注目が集まる。以前の《火矢》襲撃事件の際に名前を覚えられたのか、それとも元から生徒の名前を把握しているのか知らないが。

「そうっすけど」

「あなたと、あともう一人……そちらは《身体強化》が得意な生徒がいいのだけど。誰かやりたい人はいないかしら？」

もう一人はわざわざ訊くせに、何故鋼は名指しなのか。シンドから何か聞いて、要注意生徒とか思われていないだろうなとやさぐれた気持ちになる。

「俺がやりますよ。得意な生徒のほうがいいんでしょう？」

台詞の後半を妙に強調して手を挙げたのは、言っちゃ悪いがなんだが気障な感じの金髪のセイラン人男子だった。なんとなく貴族っぽい気がするが、同じクラスかどうかさえ鋼には分からなかった。貴族は大抵どの授業の時でも貴族同士固まっており、あまり交流がないので顔すら覚えていない。知った顔はマルケウスくらいだろうか。

「鋼も《身体強化》かなり得意なのにな」

「今んとこそれが唯一の強みだからな」

ぼそりと呟いた日向に凜がこくこく頷き、鋼も小さく同意しておく。それを聞きとがめ、さっきの気障っぽい男子がふふんと笑った。「ニホン人は知らなくて無理もないだろうけどね。我がゲイルド家は代々魔術師を輩出している由緒正しき家系なんだよ。俺も幼少の頃から魔術に触れている。悪いがニホン人には負ける気がしないね」

「へえ」

ゲイルド何某は自信満々のようだったが、漫画とかでいかにもありそうな小物っぽい台詞でもあった。これで鋼より下手だったらまずい話だ。しかし入学してから初めて会った魔術の腕が良さそうな相手に、鋼の期待も膨らむ。

「あなた達二人には《身体強化》の実演をしてもらいましょう。強化してそちらの樽を持ち上げてもらいます」

クオンテラが示す先には、助手の人達がせつせと運んできたタルがでんと置かれていた。

大きなタル、中くらいのタル、小さなタルと何やら三種類あり、口ぶりからして中身も入っており重いのだろう。同じサイズのタルごとに複数用意されているようで、こうしている今も助手達がどこから休みなく運び込んでいる。

そうして鋼ともう一人は、《身体強化》の実演をする事となった。

13 魔術実技の授業・続

重さ的に難しいようならけして無理をするな、等の注意事項をいくつか受ける。

次にクオンテラは見守る生徒達に向かい、最初に覚えてもらう《身体強化》を今からこの二人に実演してもらおう、と改めて説明した。この樽は中に水が入っており、魔術なしでは軽々と扱う事が出来ない程度には重いと云々。

とつとつとやらせてくれないかなと棒立ちで鋼は待つ。並ぶタルを眺めていてふと気付いた。

小タルと中タルは複数用意されているようだが、大きなサイズのタルは一つしか無い。

そしてクオンテラがようやく実演の許可を出した。

「君はそっちのタルにしておいてほうがいい」

大タルに近づこうとした鋼に、もう一人の実演者がきっぱりと言った。まあなんでもいいが。

ゲイルドという家名だけ分かっている名も知らぬ男子生徒は、言うだけあってその大タルの前に立つ。鋼は隣の中タルの前に立ち《身体強化》を発動させた。

ひよい。

「お、このサイズでもまあまあ重い」

持ちやすいようにか外付けされている取っ手を掴み、軽々持ち上げてみせた鋼はそう言った。

だが何故か、場に微妙な空気が流れる。

「鋼、もうちょっと演出しないと！ そんな何も言わないで強化して持ち上げて、傍から見てたら中身空っぽみたいに見えるから！」

日向の指摘で鋼も気付く。確かにこれは、魔術を見せるのが目的なのだ。

「あ、悪い」

鋼は持ったタルを置き直し、他の生徒達を見渡して「じゃあ今から強化するからな。……今、強化した」と解説を加えながらひよいと持ち上げてみる。

……なんとというか、いたたまれなくなってきた。

「先生、これ意味あるんすか？ 外から見ても全く分からないんじゃないんじや……」

「今分らなかった生徒は、この後持ち上げようとしてその重さに驚く事になるでしょう。しかし中々……お上手ね」

片眼鏡をくいと直しつつ、クオンテラは鋼の強化をそう評した。もしやそのレンズには何かを見通す力でも備わっているのだろうか。「ふ、ふん。まあ、そのくらいの大きさ、俺でも楽勝だけどね」

魔術師の家系の男子が誰にともなくそう言っつて、大タルの取っ手を右手で掴んだ。

「《身体強化》！」

宣言と同時に魔力が活性化し、その右腕には燐光が溢れた。さっきの平静と変わりなかった鋼の時とは違う。どよめきの声が観客の生徒達からもあがった。

なるほど、ああすれば良かったのか。

数秒はそのまま動かなかったセイラン人男子だが、そこで左手も取っ手に添えた。片手ではあの重さは無理だったのだろう。

ぐぐぐ、とタルが持ち上がりつついく。

「ゲイルド君、もう結構。その重さのタルを持ち上げるのは修練を積んでも誰にだって出来るものじゃないわ。優秀ね」

「当然です！」

タルを置き、ゲイルドは胸を張った。クオンテラから更なる解説が入る。

「人が魔術を行使する時は、今のように魔力光が出るか、魔法陣という術式文字が浮かび上がります。魔法陣についての詳細はまた後日の授業で」

「質問いいですか？」

手を挙げて訊いたのは有坂だった。多分同じ疑問を他の生徒も抱いている。

「何でしょう」

「神谷君の時はどっちも出なかったのはどうしてですか」

「当然の質問ですね」

クオンテラが鋼へ向き直る。

「ではカミヤ君、今度はそちらの大樽を強化して持ち上げて下さい
言われた通りに大タルの前に向かう。すれ違いざまゲイルドは「
すごい重さだぞ。大丈夫か？」なんてからかい混じりに声をかけて
きたが、「ああ」とだけ答えておく。

「ええと、《身体強化》……？」

なんで疑問系、と日向が言うのが聞こえるがスルーした。魔術を
使う際、その魔術の名を宣言するという行為に鋼は慣れていないの
だ。

よくさっきのゲイルドは恥ずかしげもなく宣言できたものだ。や
はりあれだろうか、日本の漫画での必殺技的なものにありがちな、
技名を叫ばないと味気ないみたいな慣習でもあるのだろうか。

もう既に魔術を発動させているが、鋼からは燐光も魔法陣も発生
しない。

正確に言えば、外からは見えない。

「……」

クオンテラが眉をひそめるのが分かったが、ひとまずはそれで大
タルに挑戦してみる。
ぐい。

結構きつかったが、それでもなんとか鋼は持ち上げてみせた。
片手で。

「……カミヤ君、重くないのですか？」

「いや結構重いですよ。これ以上だと片手じゃ無理っす」

「魔力光か魔法陣が見えるように出して欲しかったのだけど……、

やってもらえるかしら？」

「ちよつと待って下さい」

強化に注いでいる魔力の出力を、慎重に上げていく。手の中で大タルはどんどん軽くなっていった。

そして出力アップに伴って、じんわりと鋼の右腕から白い光が漏れ始める。本来クオンテラはこれを出させるために大タルを持ち上げると指示したのだろう。

「もういいですか？」

「ええ、ありがとう」

大タルを置き、鋼は魔術を解除した。僅かな時間とはいえ、魔力を本格的に消費する行動は久々だった。

今のも何が見ても何が見てもなんだか分からないだろう大多数の生徒達にクオンテラは向き直る。

「どんな魔術の行使でも、魔力光が魔法陣は発生します。これに例外はありません。逆に言えば、魔術を使っているはずなのにその二つが見当たらない場合は、見えない場所で発生しているという事です。つまり、体の中ですね」

魔力光、あるいは魔法陣のある位置こそがその魔術の根元、つまりは本体にあたる。炎を発生させる魔術を例にとると、魔力光あるいは魔法陣から、あまり離れた位置に炎を発生させる事は出来ないのだ。

「使用する魔術が大規模なものほど、また使用する魔力量が多ければ多いほど、この魔力光あるいは魔法陣の範囲も大きいものとなります。《身体強化》のように体内でだけ作用するような魔術はその兆候も体内で発生するのですが、多くの魔力を使って同じ魔術を使えば当然兆候は大きくなり、体からはみ出した分が外からは見えるというわけです」

つまり、魔力光や魔法陣が見えない魔術はあまり魔力を使っていない事を示す。

クオンテラが重くないのかとわざわざ訊ねた理由はそこにあるの

だろう。ゲイルドが大タルを両手で持ち上げた時、魔力光は出ていた。鋼が片手で持ち上げた時は魔力光が全て体内に収まっていた。使っている魔力だけで考えればゲイルドより少ないはずなのだ。

よってゲイルドの術式は、鋼のものよりずっと無駄が多いのだと分かる。

なにやらゲイルドに睨まれているような感じがするが、そちらは見ずに鋼は日向達のもとへ戻った。

百人余りの生徒達はだまかに三つにグループに分けられた。

体内の魔力を自覚するところから始める必要がある大半の素人はグループ1。

魔力の感覚が身についてきて、次はとうとう魔術に挑戦、という初心者はグループ2。これには魔術基礎の授業で覚えの早かった日本人も早速混じっている。

そして鋼達、既に魔術の行使が可能な生徒がグループ3だ。

「ふんぬっ！」

妙な掛け声と共に大タルを持ち上げた省吾が、体を震わせながらすぐに地面に置き直した。

おお、という感嘆の声が見ていた者達の中から上がる。今のところこの大タルは、持ち上げられない生徒のほうが多い。

近くで見ていた鋼達の方へ省吾が歩いてきて、一言。

「あれ片手で持ち上げれるとか自分おかしいやろ……」

「あー、まあ。《身体強化》は俺の一番得意な魔術だしな」

「ハセガワ君」

クオンテラに呼ばれ、省吾は「はいはい！」と素早く返事をしてそちらへ行った。傍から見ているだけで色々と分かるらしいクオンテラが、魔力光の勢いが一定していない等々、今の魔術行使についてアドバイスを授けていた。

「あの眼鏡に分析能力でもあんのかね？」

「あるんじゃないでしょうか。あくまで補助的なもので、あれを使えば誰でも見えるという物でも無いと思いますけど……」

打てば響くように、鋼が疑問を口にすればすぐに凜から返答が来た。

クオンテラが微弱な魔術を常に使用しているというのは、魔力活性化の気配でなんとなく鋼にも分かるのだが。じっと見てみるがただの片眼鏡にしか見えない。そのうちアドバイスが終わり、省吾がこちらへ戻ってくる。

「次はカガミさん、やってみなさい」

現在三つに分けられたグループに対し、教師陣もそれぞれ分かれて個別に授業が行われている。グループ3では実力テストのようなものの真っ最中だ。呼ばれた順に前に出て行き、それぞれ《身体強化》の腕前を披露するのである。

クオンテラの観察の視線に晒されながら、まず中タルを持ち上げる。これがキツイなら小タルに、楽々クリアした者は希望者だけ更に大タルに挑戦するという形式が繰り返されていた。

「それじゃ、行ってくるね！」

ぐつと拳を握り締め、呼ばれた日向が省吾と入れ替わりに歩いていく。

意気揚々とタルに向かう小さな女子はそれだけで周囲の微笑まじさを誘う。日向の小さな体なら、余裕ですっぽりと大タルの中に納まるだろう。

「各務ちゃん強化魔術はどうなん？」

「得意だぞ。大タルくらい余裕じゃねえか？」

「え、ホンマに！？ 意外すぎて想像つかんわあ」

鋼と省吾の会話が耳に入ったらしく、やや離れた位置にいたゲイルドがぼそりと呟いた。

「無理だろ」

鋼が片手で持ち上げた事に対する負け惜しみからきた、単なる呟きだ。日向のお気楽な様子と非力そうな体を見れば根拠の無い断定

とも言えないか。とにかく見れば分かる事なのだから、鋼も特に反
応せず聞き流す。

しかし当の本人である日向がそれを聞きとがめ、びしりとゲイル
ドを指差した。

「言っただな！？ それは遠まわしに、私がチビだと？」

「いや、そうは言っていないけど……」

「私も鋼ほどじゃないけど《身体強化》は得意だもんね。見てなさ
い、私が華麗に持ち上げるところを！」

びしつと言ってもゲイルドは怒るところか、少し困ったような顔
で頷くだけだ。鋼が日向を羨ましいと思うのがこだった。言いた
い事は言っても相手を怒らせない、からつとした空気が日向にはあ
る。

そして日向はいきなり大タルの前へと立った。宣言した手前、い
きなりこの一番重いタルを華麗に持ち上げようというらしい。

「先生！ こつちからやらせて下さい！ インパクト重視で！」

「インパクト、という単語は分かりませんが……。いきなりそれを
持ち上げるのはお勧めできません。かなりの重さです、腰を痛める
危険もありますからね」

「ちゃんと全身強化しますから！」

それならそう危険な事も起きないと判断したのか、クオンテラは
黙考の末頷いた。

「……いいでしょう。得意だと言うのなら、そちらからやってみな
さい。けれど絶対に無茶はしないように」

「……えっと、そこまで重いんですか？」

「今更ね。その大樽だと、確か二ホンの単位では80キログラムほ
どあるんじゃないかなかったかしら」

「はちじゅ……っ!？」

どよめきはむしろ外野、他のグループの生徒達から上がった。聞
いていたらしい。そりゃあまあ、日本の常識で考えれば日向みたい
な少女が扱うには無理がある重さではあるが。

日向はすーっと大きく息を吸って、うし、と気合の声を出す。「
今から持ち上げます！」と宣言し、取っ手に自分の手をかけた。
そこで停止する。

小柄な少女が重量物を持ち上げる絵を期待して、他のグループからもかなりの視線を集めていたようだが、見物人達は揃って首を傾げた。何故持ち上げようとする様子もないのかと。

「……おつきくて持ちにくい！」

日向が叫んだその理由に、そこから吹き出すのを堪えた小さな笑い声が上がった。なるほど確かに、日向の身長では取っ手を掴んでそこから上に、とはやり辛そうだった。生暖かくなつた空気にぶんすか怒りを見せながら、日向はしゃがんでタルの下に手をかけた。必然的にその下からの持ち上げ方は、両手を使う。

「《身体強化》！」

日向の全身、そして特に両腕から白い魔力光が溢れ出た。皆が感嘆の声をあげる中、鋼は思わず眉をひそめる。

強化に魔力を注ぎ過ぎている。あれだと片手で十分だ。

そうして次の瞬間には、懸念通りの事が起きた。

「うりゃっ！」

あっ」

勢いよく大タルを持ち上げようとして、それが日向の手からすっぽ抜けたのだ。

日向の後ろ上空へ向け、高さにして五、六メートルは飛び上がる大タル。誰かの悲鳴があがった。

あれはまずい。人に当たる可能性がある。

「私が」

聞き慣れたささやき声。

半ば反射的に《身体強化》で飛び出そうとした鋼の隣で、凜が発した一言である。

私が行きます。

凜が言わんとする事を正しく読み取り、踏みとどまった鋼は彼女に任せた。台詞を最後まで続けるのすら惜しみ、一瞬で魔術を編んだ凜が風のような勢いでその場を飛び出していく。

先日の事件の際より更に速い、圧倒的高速。移動した周囲には旋風すら巻き起こり、生徒達の間を吹き荒れる。

そのスピードの秘密は凜の両足下に出現している小さな魔法陣にある。彼女は今、《身体強化》以外にもう一種類の魔術を同時に使っているのだ。

彼女が最も得意とする《圧風》の魔術。

両足にそれぞれ与えられた風圧の後押しが肉体の強化に上乘せされ、信じられないような速度へ昇華されているのだ。しかも確か、凜のこの移動時には空気抵抗を減らすための《圧風》も併用しているはず。それと両足の分で、《圧風》を三重に同時発動させているのだ。

空中に投げ出された大タルに凜が追いつくのに、一秒すらも必要としなかった。

取っ手を掴み、肩に担ぎ上げる。そのまま風を操り勢いを殺しながら、ふわりと凜は地面に降り立った。

「こんのアホ日向！ 最初から手加減なしでやる奴があるか！」

「じじじじめんさい！ あんなすばつといくとは思わなくて……！」

「80キロ言われて重いように思えたのか知らんが、実際は大柄な男よりちよい重いくらいだぞ！？ お前人間くらい片手で投げ飛ばせるだろうが！ なのに出力だけ上げた雑な術式組みやがって」

しゅんと頂垂れる日向に鋼ががみがみと叱っていると、大タルを担いだ凜がとことこと戻ってきた。

片手でそれを元あった位置にそつと置き直し、おずおずと鋼に声をかける。

「あの、コウ。もうそのへんで……」

言われて初めて他に意識がいく。

校庭に集められた人間は、三人以外完全に動きを止めていた。他のグループも、教師も助手も、例外なく。

注目の的になっていている事に気付き、叱っていた口を閉じた鋼は気まずげに一つ咳払いした。痛いほどの静寂の中、日向の肩を少しつつく。はっとした日向が生徒達を順繰りに見て、クオンテラに向き直り、ぺこりと頭を下げた。

「すみません！ かんっぜん不注意でした！ 次から気を付けます！」

「え、ええ……。はい、まあ、大事には至らなかったわけですし、反省もしているようですので……」

しきりに片眼鏡の位置を直しながら、クオンテラが動揺を隠せない声で頷いた。それで余計に、空気がなんとも微妙な感じになったまま戻らないという状況になっていた。

あれだけ皆が重そうに持ち上げていた80キロの重量物を、日向が軽々投げてしまったのを驚かれているのだとは分かる。だがここまで呆然と驚かれあまつさえ教師にすら絶句されているのには、鋼も戸惑いを覚える。

「こほんっ、それではええと、次の人、前に来てもらいましょうか」
雰囲気を立て直すようにクオンテラが先程の続きを開始し、それに伴い鋼と日向と凜の三人は、タルから離れて省吾の傍に連れ戻って戻った。他の教師や助手達もぎこちなく本来の授業に戻り、そうして表面上は何事も無かったかのように済まされた。

「まあ日向、次からは気をつけるよ？」

「うん、ごめん……。ルウちゃんもありがとね。タル拾ってくれて」「はい。でも私かコウが動かなくても、きっとヒナちゃんはタルが落ちる前に自分で追いついて回収できたと思いますよ？」

「ううん。本気で走っても、あのタイミングだと間に合わなかったかも。誰かに怪我させなくてほんとに良かったあ……」

「ま、あのまま落ちて誰にも当たらずさそうなコースだったから安心しろ。さすがに飛んでった瞬間は俺も着地地点が分からず焦った

が

安堵し笑いあう三人を見て、省吾が疲れたようにぼつりと呟く。

「どっからツッコミ入れてええんか分からん……」

グループ3の生徒のうち、大タルの持ち上げに成功したのは19人中7人。

その内、大タルをつい投げ飛ばしてしまうという前代未聞のアクシデントを起こした生徒は除くとして、両手を使わずそれをなした生徒はたったの二人しかいなかった。

鋼と凜である。

『同じ場所に落ちたらしい帰還者三人組はなんかヤバイ』という噂が、この授業をきっかけに新入生達の間で広まっていく事になるのはある意味当然だった。

14 都市の抱える闇

「なんていうか、すごかったわね……」

一回目の魔術実技の授業が終わり。

有坂伊織は、そろそろ顔を合わせるのも慣れてきた面子の二人である長谷川と片平に合流していた。

「ほんまになあ……」

主語を抜かしたって、互いに何を話題にしているかは通じていた。この場にはいない帰還者三人組、鋼・日向・凜の事だ。

あの三人は授業終了と同時に、クオンテラ教師に呼び出されて一緒にどこかへ行ってしまった。

「さすが、ばんばんモンスターと戦った事があるだけありますよね！ 日向ちゃんとかあんなにちっちゃいのに、80キロのタルをぽーんと投げちゃうし！」

最近より仲良くなってきたようで、日向だけは下の名前で呼ぶようになっていて片平が興奮した様子でまくし立てた。伊織はちらりと教師の助手達を見やる。授業で使ったタルを片付け始めている助手達は、大タルを二人がかりで重たそうに運搬しているところだった。

「ねえ長谷川君。すごい納得いかないんだけど、あのタルってやっぱり魔術で強化しても相当重いのよね？」

「メツチャ重かったで？ わいも抱えるのが精々で、一人で運べ言われたらかなりキツイかなあ」

「他の魔術使える生徒が皆初心者なだけなのか、あの三人が異常に魔術が上手いのか、よく分かんないわね」

「そりゃあ習いに来てる身やし、わい含めてほとんど初心者やと思っけど。あの先生の驚き方見る限り、鋼ら三人もかなりすごいんち

やうかな。鋼と各務ちゃんは強化得意ゆつつたけど、村井ちゃん
でさえあっさり片手で担いでたもんなー」

「力もそうだけど……、私的には」

「ん？」

「……なんでもないわ」

言いかけた言葉を首を振って呑み込む。怪力より、何より。伊織
が一番驚愕したのは、大タルを回収する際の凜が見せたスピードだ。
街中で魔術を撃たれた時見た動きより、相当に速かった。物凄く
大雑把な推測だが、時速100キロは恐らく超えていた。

あんな速度が果たして人間に出せていいのか。

言葉を飾らず言ってしまうえば、伊織は畏怖の感情を抱いている。

伊織の実家は剣の道場である。

実戦的な剣術を教える風変わりな道場だ。代々続く由緒正しい古
くからの流派らしいが時代にそぐわず廃れる一方で、門下生はたつ
た数人。悲しい事だが、時代に取り残された消え行く運命にある道
場だと伊織も感じている。

伊織はその道場で祖父直々に剣術の教えを受けて育った。強制さ
れた訳ではなく、自ら望んで剣の道にのめり込んだ。

どの門下生よりも熱意に満ちた伊織を見て、これでお前が男児だ
ったら、としみじみ言われる事数知れず。中学時代は剣道部に所属
し、そちらでは全国大会へ出場し準優勝にまで食い込んだ。まだま
だ未熟なる身だが、伊織は生き方からして常々『剣士』でありたい
と願う、かなり稀有だろう女子高生だ。

その剣士としての感覚が告げていた。

凜にあの速度で斬りかかってこられたら、対応できまいと。

ここまで強く、勝てないと感じたのはいつ以来の事だろう？

伊織は我知らず口元に笑みを浮かべる。

「……私も頑張らないとね」

「魔術の勉強？」

「色々。そりゃああの三人、ルデス山脈ってところで生き残ったんだもんね。追いつくにはこっちもかなり頑張らないと」

この時伊織は迂闊にも、つい口を滑らせてその地名を出してしまった。すぐ後ろに声をかけてこようとしていた真紀がいたのにも気付かずに。

「ルデス山脈？ それってリンリン達がこっちの世界来た時に落ちたところ？」

「っ！ ま、真紀アンタいたの!？」

「いたよー。なんでいおりんそんな驚いてるの？」

振り向けば伊織のルームメイトが、きょとんとした顔で立っている。鋼にあまり言いふらしてくれるなよ的な言い方を以前されているので、例え日本人でも他の人に漏らすつもりは無かったというのに。己の迂闊さに顔をしかめ、伊織は手を合わせて頼み込んだ。

「ごめん真紀、聞かなかった事にして！ 神谷君達を助けてくれた恩人が住んでる場所らしいんだけど、その人のためになるべく秘密にしといてって神谷君に頼まれてたのよ。私もあんまり事情は分からないけど」

「ふうん？ よく分かんないけどいいよー」

「お願いね。なんかアンタ、私より更にぼろっと言っちゃいそうでちよっと心配だけど……」

「いおりんヒドイ！ 任しといてよ、絶対言いふらしたりしないからさー！」

「ええと、やっぱり授業中のアレっすか？ こいつがタルを投げ飛ばした件で」

「それもあります……。改めて叱りつけようというのではありま

せん。少し、あなた達は常識外れなところがあるようですから……」
頭痛をこらえるような表情で、鋼達を準備室のような場所へ連れてきたクオンテラが歯切れ悪く言う。

「常識外れ？」

「《身体強化》の精度の高さを見れば、的外れな表現では無いでしょう。問題児、というわけでは無いにせよ、あなた達はやや、その…… 個性的な生徒のようですから。教師として指導するにあたり、少し話をしたいと思っただけです。生徒の人となりを把握するための面談程度に思ってくればいいわ」

個性的、という部分に頑張つて言葉を選んでくれた感が見て取れる。はあ、と気の無い頷きを返して、勧められるままに室内のソファーに鋼は腰を下ろす。

その向かいにも空いているソファーはあつたが、凜はいそいそと鋼の右隣に腰を落ち着けた。日向はきよとんと首を傾げてから、少し遅れて鋼の左隣に座る。

準備室とはいつてもクオンテラに割り当てられた部屋のように、来客に備えた設備がちゃんとある。部屋の配置的に、奥にクオンテラのデスク、やや手前に左右に向かい合う一組のソファーがあつて、三人が詰めて同じソファーに座る必要は無さそうなのだが。まあいいか、と鋼は気にせず済ませた。

「……」

肩が触れるような距離で平然と座る三人を見てクオンテラがまた難しい顔をするが、諦めたようにため息をつき、鋼達の向かいのソファーまで移動してきた。

「あなた達は仲が良いようね」

「はい！」「まあ、それなりに」

前者が日向、後者が鋼の返答である。凜はただ無言でこくりと頷いていた。

「三人揃つてこちらの世界へ迷い込んだ事があるようだから、そういう理由もあるのでしょうか。私達はそういった二ホンの人を『迷

い子』と呼ぶけれど、あなた達は『帰還者』と呼ぶのだとか。以前こちらの世界で、あなた達は皆同じ人から魔術を？」

「そうっすよ。山に住んでる人嫌いの魔術師です。迷惑がかかるかなと思っただんで、名前は伏せさせてもらってますが」

「よほど腕の良い術師なのでしょうね。あなた達三人の《身体強化》の精度は、初心者ノ域を逸脱しているわ。私は強化の適性がさほど高い方ではないですから、正直に言えば《身体強化》に関しては、私からこれ以上教えられる事が無いくらいよ」

それほどか。

薄々気付き始めていた事だが、鋼達は一般的な視点では中々に高いレベルにいるようだ。鋼が持つ魔術でその領域に達しているのはせいぜい強化くらいだから、学園で習う意味はもちろん十分以上にあるが。

「しばらく授業では《身体強化》を扱おうと思っていたのだけれど。あなた達に関しては、先に次の魔術に進んでもらってもいいかもしれないわ。あなた達は他にどのような魔術を使えるのかしら？」

誰から答えたものか、鋼達は顔を見合わせる。代表して一番手は鋼が言う。

「俺の場合はせいぜい《身体強化》くらいっす。それだけ極端に適性が高いつて師匠にも言われてました」

「え、鋼他にも使えるじゃん」

「使えるだけで、学校で習う必要が無いってレベルに達してるの、それくらいだろう」

「あ、そっか」

口を出してきた日向が納得し、「次は私の魔術かな」と続いて口を開いた。それにクオンテラは手をあげてストップをかける。

「いえ、ちよつと待ちなさい。カミヤ君、学校で習う必要が無い魔術がいくつもあるなどと、いくらなんでも思っています。使える魔術であればいいから教えてくれるかしら」

「色々ありますが……、えっと、もしかして全部っすか？」

「ええ、もちろん」

と、言われても。ただ使えるだけでいいのなら、結構な数になっ
てしまうのだが……。

面倒な、と少し思ってしまったが。自分の魔術の可能性を最近模
索しようと思ったばかりなので、見直すのにこれはいい機会だろう。
「ええと、まず。《熾火》^{おきび}と《火矢》、《冷却》に《電撃》、《圧
風》と《魔弾》。《隐身》、《無音》、《障壁》、《防熱》、《防
電》、《暗視》、《望遠》、《念話》、……あと何があったっけな
」《消毒》とか？」

「おお、それ忘れてたわ。《消毒》と《解毒》。まだあったな。《
照明》、《火炎》、《穿風》、他は……《薬物生成》も一応」

「ちょ、ちよつと待ちなさい!!」

クオンテラが目を見開いてすごい勢いで制止の声をあげる。

「あなた、今言った魔術全て使えるの!? 本当に?」

「ええと、いや、ほんとにただ使えるだけってのも含めてますが」
「どういう適性してるの……」

「他が並で《身体強化》だけは高い、て感じじゃ?」

「普通はそこまで節操無く、違う系統の魔術は扱えません。いえ、
努力で覆せる部分も多くありますし、それなりの魔術師であればそ
のように修練している事もありますが……、間違っても初心者とは
言えないでしょうね。その年齢で全く、非常識な……」

非常識らしい。

魔力の塊をただ放出する、という二ーに言わせれば『魔術じや
ない』攻撃手段も、強化と並んで鋼は得意としているのだが。これ
以上何を言われるかも分からないので黙っておく。

「魔術師は本人が使えなくとも、理論だけは他者に教えられるよう
勉強しているものですが……。もしかすると、あなた達の師匠もそ
れだけ多彩な魔術を扱えるのかしら。あなた達を見るにその方は《
身体強化》も相当得意なのでしょうし」

「え、いや。あんまし上手くなかったっすよ。五人いた弟子の誰よ

りも、師匠が一番下手でしたね」

「……」

顔に手を当てて俯いてしまうクオンテラ。「話をすればするほど訳が分からなくなってくわ……」と小さな嘆きが聞こえてくる。

「いや俺の適性がやっぱり高いつて事みたいで。強化に関しては、教えられてから割とすぐに師匠より俺のが上手くなったんで、それ以降他の奴らには俺が教えたっただけです。むしろ師匠にも教えたくらいです」

「……よく、分かりました。あなたが非常識だという事は」

「そっちかい」

つい鋼は敬語を忘れた。クオンテラも普通にスルーしたが。

根掘り葉掘り聞くのもどうかと思っただのか、それ以後彼女はそれほど詮索してこなかった。

他には日向と凜の得意分野を訊いてきた程度で、数分で面談は終わり鋼達は解放された。そして次の授業からは、鋼達三人は《身体強化》以外の魔術を教えてもらえるという話に決まったようだった。

その集団は、存在を知る者からは闇傭兵ギルドと呼ばれていた。

闇、と頭についている集団が、健全な組織であるはずがない。例えば冒険者・傭兵仲介ギルドが各国に正式に認定されている組合組織であるのに対し、この闇傭兵ギルドは全く違う立ち位置にある。所属する者達が勝手にそう称しているだけの、実態は犯罪組織そのものであった。

活気溢れる新しい都市であるパルミナであっても、その暗部と呼ぶべき治安の悪い地区は存在している。闇傭兵ギルドはそういう場所、密やかに根付いている。

「んで、どうすんだよ。ガキに邪魔されて失敗とあっちゃあ、ギルドの信用はガタ落ちだぜ。まさかこのまま放置してこたあ無いだろうな？」

貧民街。ろくに明かりも灯されていない、とある建物の一室にて。人相の悪い男達が、椅子・床関係なく思い思いの場所に座り、顔をつき合わせている。内三人が組織の顔役ともいえる幹部達で、後はそれぞれの部下である。

その幹部の一人、顔を縦断する大きな傷跡を持つ男が、残る幹部二人に問いかけていた。答えたのはその片方、禿頭の巨漢だ。

「へへへ、当たり前えだろ。俺たちやあ、泣く子も黙る闇傭兵ギルドだぜい！？ 邪魔してくるなら、ガキだろうが二ホン人だろうがぶっ潰すまでよ！」

粗野で野太い声で、巨漢はげへへと下品に笑う。そこにもう一人の幹部、髭をたたえた遊び人めいた風貌の中年の男が口を挟んだ。

「ナメられちゃあ商売あがったり。その理屈は分かるがね……」

この場においては最も清潔な身なりの、帝国系移民らしき黒髪その男は、大仰な身振りで額に手を当てた。

「騎士学校の生徒というだけでも厄介だが、おまけに二ホン人ときた。これはさすがに、手を出すのはまずいんじゃないかね。他からの移民とは訳が違う。王国は二ホン人相手には非常に慎重な交流を進めている。国に本格的に目をつけられれば、我々といえどもタダでは済まない」

「ああ！？ だったらそのガキ見逃すのかよ！」

「私だったらそうするね。その二ホン人の少年は魔術に長けた騎士候補らしいし、有名な女冒険者『銀の騎士』や、貴族とも繋がりがああるかもしれないという話だ。今更もう金にもならんのに、手を出すのはリスクが大きいのではないかな。その少年にやられたという君のこの傭兵も、せいぜい気を失わされた程度なのだろう？」

だん、と巨漢はすぐ傍にあった木箱を叩いた。

「メンツつてもんがあるだろうがよ！ オルタム、てめえタマついてんのか！？」

「おいおい、『タマついてる』奴がみんな君みたいだったら、我々はいまだに洞窟に住み獣を狩る生活をしてただろうな。野蛮人には少し、難しい話題だったのは認めるがね」

「ああ？」

売り言葉に買い言葉。巨漢の男から殺気が膨れ上がる。

室内が一触即発の空気に包まれ、組織の顔役三人の会合を見守っていた部下達の間には動揺が走った。

その緊張感の中、どうしてもよさげに口を開いたのは顔に傷跡を持つ男だった。

「アホらしい。仲間割れすんなら勝手にやってくれ。俺は帰るから勝ったほうがまた呼びに来い」

「いやいや、待ってくれたまえよ。ただの、そう、場の勢いというものだ。身内同士で争ったところで得をするのは、君のような様子見を決め込んだ第三者だけだと、我々は分かっているさ。なあラグル、さつきは言葉が過ぎた。すまんね」

「……ふん」

ラグルと呼ばれた巨漢は殺気を収め、それにより部下達はほっと胸をなでおろした。

「バート、君の意見をまだ聞いていなかったな」

「俺か？ 別になんでもいいってのが本音だ。面子は大事、金にならない事はしない、どっちも納得できる意見だわな」

「それならこう訊こうか。君自身の判断に全てが任されたなら、君ならどうする？」

質問を変えた黒髪の髭男オルタムに、気乗りしなさそうに考え込む傷跡の男バート。このバートという男がかつて死線をくぐり抜けている実力者なのは闇傭兵ギルドではそれなりに知られた話である。幹部であっても組織の運営にあまり口は出さず、組織の『用心棒』を自称するこの男の事は、オルタムもラグルもそれなりに一目置い

ている。

「そうだな、俺なら」

バートは語る。この件について、自分ならどう処置するかを。

オルタムも、血の気の多いラゲルでさえも途中口を挟む事なく、
ほう、と話に聞き入った。

それは部屋にいる人間達を納得させる妥当な措置であり、それなりに妙案と言えるものだった。

こうして、非合法的な依頼を金次第で引き受ける犯罪組織『闇傭兵ギルド』のこの件に関する方針が、人知れず密やかに決定される。

一般人の与り知らぬところで、都市の暗部は今日も平常通り、蠢いていた。

15 剣術実技の授業

ガンサリツトの後を追ひ、その酒場へ突入した時。

シンドが目にしたのは倒れ伏す男達と、遠巻きに怯えたように見守る人相の悪い客達、そしてその中心にいる、先程見失った騎士学校の男子生徒だった。

「これは……、お前がやったのか？」

問いかけるまでも無かった。状況が、この場の他の男達の表情が、ここで何があつたかを雄弁に物語っていた。

だというのにぬけぬけと、平然と、今来たところだとカミヤは言い放った。この状況に気後れも何も感じていない様子だった。隠す気すら見えない分かりきった嘘だと、シンドはこの時点で断定していた。

この男子生徒の態度は『どれだけ嘘だと思えても納得しておいたほうが、この場を収めるのも容易いですよ』とこちらに訴えている。それをシンドは大人を侮る子供特有の増長だと受け取った。そのまま話に乗っかり、なあなあで済ます性格はしていない。

だから殺気に近いものすらにじませて、下手な嘘はやめるとシンドはカミヤを睨みつける。

全く小揺るぎもなかった。

カミヤは涼しい顔でそれを受け止めてみせ、睨まれている事実など無いかの如く笑みすら浮かべた。

こいつは、底が知れない。

十は離れた年下の相手に、そのような感想を抱いたのは初めてだった。

同時にシンドの中で、今年度の新入生における問題児第二号が決まった瞬間でもあった。

一号は言つまでもなく、先程まで追いかけていた貴族の少年だが。

あの子の事を、シンドはふと思い返す。

椅子泥棒の子供を連れ、満月亭という店に戻り。その途中放置された店の椅子も見つけて回収し。

盗まれた椅子を返し、店員の許可を得て子供はお咎めなしで帰らせた。そしてカミヤと、ガンサリットとその護衛官と、シンドの四人で昼食を取った。

その、後の事だ。

「待てカミヤ。休み時間はまだ残っている。少し話さんか？」

学園に帰って来て、ガンサリットとその護衛官と別れたところだった。同じく去って行くこうとするカミヤをシンドは呼び止めた。

「……なんか話す事でもありましたっけ？」

「そう警戒するな。お前がしでかした事を教えてもらいたいのは確かだが、何も学長にチクろうというわけじゃない」

「こつちでも『チクる』って表現あるのか、いや、あるんですか……」

「平民が好んで使うような崩した言い回しだがな。しかしお前、いかにも不本意そうに敬語を使うな」

さほど昼休みの時間は残っていなかったため、場所を移すまでも無いだろうと前庭の片隅にカミヤを誘導する。逃げられるかと思いましたが、案外素直にシンドに従った。

「敬語はどうも……苦手です。思った事そのまま言わずに、一旦変換する手間が面倒というか」

「そんなもん慣れだ、慣れ。礼儀作法の類は身に付けておいて損は無いからな、お前のような奴は特に。将来礼儀に煩い貴族相手に、余計な敵を作りたくはないだろう？」

「そりゃまあ」

だとすれば解せない。シシドは核心に踏み込んだ。

「今回の事もそうだ。もつと穏便に解決できなかつたのか？」

椅子泥棒の子供と、その子供が逃げ込んだ先である酒場。シシドにもなんとなくだが、全体図は見えていた。満月亭に嫌がらせしていた男達が根城にしている場所をカミヤはどうにかして突き止め、単身乗り込んだのだ。

多対一の争いの跡から考えても、強化の類は得意なのだろう。喧嘩になつても負けない自信があつたから、この少年は無謀ともいえる行動に出た。その自信はいつか、カミヤ自身に手痛いしっぺ返しをくらわすだろう。

「お前はこんな事がある度に無茶をしでかすつもりか？ 街のゴロツキどもに目を付けられても構わんと？」

「んなわけありませんよ。今回はたまたま、色々なタイミングが重なつてあんな事になつただけです。それに一応言い訳しとくと正当防衛ですよ。いきなり向こうから手を出して来ました。取れる選択肢は多くなかつた」

今更否定もせず、カミヤは飄々とした態度で男達を叩きのめした事を認めた。

「お前は……。必要なく敵を作りたくはないが、作ってしまったらそれはそれでしょうがない、とでも考えてそうだな」

「多分、その通りです。俺はですね、教官。喧嘩しても絶対負けない！ なんて自信はそれほど持つちゃいないですが、どんなやばい状況になつても生き残るつて事に関しては、実はそれなりに自信があるんです。だからまあ、何かやつちまってもなんとかなるかつて気楽に考える傾向はあるかもしれせん」

それなりなんて表現しているが、相当の自信がその気楽な表情に

は見取れた。少し変わった方向の自信である。

このカミヤという男子生徒の持つ特殊な過去をシンドは思い出した。

学園の生徒の個人情報やシンドは閲覧できる立場にあり、教育者として一応目を通すくらいはしている。無論生徒全員分のそれを覚えていたわけもないが、迷い子としてソリオンの生活を経験している六人の日本人に関しての情報は、個人的な興味も手伝ってそこそこ脳裏に刻まれていた。

カミヤ、カガミ、ムライ。この三人は同じ場所に落ちた三人組だ。他の迷い子三人と比べても尚、異色の過去を持つ。魔物も住まうどこかの山に落ち、ただの一度も人里に降りて来ずに日本へ帰還しているのだ。

彼らがどこでどう過ごしたかなど、日本で確認できる手段があるとは思えない。資料に載っているのは彼らが日本へ帰った後、向こうで語った内容そのままのはずだ。その山の地名すら分かっていない話を、シンドは全く信頼できないものと見なしていた。

現実味が無いのだ。いくらなんでも。

魔物のいる山に落ちるのは確率としてあり得る事だ。そこで偶然《逆召喚》を扱える高位魔術師に出会えるのもまあ、運が良かったと片付けても良い。しかしシンドが問題視しているのはカミヤ達はこちらで過ごした期間だった。

一年。

一年である。それだけの期間を、魔物が出没する地域で街にも寄り付かず生き延びるなど。それも平和な国で過ごした、ただの少年少女が、だ。

あまりにも現実味が薄い想定だ。

こちらの世界でどう過ごしたかを明かしたくなくて、カミヤ達は嘘をついた。シンドでなくともそう結論するのは当然だろう。

生き残る事には自信がある。そう言ったのけた少年の顔を、改めてシシドは凝視する。

あり得ないと思っていたが。もしそうなら、確かに自信を抱くに足る根拠になりうる。

「……仮に、その自信に見合うだけの能力を、お前が持っていたにしても、だ。ああいった事はもうするんじゃない。あんな目立ち方をして、どこに敵を作るか分からんぞ」

「そうっすね。やむなくああしたとはいえ、次からはもっと慎重に動きます」

素直にカミヤは頷いた。その様子に、優等生の笑顔に、シシドは強く苛立った。

「本音で語れ！ 適当に取り澄ましていればやり過ぎせるとでも思っているのか？ 大人を甘く見るんじゃない」

「その大人によつては本音を出したほうが怒る事もあるんですよ。相手を怒らせないで会話するのは難しいっす」

「はぐらかすな。……お前は分かっているのか？ そりゃ敵を作っても自分なら大丈夫だと思うのは、お前の勝手だ。ゴロツキに目を付けられて、喧嘩を売られたところで本当にお前は自分でなんとか出来るのかもしれん」

だがこの少年は、自分以外の事を果たして考えているのか。シシドはそれを危惧していた。

「お前に叩きのめされた男達は、次はお前の周囲に手を出すかもしれないのだぞ？ それを本当に、分かっているのか？」

「もちろん分かっていますよ。だからこそ、です」

にっと笑って軽く言う。そのカミヤの瞳から、軽薄な色が剥がれ落ちるのをシシドは感じた。

「元々、はつきりとあの店を助けたかったわけじゃありません。迷惑な男達がいる、店に嫌がらせをしている。マルケウスじゃあるまいし、それだけで助けたいなんて思うガラじゃないですよ、俺は。

最初は……、美味しいメシが気に入ったのもあって、気まぐれみたい

なもんでした。ダチを巻き込みそうなら、すぐ手を引くつもりだった」

確かにあの店の食事は美味かった。貴族のマルケウスでさえ感嘆していたほどだ。

「そう思ってたのに、いきなり街中で魔術を撃たれましたからね。あれはさすがに予想外で。気が回らずに、ルウ　村井に、襲撃者を捕まえさせてしまったんです。あの役目は俺がやるべきだったのに」

「……男の仲間に恨まれるからか？」

「ええ。俺の気まぐれから始まったトラブルに、他の奴を巻き込むわけにはいかないでしょ？」

「お前は……」

ここまで言われれば、カミヤの意図はシンドにも分かってくる。

「次はムライが狙われるかもしれん。その可能性を潰すために、先手を打ってあの酒場で暴れたと？」

「まあ、周りを巻き込む可能性が出てきたからには積極的に関わってとっとと解決しよう、なんて思ってたくらいですが。ああなったのはほとんど成り行きですよ。でも大丈夫です。あの男達には、俺の身内の方が俺より更に強いと思ひ込ませました。派手に暴れたしなるべく偉そうに振舞ったし、次に狙われるとしても多分俺になりますよ」

絶句する。平然と語るカミヤの顔には、今度こそ嘘は無かった。

「……恨みを自分にだけ集めるために、あんな事をしたと？　お前は馬鹿なのか？」

「馬鹿とはまたひどい。本音を語って言ったのはそっちじゃないっすか。……俺は」

そこで言葉を切り、カミヤは僅かな苦笑を浮かべた。本音を口にするのは気恥ずかしいと思っているような、年相応の少年の顔だった。

「どうも、わがままみたいで。特に各務と村井。あいつらは俺にと

つてすげー大事な仲間なんです。仲間に手を出されるのも、仲間が危険かもしれない状況に置かれるのも、俺は我慢できない。危害を加える奴がいるなら許しがたい。殺しても構わないとさえ思います。……だからこうしました」

物騒な言葉を差し挟み、その瞬間だけは苛烈さを滲ませて、カミヤは語った。そこに込められた感情こそがこの少年の本質だとシシドは直感する。

「……怒ってます？」

「何がだ。怒ってなど無いが、正直呆れている」

「はは。教官はいい人ですね。まだ子供が何を調子に乗った事を、なんて怒られるかもなとか思っていました」

「お前はもつと大人を信用しろ。何もかも一人で引き受ける必要なぞ無いんだ。少しは他人に頼る事を覚えろ」

「そつつすね。俺はきつと、それが苦手なんです」

そこにふざけている気配もなく、ため息まじりにカミヤは呟く。全く。なんて面倒くさくて、ふてぶてしくて、分かりづらい生徒だろうか。

受け持つ生徒の中でも、この少年には特に手を焼かされる羽目になるだろうと、この時シシドは予感した。

数日前の回想から意識を戻したシシドは、校庭の様子に視線を移す。

整列させた生徒達はそれぞれ竹刀を手に、素振りの真つ最中だ。現在行われているのは『剣術実技』の授業である。

この授業は必修である『騎士教練』とは違い、実戦を想定したような本格的な指導を前面に押し出している。魔術師志望だけが本来選ぶのが魔術実技の授業なら、こちらは騎士志望、警備隊志望の者だけが選ぶような授業とっていい。もっとも興味本位で選んだと

思われる、相当不慣れな動きの日本人生徒を結構な数見かけるが。

聞いたところによると魔術関連のほうは日本人全員が選択しているらしく、ほぼ全員完全な素人という笑えない事態となっているようだ。そちらと比べればこちらはまだマシと言える。剣術実技を選んだ日本人は全体の六、七割程度で、運動がかなり苦手な者は選ぶのを控えているようだったから。

「素振り、やめ！」

シシドの号令と共に素振りをやめた生徒達の空気が、一気に弛緩する。

「誰が休憩にすると言った！ 私語を慎め！」

だらけたように隣の者と雑談を始める生徒に一喝。学園の現在の上級生に対しても去年思った事だが、日本人は相当気合の入った真面目な奴とやる気の感じられないふざけ半分の者に極端に二分される。

シシドもいまだによく分からない人種、それが日本人だ。教育を受けているから、自分は馬鹿な方だと思っているような生徒でもかなりの教養は備えているし、怠け者に見える生徒が案外深い知識を持っていたりするのが油断ならない。

クオンテラに聞いた話では、どういった性格の者であろうと関係なく日本人が持っているものとして、豊かな想像力が挙げられるらしい。魔術においてそれは大切なものらしく、こちらの世界の人間よりも日本人の方が魔術師に向いている者が多いそうだ。魔力に触れて育ってきたわけでは無いから、魔力に対する感覚が拙いという特徴もあるらしいが、理論などの呑み込みが総じてセイラン人よりも早いと彼女は言っていた。

その話とはもかく。

新入生達にとって、この授業は既に二回目だ。ちなみにシシドは知らないが、例えば日本の自衛隊などの訓練と比べればこちらは相対に見劣りのする、厳しいなんて言えばあちらの軍隊に失礼な授業内容である。シシドも体力作りのための走りこみなどやらせたいと

思っているのだが、そういった地味にきつい訓練は貴族受けが良くないのだ。

なので少し早い、今回の授業から生徒同士の打ち合い稽古に移る。最初の授業で素振り、最低限の騎士剣術の型、攻撃と受け流しの二種類は覚えさせていた。

「次、二人一組となつて、打ち合いをしてみよう」

攻撃の型と受け流しの型をそれぞれ分担し、一人が竹刀を打ち込みもう一人が受け流す。それを交互に繰り返す稽古だ。そのように説明し、型の練習であるので決して全力で打ち合うなど、注意事項もしつこく伝えた。

「技術申告書で剣の心得があると書いた者はこっちへ来い」

剣に限らず、武器の扱いを習った事があればそれを書いて提出する書類である。剣・槍・弓などの心得でなくとも、素手での格闘術の経験でも構わない。学園に知らせておけばそれを考慮してもらえ、内申書にも記載されたりする。

シンドの呼び声に応え、幾人もの貴族と、ほんの一握りのセイラン人平民と日本人が前へとやって来る。事前の書類でシンドも知っていたが、入学以前に剣術を嗜んでいる生徒は圧倒的に貴族が多い。我が子を騎士にという貴族の家は珍しく無いのだ。

反面セイラン人の平民も日本人も、剣の心得があると書類に書いた生徒は少ない。平民は二人、日本人では五人で、その通りの人数がシンドの前に出てきていた。

剣を習っている者は習っている同士で打ち合い稽古をさせるためにこうして少人数を分けたものの、シンドには不満があった。

「……おいカミヤ。お前もこつちだ」

「いきなり名指しかよ！」

残る生徒達の中からあがったその声の主を睨みつける。シンドが認定する新入生の問題児第二号は、視線の意味に気付き「……いきなり名指しですか」と言い直した。

「いや、意味が分かんないんですが。俺、書類に何も書いて無いっ

すよね？」

「書いてないからわざわざ別に呼んだんだ。お前、魔物との交戦経験があると言っていただろう。剣で魔物と戦った事は？」

「……そりゃまあ、剣があるのに手で殴りかかるほどアホでは無かつたんで」

「ならお前もこつちだ。申告書には習った事のある魔術以外の戦闘技能と書かれていたと思うが、人から習わなくとも実戦経験があるなら話は別だ。他の生徒も、数回以上の剣による実戦経験がある者は申告書に記載が無くても前に来い」

シンドの声かけに対しカミヤは無言のまま横を見て、二人の少女に一瞥いちべつをくれた。それで意思疎通は成立するらしく、カミヤ・カガミ・ムライの三人組は揃ってこちらへとやって来る。

他に前へ出てきた生徒は全くないかった。こちらよりかなり平和であるらしい日本の生徒は言わずもがな、セイラン人平民だつてこの年で実戦を経験しているような者なぞ普通はいない。

三人組がこちらに来る際、一声かけていた男子生徒がシンドに対して拳手をした。確かハセガワ、という迷い子の日本人だ。

「こつちにいてた時に二回くらいやったら剣で戦った事あるんですけど、わいもそつちへ行つたほうがいいですか？」

「そつちな、来てくれ」

貴族平民日本人合わせて、人数的にもそれで偶数になる。

カミヤ達三人が加わつたところにハセガワも合流し、日本人は九人になつた。申告書で剣の心得があると書いた元いた五人の内、一人の女子生徒がカミヤ達に話しかける。

「結局いつものメンバーになつたわね。この授業取つてない片平さんは抜いてるけど」

「片平以外、全員経験者とは暴力的な面子だな」

「ちよつと神谷君、その括りに私も入れられるの納得いかないんだけど！ 私実戦経験なんて無いし、中学が剣道部だつたつてだけよ」

「わいもほとんど実戦経験なんてゆえやんレベルのもんやしな！」

正直ほぼ素人やで」

女子生徒は確かアリサカという生徒だ。彼女とハセガワは、カミヤ三人組と仲が良いらしい。

「私語を慎め。まずは経験者のお前達から打ち合い稽古してもらい、他の生徒達の見本になつてもらおう。……そうだな。ガンサリット、手伝つてくれ。そこから竹刀を取つて、俺の前に立て」

「はっ、了解しました！」

経験者メンバーの貴族の一人、マルケウスニル・ガンサリットが勢い良く返事をする。ガンサリット家は貴族の中でも騎士の名門だ。彼はシンドにとつての問題児第一号ではあるが、本人の気質は真面目なのでこういう時には頼りに出来る。

「見本の見本だ。ガンサリット、前回の授業でやった攻撃の型で打つて来い。俺が受け流して、次は逆だ」

「了解しました」

授業の助手が準備していた竹刀の束から一本抜き出し、ガンサリットはこちらを向いて掲げる。シンドも竹刀を持ち構える。

別段、特筆すべき事も無い。ガンサリットが決められた軌道の攻撃の型で竹刀を振り下ろし、シンドは横に流すように弾く。その次は互いの型を入れ替え、同じようにする。そうして簡単に実演してみせてから、経験者の生徒達に振り返る。

「これを二人一組で行う。何か質問は？」

「教官」

そこで手を挙げたのはガンサリットで、シンドは少し意表を突かれた。

「組む相手は自由に決めて構わないのですか」

「ああ。生徒同士適当に決めてくれて構わん。両者の技能に大きな差があれば、こちらから他の者との入れ替えを指示する」

「分かりました」

ガンサリットは頷くが、恐らくは貴族・平民・日本人で分かれるだろうとシンドは予想していた。そうになると一人ずつ貴族と日本人

が余る事になるので、一組はそういった組み合わせになるだろう。なるべくなら、そのペアの日本人は余計なトラブルを避けるためにも、礼儀正しい者をあてがいたいが。シシドとして思うところはそれくらいで、後の組み合わせはなんでもいい。

貴族のグループから外れ、日本人達の元へガンサリットは歩み寄る。そして口を開いた。

「カミヤ。僕の相手を頼みたい」

その発言は身分問わず、この場にいた者達を少しばかり驚かせた。

16 剣術実技の授業・続

「なんで俺？ 別に誰が相手だろうとそう変わらんだろ？」

打ち合い稽古の相手をして欲しいと言ってきたマルケウスに、鋼は純粋な疑問を返す。

「いや、お前と打ち合ってみたいと思ったただけなのだが」

貴族は貴族同士で組んだらどうよ？ というのが正直なところだ。それが普通である証拠に、マルケウス以外の貴族達も意外そうな様子である。そこで鋼は気付いたが、貴族達の人数は奇数だった。

「あー、身分ごとに分けても貴族と日本人はどうせ一人ずつ余るのか。まあ別に俺はなんでもいいが」

「なら決まりだな」

……何故こうも最近、名指しされるのが多いのか。マルケウスと組むのはいいが、これだけは聞いておかねばなるまい。

「なあ。なんでわざわざ俺なんだ？」

「噂が本当なのか、気になってな」

「噂？」

うむと頷き、熱血貴族少年は結構衝撃的な発言を放った。

「生徒の間で流れる噂を耳にしてな。お前が亜竜山脈から生還した迷い子だと」

「真紀の奴めえええ！！」

有坂が小声で叫ぶという器用な事をしながら毒づく。省吾・有坂・片平にしかルデス山脈の話はしていないのを考えれば、どこから漏れた話なのかそれでだいたい察しがついた。

校庭の空気が少し静まる。

剣の心得がある経験者メンバーの内、噂を知っていた者は固唾を呑んで見守り、知らなかった者は大いに驚きを露わにしている。そういう感じの場の空気だった。亜竜山脈とは何なのかよく知らない日本人は周囲の雰囲気の変化に戸惑っているようだったが。

「どうなんだ？ その噂は本当なのか？」

「お前はそれ、信じたのか？」

「信じがたい噂なのは確かだ。それで直接こうして訊いている」

疑うような視線でもなく、感嘆する様子でもなく。マルケウスはいつも通りのいかにも真面目くさった表情だった。

「いや、まあ。ルデスの事は別に何が何でも隠したい、とかでもなし。拜むようなジェスチャーで謝ってくる有坂に気にするなと苦笑を送り、マルケウスに正直に告げる。」

「……まあ、多分そこに落ちたっばい」

「多分とはどういう事だ」

「いや、どつかの街からその名前の山に行つたとかじゃねえからな。こつちの世界に落ちていきなり山の中で、地名とかあんま気にしてなかった。気にする余裕もあんま無かつたしな」

さすがにマルケウスも同情するように顔をしかめた。

「それはまた……、なんとというか、ひどい話だな」

あまり考えたくないが、人里離れた場所に落ちてしまい人知れず命を落としている日本人もどこかにいるだろう。帰還できた鋼達はそれでも運に恵まれたほうと言える。

そこで話を聞いていた、周囲にいた男子生徒の一人が揶揄するように口を挟んだ。知らない奴だが多分貴族だ。

「おいおい、それならその辺りの山だったかもしれないじゃないか」「かもな」

鋼が認めると拍子抜けしたようにその男子は口を噤む。

噂がもう広まってしまっているなら、これからもこういう面倒そうな性格の貴族が難癖つけてきたりするのだろうか。そっとしておいて欲しいのだが。

「雑談は後にしろ！」
シシドの怒声に尻を蹴飛ばされ、生徒達は慌てて竹刀を握るのだった。

マルケウスがそれを提案してきたのは、打ち合い稽古が一段落ついた頃だった。

「カミヤ。僕と試合をしないか」

「試合？ 剣のか」

「他に何がある」

そのやり取りに周りの生徒の注目が集まる。シシドが眉をひそめて近づいてきた。

「勝手な事をするなガンサリット」

「もちろん許可を取るつもりでいました。教官、カミヤと試合をさせて下さい」

そんなものすぐ却下されるだろう。鋼は気楽な気持ちで構えていたが、予想に反してシシドは考える素振りを見せた。

それどころかこちらの様子を見て、試合なんて面倒くさいという考えを読み取ったかのようににやりと笑った、気がした。実際はそんな表情など浮かべていないのだが、なんとなくそう思えたのだ。

「……危険だと判断したら制止する。俺が声をあげたら絶対にそこで止めると約束するなら、構わん」

「ちよ、教官止めてくれないんすか!？」

「素振りや型の稽古だけでも思っていたのか？ これは実技の授業だぞ。遅かれ早かれ、いずれはどの生徒も試合くらいさせる」

「いやいや、ちょっと早くないですか？ 俺なんか自己流もいいとこというか、ちゃんとした構えもまだよく分かってない半分素人っすよ？ いきなり試合とか」

「こぼっ」

鋼が言い募る最中、不意に咳き込むような息の音。

発生源は俯いた凜の口からだ。それは思わず噴き出してしまった、

という反応で、鋼が怪訝な面持ちで見やると凜は弁解しだした。

「いえその、冗談にしてもひどいじゃないですか。コウが半分素人って、いくらなんでも無理が……」

「ほう。中々期待できそうな相手らしいな、カミヤ」

マルケウスが目を光らせて鋼を睨み、これはもう避けられない流れなのかなと周りを見てみる。

「亜竜山脈からの生還者とは俺も初めて聞く話だが、それが本当ならガンサリットの相手も務まるだろう。ああ、知らないだろうから言っておくが、ガンサリット家は騎士を輩出する名門だ」

相手も務まるだとか太鼓判を押すような言い方をしながらも、シドがやや皮肉げにトドメを差してくる。もしかやルデスの事を秘密にしていた鋼に対する意趣返しもあるのだろうか？

「ああもう！ 分かりましたよやればいいんでしょやれば」

「言つまでも無い事だが、魔術は絶対に使つなよ。強化もだ。取り返しのつかん怪我になりかねんからな。頭を狙うのも絶対にやめろ」

「そりゃまあ、そうっすよね」

そういうわけで、鋼はマルケウスと試合をする事になった。

「ついに神谷君の実力を見れる時が来たわね」

どことなくはしゃいだ声で伊織が言うのが少しおかしかった。釣られるように日向も笑みをこぼす。

「鋼の実力が気になるの？」

「そりゃあそうよ。各務さんと村井さんもそうだけどき、魔物の山を生き抜いて強くなった、みたいなのは物語の主人公とかじゃある意味定番とも言えるしね。村井さんは魔術すごかったし、神谷君もやっぱり只者じゃないのかな、ってつい期待しちゃうというか」

日向達はシドのほぼ真後ろに位置取り、竹刀を持って向かい合

う鋼とマルケウスを見守っていた。他の生徒達も全員がギャラリ―だ。

「今日は無理だが、その内生徒全員にこのような試合をしてもらう事になる。よく見ておけよ」

教官に言われるまでもなく、生徒のほとんど全員が興味津津なようだった。視線の渦の中心で、対峙する二人がそれぞれに構える。防具さえも着けていないけど、こっちの世界ではこれが普通なんだろうか。

「二人とも、準備はいいな？ 可能なら当てる直前に寸止めしろ。それでは、始め！」

審判を務めるシンドの合図と共に、鋼とマルケウスの両者がゆっくりと動き出した。

お互いに向かうのではなく、様子を見るように横に動きあい、向き合ったまま円を描く。緊張感が高まり、観戦する生徒達はひそひそと声をひそめて隣の生徒と勝負の行方についてささやき合う。

「なあなあ、どっちが勝つと思う？」

鋼達から視線を外さずに、省吾がそう訊いてきた。

「ん？ 鋼じゃないかな」

「コウでしようね」

日向、そして凜は決まりきった回答を返した。相手の貴族を侮辱するわけでは無いのだけど。鋼の勝利を確信しているのに「どっちだろうね？」なんて返すのも、ちょっとどうかと思ったのだ。

「へー、二人とも即答なんだ。信頼されてるわねー、神谷君」

「でも相手も騎士の名門とかゆってたやん。あの男子だって強いんじゃないん？」

「うーん。きつと強いんだろうけどさ、鋼に勝てるとか、ちょっと考えづらいというか……」

日向が思うところを正直に吐露した時、状況が動いた。

痺れを切らしたようにマルケウスが強く一步を踏み込む。日向も「おお！」と思うくらい、鋭い突きが放たれた。

鋼が自らの竹刀でそれを弾く。攻撃を横に逸らされたマルケウスは、隙など見せないとはかりに素早く後ろへ下がるのだが、鋼がそれを追いかけた。こちらも鋭く振るわれた追撃はしかし竹刀で受け止められてしまう。ばしん、という小気味良い音が響いた。

更に鋼が攻勢に出る。縦横斜め、突きに払いと、様々な斬り方で攻めまくる。

しかし騎士貴族は、冷静に一つ一つに対処してゆく。大きな余裕があるわけではないけど、防御で手一杯、という風にも見えない。防御を切り崩せない鋼はより大胆に攻め始める。それはつまり、よりリスクを背負う選択でもあった。

急接近して竹刀を振り上げ、辛くも避けてみせたマルケウスに次は横への薙ぎ払い。ここで一連の流れががらりと変わる。下から上へと、鋼の竹刀が弾かれたのだ。

がら空きになった胴へ、痛烈なカウンターが放たれる。

少しでもこういう試合を見慣れている人なら、ここでもう勝負は決まったと思っただろう。

鋼は避けた。ぎりぎりの間合いで相手の竹刀が通過していく。教官が試合をここで止めるか見極めるために、特に集中して目を光らせているのが分かった。

鋼は体勢を崩したまま完全には立て直せず、次々と攻撃に晒された。さつきとは立場が逆転する。マルケウスがひたすらに攻め、鋼が余裕の無い動きでそれを防御していく。

くすりと日向は笑った。同じタイミングで、凜も同じように笑った。

「……鋼の勝ちだね」

「当然です」

「え、なんでそうなるん？　今むしろ、鋼がメツチャピンチに見えるんやけど」

省吾が疑問の声をあげ、伊織はただ無言で試合を見守る。「見れば分かるよ」とだけ日向は返し、試合の流れに集中する。

マルケウスは攻める手を休めない。しかしその猛攻に、三十秒ほど鋼が耐え続けたあたりで焦りが見え始めた。

試合を観戦する貴族の生徒達の間から「守ってばっかじゃ勝てないぞ！」と馬鹿にしたような野次が飛ぶが、戦う二人は気にした様子も無い。そうしてある時、ふ、と。何気ない動作で唐突に鋼は前に踏み出した。

そこからは、三太刀だった。三回の攻撃で、勝負は呆気なく決した。

鋼が竹刀を振るい、受け止めたマルケウスの竹刀が外へ弾かれる。再度振るい、咄嗟に相手が手元に戻した竹刀を、更に大きく外へ弾く。間をおかず振り上げられた攻撃が、マルケウスの胸のあたりに触れそうな位置でぴたりと止められる。

「やめっ！ 勝負ありだ！」

シンドがそう宣言すると、生徒達はどよめきと歓声をあげた。

鋼の逆転勝利に、特に日本人生徒は沸き上がる。そして負けたのはマルケウスだというのに、彼以外の貴族の生徒が何人か、忌々しそうな顔をしていた。

うん。まあ、鋼が無意味に敵を作っちゃうのはいつもの事だし。

のんびりとそんな思考にふける日向が他の観客達のように歓声をあげないのは、最初から最後まで鋼の勝利を疑っていなかったからだ。「すごいええ勝負やったなあ！ 二人ともすごいわ！」と省吾は興奮気味だ。多分観戦していた生徒のほとんど全員が、『いい勝負』をしていたように感じたのだと思う。

「……いい勝負なんかじゃなかったわよ」

硬い表情の伊織がぼつりと言った。

同じような顔をしている人は他にもいる。試合を見守っていたシンド教官と、試合を終えて鋼と握手しているマルケウスの表情にも、伊織と同じ理解の色があった。

「……ねえ。神谷君って、日本で剣道とかやってた事ある？」

「全く無いよ？ だから、鋼が自分は半分素人って言ったのも間違
つては無いんだよね」

「え、何？ どうゆう事や？」

会話の意味が分からず省吾が首を傾げる。色々鋭い伊織が簡単
に解説する。

「神谷君の圧勝って事よ。剣道も剣術も経験無いのに、その土俵で
戦って勝ったんだもの。実戦形式だったら多分、相手は手も足も出
なかつたんじゃない？」

「そんな見ただけで分かるん？」

「だって神谷君の動き、すごく不慣れな感じだったしね。無理やり
騎士剣術っぽく振舞ってたのよ、多分だけど」

「やのに勝ったから、本来もつと実力差あるって事なんか。なるほ
どなあ」

それだけであつさり済ました省吾も大らかというか、ある意味で
は大物と思う。とある貴族の男子生徒とは正反対だった。先程から
野次を飛ばしたり、ルデスから生還したという鋼に『その辺りの山
だったかもしれないじゃないか』と突っ掛かったりしていたその男
子生徒は、試合を終えて日向達の方へと歩いてきていた鋼に向けて
また何か言っていた。

「お前、まぐれで勝ったからっていい気になるなよ！ 必死こいて
守ってばかりだったクセに！」

「そういうお前は見てただけの外野だな」

「な、なんだと！」

減らず口を鋼が叩いて、無駄に相手を怒らせていた。見ていて日
向はちよつとすかつとしたけど。

負けたマルケウスが本来関係ないその男子を窺めるのを尻目に、
鋼がようやくこちらへ戻ってきた。帰ってきた親鳥にすり寄ってい
くひな鳥みたいに、すかさず凜が傍に駆け寄った。

「お疲れ様ですコウ」

「ああ。……なあ、貴族が相手だったら引き分けとかに持ち込んだ

方が良かったと思うか？」

「もしコウを恨んだりするならただのやつ当たりです。あれ以上手加減する必要は無かったと思いますよ？」

「いや別に手は抜いてねえぞ」

さすがに手加減云々は抑えた声量でのやりとりだ。それにしても、わざと負けるではなく引き分けと言うあたり、鋼の負けず嫌いの性分がよく出ていると思う。鋼はたとえ訓練や練習試合であっても、負けるのはなんとなく嫌らしい。

これが実戦だったら死んでいた、とか考えちゃって微妙な気持ちになるんだろうなあ。

よくも悪くも、鋼は物凄く現実的な男の子なのだ。

「ねえ」

鋼と凜が喋っているのをのんびりとした気持ちで眺めていると、いつの間にかすぐ隣に伊織が立っていた。

「……変な質問だっていうのは分かってるんだけど。神谷君って……、何者？」

鋼達に聞こえない程度の小声でそう訊いてきた伊織に、日向はぱちくりとした目を向ける。

「……ごめん、やっぱり忘れて。自分でも意味分かんない質問しちゃった」

「んー、そうなの？ 多分、どういう意味か分かる気がするけど」その言葉に伊織は意外そうな顔をする。日向はにかつと笑った。

「伊織ちゃん、気付いたんじゃないの？ 次から鋼と今の相手が試合しても、もう勝負にならないって」

「……！」

反応からして日向の推測は当たっているようだった。それは試合の直後に彼女が浮かべていた表情からも分かる。対戦相手のマルケウスと、シシド教官と、そして伊織。この三人は、恐らく今の試合で気付いた。鋼の異常性に。

「鋼はね。同じ相手から同じような攻撃をされても、二回目からは通用しなくなるの。分かっているても反応できないってくらい高いレベルで攻撃しないと全く通らないんだよ」

技術や魔術、そういう問題では無く。戦闘における学習能力が、鋼は異常に高い。まあ、高いのは学習能力だけでも無いけれど。

途中から一方的に攻撃し続けていたマルケウスが徐々に焦りだしたのは、余裕の無い動きで回避や防御を行っていた鋼が、全く危なげなく攻撃を捌くようになっていったからだ。

もし万一マルケウスが勝てるとしたら、試合の流れが変わってからの最初の攻撃にしか可能性は無かった。戦いが長引くほど、鋼はその真価を發揮する。

「やっぱり、そうなの？ だって神谷君、試合の最初と最後で別人みたいに動き方違ったから……」

「元からして鋼はすごい強いんだよ？ 始めのほうぎこちない動きだったのは、対戦相手に合わせて騎士剣術で戦ってたからね。多分だけど、蹴りとか入れたら反則取られるだろうとか考えて、慎重に動いたんだと思う」

「それ、私もそういう事なのかなってちょっと思ったのよ。でも神谷君、合わせるも何も剣術の経験全く無いんでしょ？」

「そうだよ。さっきそれを訊いてきた時点で、伊織ちゃんはどういう事なのか予想ついてるんじゃないのかな」

日向が悪戯っぽく鎌をかけると、伊織はびくりと表情を硬直させた。自信が無さそうに、恐る恐る口を開く。

「戦いながら、……覚えてたって事？ 騎士剣術を。対戦相手から」

「うん、そうだと思う。一番最初の様子見て、あの貴族の人の足捌きを覚えて。最初の鋼の攻撃は相手の最初の攻撃の真似だったし、その後かなり色々なパターンで適当に斬りまくって、騎士剣術ではどういう風に防御するのか見てたっばいし。切り返されてからはそれまでに相手が取った動きの真似だけで全部防御しながら、次は騎士剣術の攻撃パターンを覚えて、最後にはそれ使って組み合わせて

効率良く仕留めたんだよ」

鋼は確かに半分素人と言ってよいし、試合では手加減もしなかった。それは嘘では無い。

だけど全く経験の無い剣術を用いて、見よう見まねで戦うという巨大なハンデを背負ったまま試合に勝利しているのだ。それがどれだけ異常な芸当か、剣道や剣術に慣れ親しんだ伊織を始めとする三人だけは気付いた。だからあれほどまでに表情を硬くした。

次から鋼とマルケウスが試合をしても、もう勝負にならない。

「……………ねえ。ほんとに神谷君って、何者なの？」

「何者って言われても……………。んーとね」

一応肩書き的な意味では、鋼はただの日本人の少年だ。

それでも彼という人間を表現するのにふさわしい言葉を、日向は一つだけ知っている。だから正直に、そう言った。

日向が知る限り一番の、正真正銘ホンモノの。

神谷鋼は『戦闘の天才』である、と。

17 ニール「クチバ

木で造られた室内に、こくりこくりと船を漕ぐ女性の姿がある。

部屋の中央には大きな木造のテーブルと、それを囲む複数の椅子が置かれている。その一つに座るのは眼鏡をかけた茶髪の女性だ。不揃いに短く切られた髪は男性的で、マントのようなぶかぶかの皮の衣装には、身だしなみに気を遣わない彼女の性格がよく表れている。

複数人での使用を前提とした家具の配置だが、現在この家で暮らしているのは彼女一人だけだった。木造の暖かな部屋なのに、その光景はどこか寂しい。

うたた寝の最中、女性は夢を見る。かつてこの家に、彼女以外の人間が暮らしていた頃の夢を。

その始まりの日を。

かんかん、というノックの音が耳に入ってきた時。

魔物の素材を用いた実験を行っていたニール「クチバはふと顔をあげ、家の入り口に目を向けた。

何故自分はそのような事をしたのだろうとまずは考えた。まさかこの場所を訪ねてくる者などいるはずが無い。その思い込みからノックの音が意識に引っかからなかったのだ。

最初よりも強く、入り口ドアが外から叩かれる。

風の音にしてはおかしい。浮かんだのはその程度の疑問だった。

ここに至ってもニールは、外から人がやって来たという発想には行き着かなかった。

しかし現に、音がある。三度目のノックも行われる。ニールは戸惑いながらも、その場に座ったままじっとドアを見つめ続けた。混乱が収まるより先に、音の正体が向こうからやって来た。がちやり、と。外からドアが開かれた。

立っていたのは小さな子供だった。

目が合う。まだ十かそこらに見える、小さな女の子だ。その無機質な瞳がニールを見据える。背筋が強烈に粟立あわたった。

可愛らしいなどという感想は欠片も抱かなかった。ニールを、次いで室内を検分していく子供の視線。その目には何の感情も宿ってはいない。

そこでようやく気付いた。その小さな少女の後ろに、何人もの子供がまだいる事に。

十代半ばくらいの少年と、同じ年頃に見える少女が二人だ。少年の手にはもう一人、ぐったりとした女の子が抱えられている。

男の子が一人と、女の子が計四人。みすばらしい身なりの年端もいらない子供が五人、ドアの向こうに立っていた。あり得ない、とニールは思った。この周辺は子供が生存できる環境では無い。

「こんなところに人が住んでるのか。なあ、その人」
女の子を抱えた少年が、ニールを見て言った。

「ここは安全か？」
「……」

訊かれている意味は分かる。だがあまりの出来事に、咄嗟に言葉が出て来ない。ニールは混乱したままそつと頷いた。

「あんたに迷惑はかけない。家の外でいいから、こいつを安静にするのに場所を貸して欲しい」

「あ、ああ。それくらいなら、構わないが……」
「助かる」

それだけの短いやりとりで、あっさりと少年はこちらに背を向けた。二人の少女も踵を返し、最初の小さな少女がドアを閉めようとする。慌ててニールは子供達を呼び止めた。

「ま、待て！ 本当に外で過ごすつもりか！？」

「それは、構わないと言ったのを撤回するって事か？」

「そうじゃない。怪我人がいるんだらう？ 中に運べ。たいした設備も無いが外よりはマシだ」

少年は意外そうな顔をして、まじまじとニールを見つめた。まさかこちらが、平然と怪我人を外に放り出す外道にでも見えるというのか。中々に失礼な子供だ。

しかしすぐに、素直に頭を下げた。

「恩に着る」

床に散乱していた実験用の器材や素材が片隅に寄せられ、即席の簡易ベッドに怪我人の少女が寝かされていた。

応急処置は既に済まされ、少女の口からは安らかな寝息が漏れている。見守る子供達の表情も、最初の時よりは穏やかになったようにニールには思えた。あくまで最初と比べればだが。

しかし、まあ。

一体どういう者達なのか、さっぱり分からない。

そこらの街にいるような普通の子供では無いのは確かだった。子供達は皆どこか、荒んだ目つきをしている。一番小さな女の子など、それを通り越してまるで人形のようなだった。

あからさまな疑念と警戒の視線をニールに向け続けている少女もいるが、そちらのほうが余程人間味があって安心できる。少なくともこの子供達は、これまで幸せな人生を歩んではいまい。会ったばかりでもそれくらいのは事は察せられた。

「ありがとう。本当に助かった」

子供らしからぬ口調で黒髪の少年は頭を下げ、礼を言う。今に至

るまでの子供達の様子から分かっているが、この少年が他の少女達のまとめ役であるらしかった。

「そこまで仰々しく感謝されても困る。怪我をしている子供を助けるのは当然の事だ」

心の中だけでニールは苦笑する。らしからぬ口調と言えば、自分だつて女らしさの欠片も無い喋り方だつた。

「名前も聞いても？ …… ああ、そう警戒しなくていい。見ての通り、私はこんな辺鄙な場所に一人で住んでいる偏屈な魔術師だから国や街とは無縁の生活を送っている。君達にどんな事情があつたところで、私には無関係だ」

「こんな場所に、一人で？」

「世間に関わらずに一人で暮らすのに、ここ程うつつつけの場所も無いだろう？」

「こちらもまた、何か訳ありなのだろうと少年は納得したようだった。

「それじゃ、名乗るけど。俺は神谷鋼。あんたは？」

「ニール＝クチバという。それにしても、少々変わった名前だな」

カミヤ＝コウ。帝国系の名前だろうか。

少年と少女達は、一人だけくすんだ銀髪の少女がいるものの、あとの四人は帝国人の特徴である黒髪を持っていた。子供達はもしかすると帝国から脱走した奴隷かもしれない。もちろん密告しようとか、国に突き出そうとか、そういった事は微塵も考えなかつたが。ニールもどちらかというと、奴隷制を堂々と敷くようなあの出身国に嫌気が差して、こんな所に住んでいるという側面があるのだし。

詮索するような事を口走つたからか、ある黒髪の少女がじろりとこちらを睨んできた。先程からニールを最も警戒している少女である。当然カミヤ少年も気付いていて苦笑したようだった。

「ついでに紹介するよ。こいつは……、ルウとでも呼んでくれ。見ての通り他人に対してちょっと警戒心が強いが、大目に見てくれると助かる」

「気にしないさ。こんな場所に家を建てて暮らす私は、十分に怪しさ満点だという自覚はある」

自分が紹介されているというのが相変わらずそのルウという少女は喋りもせず、他の子達もそうだがニールとの一切のやりとりをカミヤ少年に一任しているようだった。

「……で、こっちの小さいのが日向」

次に紹介されたのは最初にドアを開けた人形みたいな子供だった。ニールは子供達の中ではその子が一番苦手だ。ぱっちりした大きな瞳の黒髪の小さな女の子は、年相応の笑みでも浮かべていれば愛らしい姿をしているのだろうが、どうにも表情が無さ過ぎる。ヒナタと再び目が合うも、警戒すら浮かんでいない観察の視線に思わず気圧けおされた。

そうしている間にカミヤが意識のある最後の一人、銀髪の少女を手招きで呼び寄せた。きよるきよると家の中を興味深そうに見やっていたその少女は、ニールの見たところ一番子供らしい素直な反応でとことこやって来た。

「お前も自己紹介」

「分かった。……私の名はダリアクレイン。よろしく」

初めて少年以外の声を聞く事が出来た。しかし、そんな事よりも、

「ダリアクレイン？」

思わずその名前を反芻はんすうする。

「……何か？」

「ん、いや。なんでもない」

まさかな。さすがに、それは。

名前から連想した彼女の正体をニールは脳内で振り払う。少々変わった名前どころではない。名付けた者は何を意図してそんな名にしたのだろう。

ダリアクレインはニールの心中を探るように、じつとまっすぐな目で覗き込んで来る。彼女に限らず少女達の態度からは、一応は助けてあげたというのにニールをあまり信用していないのが窺えた。

今までどんな環境にいたというのか。信頼を得るのは骨が折れそう
だ。

「お前ら、んな警戒しなくていい。誰も彼も疑っても仕方ねえだろ」
少年の一声は少女達にとって大きな意味を持つらしい。

カミヤが窘めるように言うと、ヒナタがニールや屋内への観察の
視線を即座にやめ、怪我人の少女の元へと寄り添った。ルウは変わ
らずニールに警戒の視線を向け続けるも、不本意そうに頷く。ダリ
アクレインも少し表情を柔らかくした。

僅かにだが笑みすら浮かべて、銀髪の少女は改めて口を開いた。

「コウが信用する人なら私も信用する。助けてくれてありがとう」

その表情の変化でニールも気付いたが、ダリアクレインはかなり
整った顔立ちの女の子だった。今の年端もいかない外見でも美少女
と形容するにふさわしいものを持っていて、あと数年もすれば相当
な美人になるだろうと分かる。だからこそ余計に、くすんだ髪や薄
汚れた格好が痛々しいものとして映った。

この時点でもう、怪我人の治療が終わり次第子供達を放り出す、
という選択肢はニールの中では無くなっていた。

「どういたしました。コウ君をすごく信頼してるんだな、君は」

「うん。だからニールも信じる。でもコウを裏切ったりしたら殺す
から」

「……………ん？」

助けてあげたいとニールに素直に思わせる、柔らかな笑みを浮か
べたこの少女から、今何か物騒な単語が漏れなかつただろうか？

「おいこら何いきなり喧嘩売ってんだお前は！」

カミヤが怒鳴り、ダリアクレインの頭をどついた。結構痛そうな
音が鳴る。

「け、喧嘩など売ってない」

「ああ？」

凄まれ、涙目になるダリアクレイン。カミヤは目を合わせながら
も、それ以上何も言わない。傍から見ているニールでさえもちよっ

と少年の気迫は怖いくらいで、銀髪の少女もすぐに根を上げた。

「う、ごめんなさい」

「あ、ああ、いや、そこまで私も気にしてないさ。それほどコウ君が大事なんだろう」

しゅんとなったダリアクレインに、むしろこちらがかばう言動を取ってしまった。何故殺す宣言された本人が罪悪感を抱かねばならないのだ、と釈然としない気持ちになるが、ついでに意識を切り替える。

怪我人の容態も落ち着いているようだし、次は子供達の汚れた格好をどうにかしたい。

この人数分の体を拭けるような布はあったかな、と考えながら、ニールは立ち上がった。

ニールの住処は、非常に見つけづらい場所に建っている。

まずここいら一帯のルデス山脈という土地自体が、通常人間が寄り付かない場所だ。それに加えてこの家は、山脈のそこそこ奥地にある名もなき湖のただ中、離れ小島の上に位置している。

より正確に言おう。

草木すら生えていない岩山だけがある離れ小島の、その岩山をくり抜いた内部だ。島に上陸してみないと分からないような入り口から中を覗くと、小屋と呼んで差し支えないしよぼくれた木造家屋が建っている。かなり違和感のある光景である。

そこがニールの住処なのだった。

人が外から来るなどあり得ないとニールが思ったのも致し方ない事なのだ。むしろカミヤ達はよくここを見つけたなと思う。そもそもこの小島へ渡るのだって難しいはずなのだが。

「ありがとう。久しぶりにさっぱりした」

少しは慣れてくれたのか、少女達を代表してダリアクレインが礼

を言う。

あれから二十分ほどが経過している。

あの後ニールは薄汚れた状態の子供達をどうにかするため、家中を引つ繰り返すようにして探し当てた手拭いの布をそれぞれに押し付けた。そして、まずは女の子達から外の湖で体を拭いてくるように言いつけたのだ。

今は彼女達が戻ってきたところで、カミヤ少年は入れ替わりに体を拭くため外へ出ている。

子供達の中で最も話を通じる少年がいない状態で、他の少女達と意思疎通が出来るのか少し心配していたのだが。何の含みも無いダリアクレインの様子からして杞憂だったようだ。

と、いうか。

ヒナタ・ルウ・ダリアクレイン。

小奇麗になった三人の少女を見て、気付く事がある。

三人共、容姿がかなり見目麗しいのだ。もし身分が奴隷であったとしたら、労働力以外のものが期待される高値で取引される存在だったのではないかと勘繰ってしまいそうな位に。

だが一方で、卑屈さやひ弱さとは真逆の雰囲気があるようにも思える。何に恥じる必要もない、芯の通った力強さをそれぞれが宿しているような。あるいは脱走奴隷かもという推測は全くの的外れかもしれないかった。

冷たく荒んだ瞳を持つ、外見に限れば育ちの良さそうな美少女達と、それを率いる年若い少年。

本当にこの子供達は、どういう集団なのだろうか。訊いたって警戒されるだけのような気がするものの、ニールもそろそろ子供達の素性が気になってきた。

「なあ、君達はどうやってこの小島まで辿り着いたんだ？」

ダリアクレイン、長いのもうダリアと心中でも呼ぶが、ニール

の問いに考える素振りをしたのは彼女だけだった。ダリアは言っていないのか訊ねるようにルウを見て、首を横に振られて困ったようにこちらに視線を戻す。ちなみにヒナタは一貫して無言のままだ。

「なあ、ルウ。それくらい教えてくれたっていいだろう？」

「……それなら、後でコウに訊いて下さい」

丁寧で、それでいて冷たい声音が返ってきた。後はただ何を言っても黙殺だった。

たとえ些細な情報でも、少年の許可なく渡したくないという事か。あの少年にはそこまで神経質なところは見られないから、このルウという少女が面倒な性格をしているだけなのだろう。

あの少年にはかなり信頼を寄せているようなので、好奇心に動かされるニールは切り口を変えてみた。

「コウ君がやはり、君達のボスか」

「……」

「彼は慕われているな。裏切ったら私を殺す、とダリアは言ったが、君もそういう過激なところがありそうだ」

「……当たり前でしょう。あの人を利用し傷つけるような事があれば、あなたにはそれなりの代償を払ってもらいます」

案外すぐに食いついてきた。ついついニールは調子に乗って、挑発まがいの発言をする。

「君は殺すとは言わないのか？」

「もしあなたがコウの敵なら、本心から殺して差し上げたいと思いますけど。例え裏切られても、コウはきっと命まで取るのを望みませんから。あの人は優しい方なので」

……会ったばかりの自分が心配する事ではないかもしれないが。女であるはずのニール自身にはあまりピンと来ないが、思春期の乙女が持つ恋愛感情のパワーは凄まじいものだとは聞く。ダリアといい、あの少年は中々に重い愛を向けられる身であるようだ。この場合、少女達同士の仲は大丈夫なのだろうか。

「……君も実は同じような意見だったりするの？」

余計な心配は切り上げて、ニールは恐る恐るヒナタにも訊いてみた。部屋の片隅で置物と化していた無表情少女は、ここにきてようやくニールにもその声を聞かせてくれた。

「鋼は警戒しなくていいって言ったから。あなたは、私達に悪意を向けるような人じゃないと思う」

案外、というか見た目通りなのだが、とても幼い声だった。言っている内容は一見まともだが、やや引つかかる物言いである。

「君自身はどう思うんだ？ 私は善人と悪人、どっちに見える？」

「……さあ？ でも鋼は、誰も彼も疑っても仕方ないって言ったし」

「……」

少女達の異常性に気付き始めたニールは、さすがにそこで閉口した。

もう少し後になって、知った事だが。

それまで色々辛い目に遭ってきて、子供達の心が最も荒んでいた時期がこの時だったそうだ。

ニールの隠れ家によって来る前、彼らは『地獄のような日々』を送っていたという。それがどんなものだったかは、本人ならぬニールには聞いた話から想像するくらいしか出来ない。

コウはどうかやら生来の強靱な精神力で己を支えていたようだが、彼ほど強くなかった少女達はコウの存在を支えにしてその日々を生き抜いたらしい。精神に強い負荷が掛かったためか、少女達には全員例外なくコウへの強烈な依存心が見られた。最初の頃など、少年の傍にいないと少女達は安らげないらしく、眠る時は片時も離れなかったのだ。

宿を貸した初日に、家の外の洞窟内で寝ようとした子供達を引き止め、屋内で休ませたのだが。怪我人の少女とコウを中心に、寄り添うように丸くなって眠る少女達という光景を前になんだか生温か

い笑いが出たのをよく覚えている。群れた野生の狼か、というのがそれを見たニールの感想だったと思う。

彼ら五人とは、それからおよそ半年後に三人が《逆召喚》で日本へ去るまでの間、共同生活を続けた。

安定した生活を続けるにつれ、少女達の態度も徐々に軟化し、ニールにも身の上話などを聞かせてくれるようになった。周辺との魔物との戦いで役に立つだろうと、こちらから魔術を教えたりもした。唐突に始まったたった半年くらいの付き合いだったけれども、コウ達との間には確かな絆を築けたと、ニールは信じている。

夢の中だったのか、どこか途中からは寝起きの頭が描いた回想だったのか。

その境界が曖昧なまま、ニールは覚醒している己の意識を自覚した。座ってぼんやりしている内、意識を手放していたらしい。

二年ほど前の夢を見ていた。

そうか。あれからもう、二年も。

色々と面倒になって、一人でいる方が気が楽だったのもあり、こんな世捨て人みたいな暮らしを始めたのに。最近はこの頃を思い出して、なんとなく感傷的な気分になる事が増えた気がする。

きっとこの家具がいけないのだ。椅子で囲まれた部屋の中央の大テーブルは、六人で生活するのにあった方が便利だからと、あの頃に皆で手作りしたものだ。他にもいくつも名残はあった。改築して家自体を広くもしたから、いまや屋内を見てもここが一人暮らし用には見えなくなっている。

かんかん、とノックの音。ニールは驚いて椅子からずり落ちそうになった。どうやらあの音に起こされたらしい。

がちやり、とドアが開かれた。

「ニール！ 来たぞ！」

そこから顔を出したのは、懐かしき銀髪の少女である。今見ていた夢が夢なので、こちらの驚きも一入ひっつまだった。

「……クー」

「しばらく会いに来れなくて、すまなかった。でもニール、いい知らせがあるんだ！」

あの頃からすれば信じられない程の、満面の明るい笑顔でダリアクレインは話し始める。その笑みだけで、ニールの胸も温かいもので満たされた。

その表情が、溢れ出るほどの喜びの感情が、話を聞くまでもなくニールに知らせてくれる。

きつと愛しい仲間との再会が叶ったのだ、と。

思った通りの報告を始める少女を、我知らず笑みを浮かべたニールは優しく見守るのだった。

18 新たな友人

旅立つた銀の少女が、山奥の湖上の隠れ家を訪れている頃。晴れて外出禁止が解除された鋼は、様子見がてらいつもの面子を誘って満月亭に赴いていた。

「お」

「カミヤか」

そこで熱血貴族のマルケウスと遭遇し、軽く声を掛け合っていた。マルケウスは彼の護衛官、ターレイを伴っている。

「ここに座らせてもらうぞ」

席につく鋼達六人から最も近い場所へと、貴族少年と護衛官は腰を下ろす。先日の剣術実技での試合以降もマルケウスの態度が特に変わったという事はなく、あっさりしたものだ。た。

これが陰湿な性格の貴族であったなら敵意を持たれたり逆恨みされたりしたのかもしれないが、この実直な少年はそういった感情とは無縁のようだ。むしろあれ以降、何か興味を持たれた気すらしている。

「貴族でもこういうところで食うんだな」

「民の生活を知るのも、貴族の務めの一つだからな」

「……そこは素直に前来た時に気に入ったからって言っとけよ」

教官とも一緒に来た時「普段、こういう場所で食事をとらないから何か新鮮だな」とか言っていたのはすっかり覚えている。マルケウスは更に何か言い返したそうだったが、店員の少女が注文を取りにぱたぱたとやって来たので諦めたようだ。

「なあなあ、友達になっただん？」

その隙に省吾が訊いてきた。軽く答えるつもりで鋼は口を開きか

け、有坂、片平のみならず日向と凜も興味深げに答えを待っているのに気付く。

「……いや、まあ。まだダチでは無いだろう。そもそもそんなに話してねえし」

「『まだ』、ねえ……」

有坂がにやりと笑う。それを無視すると次は片平が妙に瞳をキラキラさせて言った。

「『中々やるな』『お前もな』ってパターンですね！？ うう、私も神谷さん達の試合、見たかったです！」

「いや別にそんな青春じみた展開は無かったぞ……」

喧嘩した男と男が互いを認めてそこに友情が、という漫画的発想なのだろうが、マルケウスとやったのはただの試合である。それ以上でもそれ以下でもない。

視線を隣の日向に向けてみると、にこにここと微笑ましいものを見るような顔で鋼を見守っていた。なんとなくムカついたのでデコピンをお見舞いする。

「いたっ！ え、なんで私いきなりデコピンされたの！？」

「なんとなくだ」

「なんとなく！？ まあ、いいけど」

「いいんだ……」

全然気にせず片付けた日向に、有坂が何か納得できない様子で咳く。

ふと鋼が日向とは逆の隣に目を移すと、凜が前髪を手でかき分けているところだった。髪の毛の乱れを整えているようだが、普段と違うおでこが露わになった状態に最終的には落ち着く。それを指摘すべきか迷っていると、凜が何かを期待するような目でじつとこちらを見つめてきた。

そこそこ長い付き合いだが、この時ばかりは凜が何を言いたいのがよく分からなかった。

「……あの三人を見ていると、私ってすごくキャラ薄いな、と思う時があります」

「この場合はあの三人が濃すぎるんじゃないかしら」
片平と有坂がひそひそと囁きあっていた。

満月亭で食事をしている客は鋼達やマルケウスの他にも二組いて、いずれも騎士学校の学生のようにだった。

そこそこの客入り、と言えるだろう。給仕役はいつもの店員の少女一人だけなので、結構大変そうだ。

食事を済ました鋼達はまだ学園の休み時間が残っているのをいい事に、店から出るわけでもなく雑談に興じていた。鋼達より遅れて食事を開始したマルケウスとターレイも食べ終わり、鋼達に話しかけてくる。

「カミヤ。少し聞きたいのだが」

「ん？」

「学園の噂話では、お前とそちらの二人は同じ場所に落ちた迷い子だと聞いた。つまり三人とも、亜竜山脈を生き延びているのだな？」

入学した直後は、目立ちたくも無かったので帰還者である事はなるべく隠すつもりでいたというのに。もはや話はそんな問題ではないほど大きくなってきているようだった。帰還者の生徒は六人しかいないのに、隠そうとする事自体に無理があったのだろう。

あまり耳に入れないようにしていたが、ある事ない事周りでは噂にされていそう。というか貴族・平民の垣根すら関係なしに広がっているのだろうか、その噂話とやらは。

「なんだ、信じがたい噂とか言ってたのに結局信じたのか？ 俺が亜竜山脈の生還者だったの」

「ああ」

即答され、鋼は咄嗟の言葉に詰まる。

「あの剣の腕を見せられたら信じるしか無いだろう」

「それはそうよねえ」

有坂も同意するように笑い、話についていけない片平がやっぱりその試合見てみたかったという不満の表情をとる。日向と凜の方は、話題の当事者でもあるクセにいつもの通り鋼に任せるといった態度で他人事のように座っていた。

「まあ他にもあと二人いたが、亜竜山脈じゃこいつらも一緒だったぞ。それがどうかしたのか？」

「疑うわけでは無かったのだが、所詮は噂だ。本人達に確認したほうが確実だと思ったのでな」

「だからなんでそんな俺らに興味津々なんだよ、お前は……」

「騎士候補として、同じ学年に強い者がいると聞けば確かめたいと思っるのは当然だろう」

「いやそれ当然なのか？」

つくづく面白い性格の貴族だ。あまり身分差についても意識していない節があるし。

「なー、そのあとの二人って、こっちの世界の人なんよな？ 一人は前会ったクーさん？」

「ああ。俺達は三人でこっちに落ちたんだが、そこに似たような境遇の遭難者の集団がいてな。それに拾われたんだよ。さすがに三人だけだったら生き残れんかっただろな」

「あなたも会った事ある、前に校門にいた銀髪の人よ」

省吾が鋼に訊いてきて、そこで出た名前について有坂が親切にもマルケウスに教えてあげていた。

「っ！ あの女性か！」

「わあ、すごい反応。クーちゃん物凄い美人だったもんねえ」

「ち、違う！ 驚いただけで、僕は断じて、そのような……」

日向の何気ない一言に物凄く反応するマルケウス。顔を赤くしている。

やはり真面目で熱血なマルケウスといえどもそういう部分は思春期の少年っぽい。というかもしかして、クーに気がある、とかだろ
うか。まだ一度しか会った事が無かるうが、クーの外見を考えると
そう不自然な想定でもない。

……。

鋼は思考を脇に置きやった。あまり直視したくない複雑な感情が湧き上がってきそうに思えたからだ。

「ねえ、クーさんって、前にあの男達を追っ払ってくれたあの綺麗
な人？」

外から新しい声が割り込んでくる。

仕事かひと段落ついたらしい満月亭の店員の少女が、くだけた態度でテーブルの傍にやって来たところだった。注文を取りに来る時などは常に敬語の少女なので、今は休憩なのだろう。

「ああ」

「あの人、また来ないかな。あれからあの男達、店に来なくなった
のよ。あの人にお礼言いたいのに」

「へえ、そりゃ良かったな。あいにくあいつ今、この街を離れてん
だ。帰って来たらまた連れてくるな」

来なくなつた本当の理由は知っているも、その顛末を知っている者は日向と凜しかこの場にはいない。酒場の件での目撃者であり、マルケウス程鈍くはなさそうなターレイは、事実を推測できているのか少し面白そうな目で鋼を見てきたが。

「お願いね。あいつらの嫌がらせにはすごい迷惑してたから。クー
さんが次来た時は、タダでいいわ！」

「……いいのか？ ただでさえ貴重な店の収入なのに、赤字になつ
たり……」

「し、失礼ね！ そりゃあ前会った日は確かにあなた達しかお客さん
来なかったけど、最近は盛り返してきてるの！」

もちろん客入りからして鋼も分かっていたのでからかったただけだ。
「と、いうわけで。これからも当店を、どうぞご贖^{ひいき}に」

宣伝つぱく少女はまとめて、ぺこりと鋼達六人に小さく頭を下げた。

そしてマルケウスにもこう話しかけた。

「あなたも、いつもありがとう。この前も椅子取り返してもらったし」

「あ、ああ。いえ、騎士候補として当然の事をしたまでです」

堅苦しい言葉遣いだが、マルケウスはどうやら照れているらしい。その反応も興味深いが、もっと気になる箇所が今の台詞にある。

「へえ。いつも、か。もしかしてマルケウス、あれから毎日ここに通ってたのか？」

「ま、まあそうだな。民の生活を知るのも、貴族の務めの一つであり」

「さつきも聞いたぞそれ。素直に美味いから気に入ったって言えばいいものを」

ちなみにここで店員の少女が、この人貴族だったの！？ という顔をしていた。

「それに、来れなかった俺の代わりに店の様子を見てくれたのか？」

「そういうわけではない」

きっぱり否定された。まあ、多分こいつは酒場で倒れていた男達がこの店に迷惑を掛けていた輩だとは気付いていないわけで。マルケウスからすればこの店は椅子泥棒の子供が一度出ただけの、至って平和な店と感じているはずだ。毎日来て警戒を続ける理由は薄いかもしれない。

だが。

この少年が熱血くそ真面目なのを鋼は知っている。何も起きない満月亭で、それでも根気強く警戒し続けていたという可能性は低くないように思ったのだった。

「ここ数日来ないなあって思ってただけど、来れない理由があったの？」

「学校の用事とか色々あつてな」

店員の少女の問いかけを誤魔化しつつ、余計な事は言わんでいいぞと席につく面々に鋼はアイコンタクトを送る。ほとんどはその意味を把握し承諾してくれたようだ。

マルケウス以外は。

「用事？ この店に迷惑を掛けていた男達の一人に襲われて、学園から外出禁止を言い渡されていたのではなかったのか？」

一人だけ空気の読めない貴族がいた。

「……………」

こいつ、どうするよ？ と居たたまれない空気の中、鋼達は目でやり取りする。

さすがに何か感じるところがあつたのか、表面的にはむっつりとしかしやや焦つた様子でマルケウスは周りを見る。

「な、なんだ？ まるで僕が間違つた事を言つたような雰囲気だな」
カミヤの事情はそう聞いていたのだが、と自分の護衛官に確認を取るマルケウス。気まずそうに目を逸らされていた。

店員の少女が慌てたように言い募る。

「え、ちよつとどういう事！？ あの男達に何かされたの！？」

「もう解決してる。気にしなくていい」

「そんな事言われても気にするわよ！ あいつらに襲われたの！？」
こつなつてしまえば適当な誤魔化しであしらえるはずもなく。仕方

方が無いので《火矢》での襲撃事件についてだけ、鋼は簡単に説明した。話を聞く内どんどん少女の表情は深刻なものになっていった。
「つてわけで、犯人はもう捕まつて警備隊に引き渡されてる。

後の三人についても警備隊にも一応話に行つてるし、あいつらも諦めたんだらう。外出禁止になつてた間も特に何も無かつたしな」

そう鋼が総括しても、店員の少女の顔からは不安は晴れない。

「そんな事になつてたなんて。私が謝るのも、少し違つんだらうけ

ど……」

「んな暗い顔すんなって。襲ってきた奴、こいつが捕まえたって言っただろ？ 俺だって実はそういうのに結構慣れてるし、もしあいつらが今度は三人で襲ってきたとしても返り討ちだ」

「慣れてるって、あなたが……？」

意外そうに瞳を瞬かせて、首を傾げられた。

「一応騎士候補だぞ？ そんな俺、弱そうに見えるか？」

「あ、ごめんなさい、そういうつもりじゃ。あなたって、私にとっては女の子の扱いが上手い人って印象だけが強くて……」

「どんな印象だよ！？ 弱そうに見えるって言われた方がまだマシだったぞ！」

「だって、あのただ者じゃ無さそうなクーさんが頭を撫な」

「ごほ、ごほっ、ごほっ……！」

それ以上言わせないための持病の発作が出た。いやまあそんな持病など持っていない鋼だが。

そうだった。忘れようと努力はしていたが、夜にクーの頭を撫でている所をこの少女には目撃されているのだった。

前回マルケウス達と店に来た時は、椅子泥棒の件などもあってクーの事には触れられなかった。変な目で気まずげに見られはしたが、それ以後数日が経ったのもあり、鋼は完全に気を抜いて安心していったのだ。

場の流れをコントロールするため、むしろこちらから積極的に話題を展開させる事にした。

「女の子の扱いが上手いって……無い無い。俺ってそんなキャラに見えるか？」

異性を優しくエスコートするような紳士、あるいは優男タイプとは、正反対の位置に自分はいると鋼は思っている。一緒に異世界を戦った少女達を除けば、女子と親しくなった経験などほとんど無い。

だから見えるかと訊きつつも、否定される前提での鋼の問いかけだ。それに対し、有坂と片平は答えたくないとはかりにふいと目を

逸らした。

なんだ、その反応は。

頼みの綱つなとばかりに省吾に視線を移せば、鋼の両隣に座る日向と凜を静かに見やってから、微妙にシリアスな表情でそろそろと目を逸らす。鋼は地味にシヨックを受けた。

「ふむ。確かに見えないな。カミヤが婦女子に敬意を払っている様子すら見た事が無い」

ここでまさかのマルケウスからの援護がきた。

「マル。お前いい奴だな……」

「待て、なんだその馴れ馴れしい呼び方は!？」

「照れんなよ。俺達、ダチだろ？」

「さっきは違うと言っていたのはしっかり聞いていたぞ!？」

ちゃっかり聞いていたらしいマルケウス、もといマルが食ってかかる。元々長い名前で呼びづらいついていたので、その呼び方で鋼の中では決定された。

「お前はちよつと空気が読めないところがあるが、いい奴だよ。俺が保証しよう」

「だから待て! 呼び方もだが、空気が読めないというのはどういう事だ! 納得できん!」

マルは本当に心の底から納得できていない表情だった。いやいや。「お前……、ダチだからこそきっぱり言っただけ、それは認めただけ、ほづがいいぞ……?」

「貴様と友人になつた覚えは無いし、その気遣わしげな表情もやめる! 全く言いがかりも甚はなだしい。僕が協調性の無い人間などと……」

ぶつくさ言うマルとその護衛官の視線が交錯する。ターレイは軽く咳払いして、そつと視線を逸らしたのだった。

同じ通りでも、満月亭からはかなり離れた路上。

店から出てくる騎士学校の生徒達を、さりげなく観察する男がいた。とある酒場で神谷鋼に襲い掛かった十人の内の、唯一最後まで立っていた小剣使いの男である。

ここからでは話している内容はおろか表情さえ判然としないが、構わない。気付かれないのが第一だ。慎重に慎重を重ねるべきだとその男は考えていた。それだけ神谷という騎士候補と、もっと強いらしい彼の『連れ』を警戒しているのだ。

やはりあの騎士候補は、満月亭の常連であるようだ。出来ればもう関わりたくないのだが、上からの指令に従うならそうはいかないかもしれない。あくまで可能性だけなのだが、男を陰鬱な気分させるのにそれは十分な要素だった。

騎士学校の生徒や、店の客は次の標的ではない。狙いはあくまであの店だけだ。しかしあの店に異常が起きれば、常連客にも遅かれ早かれ気付かれる事になる。

そこから自分まで辿られる可能性は、かなり低い、はずだ。そもそもあの少年は、彼自身とその連れが手を出されない限りは動かない気もする。大丈夫だろうと信じるしか無い。

闇ギルドの指令に逆らう程、男は愚かではなかった。逆らって無事に済むほどおめでたい組織では無いからだ。だからこそあの少年が関わって来ないようにと願うしか、男には残されていないのだ。

あの少年かその連れに実行犯を特定されて、個人的に報復されたりしないだろうか。そういった心配を無理やりに押さえ込み、選択肢の無い男としては何も考えないよう努めるしかなかった。思わずため息がこぼれる。

様子見以上の意味も意義もない監視をやめて、男はその場から立ち去った。

満月亭を立ち退かせるという依頼の失敗。

その件に対する、闇傭兵ギルドが決定した処置の実行日は明日に迫っていた。

剣術実技の授業で、試合が行われていた。

前回の鋼とマルの試合に触発されたのか、有坂が試合をしたいと申し出たのだ。

シンドは許可を出した。まだ数回目の授業では素人に試合なんてさせないらしいが、有坂であれば問題ないだろうとの事。武道の経験者であれば試合で相手に怪我をさせるような無茶はすまい、という判断基準らしい。

そして有坂は、迷わずに対戦相手を指定した。

「どつこが『私なんか全然』よ！ あなた、うちの中学の剣道部副部長よりは強いわよ！」

竹刀で何度か打ち合い、両者ともに距離を取る。それが繰り返された何度目かで、有坂は構えながら相手に文句を言った。

言われた相手はなんと答えていいのか困惑した様子で、それでもぼそぼそと口を開いた。

「そ、そうなんですか……？」

凜だった。

ギヤラリーとなった生徒達が見守る中、いかにも緊張を隠せていない彼女はとても頼りなく見える。だがさつきまで、鋭く振られる有坂の竹刀を的確に弾いていたのもまた彼女である。

「どないやねんあの二人……」

再び二人は切り結び合い、観戦する省吾が呆れたような調子で呟く。眼前で繰り広げられる男子より非力なはずの女子同士の打ち合いは、当然魔術は使っていないというのに展開が激しい。両者ともに強いというのは素人目にも明らかだ。

凜が対戦相手として指名された時、自分が選ばれるなど夢にも思

つていなかったらしく彼女はかなり挙動不審になった。何故私なのか、と訊かれて有坂は「歩き方とか身のこなしが、なんか強そうだから」と答え、凜は「私なんか全然そんな事ないですよ」と確かに言っていた。そりゃあ有坂も文句を言いたくなるだろう。

女子二人の華やかな容姿もあいまってか、息すら忘れて試合に集中しているような見物人もちらほら見受けられる。

「魔術もなしの女の細腕で、よくやる。両者ともに強いな」

感嘆するように言ったのはマルだ。貴族っぽく偉そうに腕を組みながら、凜と有坂の攻防を注視している。

「しかしアリサカの方が、一枚上手か」

「だな。あれは《身体強化》覚えたら相当強くなるぞ」

試合の流れは基本的に、有坂が苛烈に攻め凜が守勢に回るというものだ。元々守備的な戦いを好む凜だが、それを差し引いても少し一方的にやられ過ぎている。だが二人の実力が離れているかといえは、案外そうでもない。

見ていれば分かるが、有坂も相当やりにくそうだ。凜は守りながら、ほんの僅かにでも気を緩めれば一撃で逆転してやるという氣勢でカウンターを狙い続けている。有坂も相手の守りを崩すための強気な攻撃を中々繰り出せず、互いの神経を削る戦いになっていた。これは見ている方も疲れる。

「というかマル、ちゃっかりこっち来てんのな」

「なんだ、戻れと？」

「ああ、違う違う。日本人は正直、こっちの貴族とか平民とかよく分かんのでな。俺が変に気にしてただけ」

「確かにこちらでは、同じ身分の者同士で固まる傾向はあるが。貴族と二ホン人が共に試合を観戦する事に、何か問題があるわけではないぞ。……そして、その馴れ馴れしい呼び名を認めただけではないからな」

「すげえ今更じゃね？」

友人になった覚えは無いとか言っておいて、授業中にわざわざ隣

にやって来るマル。なるほど、これがツンデレというやつか。

鋼もマルも、話しながらも一切試合からは目を離していない。そろそろ凜が押され始め、カウンターすら狙えずただ守っているだけとなっていた。彼女の實力の程を知る鋼は断言するが、凜はけして弱くない。有坂が強過ぎるのだ。

そしてとうとう、竹刀の内側に竹刀が滑り込み、試合は有坂の勝利で決着がついたのだった。

「……負けました」

「村井さん、やっぱり強かったじゃない。勝ったけど私も全然余裕無かったわ」

試合が終わり、爽やかに互いを認め合う　という展開には残念ながらならず。結構凜は凹^{へこ}んでいた。口ではああ言いつつも、実は自分に自信があつた、というわけでは無い。単にネガティブ思考なのだ。

「普段から自信ないクセに、負けたら負けたでショック受けるからな、こいつ」

「そうだよルウちゃん。もっと前向きに考えないと！　実践だったら死んでたけど、これは試合だから生きてた。良かった！　みたいにさー！」

「え、それもしかして励ましてるん？」

ポジティブ思考の日向に、省吾が首を傾げている。凜は深く頷いた。

「確かに、そうですね。今私は生きている、それが重要でした」

「あ、今ので良かったんだ……」

吹っ切れた様子で凜に、有坂が疲れた声で言った。

「にしても有坂の強さは驚いたぞ。剣道は得意って言うだけあるな」「そりゃ私、これでも全国大会で準優勝だしね。魔術なしの純粹な剣の勝負じゃ、そう簡単に負けるつもりはないわ」

「全国二位かよ……！」

さすがに仰天した。日向も凜も省吾も、ついでにマルも、目を見開いて驚きを表していた。女子剣道で、中学の部とはいえ。一国のトップクラスのレベルには違いない。そんな奴がこうも身近に存在したとは。

マルの驚きようが尋常じゃなかったたので問い質したところ、『全国』、つまり地球上の全ての国を含めての二位だと勘違いしていたので、その誤解を解くという一幕もあったが。まあ割愛するとして。

「村井さん、落ち込む必要なんて無いくらい強いと思うわ。その、嫌味にとつて欲しくないんだけど……」

「勝負やから勝ち負けあるって分かってても、悔しいもんは悔しいわな。まーでも村井ちゃん、魔術も出来るんやし強化もすごいしで、かなり万能ちゃうん？ 全部使ったらなんか凄まじい事になりそうなんやけど……」

「……確かに。そうか、ムライは先日の子の犯人を、魔術で捕縛したのだったな。もしかや魔法剣士を目指しているのか？」

「え、いえ……。あのその、特にどれを目指している、というわけでは……」

マルが出した単語に有坂が食いついた。

「魔法剣士？ それってそのまま、魔法も使える剣士って意味よね？」

「その意味で概ね間違っではない。魔術を戦闘に用いる者達の戦い方は主に三つに分けられる。その一つが俗に魔法剣士と呼ばれるものだ」

「その話、もっと詳しく聞いてもいい？」

「構わんが。そうだな、主に魔術は強化しか使用せず、剣や槍などの近距離武器で戦う者を通常、戦士や剣士と言う。逆に魔術を主な攻撃手段とする者が魔術師や術師と呼ばれる」

「あ、魔術師って研究者みたいなイメージがあったんだけど、戦う人の呼び方だったの？」

「ああいや、言葉が足りなかった。これは戦い方を三つに分ける上での便宜的な呼び名だ。本来であれば魔術師といえば、魔術を専門的に修めた者を言うのだ。戦いを生業なりわいにしていなくともな」

「ふんふん」

案外面倒見が良く詳しく解説してくれるのを、鋼も興味深く聞いていた。

「そして今挙げた二つの戦い方の中間がいわゆる魔法戦士、あるいは魔法剣士などと呼ばれる。武器を振るい、そこに下級の魔術も織り交せて戦う。だがこの戦い方をする者は非常に少ない。あまり有効な戦い方では無いからだ」

「え、なんでや？ 剣士に魔法が足されるんやから、弱いはずがないと思うんやけど」

「剣の道も魔術の道も、甘いものではない。大抵はどっちつかずの中途半端で終わってしまうのだ。それに他の事に思考を割きながら、本来の実力で戦える剣士などいない。更には、剣と魔術の攻撃を一人で両立させるよりは、剣士と魔術師が組んだほうが結局は効率がいいという理由もある」

マルは語る。

騎士は国に所属する剣士であるし、国に仕える魔術師が宮廷魔術師と呼ばれる人々だ。それぞれの技能に特化した人材をセイラン王国は求めているが、例えば魔法剣士のみは騎士団、というようなものには無いらしい。確かに騎士がそれぞれ違う魔術も使うなら、指揮するほうは困りそうだ。

「だが大半の二ホン人は、魔術の授業も剣術の授業も全て取っている。本来はあまり勧められん事なのだが」

「どうせ後期の選択授業じゃ剣術取る奴はかなり減るさ。日本人はかなり魔術に憧れがあるからな。剣術取ってる奴もだいたい、魔法も使える剣士ってのを目指してるだけだと思うぞ」

「そうなのか？ 確かに冒険者などは、武器も魔術も習得している場合によって使い分けるとい話も聞く。目の前の敵には剣で、離

れた相手には魔術で、というように」

「へえ」

校庭の片隅でだらだらと駄弁っていると、他の剣術経験者の生徒同士の試合は終わりを迎えていた。実は試合中だったのだが、凜や有坂、そしてマルと比べればそこまでたいした技量では無かったので、軽く目で追いつつも雑談していたのだ。

「ああそれと、今言った分類法は一般的に広まっているが、正式な呼称というわけではないからな。多少魔術を習得しているが基本的には剣だけで戦う、といった者が剣士と名乗ったりする事はよくある。どこからが剣士でどこからが魔法剣士かなど、境界線は人によって曖昧だからな。そういう考え方もある程度に捉えておいたほうがいいだろう」

「よく分かったわ。ありがとう」

教師顔負けのマルの解説を踏まえて、鋼は考えてみる。

自分達をその分類法に当てはめてみると、鋼は魔術も扱える剣士、凜は剣も扱える魔術師、そして日向が魔法剣士という事になりそうだ。これはそこそこバランスのとれたメンバーではなからうか。

「あ、やべ」

話していて気付くのが遅れた。試合の審判を終えたシンドが、明らかにこちらを見据えてずんずんと歩いてきていた。

「試合が終わっても堂々と雑談。いい度胸だな、お前達」

その後、六人仲良く怒られましたとさ。

その日の昼休み。

学園の食堂よりも、正直なところ満月亭の方が料理が美味しい。なので本日もそこで昼食をとる予定だった。

今日はマルにも声をかけてみようと思っていたのだが、休憩時間

が始まると即座に教室から出て行ったので、鋼・日向・凜・省吾・有坂・片平といういつもの面子となっていた。そして鋼達が学園を出たところで、護衛官を連れたマルと遭遇した。待っていたという感じでは無い。出かけていて、今学園へ帰ってきた風だった。

マルは神妙な顔をしていて、どことなく緊張感が漂っていた。学園から出てきた鋼達に気付き、まっすぐこちらに向かってくる。

「……どうした？」

様子がおかしいのは分かる。端的な問いかけにマルは答えた。

「今、あの店に行ったのだが。閉店していな」

用事というわけではなく、どうやら先に店に行っていただけのようだ。

「閉店？」

「臨時休業、という札がかかっていた」

「他には？」

「いや、それだけだが……。妙に気になってな」

あの店に柄の悪い男達が出すかも、と鋼が教官に話したのを、以前こいつも聞いている。突然の臨時休業を、何か不吉な予感のようを感じているのだろう。

「少し心配だったので、中の様子を伺ってみようと思ったんだが。

それはターレイに止められた」

「当たり前だ」

「……むう。お前もそう言うのか。確かに休業中の店に入っていくのは非常識かもしれないが……」

そんな理由で鋼は当たり前だと言ったわけでは無い。

「違う。見張られている可能性を考える」

その可能性に初めて思い当たり、驚愕の表情となるマル。やはりターレイはそれを分かっていたようで、鋼と目を合わせ僅かに頷く。事情をあまり知らない省吾が訊いてきた。

「なあ、どういう事や？ 臨時休業っただけでそんな警戒しやなあ

かん理由あるんか？」

「あー。すつげえ簡単に説明するとだな、地上げ屋があのお店をしばらく前から狙ってたんだ」

「ジアゲヤ……？」

「そら物騒な話やなー」

マルが怪訝そうに訊き返し、省吾は少し真面目な顔になる。

ともあれどんな事情があるにせよ、このまま満月亭へ行くのは得策ではない。今現在すら、店まで行ったマルに監視の目が光っていてもおかしくはない。渋るマルを鋼はターレイと二人で説き伏せて、一旦八人は学園へ引き返したのだった。

それはもちろん、見せ掛けだけの事だったが。

その数十分後、鋼の姿は満月亭の裏口前にあつた。

「開いてたらそのまま入るぞ。本当にただの臨時休業だったら店の人に謝ればいい」

店の表の通りでは無く、建物と建物との間の見慣れぬ細い路地に鋼は立っている。見上げるのは店の裏側で、同行者は三名だ。

マル、ターレイ。そして絶対についていくと言い張った、凜である。

様子を見てくるだけだから、と省吾達には食堂で残ってもらっている。マルも置いて来れば良かったのだが、まあこの熱血貴族が事態を静観するはずもなく。護衛官のターレイも諫めるような事を多少はマルに言ったのだが、頑固な性格は百も承知のようで最初からどこか諦め気味だった。

「お邪魔しまーす」

ドアを開け、声をかけながら建物に入る。施錠はされていなかった。

暗い。閉め切った建物内は窓からの光以外、全く光源が無い。

「暗いな。……誰かおられませんかー！」

マルが呼びかけても、満月亭内部からは何の反応も返って来ない。

無人だろうか。

先に一階を調べるつもりで歩いていると、見慣れた空間に合流する。鋼達も何度も食事をとった、客用の座席がある飲食スペースだ。無人だという予測はそこで間違いだと判明した。閉め切った薄暗い店内に、一人の男性が座っている。

店に通う内に何度かちらりと見た、料理人らしき年配の男だった。のろのろと億劫そうに首を巡らせ、彼は鋼達の方を見た。

「ああ……、お客さんかい？」

「普段は客として来ておりますが、今日は違います」

裏口から堂々と入ってくるなど、客にしては不自然極まりないのに。どうにも男性の反応は鈍い。

「ああ、よく来てくれる子達だね」

「はい。失礼ながら、臨時休業の札を見て裏口から入らせて頂きました」

「何か用事だったのかい？ 悪いけど今日は……」
憔悴。

そんな言葉がしっくりくる程、マルに対して受け答える男性の声には覇気がない。

「以前より男達に、この店が営業妨害を受けていたのは聞いております。何かあったのではと思います……」

「……あったも何も」

どこか捨て鉢に、男性は机の上に置いてあった紙をこちらへと寄越す。

何が起こって臨時休業となったのか。おおよその事態を鋼はこの時点で察した。

「それは？」

「読んでみるといい」

受け取ったマルが目を落としたその手紙の内容を、鋼達も後ろから窺う。

『娘は預かった』

そんな一文で、この手紙は始まっていた。

ある大人は、以前鋼に言った。

「もつと大人を信用しろ」と。

「他人に頼る事を覚えろ」と。

と、いうわけで。

今鋼の前には、頭痛をこらえるような表情のシンド教官がいる。

「またお前は……、とんでもない物を持ってきてくれたな……！」

その手にあるのは満月亭の店主から預かった手紙である。内容は要約すると、以下のようなもの。

娘は預かった。

店の土地の権利書を持って、午後二時に指定の場所へ来い。

警備隊に知らせれば、娘の命は無いと思え。

「なんとかありませんか教官！ こんな非道、許されるものではありません！」

マルは息巻くが、対するシンドはさすがの貫禄できろりと睨み返す。

「警備隊に知らせるなという事は、それを防ぐために店が見張られているという事だ……！ それを迂闊にもお前は、証拠となる手紙を堂々と持ち出したんだぞ！ 分かっているのか！？」

若干怯んだマルに代わり今度は鋼が答えた。

「店には裏口から入りましたし、見張りの有無は確認しましたよ。恐らく大丈夫かと。それに俺達は別に、警備隊じゃないっすから。屁理屈かもしれないですが、奴らとしても目的のブツをまだ手に入れない以上、今の段階で人質の命をどうこうする理由は薄いはずです」

「……」

シシドの顔には熟考の色。

「本来なら、学園生徒でも何でもない者の事情など関係ないと突っぱねたいところだが。……さすがに誘拐というのは、穏やかではないな」

「では教官」

「まず言っておくが、学園としてはこの誘拐事件に関して、何らかの対処をする事はできん」

一旦明るくなったマルの表情が、忙しなく今度は怒りの形に変わろうとする。それを制してシシドは続ける。

「俺が個人的に、警備隊にツテのある知り合いに相談してみよう。

事件について漏らさないと断言出来る、信用できる人間だ。お前達はこれ以上余計な事をせず、通常通り午後からも授業に出ろ」

「教官、何か僕達にも出来る事はありませんか!？」

言い募るマルに、シシドはぴしゃりと言う。

「無い。いいかガンサリット、これ以上お前達は動くな。人質の命がかかっている、くれぐれも軽々しい真似は控えろ。この件に関して、絶対に悪いようにはせん。後は任せて、お前達は続報を待て」

シシドにとつて縁もゆかりも無い、学園の外の事件だというのに、彼の対応は真摯しんじなものだった。この人は信用していいだろうと鋼は思った。

何か手伝いたいのにな、という顔で悔しそうに立ち尽くすマルの肩を、後ろから叩く。「お願いします」と一緒に頭を下げ、鋼とマルそして同伴していたターレイと凜は、シシドの私室も兼ねていそうな準備室を後にした。

午後の授業が一つ終わる。

手紙に指定されていた時刻は、既に少しだけ過ぎていた。今頃は

満月亭の店主が犯人と接触しているはずだ。

「といつてもシッドに釘を刺された上、ただの生徒に過ぎない鋼達に出来るのは漫然と授業を受ける事だけだ。もちろん授業をさぼって何か行動を起こす事は可能かもしれないが、それは事態の解決に奔走しているはずのシッドの誠意を踏みにじるのと同義である。」

「教官に何か進展があつたか、聞いてくる」

「いてもたつてもいられない、といった様子でマルが教室から出て行くのを鋼は見送る。恐らく何の進展も無いだろう。教官に知らせたら今まで、いくらなんでも時間が無さ過ぎる。」

店主には犯人達の要求通りにさせ、後から介入して土地の権利書を取り戻す、という方向でシッドは事件の解決を狙うはず。警備隊にツテのある知り合いにも、そのための手配を頼むに違いない。

「あの人、大丈夫でしょうか」

「大丈夫やと信じたいわなあ……。最悪、店取られても命さえ無事やったらええと思うよ、ほんまに」

片平が心配し、省吾もしみじみ言う。さすがに誘拐事件とあつては明るい雰囲気になる訳も無い。

その内にシルフ組から凜と有坂もやって来た。

「あのいきなり魔法撃たれた時も結構な事件だったけど。こんな大事おほになるなんてね……」

「はい……」

ややシリアスな空気を保ちながらも、ぼつぼつと雑談。

そのうちに五分が経ち、十分が経った。

「おせーな、マルの奴」

「教官と話し込んでるんちゃうん？」

「もしくは見つけられずに探し回ってるか、だな」

解決の目処が立つまで、シッドはあまり詳しく誘拐事件については話してくれない気がする。マル相手なら尚更だ。時間がかかっているのは教官相手にマルがしつこく詰め寄っているか、教官を見つけれないか。そのどちらかだろう。

誘拐事件それ自体に、思う事がないわけではないが。鋼は思ったよりも冷静な自分に気付いた。

まあ、こんなものかもしれない。

家族や友人、大切な仲間が連れ去られたのなら誰だって平静ではいられないだろうが。所詮は数回会っただけの少女だ。

やがて、次の授業の時間が迫ってくる。

マルはまだ帰って来ない。

さすがこれは少しおかしいのではないかと、鋼達も思い始める。

この日。

鋼の知る限り、初めてマルが授業を欠席した。

ほんの少し時間を遡る。さかのぼ

「そんなすぐに進展があるか！」

とシンド教官から叱責をもらい、マルケウス＝ニル・ガンサリツトは教室へと引き返していた。

肩を落として、とぼとぼと歩いている。カミヤが同行しなかった理由が今なら理解できた。

僕は、無力だ。

貴族ではあるが、所詮は学生という立場の弱さ。カミヤに及ばない剣の腕。

そういつた弱さだけでない。何より己に足りていないのは冷静さだ。マルケウスとて、その自覚くらいはある。

目前に明らか悪がいれば、マルケウスは騎士として、危険を顧みずに挑む事が出来るだろう。しかし人がさらわれ、所在も分から

ないという今の状況では、どう動いて良いのか全く分からない。思考は空回り、考えるのをやめて直感で動くには、かかっている人の命は重過ぎる。

途中経過を自身が聞く事に何の意味があるのか。結局は教官に全てを委ねるしかない。

あまりに無力だ。

「……」

教室に真っ直ぐ帰るといふ気分でもなく、マルケウスはふらふらと遠回りの帰路を選ぶ。

ふと、二つ前の剣術実技の授業を思い出す。誘拐事件やムライとアリサカの試合とは何ら関係ない、取るに足らない些細な事だが。あの時そういえば、同じクラスの女子生徒が、髪留めをどこかに落としたとか騒いでいた。

なんとなしに校舎の傍の茂みを見つめ、マルケウスは決めた。ぐだぐだと暗い思考に陥るくらいなら、待つ間のこの時間をもう少し有意義に使おうと。

落とし物探しに夢中になってしまい、我に返った頃には結構な時間が経っていた。

しまった。これは授業開始に遅れるかもしれない。

粘った甲斐あって、落とし物らしき髪留めは発見できたのだが。

いつの間にか校庭近くの茂みにまで足を伸ばしている自分に気付き、苦笑する。

「すまん、わざわざ来てもらって」

声が聞こえたのは、目的も果たしてさあ立ち上がるう、というタイミングだった。

学園の教師の中でも特に聞き慣れた、シシド教官の声だ。

「まあ今の仕事は巡回だけだし、いいんだけどさ。わざわざ学園に呼び出すほどの用事か？」

応えるのはシシドと同じ年代くらいだろうか、知らない男性の声

である。さすがにぴんときた。

察するに、誘拐事件に関する話だ。巡回と言っていたし、相手の男は警備隊の人間だろう。二人は友人か、少なくともある程度気安い知り合いという関係らしい。

もう休み時間は終わっているのか、周囲に他の人の気配は無い。シンド達が立っているのは校舎沿いの歩道で、それと校庭に挟まれる形でマルケウスを隠している茂みがある。今立ち上げれば、間違いないで見つかる。

盗み聞くのは気が咎めたが、じつと息を潜めてマルケウスは耳を澄ませた。

「少し、立て込んでいてな。警備隊としてじゃなく、個人的に相談に乗ってもらいたい事がある。内密の話だ」

「おいおい……、どんな厄介事だよ。内容によるぞ」

「数日前にうちの生徒が、魔術で攻撃される事件があつたらう。またあれ関係でな。捕まった男とよく共に行動していた、他の男達について調べるよう、学長が頼んでいた。あれどうなってる？」

マルケウスは当事者ではないが、あらかし程度は聞いている。カミヤが狙われた一件だ。

「いや、そりゃ調べたけど……。なんだ、また同じような事件があつたのか？」

「……うちの生徒ではないが。生徒の友人が、誘拐された。その男達が犯人の可能性が高い」

驚愕した様子の相手の男に、シンドは今回の件について懇切丁寧に説明した。店への嫌がらせや、先日『火矢』襲撃事件はそのとばっちりだと予想される事など。身を隠すマルケウスには二人の表情は分からないが、警備隊の男は苦い声で告げる。

「……言いたくないんだけどな」

「ん？」

「警備隊が堂々と動く訳にはいかないんだろ？ ちょっとそれは、どうしようもないぞ」

「分かってる。店主が犯人の言い分に従って、店を手放して娘が戻ってきてからでいい。後から警備隊と協力して、犯人を捕らえて店も戻す、という風に出ないか？」

マルケウスにとつて、それはなるほど唸られる解決法だ。自分では思いつきもなかったが、聞いた後ではそれしか無いように思える。やはり教官は、頼りになる人だ。正義の人だ。頷くマルケウスはしかし、次の相手の言葉を聞いて硬直した。

「……すまん。多分、それは難しい」

「難しい？ 脅しに使われた手紙もこつちにあるんだぞ」

「……本当に、すまん。どうしようもないって言ったのはその事で。犯行現場を押さえれば話は別だろうけど……、後から逮捕は難しいと思う。あの男達が犯人なら、少し問題があつてな……」

「……。調べたと、言っていたな。一体どういう事だ」

「『闇傭兵ギルド』って聞いた事ないか？ 生徒への襲撃事件で捕まえた男は、どうもそれ所属らしくてな」

初めて聞いたがふざけた名前だ。どう考えても正規のギルド名ではない。

「聞いた事はあるが……。非合法の依頼を受ける、傭兵どころか盗賊みたいな奴らの集まりだったか」

「お前だから教えるけど、他にこういう事は漏らさないでくれよ。」

……あれは警備隊にとつても禁忌の一つでな。迂闊に手出しできないんだ」

その言葉はマルケウスに頭を殴られたのと同等以上の衝撃をもたらした。

今、彼はなんと言った？ 警備隊が手出しできない？

そんな存在が、あるというのか。それは許されるのか。

「……そんなにでかい組織なのか？」

「それもある。大本はセイラードにある同じ名前の組織のようだが、王都セイラードはこの国の首都だ。国王陛下のお膝元だ。」

断じて犯罪組織がのさばっていい場所ではない。ない、はずなの

だ。

「……他の理由は？」

「……ほんとに、その、言い辛いんだけども。そのギルドに干渉しようとする、うちのお偉いさんがいい顔をしない」

意味が分からない。本来であればマルケウスは、今にもここから出て行って警備隊の男を問い詰めただろう。

それすら出来ないほどに、座り込むマルケウスに与えられた動揺は大きかった。

「警備隊の上層部にも影響があるとなると、貴族か。くそつ、そういう事か……！ 後ろ暗いところのある貴族にとつても、非合法の依頼を受ける組織は役に立つ」

「ああ……。さっきも言ったように、現行犯なら話は別だ。闇傭兵ギルドが相手だと伏せて、その手紙を警備隊の詰め所へ持って来てくれれば、動く事も出来ると思う。だけど、後からその組織を調査して、誘拐があつたと証明するのは多分無理だ。上から止められる」

「……他に方法は何か無いか？」

「ちよつと思いつかない。……力になれず、すまない」

「……いや。お前が悪いわけではないさ。そのギルドについて聞かせてくれただけでも十分助かった」

「本当に、すまん。僕だって、警備隊のそついうのには納得いつてないんだ。警備隊は悪を見逃さない正義の集団だと、入隊前は思ってたんだけどな……」

「結局どこも、そんなもんだ。綺麗事だけで世の中は回ってない」

「ああ。入隊してからは、それを実感する毎日だよ」

やめてくれ。そんな話を、僕に聞かせるな！

マルケウスの叫びは実際には声にならなかつた。

がらがらと、足元が崩れていくような感覚。何より許せないのは、悪をのさばらせている大きな原因が貴族だという事だった。

マルケウスは正しい貴族であれと、常々自らに言い聞かせている。誇りと正義を失った貴族になど、何の価値も無いと思っている。

だがこの考えは、貴族全体で見ればむしろ異端だ。

後ろ暗い事をしている貴族の話など、いくらでも聞く。清廉潔白と信じている尊敬する父でさえ、お前は性根が真っ直ぐ過ぎるとマルケウスに言う。

シシドも言ったが、綺麗事だけで世の中は回っていないのだ。

そうと知っているつもりだった。知った上で、それでも尚マルケウスは他の規範となるよう、正しい騎士になると誓っていた。

だが、いざ目の前に突きつけられた現実はどうだ。マルケウスはそれに、易々と打ちのめされている。貴族に守られた悪人が民の暮らしを脅かし、警備隊はそれをただ見過ごす。そんなものが、今の世の中の当たり前前だというのか。

目頭が熱くなるのを、歯を食いしばって押さえ込む。

自分は貴族だ。騎士候補生だ。泣くものか。泣いてたまるか。誰も見ていなくとも、情けない真似をする訳にはいかない。

だが、しばらくの間、マルケウスは立ち上がる事が出来なかった。

呆然と茂みの中で時間を過ごして、どれくらい経っただろう？

気付けばとうに、シシド教官と警備隊の男はいなくなっている。

もはや授業も遅刻では済まず、欠席となっているだろう。

ようやく少し、感情の整理がついてきた。

周りに誰もいないのを確認しながら、立ち上がる。

シシド教官は言っていた通りに、誘拐事件をどうにか解決しようと動いてくれていた。それは確かだ。

だが、先程の会話を思い出せば一つの疑念が浮かんでくる。

彼を信じて待ち続ける事に果たして意味はあるだろうか？

誘拐されたのは生徒ではないから、学園が動く事は出来ない。本来ならそれは警備隊の仕事だ。そしてその警備隊は全く頼りにならないと、先程聞いたばかりである。もはや全てを諦め、店を手放す事で店員の少女が戻ってくるのを願うくらいしか、出来ないのでは

ないか。

人質の命は無事で済むかもしれない。だがあの親子の収入源であり、住む場所である店が理不尽に奪われるのを、ただ黙って見過ごす事は、己の正義にかけて出来ないとマルケウスは結論した。

ここで引き下がるくらいなら、騎士候補も貴族もやめてやる。敵は大きな闇組織だというが、どうなっても構うものか。

決意を胸に、マルケウスはこの場を後にした。

21 組織の力、個の力

「坊ちやまの所在をご存知ありませんか？」

マルの護衛官、ターレイが教室まで尋ねてきた。

本日最後の授業が終わってしまったが、マルは結局戻って来なかった。前の休憩時間にシンドを探しに行っただけだと教えると、護衛官は礼を言っただけで立ち去る。

「あいつ、勝手に何かやらかそうとしてるんじゃないやねえだろうな……」
鋼の呟きを、日向も省吾も片平も否定できない。生真面目なあいつが授業を休んだのだ、何も起きない方が不自然にすら思える。

凜と有坂も様子を見にこちらの教室へやって来た。

「あの貴族の人、帰って来なかつたんですか？」

「何か、変な事起きそうな気配よね……」

マルの不在を聞いた二人も不安を露わにする。

普段であれば、この場の六人が放課後に集まる事はあまり無い。

省吾と有坂の二人は学園敷地内にある第一寮に部屋があり、それぞれのルームメイト等他の付き合いもあって、放課後はそれぞれが好きに過ごすのが最近では暗黙の了解となっている。

だが今日に限っては、事件の事もありこのまま解散するのは誰も望んでいないようだった。

「教官にどうなってるか聞きに行くか？」

提案に皆が頷いたので、荷物を手にそれぞれが立ち上がる。

いるか分からないが、シンドが前いた場所である授業の準備室らしき部屋へ向かう。ほんの少し前、僅かな時間差でターレイもこの廊下を通ったはずだ。

一階廊下の、正門と中庭を繋ぐ歩道との交差点に差し掛かる。校舎内ではあるが、吹き抜けになっただけで外とも言える部分だ。

「ん？」
心配。

中庭の方から後頭部の辺りに飛んできた物を、鋼は顔を向けざまに掴み取る。緩やかな速度で飛んできたそれはただの小石だった。凜が即座に警戒の視線をそちらに向け、鋼ともども僅かに驚く。探し人が向こうから現れた。

人目を忍ぶように、マルが中庭の植木の陰から手招きしていた。他の四人もすぐさま気付く。

「……いましたね」

「なんか嫌な予感がするな。なんであんなこそそしてんだ？」

「というかあんまりちゃんと隠れられていない。近づいて、話しかける。」

「何やってんだ、マル。ターレイさんが探してたぞ」

「……ああ、分かっている。じいには見つかりたくないんだ」

ちなみにマルは、ターレイの事をじいと呼ぶ。お目付け役の目を盗んでまで一体何をやらかすつもりか。

「そりやまた、なんでだよ。悪事には加担できんぞ」

「悪事などではない！」

それまでとは打って変わったマルの感情的な断言に凜と片平がびくつとなる。眉をひそめて鋼はマルを見つめた。

「落ち着け。どうした一体」

「あ……、いや、すまない」

それきり彼はなんとさえいいのかわからないように、黙りこむ。なんだこの雰囲気は？ あまりにらしくない反応だった。弱気と
いうか、どうにもマルは精神的に弱っているように見える。

「場所を……、変えたい」

「場所？」

「人目につかない、落ち着いて話が出来る場所は無いか？」

この異様な態度。誘拐事件に加えて、更に厄介な話でも持ってきたんじゃなかるうな、と疑ってしまうが。というか、疑いの余地な

く間違いなくそうだろう。省吾が案を出す。

「講堂の裏とかどうや？ 第一寮とも離れてるし……」
ひとまず鋼達は場所を移す事になった。

これ以上、どう話がこじれるというのか。ため息をつきたい気分だった。

……。

幸いにも無人だった、講堂裏にて。鋼達はマルの話の聞き終わる。
「闇傭兵ギルド、か……」

マルが聞いてしまった警備隊の裏事情。さすがに軽いものでは無かった。

皆、苦い顔や難しい顔で黙って耳を傾けていた。

「それじゃあもう、諦めて犯人の言う通りにするしか無いってこと？」

「そんな事は……っ！ 断じて、認められん……っ！」

有坂が訊くと歯を食いしばってマルは否定する。だがそうは言っても、ここまで悔しそうにしているのだ。行動しようにも何もアテは無いようだった。

そう、鋼は思ったのだが。

「僕は……、待っているだけは、我慢ならん」

絞り出すような声で、マルは告げる。それは自分なりに行動を起こすという決意表明だった。

「僕は警備隊ではない。どう動こうと、人質の娘とは無関係だ」

「……お前、その理屈本気で犯人に通用すると思ってるのか」

「カミヤが教官に語った理屈だろう。脅迫文の内容は破っていない
どう見てもこの馬鹿な熱血貴族は、本気だった。

このまま鋼達が何も手伝わす放置したとしても。間違いなくこいつは一人でも何かやらかす。

「……………で？」

「ん？」

「お前が知ったその裏事情を俺達に聞かせたのは、手伝えとかそういう事か？」

「いや、そうではない。お前達はあの店の常連で、誘拐事件を知る騎士候補だ。知らせるべきだと思った。もし僕だったら、事情を隠されたまま知らされないのは耐え難い」

そりゃマルはそうなんだろうが。知らぬが仏ともいう。最後まで知らされないのであれば、それはそれで余計な苦勞など背負わず過ごせるだろうに。

「つーか、お前が今からどうしようがもう終わってる可能性が高いぞ。脅迫文には昼二時に土地の権利書を、と書いてたんだ。さすがにもう奪われてると思うぞ」

「ならば取り戻す方法を考える！」

そのくらいの可能性は既に考えていたらしく、間髪入れずにマルは断言。

「人質の命が無事だったからといって、誘拐が卑劣な犯罪である事に変わりはない！ あの親子が一体何をした？ 店を奪うという理不尽な仕打ち、到底許されるものではない！」

……………ヒートアップしているところ、悪いのだが。

「許されるものではない、ね。だったらお前は、どうすんだ？」

「……………考えては、みたのだ。だがお前達の考えを聞いてみるべきだと思った。僕はこういう難しい状況は、得意ではないのだ」

「結局手伝わすつもりじゃねーか」

「いや、知恵は借りたいが、いい案が無くとも僕は動く。そう、決めたのだ」

「……………」

言うべき言葉を、鋼は慎重に探す。黙り込んだこちらに対して、マルは微かにだが口の端に笑みのようなものを浮かべた。

「それにカミヤもどうせ、動くつもりだろう？ あの店のため、い

「ち早く行動を起こしていたお前の事だ」

「そうなの？　という有坂達の視線を感じ取るが、そちらに視線は向けない。鋼はマルを凝視する。」

「その表情は、こいつが初めて明け透けに見せてくれた、信頼と呼ばれるようなものだ。」

「鋼が正義の志を抱いた騎士候補だと信じて疑わない、純粋な視線。湧き上がった感情に従い、鋼は口を開く。」

「何馬鹿な事言っただ？」

「苛立ち。」

「それが、今鋼の中に浮かんできた感情の名だ。」

「む……？」

「相手は警備隊ですら手を出しあぐねてる組織だった？　それを聞いて、俺が動くだけでも？」

「マルの顔にはいまだに理解不能の文字。全くもって、気に食わなかった。」

「な……、ならカミヤは、もう諦めるつもりなのか！？」

「当たり前だろうが。ただのゴロツキ相手ならともかく、そんな組織を相手どって個人に出来る事があるとでも？」

「何か、あるはずだ！　それとも貴様、その組織がこれから悪行を重ねようとも、それを理由に全て見過ごすというのか！？」

「そう言っているつもりだが？」

「急激に頭に血が昇って、マルは茹で上がったかのように真っ赤になっていた。ここまで考えが離れているとは思ってもいなかったのだろう。だが正当性は鋼にある。この少年が少し、楽観的に過ぎるのだ。」

「貴様……っ！　それでも騎士を志す者かっ！？」

「別に俺は、騎士になるつもりは無いんだがな。勘違いしているらしいが、俺はむしろ平均より不真面目なほうだ。正義感なんてのも

そこまで無い。だがまあ、それでもこの場においては、俺の言い分のほうがお前より正しい」

「正しい訳があるか！」

激しさを増す口論に、有坂が仲裁に入ってこようとして省吾に止められているのが視界の端に見えた。

「現実を見てない正しさは、ただの理想って言うんだよ。なら訊くがお前、諦める以外に取れる手段を教えてくださいよ。闇傭兵ギルドそのものを頑張って潰すか？」

「そこまでしなくとも、権利書を取り戻せばいいのだ！」

「ならもう一回同じ誘拐事件が起こるだけだな」

勢いを失い、マルが言葉に詰まる。

「しかもそれは、お前の思うように上手くいったとして、だ。取り戻すのに失敗してお前が組織にでも捕まれば、ターレイさんにもお前の家にもすげー迷惑がかかるんだろうな。貴族の人質だ、今度は何要求されんだろうな？」

「……捕まらないように、上手くやる方法を考える。誘拐が二度と起きないよう、店の人達にも気を付けてもらえば」

「へえ。お前が学園で授業受けてる間、人でも雇って店の護衛してもらうのか？ これから先ずっと？」

マルは怯んでまた口を閉ざしたが、手加減などしてやらない。

「まあ、何もかも上手くいって、誘拐の再発も防げたでしょう。で、それで全部解決か？」

「……」

「そうはならないだろうなあ。店が駄目なら次の標的はお前だ。お前が駄目なら次はお前の知り合いだ。警備隊も手出しできない犯罪組織なんだ、きつと執念深いぞ？」

「……」

「お前が足掻いても、根元から解決しない限りどんどん周りも危険に晒す事になるぞ？ その事考えもしなかったか？ ……ふざけんなよ」

いかん、もう少し冷静に、と自分に言い聞かせる。自覚が無かったが、思いのほか鋼は怒りを感じていたようだった。マルの胸倉を掴み上げ、睨みつけていた。

命が関わるような問題を、軽く考える奴は嫌いだ。

「そういうの全部背負って初めて、正しい行動するのは許されんだよ。確かに今起きてるのは理不尽な事件だ。んな事誰でも分かっているんだよ。だからって行動しない奴を批判する資格は、間違ってもお前には無い」

マルは気圧されたようではないながらも、こちらから目は逸らさなかった。静かに頷く。それで鋼も手を離れた。

少し冷静さが戻ってきて、しかしまだ完全に頭が冷えたとも言えない状態。息を詰めて成り行きを見守っていた省吾達に「わりい、後頼む」とだけ言い残し、鋼は講堂裏から立ち去った。

数歩遅れて、背後に二人分の気配が続く。それが誰かなど確かめるまでもなかった。

講堂から十分に離れた、校舎の傍までやって来た。

歩くこちらの背中に、日向の声がかけられる。

「手伝うよ?」

幼馴染の厄介なところは、察しが良すぎる点だと思う。

「いや、手伝うって何をだよ」

「鋼がやるうとしてること」

「……何言ってるんだか」

日向に続き、もう一人の決然とした声も届く。

「もちろん、私もついて行きますからね? コウ一人でやるうなんて思わない事です」

「だからお前ら、何言ってる……」

言い返す途中で鋼はため息をつく。それで色々と、諦めた。

「……。話変わるが。クーの奴あの店に連れてった時、かなり絶賛

してたよな」

「してたね。おかわりして二人分食べたし」

「ニールのところから帰ってきてあの店が潰れてたら、ショック受けるよな」

「はい、それはもう。クーちゃんは食いしん坊なので、かなり落ち込むかと」

流れるように二人から返答が来る。

本当に。全て分かっているとわんばかりの態度が心外ではあるが。

「あー……。しゃーねえな」

マルにはああ言ったが。偉そうに説教のような真似事もしてかしてしまっただが。

組織に対し、個人が無力だというのはだいたいの場合において間違っではない。そう。

だいたいの場合においては。

「……潰すか、闇傭兵ギルド」

「うん」「はい」

言ってみると、本当に何の気負いもなく。全く淀みなく、戦友の少女二人は頷きやがった。

「……さらっと返事しやがって。別に俺達の命が狙われてるわけじゃねえんだぞ。こっちから首突っ込んでどんくらい危ねえ目に遭うのか、未知数だし」

「でも鋼はもうやる気なんですよ？ 最初からそのつもりじゃなかったら、あんなメールしてくる訳ないし」

日向が言っているのは今日の昼休みに鋼が出したメールだ。

鋼が凜とマルとターレイの四人で満月亭を裏口から訪ねた、その少し前に予め送信していたもの。学園で待っているように見せかけて、省吾達には怪しまれないよう抜け出せとメールで指示を出したのだ。

こいつには一人、別行動を頼んだ。あの時鋼が見張りの有無を確認したのだが、案の定店の裏口も見張られていたので、その見張りを更に日向に監視してもらったのだ。誘拐の手紙を持ち出した事など、実は最初から犯人達に筒抜けだったりする。言い訳させてもらうと仕方なかったのだ。あの時は何故臨時休業なのか不明だったから、見張られているだけでは引き返す理由にはならなかった。

店主に脅迫文を見せてもらい誘拐と判明した時点で、念のための保険として待機させていた日向にメールで更なる指示を出した。こゝろ見えてこの幼馴染、尾行や隠密行動はお手の物だ。そういう訳で既に鋼達は、携帯の写メールで見張りの男達の人相を押さえているし、鋼達の動きを仲間に報告するため移動した見張りの一人の後をつけて、犯人達の大まかな居場所ですら把握を終えている。

「あそこまで私にやらせといて、まだ誤魔化そうとしたのがむしろびつくりだよ……。どう考えても最初から、鋼は自分で動く気だったクセに」

「……んな事ねーよ。さっきのマルの話を聞くまでは、マジで教官に任せとくつもりだった」

警備隊を頼れないと分かった今も、シンドは別の解決法を探してくれている気がする。鋼が行動を起こそうとしているのを知れば、彼は思いつきり顔をしかめる事だろう。

日向が無邪気な動作で首を傾げる。

「うーん、そうかなー？ 教官に全部任せるとしたら、満月亭に裏口から入ったのを見張りに見られてたつてとこまで、正直に鋼は話したと思うんだけど。あの情報を自分だけが握ってる意味って、人質の身の安全に関しては鋼がなんとかするつもりだったから、だよな？ で、鋼がどうでもいいって思ってる店の権利書とか身代金とか、そういうのだけ教官に任せるつもりだったんじゃないの？」

「……………」

何を答えてもボクを出しそうだったので鋼は黙っておく。こいつの察しの良さは、たまに読心術の存在を疑いたくなる程だ。学校の

成績とかは軒並みたいた事なくせに。

「……ヒナちゃんって本当に、コウの事良く分かってますよね……」
どこか不貞腐れたように凜が呟く。張り合うものでもないだろうに、こいつはこいつで何を言ってるんだか。

そろそろ、意識を切り替える。

最重要事項を先に確認しておかなければならない。人質が返ってきているかどうかを。

返ってきていればよし。そうなればわざわざ闇傭兵ギルドに、喧嘩など売るつもりは無い。

だが相手は平然と卑劣な犯罪を起こす、警備隊に捕まる心配も少ない闇組織。素直に人質を返すか甚だ怪しいものだ。

「じゃ、ヒナ、ルウ。そろそろ行くぞ。まずは満月亭だ」

「了解」「はい！」

二人の少女を引き連れて、鋼は学園の正門を通り抜けた。

満月亭店主は指定の場所へ出かけ、要求通りにしたという。

土地の権利書を正式な商会で金に変え、それを身代金として誘拐犯に渡した。約束は果たしたから娘を返せと迫ったところ、ちゃんと返すから帰れとすげなく言われたらしい。

正式な土地の所有者では無くなっていたが、店主はひとまず満月亭に帰った。そして娘が返還されるのをぼんやりと待っていたところを、鋼達が再び訪ねた。そういう状況だった。

彼の話聞いて、鋼達は結論を出す。

これ以上待つてみるまでもない。恐らくこのまま待っていても、人質の娘は返って来ない。

満月亭を出た足でそのまま三人が向かったのは、以前奴らに連れ込まれた酒場である。

見張られている視線をやはり感じる。いや今の場合は、敢えてそれを放置しているのだが。

「コウ」

酒場の前で一旦立ち止まり、看板を見上げたその時、凜が呼びかけてくる。

「念のため『加護』をもらっておいていいですか？」

「そうだな、こっからは何あるか分かんねえし。……ただ、『加護』なんて大層なモンじゃねえがな」

戦友達の間で定着している、とある術式の名称を鋼はあまり認めていない。

かつてそれは亜竜山脈で、鋼が幾度と無く行使してきた身体強化に分類されるであろう魔術だ。該当する術式は魔術名鑑に載っておらず、誰が最初に言い出したのかいつの間やら『加護』なんて大

仰な呼ばれ方をされていた。実際にそのような名前の魔術は無いで、この名を出しても身内以外には全く伝わらない。

これまでも鋼は何度も呼び方を改めさせようと苦言を呈してきたのだが、特に効果は無く今に至る。

「……しかし、久しぶりだなこれ」

久しぶりと言っても特に不安は無かった。ここ最近何度も発動させている《身体強化》の術式とほとんど変わりはないのだから。

こちらを向いて待っている凜に鋼は手を伸ばす。

鎖骨の中央部あたりに、制服越しにそつと触れる。

「始めるぞ」

「……はい」

どことなく恥ずかしそうに目を伏せる凜。そういう反応をされると鋼も結構やりづらいのだが、努めて流した。

誓って言うが、胸自体には触れていない。位置的にはそこは胸とは言わない、多分。

「……」

触れた箇所から、温かく優しい『何か』の流れを感じ取れる。

それは彼女の身体を巡り、満たしている。学術的な知識は乏しくとも、それが魔力なのだと鋼の感覚は理解していた。慣れ親しんだ感触とさえ言える。

折り曲げた体の部位を伸ばすが如く、触れている指先からこちらも魔力を投じていく。凜の魔力の流れに、それとは異質の別の魔力が沈んでゆく。

「ん……」

彼女が一瞬だけ目を閉じ、小さな声を漏らす。訊いてみた事があるが、別に苦痛の呻きでは無いらしい。静電気が突然走ったのに近い感じなのだとか。だから魔力の同調の瞬間は、驚いてしまいついそういう反応になるのだと、以前凜は顔を赤くさせながら語った。

魔力の同調。

それが今、鋼が行っている作業だ。

微量の魔力を、鋼は相手に送り続ける。重要なのは彼女の身体に満遍なく行き渡らせることであり、魔力の量自体はそれほど必要ない。そうして少し経てば、互いの魔力が混じり合った状態になる。これで、凜のものが含まれていようと、その魔力を用いて魔術を組み立てられるようになった。

掌握した魔力で、使い慣れた術式を彼女の体内に構築していく。鋼が最も得意とする魔術は、念入りに手がけても数秒とかわからず発動までを終える。

手を離し、次はその隣に立つ日向に同じようにする。こちらは最初から目を閉じ、特に声もなく。淡々と二人目も終わった。

他者の魔力で、他者に対して《身体強化》をかける。《加護》という大層な名の術式の正体は、言ってしまうとただそれだけの事だ。厳密には《身体強化》そのものと、何ら違いがない術式である。

しかし結果として、《加護》と《身体強化》では大きく差が出る。何故なら施術者である鋼は、日向や凜よりも《身体強化》の適性が高いからだ。これで彼女達は、本人の資質に関係なく鋼とほぼ同レベルの《身体強化》も得る事が出来る。

この魔力の同調、あるいは魔力の共有。かなり便利な技なのだが、実はこれも鋼達が勝手に名付けたものだ。最初に見た時ニールは「いやそんな馬鹿な……」と啞然としていた。何でも、違う魔力同士は反発するのが魔術の常識らしく、理論上あり得ない現象らしい。だがまあ、やってみたら出来たのだ。

話は少し脱線するが。

かつて、ニールに師事して魔術を習い始めた頃。

鋼とその仲間達は、それぞれ魔術適性にバラつきがあった。鋼に一步及ばないものの日向だけは《身体強化》も得意だったが。基本的に皆得意とする方向性はバラバラで、例えばクーが得手とした炎

系と冷却系の魔術は鋼には使えなかったし、様々な魔術を扱えた凜は《身体強化》だけはからつきしだった。当たり前前の事だ。苦手な分野の無い万能の人間など、そうはいまい。

それは適性という言葉で片付けられる、世界のどこにでもある能力の不均一に過ぎない。今では鋼も理解しているつもりだが、当時は何度も首を傾げた。凜の強化のお粗末さは、鋼にとってはあまりにも理解しがたいものだったのだ。

共に戦ってきた鋼は知っていた。拙いところはあるが、十分に凜は肉弾戦だつてこなせると。その彼女が、鋼にとっては手足を動かす延長線にあるも同然の、単純な強化すら覚束無い。一応は発動できるがそれだけだ。これでは折角技術で勝つていても、《身体強化》した相手に近接戦では勝てないだろう。納得がいかなかった。

鋼と同じレベルは望むべくもないが、せめてもうちょっと上手く出来るはずだとアドバイスを重ねた。言葉を尽くして多少は上達するも亀の歩みで、もどかしくなった鋼はもっと直接的に指導できないかと考えた。

手取り足取りという言葉があるが、思いついたアイデアはそれに近い。彼女の魔力を使って、質の高い《身体強化》を組んでみれば感覚で理解できるようになるのではないか。

魔力の拒絶現象という魔道における常識を無視した思いつきを、そんなもの当時知らなかった鋼は実行に移した。

外から内なる魔力に干渉する。

最初は何やら抵抗のようなものを感じ、今のようにはいかなかったが。それほど強い抵抗でもなく、無理そうな気はしなかったので凜に声をかけたりしながらチャレンジを続けた。その時は確か数分くらいかかったと思うが、とにかくまあ、成功したのである。

そうして彼女の魔力でお手本となる《身体強化》を組み上げ、後は彼女自身が魔力を消費し続ける事で術式が維持されるようにした。日を跨ぎ^{また}これを何度か繰り返しただけで、効果は抜群に現れた。別人かと思ふほどに《身体強化》が急激に上達したのだ。

これはいい方法を見つけた。魔物との戦いで、仲間達の生存率は間違いなく上がる。

歓喜と興奮を噛み締め、鋼は他の戦友達にもこの同調による指導を行った。全員と同調は成功した。

ルデスでの生活を終える頃には一番強化が下手なのはニールになっていたと言え、どれだけ大きな成果を挙げたか分かるだろう。魔物の山に一人住んでいた彼女は、間違いなく一流以上の魔術師なのだから。

もちろん《身体強化》だけじゃない。同調の利点は絶大だった。《身体強化》くらいしか魔術の適性が無かった鋼は、同調でクーから《火炎》と《冷却》を学んだ。凜から《圧風》と《穿風》を学んだ。日向から《電撃》と《薬物生成》を学んだ。補助的な魔術に適性があったあとの一人からは《望遠》と《念話》を学んだ。

魔術を学んだのはたった半年といえど、この同調訓練により鋼は扱える魔術の種類だけは増えに増えた。といってもあくまで使えるだけで、結局のところその術式を本来得意とする本人のように上手く扱いきれないのだが。それに《空調》のような難易度の高い魔術は、そもそも同調訓練を経ても自力で発動させる事は出来なかった。

クオンテラに驚愕された魔術のレパトリーがありながらも、鋼が自身の魔術の腕にあまり自信が持てなかった理由がそれだ。

現在は魔術の可能性について、鋼も考え直している。実際、下手くそれでも使える魔術の種類が多ければ、工夫次第でかなり色々出来るはずだった。

同調に五秒、術の構築に三秒ほど。

最初の頃より随分と短縮された時間で《加護》二人分を終えて、鋼は二人を連れ酒場へと入る。

今日は客は少なかった。二組四人の男が、ちびちびと酒を飲んでいる程度。入店した鋼達を硬い表情で迎えてくれた。ろくに顔も覚

えていないが、前回十人とやりあった際に倒した相手か、その時の他の客かもしれない。

店の奥、カウンターの向こうにはバーテンダーがいる。前回も空気のようそこにいただけの男だった。

「なあ、ちよつと訊きたいんだが」

一直線に近づいて行ってそう話しかけると、いかにも無愛想な中年のバーテンダーはぼそぼそと口を開く。不思議と聞き取りづらくはなかった。

「……帰ったほうがいい。アンタらにとっても、俺達にとっても、それが一番良い選択だ」

「忠告はありがたいが。それで帰るようじゃ、最初からここには来てない」

「……」

口を閉ざしたバーテンダーの男を前にして、鋼は日向に視線で促す。取り出されたのは彼女の携帯だ。満月亭を見張っていた男達の隠し撮り画像が納められている。

「この常連じゃねーかな、って思う男が何人かいてさ。誰か一人でいいから会いたいんだ。この中に知ってる顔はないか？」

携帯というモノ自体に不慣れなのだろう。奇怪なものを見る目で表示されていく男達の顔を眺めるバーテンダー。だがすぐに冷静さを取り繕うと「知らんな」と目を背けてしまった。

本当に知らない可能性もあるが、しつこく追及はしなかった。

鋼達はまだ十分な情報を持っていない。日向に見張りを尾行させた際、深追いはさせなかったので犯人グループのアジトも大まかな場所しか判明していない。しかしそれを踏まえても、がつつく必要性は感じていなかった。

「それじゃ、ちよつと待たせてもらうかな。この男達の誰かが来るかもしれないし」

正気を疑う目でバーテンダーが鋼を見る。やめたほうがいいと静かに首を左右に振るが、その意図は分からなかった振りをした。

満月亭からずっと、見張られているのだ。ここに留まっていれば、焦らずとも向こうから道案内はやって来るだろう。自身を囷にしているのだと彼も気付いたようで、今度は呆れたように首を左右に振り、それから空気のよう干渉してこなくなった。

カウンター席に鋼は腰を落ち着け、左右に日向と凜が座る。これからの指針と予定は既に二人には説明してある。何があっても臨機応変に対応してくれるだろう。

彼女達を、巻き込むべきでは無いのだろう。

今回の誘拐事件に自分から必要以上に首を突っ込んでいくのは、言ってみればただの個人的な我儘だ。わがまま正義の人でない鋼も、胸糞悪い事件だな、くらいは感想を抱く。これから二年は暮らしていくパルミナに犯罪組織が根付いているのも気にくわれないと思うし、鋼が中途半端に関わったせいでただの地上げが誘拐にまで悪化した可能性もある。

ちくちくと心に引つかかるものが色々あって、いつそ解消してやろうと決めたのだ。動機としてはその程度。大切な戦友達を危険に晒してまで、実行に移す理由としては弱い。

考えたところで、今更だ。

それが些細な理由からでも、鋼が踏み込むと決めた危地にはこいつらも必ずついて来る。逆も然りだ。しか動かないか、彼女達を巻き込んで三人で動くか、その二択しかない。そしてその二択なら、鋼は後者を選ぶ男だという事。うだうだと考えたところで、その事実是不変ならない。

一つの疑いが浮かぶ。

もしかすると、己は人助けを大義名分として、ただ戦いたいだけなのでは、と。

平和な日常は好きだ。だが五人で戦い抜いた過去の日々も、同じくらい悪くない。そう思っている自分がいるのもまた、本当なのだ。詮無い思索を打ち切る。再び異世界へとやって来たのにはその答えを探すという意味もあるが、たった今探す必要は全く無いはずだ。

った。

鋼は酒場の入り口に目を向けた。

入店してから十分ほど経過していた。

店の外で何か大きな動きがある。そう思った時には、漠然とした気配ははつきり聞き取れる靴音へと変化を遂げていた。

ぞろぞろと物々しい雰囲気をもとつた男達が、酒場へと次々に現れる。前回の十人よりは多い。そして多分、前回の奴らよりも更に荒事に慣れていそうな感じがする。

鼻が潰れている男、奇抜な髪型をした男、山賊のような髭もじやの男。いかにもな犯罪者集団だった。武器こそまだ抜いていないが、装備を見るに丸腰の奴はほほいない。

店外にまだいるのか知らないが、入店してきたのは二十人くらいだ。最初からカウンター席に座る鋼達を意識していた。

「おう、お前らだな？　こそこそ俺らを嗅ぎ回ってるニホン人のガキってのは」

小汚い格好の巨漢が、鋼へと歩み寄りながら声をかけてくる。

そして日向と凜、特に凜の方を見て、にまにまと下卑た笑みを浮かべた。

「へえ……、こいつは中々……」

「おい」

イラッと来たので鋼は初っ端から乱暴な口調になる。

「とつとと用件を言え」

「あ？」

眉を吊り上げた後、巨漢は大袈裟に肩をすくめて、他の男達と視線を合わせ笑いかける。

「聞いたか？　この勘違い野郎、俺達に喧嘩を売ってるようだぞ」

「今時いるんつすねえ、こんな調子乗ったガキ」

「強化が得意な騎士候補のエリートだか知らねえが、俺達の特別指

導が必要なんじゃねえかー？」

ぎゃはは、と下品な笑い声が唱和する。その中に混じって、くすくすという上品な笑い声が聞こえる。

笑いを引つ込めた男達が、声の出所に気付く。鋼の隣、凜の口元からそれは漏れていた。

「あ、すいません。おかしくって。コウの事を『勘違い野郎』とか『調子乗ったガキ』とか言うあなた達こそ、勘違いして調子に乗ったチンピラ風情だと、誰も気付いていないようでしたので……」

品のある笑みを浮かべながらも、毒のある言葉を凜は吐き出す。

こいつ、ほんとに人格変わるよな……。

鋼は咄嗟に脱力しそうになる自分を戒めた。それでもやはり、呆れるというか、ため息をつきたい気分というか。

どうやら《加護》の副次的な効果の一つらしいのだ。前代未聞らしいこの術式について、人体に危険は無いのか過去にニールも交えて色々検証した事があるのだが。その際判明した一つが、この毒舌からも分かる通り、人格の一時的な変化である。

精神に影響が出るとかそれだけ聞くと相当ヤバイ術式なのだが、戦友達は皆問題無いと断言している。テンションが上がってハイになるとか、酒で酔っ払って妙に強気になる、という程度のもので、人格を歪ますといった感じでは全然無いらしい。

いや、安全な術式かどうかの判断基準が本人達の間だけというのも不確実な話だが。この《加護》、本当に相手の魔力を借りて《身体強化》をしているだけなのだ。それ以上の余計な術式は一切組んでいない。その観点から見れば問題は起きないはずで、ニールも最終的には「自力では実現できないほど底上げされた身体能力を与えられれば、まあ誰でも気が強くなるか」と結論を出した。

魔力を同調させた影響、という説も浮上したが、戦友達はとにかく大丈夫だと自信満々に言うので、鋼もそれからはあまり気にせず使う事になっていた。今のように普段の凜とかけ離れた毒舌を聞いてしまうと、やはり少し心配になるが。

「……クツソ生意気な女だな。はっ、気の強い女は嫌いじゃないぜ？ 従順になるまで徹底的にいたぶんのも面白えからな」

「あなた達ごときに出来るんでも？ 下劣な上に、おめでたい頭の持ち主ですね」

「……決めたぜ。おいおめーら、この女だけは殺さず捕らえる！ あとの二人は殺したって構わねえ」

ぴくりと不愉快そうに眉をしかめる凜。それを見て巨漢が更に吠える。

「二ホン人だからって殺されないんでも思ってたか、ああん？ 俺らはギルドの他の腰抜け共とは違うんだよ！ ま、お前だけは殺さずに遊んでやるがな。せいぜい泣き喚いて後悔しろ、俺らに楯突いた事を」

巨漢が腰から得物を抜くと、他の男達も一斉にそれぞれの武器を取り出す。剣、小剣、ナイフ、斧と、様々な使い手がいた。同時に魔力活性化の気配がほとんど全員から発生した。中には魔力にものをいわせた《身体強化》で、手が魔力光に包まれている男もいる。

三対、少なくとも二十。

一見して圧倒的に不利な状況になってしまった。鋼は小さく拳手して、一応言ってみる。

「あー、あのさ。確かにこいつが、挑発するような真似しちまったが。俺としては、なるべく平和的に話し合いで解決できないものかと……」

「ぎゃはは、今更命乞いかよ！ もう遅えよ！」

巨漢が強化された腕力で、躊躇無く鋼に向かって斧を振り下ろした。

速い。

前回の十人より、明らかに手練れの動きだった。

もちろん反応できないほどでは無かったが。

「ん？」

ぶつん、という音。手を振り下ろしきった巨漢が疑問の声をあげ

る。

鋼が手を出すまでもなく、巨漢の右腕が半ばほどから無くなっていた。

「ぐあああああああつ！！！」

血が噴き上がる腕の断面を抱え込み、絶叫する巨漢。落ちる右手かざされた凜の指先には小さな魔法陣が宿っている。

彼女の得意とする風の系統。《穿風》による裁断だった。

突然の惨状に、僅かな時間とはいえ他の男達の氣勢が削がれた。

一瞬の空白の中、凜が椅子から立ち上がる。大きな魔力活性化の気配。

右手に三つ、左手に三つ。上半身あたりの前方空間に、規則正しく八つ。

ただの一秒で凜が展開した、魔法陣の数である。

凜の動きに反射的に警戒を向けた男達は魔法陣の輝きに圧倒され、ただ立ち尽くす。

魔法陣の一つが淡く発光し、発動した《圧風》による気圧の塊が巨漢の胸に叩き込まれた。

呻く巨漢に、次は側面から《圧風》。踏ん張れず吹き飛ばされるところを、反対側から《圧風》。ついでとばかりに腹にも《圧風》。よだれと血と苦鳴を撒き散らしながら、くずおれる事も許されず風で全身を殴打されていく。

計十四発の暴虐の嵐がやがて吹き止み、後には白目を剥いて涙を流す、意識を失った男の姿が残った。

あまりにも凄惨な光景に、見守っていた男達は声も出ない。

「……ルウ、ちょっとやり過ぎなんじゃねえか？」

「コウの命を奪おうとしたのですから、これくらいはごく当然かと本来であれば、人の命を奪おうとした対価は命一つで釣り合うものですし。まだこの人、かろうじて死んではいないので、トドメを差さなかつた慈悲に感謝があってもいいくらいです」

床に倒れようとする巨漢を掴み、凜は鋼に顔を向ける。

「トドメ、差すべきですか？」

「……いや、いい。返してやれ」

「はい」

底上げされた身体能力で、凜は巨漢を投げ飛ばす。棒立ちだった男達が慌ててそれを受け止める。

普段より彼女がかなり好戦的なのは、明らかに《加護》の影響だ。思うところは多少あるが、凜を殺す気で攻撃されたら仮定すれば、多分綱だつて似たような事をするだろう。

凜は男達に向き直り、少しだけ嗜虐的な笑顔を浮かべる。

「コウは、言いましたよね？ 平和的に、話し合いで、解決できないかと。それなのにあなた達は聞く耳を持たず、こちらを殺そうとさえしました。分かります？ そちらが先に、手を出してきたんです」

畏にかけられたと理解した男達の顔が恐怖で青ざめていく。

「本当はこんな事、やりたくないんです。ですがこちらも死にたくはないので、仕方なく正当防衛で、あなた達を叩き潰させてもらいますね？」

声音だけは切実に、凜は訴える。あくまでもこちらは、襲われて反撃しただけの被害者なのだつた。

23 それぞれの動き

厳粛な静寂はどうとも思わないけど、こっぴつ気まずい沈黙は苦手だ。

場の重さに耐えかねて、有坂伊織は恐る恐る口を開いてみる。なるべく深刻な口調にならないよう努力したつもりだった。

「その……、お互いの主張は、どっちも間違ってたと思うわよ？」

講堂裏にて。

辛気臭い顔の生徒が四人ばかり、顔をつき合わせて突っ立っている。いや一人は無言で項垂れていたのだけど、声をかけたのに反応し、ようやく今顔を上げた。

「いや……、僕の考えが、足りなかった。それは認めなければなるまい」

マルケウスの声音はどこか自嘲が含まれていたけど、意外と冷静さは取り戻しているようだ。伊織と雪奈はほっと息をつく。二人で顔を見合わせ少しだけ笑いあう。

「神谷君、ちよつと怖かったです……」

「やっぱりああは言っても、ほんとは本人も納得できてないんじゃない？ 神谷君も冷静じゃなかった気がするわ」

今は誘拐事件発生中で非常事態なのだ。

喧嘩なんてしている時じゃないのに。全くもう、困った男の子達だ。

「あいつも納得していないのなら、手助けして欲しかったが……。カミヤには色々、僕には見えない物が見えているのだろうな。あいつが動かないと決めたのなら、その判断は尊重されるべきなのだろう」

「これからどうするん？」

省吾が訊くと、マルケウスは苦笑を顔に浮かべながらもさっぱりした様子で言った。

「……やはり、このまま何もしないのは到底納得がいかない」

「鋼はまた怒るかもしれんで？」

「確かに、また手厳しい言葉を浴びせられるかもしれない。だが力ミヤは、全部背負って初めて正しい行動は許されると言った。行動するなどは言わなかった。僕にも出来る事がないか、もっとよく考えてみようかと思う」

「せやなあ。人質のあの子もちゃんと返されたんか、まだ分かってないし」

「……満月亭に、様子を見に行こうと思う」

この行動に問題はあるか？ と問いかける顔で、マルケウスはそれぞれの顔を見回す。鋼との口論を経て、どこことなく彼は慎重さを身に付けたように思える。事件解決のために動く事は、あくまでやめないつもりのようだけど。

「いいんじゃない？ 私も気になるし、ついてくわ」

伊織が省吾と雪奈を見ると、二人とも頷いた。結局四人である店に行くこと決まった。

（神谷君達は帰ったのかしら？ それとも教官に会いに行った？）

ふと伊織は考える。あの少年は普段からやや乱暴な口調だけど、冷徹ではないように思う。寮に真っ直ぐ帰ったのではないなら、シド教官を訪ねている可能性が高そうだ。

実は少し、残念に思っている自分がいた。

多分伊織が望んでいたのは、マルケウスと鋼達三人組が協力して事件を解決しようとする展開だった。もしそうなら、迷わず自分も手伝うと声をかけていただろう。それは悪人を許せないからとか、人質の子が心配だからという理由ではなく、自分でも自覚している、とても厄介な衝動のためだ。

直さねばならない性分だと思いつつも、きっと本当に直す気など無い。

伊織の根源にあるどうしようもないそれは、戦いへの欲求だった。「あの、剣術の先生にだけ、誘拐事件の報告したんですよね？ 勝手に様子を見に行っても大丈夫でしょうか？」

「大丈夫だと思うけど。人質の子が帰ってきてるならもう安全でしょうし、やっぱり確かめるくらいはしときたくない？」

心配する雪奈もそれで納得したようで、四人は連れだって正門へ向け歩き出した。教官に一言でも報告してからのの方が絶対に安全だろうと思いつつも、伊織はそれを指摘しない。

きつと私は、この誘拐事件に巻き込まれる事を望んでいる。

最低の思考だ。それでも、犯人達に襲撃される可能性を、実践の機会を想像するとわくわくせずにはいられない。有坂伊織とはそういう人間だった。

期待と、少しの罪悪感を抱えながら。伊織は三人と共に、学園の門をくぐった。

「まったく、折角の休みに元部下から呼び出しがかかったと思ったら

……」

「ほんと、すいません。厄介な話を持ってきて」

パルミナ騎士教育学園のとある準備室で、二人の男が向き合ってソファに腰を下ろしていた。

恐縮したように謝るのは学園の教官を勤めるマイトックシンドで、彼が助力を請えないかと人づてに目立たないよう呼び出した相手が、正面に座る人物だった。

セイラン王国の平民に多く見られる茶髪の人物は、今しがた相談を受けた脅迫状の文面を再度眺めた。手紙を掴む手は指すらも大きく大きい。その身を包む日本製のシャツとカーゴパンツは、服越してもはつきり分かるほどの筋肉で押し上げられていた。

そもそもからして体格が違う。シシドもいまだ正式に騎士団に所属する身であり鍛錬は欠かしていないが、相對するこの人物と比べればいかにも貧弱に見えてしまうのは否めなかった。年齢は三十代後半のはずとシシドは記憶していたが、いまだ衰えなど全く感じさせない偉丈夫だ。

デーン＝グレイル。

現役の騎士で、シシドが新米の騎士だった頃世話になった大先輩である。ここパルミナと王都セイラード間でやりとりされる物資の護衛を任されており、一隊の副隊長を務める傑物だ。シシドが使えるコネの内でも頼りになる人物が、幸運な事に丁度今パルミナに滞在していたのだった。

「しかしお前ね、そりゃもちろん、誘拐はひでえ犯罪だよ。犯人が捕まって、人質が無事帰ってくりゃいいと誰だって思うさ。だがな、そういうんでいちいち騎士が出動してたらキリが無いってのも分かるんדר？」

「……分かってる、つもりです」

「どうしても解決したい事情でも？」

グレイルが見透かすように目をすが眺めると、シシドもいよいよ背筋を伸ばした。

「……その脅迫状を持ってきたのは、以前から手がかりそうだと思っていた生徒でして」

「おう、問題児ってやつか？ それ持ってきたのが生徒だつづのはさつきも聞いたが、そいつの話だよな？」

「ええ。あまり他人を、信用していない奴でして。いえ、信用していないというのは少し違うかもしれませんが。最初から他人に期待せず、何か問題があっても自分だけでなんとかしようとする、と言いますか」

「そこまで問題児か、それは？ むしろ手のかからない生徒のように聞こえるが」

「いえ、既にその、やらかしてまして。今回の事件の犯人の一味と、

以前乱闘を」

ため息交じりにそう口にしたシシドとは対照的に、聞いたグレイルは呵呵かかと笑った。

「ははははっ、そりゃ間違いなく問題児だなあ！ 活きのいい生徒がいるもんだ」

「笑い事ではないですよ……」

疲れたようにシシドが嘆息するも、すぐにまた表情を真面目なものに切り替える。グレイルも佇まいを直した。

「以前、そいつに言ったんですよ。もつと大人を信用しろ、頼れ、と」

「それで今日、頼られちまったわけかい。お前も結構、苦勞背負い込む奴だよな」

「……正直なところ、自分の手には余る事件です。ですが出来る事全てを試さずに手を引けば、きっと自分は二度と生徒に、嘘偽りなく『大人を信じる』とは言えなくなってしまう」

「なるほどなあ。お前も立派に先生やってんじゃねえの」

「まだまだ教え始めたばかりの駆け出しですよ。情けない話ですが、今回の件も先輩に頼るという方法以外思いつきませんでした」

恥じ入るように告げるシシドを見るグレイルの瞳は優しくかった。

よ、と掛け声をあげ、グレイルはソファから立ち上がる。

「ん、話は分かった。まあ、なんとかなんだろ」

「協力してくれるんですか……？ こんな、ディーン先輩にとっては迷惑でしかない話でしょうに」

「なんだあ、今からでも断ってやろうか？ 若いお前が教え子の頼みをなるべく聞いてやろうって頑張ってたんだ。俺も世話してやった後輩の頼みくらい、引き受けてやれる男でいないとな」

シシドは素早く立ち上がり、ただ頭を下げる事で感謝を示した。

律儀な奴だ、とグレイルは笑う。

「しかしまあ、動いてみるが。あんま、期待すんじゃねーぞ？」

「……ありがとうございます、本当に」

「ああもつ、昔から堅苦しい奴め。頭上げる。無事解決したら、今度酒を奢ってくれ。それで貸しはチャラだ。分かったな！」

「分かりました。……頼みます、先輩」

「おつ」

何の気負いもなく、しかし頼もしげな足取りで。意気揚々と、茶髪の偉丈夫は準備室を去っていった。

正当防衛であなた達を叩き潰す。凜の宣言に、酒場内が沈黙したのはほんの数秒だ。

一人がやられたくらいで恐れをなして降参するほど、闇組織の人員は甘くは無かった。

「こいつらをぶち殺せえっ!!」

「おおおっ!!」

誰かの号令で、男達の意味は攻撃に定まる。近くにいた奴らから、雄叫びを上げ武器を手に押し寄せてくる。

全ての攻撃は魔術で強化されており、それなりに速い。人数差も考えれば楽に勝てる相手では無い。

もし鋼が、一人で相手していたらの話だが。

「ぐふっ！」

凜に蹴飛ばされ、一人の男が別の男に盛大にぶつかり床に倒れる。多分何も魔術的強化がなされていなければ、漫画みたいにまとめて吹っ飛んで行っただろう。《加護》により、ただの蹴りがそれくらいの威力にはなっている。

それなりの強化魔術の使い手と比べても、今の凜の身体能力はかなり上だ。当然の予測として、鋼と並ぶくらいに強化が得意な奴だ。って敵にはいるだろうと警戒していたが、今のところはまだ遭遇し

ておらずこの場にもいなさそうだ。かつてニールは鋼の強化の適性を『極端に高い』と評したが、そのままの意味で信頼してもいいかもしれない。

本当の意味での強敵がないからか、凜は凄まじい暴れっぷりを見せていた。

近づいてきた相手の武器を持つ手を主に狙い、殴る蹴るの攻撃でボキボキ骨を叩き折っていく。一対多の状況に追い込まれないように今相手している男以外が接近してくれば《圧風》で全て吹き飛ばす。荒れ狂う風が何度も叩きつけられ、一度では倒れなくとも男達に確実なダメージを負わせていた。

彼女の周囲には常に複数の魔法陣が浮かび、一つの消滅と引き換えに《圧風》が放たれる。それらの魔法陣も常に新しいものが組まれ、補充され続ける。待機状態の魔法陣の利点はいざとなればノータイムで術式を発動できる事だ。

そして有坂を苦戦させた近距離戦の技術に《加護》が加わっている彼女が一对一で負けるはずがない。拮抗すら無く一方的に男達は無手の少女にやられていき、一人ずつ確実に無力化される。対集団戦において真価を発揮する、凜の強力な戦闘スタイルだ。《圧風》の連発で身を守りながら敵全体を混乱させ、近距離戦で仕留めている。彼女の風系の適性があまりにも高いからこそ可能な戦術だった。近距離戦の最中でも、思考すら必要とせず感覚で彼女は《圧風》を使用できる。

鋼も二人ほどぶん投げたりしたが、今では戦闘に加わらず凜の無双っぷりをただ眺めていた。風が無作為に暴れているので援護しづらく、これは鋼への『私に任せて下さい』という意思表示だろう。

なのでお言葉に甘えて鋼はカウンター席に逆向きに座ったまま、店内全体を俯瞰ふかんしていた。戦闘の際の役割分担はいつだって鋼が指揮官役だった。他のメンバーだけで十分そうなら、戦況の把握に努めるべきだろう。

次々と群がる男達を凜は無力化していく。その暴力の渦中からは

やや離れた位置には、魔術師的な戦闘スタイルなのか手出しせずに見守っている男が何人かいた。

魔術で攻撃しようにも他の仲間の巻き添えを恐れているのだ。まさか今更、彼女を殺さず捕らえるつもりで魔術を使わないわけでもあるまい。今はまだ機を待っているのだ。

凜の周囲の敵の密度が減っていく。両者の間にも隙間が生まれ始める。タイミングを合わせ、離れた位置にいた男の一人が手をかざした。

外向きの魔力活性化の気配と、少なくとも直径50センチを超える大きな魔法陣が発生する。

「死にやがれ！」

近づかれる前に勝負を決するのが魔術師の鉄則だという。ニールにそう聞いた。

なるほどその鉄則の通り、声を張り上げた男は魔術を放てずに倒れ伏した。接近を許したのが敗因だった。

鋼の両隣は既に空席だ。

「な、なんだ！？……お」

かろうじて冷静さを保っていた他の魔術師タイプの敵が、倒れた魔術師の男に気付き声をあげる。だが小さく呻いて、ぱたりと床に倒れ動かなくなる。

動かなくなった男達の背中には共通して切り傷。さほど深いものではない。

「っ！ もう一人の女のガキだ！ てめえら警、戒、を……」

男達の最も外周にいた一人が、促した注意を最後まで続けられず倒れる。

その段階まで来ればさすがに他の男達の注目も集まっていた。ようやく彼らは、倒れた男の傍らに立つ小さな少女に気付いた。

日向だった。右手に握る敵から奪い取ったナイフは、明らかに血で濡れている。

その瞳には戦闘による高揚も、死への恐怖も存在していない。完

全なる無表情で、ただ敵集団に視線を向けている。

「かはっ」

凜の相手をしていた男が、不注意にも日向に気を取られた隙に一撃でのされ、勢いよく投げ飛ばされた。他の男にぶつかり何人も巻き添えに転倒させた。

慌てた他の男達が体勢を立て直し凜を迎え撃とうとし、また一人日向に背中から斬られる。

斬られた男はやはり床に倒れ、残る男達はどちらの少女を警戒すればいいのか決められないまま、ただただ翻弄されていく。もはや統率も何も無い。

「？ つ、……！」

斬られて倒れた男の目には混乱があつた。

意識は失っていないのに起き上がれない。声を出そうにも叶わず、ただぱくぱくと口が動くだけだ。

次の犠牲者はその隣にいた別の男だった。日向のナイフから身を守ろうとして、庇いたてた腕に浅い傷をもらい倒れこんだ。日向にやられた犠牲者同士は目を合わせ、体が動かない恐怖を共有する。それぐらいしか出来る事は残されていなかった。

見れば分かる通り。

日向に斬られた者は意識を残したままただ動きを封じられる。

その種は《薬物生成》の魔術による、傷口からの神経毒の注入だ。まあ毒といつても、魔術で擬似的に再現された同じ機能を持つだけの架空の物質だ。魔力で編まれた物質は、時間と共に魔素に分解され消滅するという性質があるから、十分もすれば彼らは問題なく回復する。日向の毒で倒れるのはこの場においては幸運な戦いの終わり方だ。凜にボコボコにされて意識を失うよりは、ずっと。

風の魔術師と毒の魔法剣士による、一方的な蹂躪は続く。

例え魔術を撃たれても問題が無い、派手に暴れるほぼ万能の凜の制圧能力と。気配を消して行動し、一番嫌なところをピンポイントで崩す日向のかく乱能力。たった二人で十分過ぎた。

「一人は残しとけよ。道案内してもらわなきゃならねえ」

鋼が手出しする必要など全く感じられず、二人にその声をかける余裕すらあった。少しは苦戦するかもと思っていたが、全くそんな事は無かった。

所詮は数を頼みにするただの無法者達なのだ。戦闘のプロなどでは決して無い。腕が立つならまともな傭兵が冒険者として食っていけるだろうから、考えてみればこの状況は当然なのかもしれない。

《解毒》すら使える奴がいらないらしい。

冷静に男達の実力のほどを観察している鋼の眼前で、二十人からなる男達の集団はあえなく壊滅した。怯えきって戦意を失った男が一人残されている。たった数分の戦闘だった。

「あ、お、俺は……」

震える最後の一人を正面に立たせ、鋼は軽い笑みを口元に浮かべながらただじつと見つめる。みつともなく取り乱し始めるのはすぐだった。

「ち、違うんだ！俺は娘をさらったのには関わってない！本当だ！だから……」

「……お前は勘違いしてるな。誘拐事件も人質も、俺達にとってはどうでもいい。目的は実はお前らなんだ」

さすがに嘘だが、悪びれず鋼は言った。虚をつかれた男が驚いたように口を噤む。

「闇ギルドだかなんだか知らんが、いい加減目障りなんだよ。お前らから手出しされんのももう三回目なんだぞ？だからお前らの組織、潰そうと思ってな」

堂々と言い切り、自信に満ちた顔で笑う。

これは人質の救出作戦ではなく。単に組織に喧嘩を売っているのだと、彼らに信じ込ませる。

ここでの目撃者から組織に情報が渡った際の保険だった。鋼達を止められないと闇ギルドの人員の誰かが判断したら、証拠隠滅のため先に人質を処分されかねない。もちろん確実な安全策とは言えない

いが、百パーセント人質を助けられる方法など存在しないと鋼も割り切っている。

「つ、潰す……っ!? たった三人、で……?」

「出来ないと思うか?」

周田には倒れ伏し、あるいは苦痛に呻く無力化された男達。訊かれた男は『出来ない』とは言えなかった。

「お前はただ、組織の本拠に俺達を案内すればいい。それが済んだら無傷で帰してやる。悪くない話だろ? 組織に楯突いた俺達が直接、出向いてやるっつて言うんだからな」

「ほ、本当に、本気で……?」

「ああ、安心しろ。俺達を連れて行っても、ギルドがお前を裏切り者として処分する事は無いから。ちゃんと俺達が潰してきてやる。

……案内してくれるよな?」

男はこくこくと頷いた。素直なのはいい事である。

一直線に闇傭兵ギルドの拠点へと向かいたいところだったが。

案内人の男を連れただま鋼達は少し寄り道をした。日本人街のコンビニで、買いたいものがあつたのだ。

近くまでは四人で来て、後は日向に行ってもらう。組織の弱みを押さえるのに携帯の撮影・録画機能は便利そうだったので、携帯の充電器を買っておこうと思いつたのだ。そう時間のロスではないし、この道草の間に男から組織についての話も色々聞いたのでよしとする。

しかし、まあ。

これに時間を少し使ったせいで、まさか事態が急変しているとはさすがに思いもなかった。

貧民街なる地区がパルミナにあるのはガイドブックで元々知っていたし、日向が本日尾行した満月亭の見張りがこの地区に入ったのも既に確認済みだ。

普通の市街と貧民街を隔てる境界線は、明確な形で存在していた。地区を隔てる人通りの少ない寂れた道があり、そこを境に町並みはつきりと変化している。案内人に役立ってもらうのはそこから先だった。

鋼達はもうその地区へと足を踏み入れ、そろそろ十五分ほど歩いている。粗末な造りのボロい家々が立ち並ぶ景観を眺めながら、通りを闊歩する鋼達三人組の態度は堂々としたものだ。先導させている男の方が人目を気にして萎縮しているように見える。

最初の方は通行人を見ても地元民が多いだけの、ただの下町風の

町並みだったのだが。進むごとに周囲の光景は変わっていき、いかにも治安が悪そうな場所になってきた。建物や路地には汚れが目立ち、物乞いのような風体の人間が時折無気力に座っている。一人で出歩いている女子供は全くおらず、怪しげな男達から鋼達に、鋭い視線が向けられていた。

確認してみたがこの辺りは電波が届いておらず、携帯電話は圏外のようなのだ。案内人によると闇傭兵ギルドの本拠地はもうすぐらしい。もうこの辺りは完全にギルドの縄張りで、外にいる男達もほとんどが組織の関係者だそうだ。

「……いやいや。なんでだよ」

思わず飛び出した鋼の呟きに、案内人はびくりと肩を震わせ振り返った。「な、な、何か問題が？」と恐る恐る訊いてくる。ああいや、お前の事じゃないよと軽く答えながら、鋼は早足で彼を追い抜いた。ここにいるはずの無い人物を、進路の途上に発見したのである。

騎士教育学園の制服を着たそいつは、迂闊な事にたった一人でこんな場所にいた。そして案の定、柄の悪そうな二人の男に囲まれていた。

「どうして片平さんが……」

凜が疑問を口にし、日向はただ無言でその様子を見つめる。同じクラスあの少女、片平雪奈と日向は最近親しい友人になっていたはずだが、鋼を差し置いてでも急いで助けに行こうとはしない。ただこちらの後ろを大人しくついて来るだけだ。心中だけでかなり深く鋼は嘆息し、向かうペースを上げる。

「なあ」

「え、神谷さん!？」

「その子、俺達の連れなんだ。何か問題でも起こしたか？」

驚く片平はとりあえず無視して、男二人に声をかける。反射的に何か噛み付こうとしたらしい男の一人が、日本人だと一目瞭然のこちらを見て閉口する。

「……なんでもねえ」

あるいは片平と同じく鋼達が騎士学校の制服姿だったからか、直前に酒場で暴れた情報がもう伝わっていたからか。もう一人の男を促し、二人組は呆気ないほど大人しく去って行った。

危機は去ったと見て取って、へなへなと片平が脱力する。

「ほんとに助かりました……。ありがとうございます」

「……それはいいが、なんで片平がこんなところにいんだよ。いくらなんでもこの場所に一人は無用心過ぎるだろ」

学園の制服も周囲から浮きまくりで、かなり目立っている。鋼達の場合は目立たないために服装を変える意味があまり無いので、寮で着替える時間を惜しんでこのまま来ているが。

「ええと、あの、どこから言えばいいのか……。ほんとともっと早く状況を伝えたかったですけど、この辺り圏外で……」

そこではつとした顔になり、慌てたように言い募る。

「ああ！ そう、そうです！ 早く長谷川さん達を助けないと！」

「省吾？ ……おい、もしかしてお前ら」

「すみません！ 長谷川さんと有坂さん、マルケウスさんがあそこ！」

謝りながら片平が指を差した先には、周辺では明らかに一番でかい建物が見える。あまりにも嫌な予感がしたので、傍に立っていた案内人の男に鋼は問いかけた。

「なあ、おい。あの建物つてまさか……」

「あ、ああ。あれが、あなたに言われて連れていくつもりだったギルドの拠点だ。あの周りもだいたい全部、関係ある建物で。表向きは酒場だったり娼館だったりするが……」

「……嘘じゃねえだろうな？」

「も、もちろん本当だ！ 嘘なんかついてない！」

この期に及んで嘘をつくとも思えなかったし、省吾達が何故かあの中にいるという情報から考えても間違いなさそうだ。「よし。案内はここまででいい」と男を解放してやると、無傷で帰すという約

束が守られた事に安堵した顔で、そそくさと来た道を帰って行った。「……片平。講堂裏にいたお前らが、何があつてこんな事になつたのか説明してくれ」

三人を急いで助けに行かないといけない状況かもしれないが、あそこまで鋼は忠告していたのだ。自業自得なので多少後回しにする。こちらの行動に支障が出るので、まずは事態の把握が優先だ。焦る片平から先に聞けるだけの話を聞きだした。

鋼達が去つた後、講堂裏に残された四人は直後に学園を出たのだという。

マルは鋼に言われた言葉を受け止め、事件に対して動くとしても慎重に、と決めていた。だがまあ、せめて人質が無事帰ってきているかだけでも確認したくなつたらしい。

満月亭に向かつた面々は、今度は見張られている可能性も考慮した。全く関係ない道を使い、大きく迂回して店を目指したそうだが、それが功を奏したか、探りを入れて進むうち、満月亭を見張っている男を今度は先に見つけてしまった。

そいつの後方、離れた位置に四人は陣取り小声でどうするか話し合った。そして対処を決めかねているうちに先に状況が動いた。その男の元に同じ一味らしき男がやって来て、何か話した後連れ去つてその場を立ち去つたのだ。

その話の内容は断片的にしか聞き取れなかったが、本部に戻れと指示が来たとか、人質が奪い返される可能性があるとか、そういう風な事を言っていた。何か慌てている様子で、聞き耳を立てる四人には全く気付かなかつたらしい。

分かつたのは闇傭兵ギルドに何らかの異変があつた事と、まだ人質が返されていない事。その情報だけで十分過ぎた。義憤に駆られたマルが、彼らの追跡を提案するには。

マルは奴らにとって想定外な出来事があつたらしい今が最大のチ

ヤンスだと力説し、有坂も乗り気だったという。省吾だけは慎重な姿勢を崩さず危険過ぎると反対したのだが、二人の熱意は止められず。人質がいるであろう場所さえ突き止めたら絶対に引き返し、教官に相談するという条件で、省吾も同行を決めた。自身がストップパ―にならざるを得ないと判断したのだから。

そして彼は、危ない事には巻き込まないと片平を気遣い、彼女にはこのまま帰るように言ったという。何かあった場合、剣も魔術による強化も使えない片平は三人よりも危険が大きくなるからと省吾は理由を語った。そして何時間経っても三人が戻って来なければ、この事を鋼とシンド教官に伝えて欲しいとも頼んだらしい。

省吾の判断は、その状況においてかなり妥当なものだと鋼も思う。一番の問題は、何故それを頼まれた片平がこんな場所にいるかだ。

片平は言い辛そうにその後の経緯を告白する。

どうも三人に仲間外れにされたような気分を味わい、片平を置いて尾行を開始した三人の後をつい追ってしまったらしい。誘拐犯の後をつけるのはやはり怖い、尾行する三人の更に後方についていくくらいなら彼女の度胸でもなんとかあった。それに足手まといの自分が一緒に行動しても邪険にされるのではないかと心配したように、省吾達にも気付かれないよう、片平はこそそついで行った。

もし省吾達に何かあっても、見守っていれば状況が分かるし携帯で日向を経由して連絡すれば教官にも知らせられる。一応は片平にもそのような思惑があったらしい。そうして省吾達の後をずっとついて歩き、ここまで来た。そしてそれは起こった。

「横の道から、武器を持った男が何人も出てきたんです。それで長谷川さん達に突然襲い掛かって」

「それで捕まって、連れて行かれたのか？」

「あ、いえ。あの貴族のマルケウスさんが、すごい動きで一気に二人倒しちゃって。長谷川さんと有坂さんが、すぐに倒した人から武

器を奪って加勢して あ、もちろん鞘も奪って、それに納めてからですけど。六人くらいいた男の人達を倒しちゃいました」

どれほど苦戦したかは定かではないが、あの三人なら確かに、出来ない事でも無いのだろう。

省吾は《身体強化》を使えるし、それで大タルを持ち上げられた数少ない生徒の一人だ。二度ほど実戦経験があるとも言っていた。有坂は剣道の実力者だし、マルは剣術も強化も扱える。自分達の倍の人数が相手でも、ただの無法者には負けないようだ。

よくよく見れば三人が戦ったと思われる辺りの横の路地から、気絶した男達の頭や足がはみ出していた。

「それで倒した後、何か三人で話していたようなんですけど……。そのまま奪った武器を持って、あの誘拐犯のアジトっぽい場所へ突撃して行っただんです」

「いやいやいや。なんでそうなるんだよ」

「わ、私だって何がなんだか……！ あ、いえ、すいません」

「……武器持った相手に勝った事で、変な自信をつけたか？ いや違うか。そうか、あいつら……」

話を聞く限りいつも冷静な判断を下している省吾なら、残り二人が暴走したって止める側に回るはずだ。

「誘拐の犯人達に自分達が見つかったと思って、すぐ助けないと人質がヤバイと判断したんだろうな。……アホどもめ」

顔をしかめる鋼に片平がびくつとなるが、講堂裏の時のような怒りの感情はそれほど湧いてこなかった。むしろ少し、笑えてきた。そんな自分の胸の内を鋼は不思議に思う。

まあ、考えなしの行動ではなく、考えた上で決めたのなら鋼がとやかく言う筋合いもないか。アホな無謀さには違いないが。人命救助のため命を賭けて実際に行動している奴らを、心の底から貶すのは案外難しい。そういう事なのだろう。

「というか。何かあってもお前が教官に知らせてくれると信じてるから、多分省吾はあいつらに付き合っただぞ？ ここまで勝手に

ついできたお前の行動が一番まずい」

「本当に、すいません……っ！」

自分の過失をよく分かっているようだったので、それ以上片平に言う気も失せる。

「三人が入って行ったのを見て、私もようやく携帯を見たんですけど、そこで圏外だと初めて気がついて。戻ろうと思った時には、さっきの男の人達に絡まれてしまったんです」

「って事はほんとに、あいつらが入って行ってすぐのタイミングで俺達が来たんだな？」

「はい」

という事は。途中寄り道しなければこれは起きなかった事態か。

そもそも、片平の話で出てきた満月亭の見張りが持ち場を離れた原因も、恐らく鋼達にある。酒場での大暴れが伝わって、組織の人員に本部への緊急招集がかかったのだろう。ここでうかうかしていると、招集を受けてやって来た無法者達と鋼達が鉢合わせする可能性が非常に高い。

「……あのう。神谷さん達は、どうやってこの場所を」

「状況は分かった。俺達もあそこに行くところだから、片平もついて来い。置いてくわけにもいかねえしな」

質問中の片平を無視して、問答無用で鋼はそう言う。これ以上話している時間が惜しい。

「わ、分かりました。……あの。という事は神谷さん達、最初から人質を救出するつもりで」

「片平は俺の傍についていてくれ。大人しくしててくれるなら、安全は保障する」

「あ、はい。……神谷さんってもしかして、ツンデレ」

「片平、外で一人で待っててもいいんだぞ？」

少しだけ凄んでみせると、片平は半泣きになってぶるぶると首を左右に振った。もちろん彼女を黙らせた理由は、時間が惜しいから

である。

明らかに無謀な突撃だと伊織自身思っていたのに、今のところ我が身はまだ無事だった。

縦に並んで伊織達は建物内を疾走している。先頭に行くのはマルケウス。殿しんがりを務めるのが省吾。二人に挟まれる形で、伊織は最も安全な真ん中を走らせてもらっていた。

追われていた。後ろをちらりと振り返れば、剣を抜いた男達が足音を踏み鳴らし迫ってきている。

「右だ！」

小さく、それでいて鋭くマルケウスが叫ぶ。廊下の突き当たりを右に曲がり、伊織と省吾もすぐさま続く。戦いはなるべく避けてとにかく人質が捕らわれていそうな場所を探す、という作戦だった。行き当たりばったりとも言おう。

もし人質を発見出来れば、可能ならすぐに脱出し、無理ならどこかの部屋に立てこもる。三人が事前に決めている方針はたったそれだけである。

時折向かう先に荒くれ者風の男達が立ち塞がっていたりもしたけど、上手くマルケウスは進路を変えてかわしている。この三人はそこそこ一般人よりは強いメンバーかもしれないけれど、後ろの奴らに追いつかれないほどの短時間で敵を突破するなんて真似は、いくらなんでも出来そうにない。

「あいつら、すごい殺気立ってるわ！ 挟み撃ちされる前に近くの部屋に立てこもったほうがいいんじゃないの!？」

遭遇する男達は最初から武器を抜いて構えている。不審者ではなく、完全に敵に相對する態度だ。見張りの男が呼び戻された理由が関係しているに違いなかった。

「くそつ。奴らに何らかの異変が起きているなら、その隙をつける
と思ったが。裏目に出たか！」

「……最初からここまで警戒されてたら、人質を探すんはもう無理
や！ どうにかして脱出できやんか!？」

「退路は探しているが、挟み撃ちされないようにするだけで精一杯
だ！」

お互いに声を掛け合いながら、三人は闇傭兵ギルドのアジトらし
き建物をぐんぐんと進んでいる。来た道を戻れないのだから奥へ奥
へと追いやられるばかりだ。唐突に伊織は気付いてしまった。

「っ！ やばっ、これって誘導されてない!？」

「!?!？」

気付いたところで遅すぎた。

通路が途切れ、三人の視界が開ける。広々とした空間に出た。

日本で言うクラブハウスやダンスホールといった感じの場所だっ
た。本来なら、机や椅子が雑然と並べられていたのだろう。今はそ
れら邪魔になりそうなものは、全て壁際へと押しやられている。

スペースが作られた部屋の中央に十人ほどの男達が立ち、三人を
待ち構えていた。

「やっとな来たか。あんまり待たせんよ」

ぎくりと足を止め、硬直する伊織達に声かけられる。声の主は、
待ち伏せ集団の一番前にいる男だ。

顔を縦断するほどの大きな傷跡を顔面に持つ、あまりにも特徴的
な男だった。そいつだけは一人、悠々たる態度で椅子に座っており、
ただ者ではない気配を明確に漂わせている。その鋭い目つきに伊織
の本能がけたたましく警鐘を鳴らした。

「ん？ 男一人に女二人と聞いてたんだがな。まあいい」

男が何か言っているが、足止めされるのはまずいと伊織は背後を
窺う。追っ手は何故かこの部屋に入って来ず、外の通路で待機して
いた。ほんの少しの安堵とそれ以上の緊張感が伊織の胸に去来する。
挟み撃ちする必要が無いほどに、この目の前の待ち伏せ集団は危

険なのだ。見れば分かる。外で襲い掛かってきたチンピラ風の男達とは、まとう雰囲気からして違いすぎた。傷跡のある男以外も、恐らく全員が精鋭だ。

「これ、ちよつとやばいかも……。謝って済む事じゃないけど、ほんとにごめん。こんな事に付き合わせて」

ちよつとどころか本気でやばい。冷や汗をかきつつ伊織は省吾に謝った。マルケウスの方は完全に自業自得、伊織と同じ穴むしなの貉なのでいいとしても、さすがに省吾に対しては小さくない罪悪感がある。「ええよ、そんなん。ついてきたんはわいの責任や」

そう言ってくれる彼に伊織は小さく頷いて、視線を前に戻す。さて、この状況をどうすべきだろうか。もし伊織一人なら、倒されるまでに何人敵を倒せるのか、自らを試してみたいところだったけど。「貴様が悪の組織の親玉か！」

伊織の逡巡を打ち破るように、堂々たる態度でマルケウスが問いを發した。

「親玉じゃねえが、まあ幹部の一人だ。てめえらがあんまり暴れるもんだから、俺に定番が回ってきちゃった」

その言い回しに伊織はなんとなく違和感を覚える。さつき外で六人ばかり倒した以外、伊織達はこの組織の男達には手を出していない。ひたすら逃げ回りこの部屋に追い詰められただけだ。幹部直々に待ち伏せされるほど、警戒させた覚えは無い。

そういつた事はマルケウスはどうでもいらしかった。

「幹部というなら、僕は貴様に決闘を申し込む！もし僕が勝利すれば、さらった娘を大人しく返せ！」

「……は？」

傷跡の男はぼかんとした顔をした。

傍で聞いていた伊織も同じ気持ちだった。ここまで周到に待ち伏せしていた相手に、わざわざ一対一で戦えと当然のように提案できるその根性が不思議でならない。しかも相手にとって受ける利点が全く無いふてぶてしい要求付きだった。

何言つてんのこいつ、という顔で相手の男達がマルケウスを見る。その空気に全く気付かず、彼は一人ヒートアップしていた。

「とぼけても無駄だぞ！ お前達が満月亭の娘をさらった、卑劣な誘拐犯なのは分かっている！」

別にとぼけた訳じゃねえから、という相手の心の中での呟きが、伊織にも聞こえてくるようだった。

「……こりやまた、想像以上に青くせえガキが釣れたな。こんなのに何十人もやられたつてのかよ。情けねえ」

「何十人？ さっき何人かは倒してきたが……」

「んん？ てめえらだろ、さっきうちの組織のモンを二十人ばかりボコ殴りにして、組織ごと潰すとか宣言しやがったの」

「は？ い、いや、なんだその無茶苦茶な奴は。僕達ではないと思っうが……」

食い違つて話を聞きながら、後ろで伊織は省吾と顔を見合わせる。根拠はなくても、そんな事をしでかしそうな人物達になんとなく心当たりがある。

「バートさん、こいつら全く関係ない奴らじゃねえですか？ 確かに俺は男一人に女二人つて聞きましたぜ」

「はああ？ なんだよこいつら、ほんとにただの青臭いガキかよ！ ちっ、期待してたのによお。どんな偶然だ」

別の一人が、バートと呼ばれた傷跡の男とそんな会話を繰り広げる。その二人に、外で奪い取った剣を向けながらマルケウスが割つて入った。

「なら期待外れかどうか、試してみるか？」

その無駄にカッコつけた感じがなんかムカつく。呆れたような顔を見せながらも、バートは自分の剣に手をかけ立ち上がった。

「……本命が来るまでの暇つぶしには丁度いいか。いいぜ、決闘だかなんだか知らんが、相手してやる」

「ほう。ならば名乗らねばならないな。僕の名はマルケウスニル・ガンサリット。パルミナ騎士教育学園の騎士候補だ！」

え、それ言っちゃって大丈夫なの？ と伊織は彼の背中を凝視するが、もちろん視線に気付いた様子はない。

「……………」
案の定バート達からも馬鹿を見るような視線が注がれていた。

「どうした、貴様も名乗るがいい」

「……………」バートだ」

色々と言いたい事はあったが全て呑み込んだという表情で、相手も名乗りながら剣を抜いた。マルケウスも鞘を外し、剣身を露わにする。毒気を抜かれたような空気が、それで幾分か引き締まった。

互いの得物は似たような刃渡りの長剣だ。バートの剣のほうが伊織の目から見てもよく手入れされているけど、条件的にはほぼ同じ。純粹な実力勝負がこれから始まるうとしている。

我知らず生唾を飲み込む。マルケウスの代わりにその場所に立ちたいとごく自然に思いながら、伊織は省吾と共に一步引き、決闘の開始を見守った。

「では、尋常に勝負だ！」

その声と共に、マルケウスが踏み込んだ。

25 意外な邂逅

「誰か、誰か応援を呼んでぎゃあああつ！」

声を張り上げたナイフ使いの男が《圧風》で吹き飛ばされていく。「さっきの奴らじゃねえ！ こいつらだ！ こいつらが俺らに喧嘩売ったっていう……え？」

日向と向き合っていた斧を持つ男が、手を浅く斬りつけられ毒で倒れる。

闇傭兵ギルドの本拠らしい、大きな娼館っぽい建物を鋼達は順調に攻略中だ。前に立ち塞がる男がいれば全て日向が殴るか毒ナイフで斬り伏せ、後ろから追いかけてくる者があれば全て凜が殴るか魔術で吹き飛ばす。通路がそれほど広くないので困まれる心配もなく、敵だけはうじゃうじゃ多いものの特に問題は無さそうだ。

まさに鎧袖一触。

一応は鋼も敵から奪った手頃な剣を手にしているのだが、抜くどころか鋼の出番すら無い。《加護》も問題なく継続中のようだ。戦闘時以外も極々微量の低出力の魔力で維持すれば、この術式は半日だって保つ。

「武装はしてもらくに鍛えてねえんだろうな。こりゃ省吾達も、焦って探す必要ねえかな」

「そ、そうなんでしょうか。……長谷川さん達が外で戦ってた時は、こんなに圧倒的じゃなかったと思いますけど……」

ゆったり歩きながらそう呟いた鋼の隣で、片平はぼかんとした表情だった。

「あいつら、苦戦してたか？」

「あ、いえ、ちゃんと勝ってましたし、まだ余裕って感じでしたけど。見ていてやっぱり、怖かったです。何か間違えば三人の内誰か

が斬られるんじゃないかって」

「今も怖いかな？」

「いえ……。今は、武器持った人達が殺しに来てるはずなのに、なんだかゲームの雑魚キャラみたいにしが見えなくなりました」

省吾達の戦いぶりは片平にそこまでの安心感を抱かせないものだったのだろう。

「ぐっ、……。かはあああつ！！」

強化を使って凜の打撃に耐えた男が、二撃目の《圧風》による速度上乘せパンチには耐え切れずに廊下の向こうまで吹き飛んで行く。その瞬間を目撃してしまった片平が青い顔になる。

「……。い、いくらなんでもあんな漫画みたいに吹っ飛ぶのおかしくないですか！？ いえ、私はそういうの嫌いじゃないですけど。むしろ大好物ですけど！」

「そ、そうか。大好物が……」

片平の事が分からなくなった鋼だった。

そんな緊張感の無いやり取りをしながらも、一行はほぼ一定のペースで前進し続けている。諦め悪く次々と武器を掲げた男達が挑んできているが、足止めさえも満足にこなせていない。

鋼達には知る由もないが、男達はこの四人組を待ち伏せ部屋に誘導しようと必死なのだった。大人数で通路を塞ぎ進路を限定する作戦だったのに、鋼達はそんなものお構いなしに行く先を決めてしまふ。そしてそれが可能なほど圧倒的に強い。誘導しなければもはや勝てないと悟っているからこそ、なおも男達は決死の思いで挑んでくる。哀れな悪循環だった。

だがようやくそれも終わりか、状況が落ち着いてくる。遠くからこちらを窺う視線は前にも後ろにも残っているものの、鋼達に襲い掛かって来ている男は最後の一人となっていた。

その一人を日向がナイフで浅く斬る。《薬物生成》による毒が注入され、ぐらりと倒れ

「効かねえよ！」

その直前で持ち直した男が、日向のナイフを握る手を掴もうと手を伸ばした。

《解毒》の魔術だ。体内の毒素を中和する術式。ここにきて初めて使える者が現れた。

「日向ちゃん!？」

片平が悲痛な声を上げる中。男が触れようとした日向の手首部分に、ぼわんと魔法陣が浮かび上がる。

日向の得意魔術の一つが、ニールさえ絶賛させた相当な速度で発動する。

「ぎゃ、お、ご……っ!」

途切れ途切れの不気味な悲鳴をあげ、手を伸ばした相手の男は硬直した。びくびくと体を痙攣させ、そのまま日向の蹴りを腹に受けて吹っ飛んで行く。片平の大好物らしい飛び方だった。

「い、今のは一体……」

「あいつの得意な《電撃》って魔術。触れるぐらいの距離にいる相手に電流を流せる。……おいヒナ」

解説しつつ日向を呼び止める。鋼を振り返る小さな幼馴染はやはり完全な無表情だ。放課後学園を出てから今まで、ずっと彼女の表情はそれで固定されている。

「魔力残量は?」

「……八割くらい」

戦闘が小休止した今のうちに確認をとると、自身の魔力を把握するための僅かな間の後、簡潔に日向が答える。さすがにかなりの人数を相手にしただけあり、既に二割も消費していた。

「今みたいに余裕がある時、もし六割を切ったら言え」

「分かった」

それだけのやり取りで日向はまた前に向き直る。片平が何か声をかけようとしていたのだが、すぐに背中を向けられたので気まずげに言葉を呑み込んだようだった。

「……あんま気にすんな。こいつ、こっぴつ戦うような状況だと一

切余計な事言わなくなるから」

「あ、そうだったんですか……」

この会話も聞こえているはずなのに日向は身じろぎ一つしない。へらへらしているか、一切の無駄をしないか。なんとも極端な奴なのだ。まるで二つのモードがあるかのように、日向はそれを切り替える。

それはかつて過ごした地獄の日々に対する、彼女なりの適応の形だ。戦友達の中では最も戦いに不向きな性格だった日向は、結果誰よりも上手く感情を凍結させられるようになった。鋼よりも、だ。

戦闘における心構えが既に出来あがっているからか、日向だけは《加護》による性格の変化も見受けられない。本人曰く『集中力が増す感じ』はあるそうだが。

「び、びっくりしましたけど……、でもなんだか、そういうのってカッコいいかもです」

もう少し普段の日向とのギャップに戸惑うかと思っていたが、片平は案外すぐに順応してみせた。そう言ってくれるのは鋼としても嬉しい。いや、殺伐とした精神に安易に憧れるのもどうかとは思うものの、どん引きされるよりはずっといいだろう。

その証拠に、戸惑ったような僅かな反応の遅れの後、背を向けたままの日向が限りなく小さく頷いたのを鋼は見逃さなかった。

「よし。敵の数も減ってきたからな、そろそろ人質か省吾達を探るか。適当な奴捕まえて訊けば分かんたる」

「了解」「はい」

鋼の提案に日向と凜がそう返事して、四人は適当に、闇ギルドの本拠を進んで行くのだった。

この戦いの何一つ、見逃してなるものか。

互いに打ち合うマルケウスとバート。呼吸さえ忘れてしまうような集中状態で、目を皿のようにして伊織は戦う二人を見守っている。平和な日本で見える事などほぼあり得ない、真剣による果たし合い。伊織が懂れるものの一端がここにあった。

「ふっ！」

顔に傷を持つ男バートが呼気と共に踏み込んでくる。相当な速度だった。

振るわれた長剣をマルケウスも剣で受け流す。その顔に余裕は全く無かった。受け流されたと見るや更に無造作にバートは前に出て、マルケウスの足を踏み潰そうとする。

辛くもバックステップでそれから逃れたマルケウスは、剣士として優れた勘を備えていると言えるだろう。バートの戦い方はお行儀のいい剣術ではなかった。泥臭い、相手を殺し自分は生き残るためだけの剣と体術だ。マルケウスがただ型通りの剣術をこなすだけの少年だったなら、とうに敗北しているに違いない。

だからといって互角の勝負を演じているわけでもなかった。いかにも実戦慣れした型にとらわれない猛攻の前では、マルケウスは防ぐので精一杯のようだ。

バートが下がったマルケウスを追いかける。長剣を振るい、時折蹴りも飛ばす。どれもが目を瞠るほど速く、伊織から見ても超常の動きだった。それを防ぎ、あるいはかわすマルケウスも通常の人間の動きではない。二人とも強化の魔術を既に使っているのだ。

その上バートの攻撃は、その全てが鋭い。どれもが殺意の乗った一撃だ。半端な判断で適当な防御をしようものなら、それをすり抜けて即座に殺されそうな気迫がある。強化に関しては両者に大きな差は無くとも、総合的に相手はマルケウスより格上だ。

バートの剣による突きをなんとか回避しながらマルケウスも反撃するけど、容易く弾かれてしまう。すぐに攻撃を返され、避けきれずマルケウスは肩を浅く斬り裂かれる。見ているこちらも緊張する一瞬だった。何かが違えば、斬られて彼が死ぬ未来もあったに違い

ない。

だけでも今回は浅い負傷だった。この瞬間こそが好機だと悟り、マルケウスの目に強い気迫が宿る。

「おおおっ！！」

攻撃の直後という隙を晒しているバートに対して、マルケウスは踏み出しつつただシンプルに長剣を縦に振るった。

あれでは軌道が丸分かりだ。容易く防がれ、がら空きの胸に攻撃を叩き込まれて終わる。剣の試合を見慣れている伊織はマルケウスが構えた一瞬だけで、決着までの流れを幻視してしまう。

いや、所詮は幻視だった。そうはならなかった。

剣を振り下ろし始めた瞬間、マルケウスの全身がほのかに白く輝いた。特に剣を握る両手は溢れんばかりに発光する。

習ったし、授業で見た。魔力光だ。

瞬時に白い光に化けた攻撃の軌道ごと、長剣が恐ろしい程の加速を得て振り下ろされた。

バートがこの決闘で初めて、余裕の無い顔をした。既にマルケウスの斬撃を受けるために持ち上げていた長剣を捻る。剣の腹をマルケウスの剣に向け、片手でその裏側を支える。微妙に斜めになるようにして、両断しようとする白い攻撃を受け止めた。

これには敵ながら感心するしかない。よくもまあ、咄嗟にそれだけの行動が取れるものだった。

「ぐっ！」

ぶつかり合った剣と剣から耳に痛いくらいの甲高い金属音が鳴り、バートは苦しそうな声を発する。だけど、それだけだ。剣も折れず、吹き飛ばされず、バートはその場で耐えてみせた。渾身の一撃は届かなかった。

今度はバートが腕を魔力光で光らせ、お返しに剣を振るう。剣それ自体を狙った勢いのある攻撃に、受けてしまったマルケウスの手から長剣がすっぽ抜けた。

「はあ、焦ったぜ。全力の強化に切り替えるまでの時間が相当短い。

それがてめえの持ち味で、奥の手ってわけか」

「く……、はあ、はあ……っ」

じりじりと横に動き、落ちた長剣に向かおうとするマルケウスの息は荒かった。気の抜ける時が無い剣の応酬が続き、もはやかなり消耗しているのだ。

バートと一緒に待ち伏せていた、今はギャラリーとなっている男達が口笛を吹く。

「さすがバートさんだぜ！ 今でも防いじまうのか！」

「そろそろ決めてくれよ兄貴！」

男達はもう、いや最初から、バートの勝利を確信しているようだった。組織内でも実力の高さが信頼されているのだろう。マルケウスも自主的に修練を積んでいる、候補生の中では実力者のはずだけども、勝ち目はかなり薄そうだった。

伊織は確信する。

相手は『本物』だ。

ひたむきに修行する騎士候補の少年や、剣道にのめり込む女子高生とは違う。死線を経験しなければ辿り着けない、本物の剣士の高みにいる。

ぞくりとした興奮に伊織の背は震えた。

「……何の真似だ、女。先にてめえから死ぬか？」

問いかけられて初めて、伊織は自分のしている事に気付いた。丸腰のマルケウスに斬りかかろうとしたバートの正面に立ち塞がり、剣を抜こうとしていたのだ。しかも一緒に動いてくれようとした省吾には手をかざして援護を断っていた。完全に無意識でだ。

我ながら呆れてしまった。でもなんだか、気分は晴れやかだ。

「今の決闘は彼の負けでいいでしょ。だから次は、私と戦ってくれない？」

それを聞いたギャラリーの男達が笑い声をあげる。

「おいおい、お前今の見ても兄貴の強さが分からなかったのか？ 多少腕に自信があるうと、ガキが勝てるような人じゃないぜ？」

「なんせバートさんは『死の谷』からも生きて帰ったお人だからな！」

ついでにそんな情報を教えてくれた。あいにく聞いた事のない地名だったけど、亜竜山脈よりすごいのかしら、と伊織は首を傾げる。「それがどれだけすごいのか、日本人の私には分からないけど……、別に、勝てるなんて思っていないわ」

剣の切っ先を突きつけて、伊織は本心から告げる。

「こんな機会、滅多にないもの。勝ち負けなんてどうでもいいからただ戦ってみたいの。まだ私すごい下手な強化しか出来ないけど、お相手願えるかしら？ 殺されたって文句は言わないわ。もちろん殺されないよう、なるべく長引かせるつもりだけど」

バートは嫌いな虫でも見たかのような顔をした。

「てめえ、女でその年で、戦闘狂かよ。せっかくそれなりな顔してんのに勿体ねえ……」

「ふふ、褒め言葉として受け取っておくわ。ところで、その『死の谷』から帰ってくるのってそんなにすごいのか？」

興味本位から訊いてみた伊織に答えたのは、背後にいるマルケウスだった。

「……はったりだ、まともを受け取らないほうがいい。この男が強いのは認めるが、さすがに信じられる話ではない」

「そんなすごい場所なの？ 亜竜山脈より危険とか？」

「亜竜山脈からの生還者であればまだあり得る話で済む。だが、死の谷となると……。この国からだ亜竜山脈を越えなければ辿り着けない場所だが、生きて帰って来た者が誰もいないと言われているからその名がついた谷だ。死の谷への追放は、隣国のグレンバルドでは死刑を意味しているほどだぞ」

彼の言う通りはったりなのかと視線でバートに問いかけてみると、信じられんならそれでいいんじゃないかねえの、とばかりに肩をすくめられる。確かにまあ、どっちでもいいかもしれない。彼の強さは本物だし、伊織にとって重要なのはそれだけだ。

「まあいいわ。強い相手ならなんでも」

その台詞に呆れたような視線を向けられながらも、伊織は授業や自主練習の通り、体内にある何かに意識を注ぐ。

それは伊織自身の魔力だ。だけどまだ、あんまり上手くは感じ取れない。今日の午前中に行った凜との試合がいい刺激になったのか、直後の休憩時間での自主練習では、初めて《身体強化》の魔術に成功したのだけど。

あれを、もう一度。

まだ成功したのはたったの一回だ。そんな不確実なものをぶっつけ本番で成功させなければいけないこの状況に、緊張しながらも笑いが込み上げてくる。強化出来たとしても敵う相手ではないけれど、強化なしでは間違いなく瞬殺だ。だから必ず、成功させなければいけない。

だからきつと、成功する。

「《身体強化》……！」

魔術を発動する際、術式名を口にする事で意識がその名に固定され、成功率が上がるのだそうだ。そういう話があるのだと教師が授業で言っていた。迷信や思い込みだと馬鹿にする人もいるけれど、日本でいう血液型性格診断くらいにはこちらの世界で広く信じられている、魔術における小技の一つだという。

それに倣い、^{なら}宣言する。

手に持つ剣の重みが消滅し、伊織の全身から白い魔力光が噴き上がった。

「っ！」

これでは駄目だ。すぐに魔力が尽きてしまうと直感で分かった。先程のマルケウスの、振り下ろす瞬間だけ魔力光が出ていた光景を思い出す。鋼が授業で大タルを持ち上げた時、教師に言われて徐々に魔力光を腕から出させていたのもイメージする。当然ながら、必要な分だけしか必要ないのだ。大タルを投げ飛ばしてしまった日向のように、必要以上の強化は思わぬ危険を招くだろう。

光が体の中に収まるよう、出力を絞っていく。なんとか無理やりにそれを成し遂げて、伊織はこれから戦う相手を見据えた。

「待っていてくれてありがとう。さあ、始めましょうか」

「そう言って、いざ戦いを挑もうとしたその時。」

高揚した気分には水を差すように、どたどたと騒がしい足音が部屋の外からやってきた。

「バートの旦那あっ!!」

悲鳴じみた情けない男の声も一緒だった。伊織達三人がやって来た通路から、顔を腫らした男が現れる。いかにも顔面を殴られましたと言わんばかりの、変色を伴った痛々しい腫れ具合だ。

「助けて下さい! 騎士学校の服着たガキが三人、暴れ回って止められません! ギルドに喧嘩売ってきた三人組はきつとあいつらです! もう無茶苦茶で!」

「とうとう本命が来やがったか。だが、おい。この部屋に誘導する手筈になってただろうが」

「そ、それが本当に無茶苦茶で、誘導なんか無理でした! こっちが何人でかかっても全員蹴散らしながら、好きなように進みやがるんです!」

騎士学校の服で三人組。もはや正体は確定したようなものだった。それにしても、話を聞くだけでも確かに無茶苦茶である。個人がどれほど鍛えて強くなったところで数の不利を覆すのは難しいと、伊織の常識は言っているのだけど。魔術がある世界では、鋼達はそんなに圧倒的に強いのだろうか。

泡を食った男の報告を聞いて、バートは苦々しく舌打ちをした。

バートは彼の仲間の一人に視線を送る。魔法使いっぽい服装の口ブを着たそいつは、マルケウスとの決闘を一人離れた場所から見守っていた男だった。今現在も、室内を一望できる部屋の隅に陣取り壁に寄りかかっている。

「もう遊んでる時間は無さそうだ。ここを手っ取り早く終わらせてくれ」

「んー、了解」

少し面倒そうにその男は壁から背を離し、大きな宝石がついた指輪をしている手を伊織達に向ける。あまり知識のない伊織でも、そんないかにもな格好でいかにもな動きをされたら嫌でも分かっちゃった。剣士、魔法剣士、魔術師でいえば、この男は間違いなく一番最後の奴だ。

なんだか嫌な気配がびしびしと伝わってくる。同時に伊織は初めて見る、これが授業で言っていた魔法陣なのだろうな、という丸い紋様が男の手の先に浮かび上がった。

魔術を発動させてはならない。そう思うのに、前へ出るのも躊躇われた。あの魔法陣は引き絞られた弓矢や銃口と同じものだ。前に立つのは自殺行為だと伊織の勘は言っている。もし止めようと踏み出せば、その時点で未完成な術式であってもぶっ放されるビジョンしか浮かばない。そして未完成な威力の弱い魔術であっても、ド素人の伊織に対処する術は無いだろう。

「ちよつと、卑怯よ！ 殺されるならせめて剣で斬られて死にたかつたのに！」

「重要なのはそこか！？」

マルケウスの叫びも置き去りにして、魔法陣が強く光り輝く。マルケウスか省吾が何かやってくれるのに期待するしかない。もしくは放たれた何らかの魔術を、伊織が斬ってみせるしか。……いや、冷静に考えれば絶対に無理なんだけど、漫画とかではよくあるパターンだ。それが成功するのに賭けてみるしか、伊織に残された選択肢は無さそうだった。

そしてとうとう、魔術師の男から魔術が

放たれる直前。

ばきばき、という木の板が折れて軋むような音を、室内にいる誰もが耳にした。魔術師の男が慌てた様子で後ろを振り返る。めきめき、と致命的な音をさせながら、向こう側から何かに圧迫されるように、直近の壁がたわんで膨らんでいく。

そして、壁が破られた。

「ぼおん、と破壊音を撒き散らしながら、壁の一画、二メートルは超えている範囲が丸々壊されたのだ。」

その破壊の余波だけで魔術師の男が壁の残骸と共にまとめて吹き飛ばされていく。男の体は反対側の壁まで達して、さっきまでは壁だった木材などがそこに降り注ぎ、哀れにも彼は残骸の中に埋まってしまった。

滅茶苦茶過ぎてその瞬間は何が起こったのかよく分からなかったけど、後から思い出してみるとそういう感じの出来事が起きたのだ。そして当然、原因となった空いた壁のほうに室内の視線は集中する。

魔法陣をその手に光らせて、穴の向こうに凜が立っていた。その後ろには鋼と日向、それに雪奈までいる。

「……なんだ、三人共無事か。話聞いた時はあいつらアホかと正直思ったが、要らん心配だったか？」

「いや、すごい助かったで！ 正直メツチャ今ピンチやったから！ 鋼が誰に言うでもなく呟いて、それに省吾が答える。新しく開通した通路を使い、四人はそろそろと部屋に入ってくる。歩き方や振る舞いに、緊張した様子など全く見つけられない。

「まあお前らとの話はまた後でな。……それよりも」
話を切り上げ、バート達のほうを向く鋼。

「いや、バート達ではなく、バート個人に対して鋼の視線は固定されていた。」

「すげー懐かしい顔がいるな。まさかの再会だな、バート」

「んな、馬鹿な……。カミヤ、か？ 嘘だろ？」

驚く伊織達の前で、二人はお互いの名前を呼び合ったのだった。

かつて異世界のどこに落ちたか省吾に訊かれたのは、確か入学式の日だった。

そしてあまり正直に言いたい場所でも無かったので、少し鋼は嘘をついた。

それにまあ、落ちた場所は違ったがルデス山脈で半年過ごしたのもまた、事実なのだ。

見知った、共に戦った事もある顔に傷跡がある男が呆然とこちらを見ている。「バートさん、知り合いですか」と周りの男達に問いかけられているあたり、この集団のリーダーみたいなものらしい。

「信じ、られん……。あの状況から、生き延びたのか」

幽霊にでも遭遇したようなバートの反応に鋼は苦笑する。最後に別れた時は、そのまま死んだと思われていても不思議でない状況だった。もう二年と半年ほど前の事だ。

「まあな。さすがにあの時は死ぬだろうなと思ったが、なんとか切り抜けたよ」

こいつらのおかげで、と言い足しながら日向と凜を視線で示す。もちろん二人もバートとは顔見知りだ。死の谷とか呼ばれてるらしいあの地獄で、鋼達は同じ境遇の遭難者達に拾われた。バートはその一員だ。最後の方まで生き残っていた貴重な一人でもある。

しかし、まあ。鋼個人としては、それほどバートに対しては悪感情を抱いていないものの。鋼の戦友達と、彼の折り合いは悪い。

「お久しぶりですね、バートさん」

手の中の魔法陣は待機させたままで、にこりと笑って凜が声をかける。

「今では盗賊崩れのような犯罪者達の、兄貴分ですか。出世したじ

やないですか。下劣で恥知らずなあなたには、よくお似合いの立場だと思えますよ？」

飛び出した毒舌に、マルに有坂、省吾がかなり驚いた顔をしていた。鋼はため息をつく。バートの周りにいた男達も、これにはさすがに逆上したようだ。

「兄貴、知り合いか知りませんが容赦する必要ないっすよね」

「もう何十人もやられてるって話だろ！ 聞くまでもねえ！」

怒りを見せるでもなくいまだ煮え切らない態度のバートを差し置いて、部下らしい男達は魔力を活性化させた。そういえば至近で魔力活性化の気配を感じたので、凜に壁ごと吹き飛ばして倒してもらったのだが。既に一人この部屋にいた奴がやられているのもあつてか、男達は完全にやる気になっている。

「俺らに喧嘩売ってただで済むと思うなよっ！」

《身体強化》の魔力光で全身を覆った男が一人、叫びながら飛び掛かってくる。これまで見た敵の誰よりも速い。地球で言えばトップクラスの陸上選手の、全力疾走に匹敵するだろう。さっきまで倒しまくっていた男達とは明らかに別格だ。その後ろに他の男が何人か続く。

凜がすかさず《圧風》を放つが、男達は強化にものを言わせた脚力で左右に散らばり避けてしまう。凜は焦らず、右に避けた最初の男にすぐさま手を向け直した。その手に依然輝く魔法陣を目にして、男の目が驚愕に見開かれる。

一度魔法が発動すれば、魔法陣は一旦消滅すると思っ込んでいたのだろう。その予測と知識は正しいものだが、男は前提を間違っている。凜の手に待機している魔法陣は元から一つではないのだ。

一つの魔法陣に見えているだけであつて、実態は違う。複数出現しているべき魔法陣の座標を、全て同じ位置にしているだけだ。凜は今も《圧風》の魔術を、複数同時にその手に宿している。

多重魔法陣。そう呼ばれる技術だった。

「ぐはっ」

二発目の《圧風》を避けきれず、くらった男がその場に倒れた。半端に強化した体で踏ん張ろうとしたものだから、風のダメージ全てをその体で受ける羽目になったのだろう。強化しているのだから、大人しく吹き飛んでおいたほうが衝撃が逃げて助かっただろうに。隙ありとばかりに左から二人目の長剣を構えた男が凜に襲い掛かる。近距離戦は苦手と踏んでいたので、油断しきっていた。逆に凜に一瞬で肉薄され、その顔面を手で掴まれる。

アイアンクローの要領で持ち上げられた哀れな男が、続いて凜の前に現れた三人目の敵に武器として振り下ろされた。啞然とした表情をしながら三人目が腕を交差させてそれを受け止めるも、即座に横合いから放たれた日向の蹴りはどうする事も出来ず。呻き声と骨が折れる音を響かせながら、三人目は床に沈む。

凜が片手で持ち上げている二人目を、警戒して止まった四人目にぶん投げて《圧風》で加速させる。四人目は体勢を低くして衝突しながらも受け流すが、二人目が持っていた長剣を凜がちやつかり奪っていた事には気付いていなかったようだ。《加護》で強化されている腎力しじりょくで、凜は瞬時にそれを投擲していた。

肩に長剣が突き刺さり、悲鳴を上げて四人目は苦痛にへたり込む。先陣として襲い掛かってきた四人はそれで一旦、片付いた。

結局、ほとんどを凜一人に任せた形となってしまうた。

「わりいな、ルウ。お前にばっか負担かけて」

「いえ。気になさらないで下さい。負担だなんて思っていないません」心からそう思ってくれていると分かる表情で振り向いた凜がそう言うしてくれるが、女にばかり戦わしている男という構図には違いがない。鋼としてもばつが悪い思いたが、それぞれの特性を考えればこの配置が妥当なのだった。

四人が容易く無力化されたのを目にして他のバートの取り巻き達が二の足を踏む中、一人だけ誰もいない方の壁へと素早く駆け寄る男がいた。この部屋に元からあった物を集めたらしい一画があつて、目当てはそれだ。男は一番大きい木箱に飛びつき《身体強化》で持

ち上げた。

「ならその女は後回しだ！」

全力でそれを、鋼目掛けてぶん投げる。

恐らくは凜がこちらの中で最も強いと思い込んだ男が、目標を切り替えたのだ。

くるくると回転しながら、四角い木箱が走る車の勢いで迫る。その威圧に鋼の隣で片平が身をすくませた。もちろん鋼はいざとなれば彼女を守るつもりだったが、やはりその必要は無く。ぴたりと木箱が、空中に静止する。

既に待機させていた《圧風》を使い切っていた凜が、かざした手に新たな魔法陣を発生させている。凜の横を通り過ぎようとした木箱がたつたそれだけで空中に留められているのだ。以前《火矢》を風圧で握りつぶした光景が思い出される。

「《射出》」

木箱を投げた男に手を向け、凜が小さく呟いた。それは最近、早朝での鋼や日向との魔術トレーニングで、凜が編み出して練習している術式の名だった。

「っ！」

筒状に展開した《圧風》で物を器用にも空中に固定し、後ろから更なる《圧風》で射出する。

砲弾並みの速度で大きな箱が一息に男に迫った。危機を感じ取ったか投げた男が焦った表情で既に回避行動に移っていたが、攻撃が速過ぎてほんの少し間に合わない。箱は男の片腕を掠め、背後の壁に当たって粉々に粉碎された。

「あ、ああっ！ぐ、お、痛えよあ……っ！」

中身の酒瓶も破けて壁と床がアルコール浸しになる中、のたうち回る男の声を皆が耳にする。

バートや省吾達の呆然とした視線の先には、掠めただけでスタズタに引き裂かれ、無残に折れ曲がった彼の腕がある。拳銃の原理を風で再現した凜のその術式は、火力に乏しいと言われる風系魔術に

しては隔絶した攻撃力を備えているのだ。

「こちらも、警告しておきましょう」

苛立ちを抑えたような淡々とした声で、凜は半分に減った男達を睥睨する。

「この方に手を出して、ただで済むと思わない事です」

その宣告と気迫に、室内がしんと静まり返る。

そこは俺だけじゃなく、私達にと言っておくべき場面だと思うのだが。

ちらりとそう考えた鋼だが、この場でわざわざ口に出す事でもないかと諦める。この凜という少女は、どこか鋼を戦わせない事を己の使命としている節があったりする、かなり過保護な奴なのだ。

魔力容量に余裕があり魔術を乱発できる彼女と違い、確かに鋼はあまり魔力を消費する行動は取れない。それにそもそも戦闘における手札も少ないから、鋼が前に出て敵の攻撃をいなす場合、魔力消費の激しい力業に頼る事が多くなってしまふ。

対応力の高い凜がなるべく前に出て、鋼の魔力を温存させようと考えるのは無理からぬ事なのだ。それで鋼も強くは言えず、基本的に彼女に任せる事が多くなる。情けない限りだが。

「……少し、やり過ぎではないのか？」

沈黙を恐れる事なく、あるいは空気を読まず、ひどい状態になった男の腕を見てマルが口を開いた。

凜はそちらに視線を向け、物分かりの悪い生徒に根気良く教える教師のような表情で、木箱の残骸を指差した。

「あの残骸をよく見て下さい。あんな重くて割れ物が詰まった、危ない箱だったんですよ？ それを人に投げつけるなんて、信じられません。神経を疑います。下手すれば命に関わる大怪我ですよ。あまりにひどいと思いませんか？」

倍以上の速度でぶつけ返そうとした奴の台詞としてこれは許されていいのだろうか。

「む？ その理屈だと一番ひどいのは　むがっ」

言いかけたマルの口を省吾が慌てて塞いだ。ファインプレーだった。

「だからやり過ぎだとか、可哀そうだとか、この人に対して感じる必要はありません。殺人未遂なんですよ？」

この場合凜だつて殺人未遂だが、先に手を出してきたのが相手だというのはかなり重要なポイントとなる。彼女が後々罪に問われたりする可能性はほぼ無いと断言していい。殺意ある攻撃に対してのみ、殺意ある攻撃で反撃してよいと予め綱も彼女達に言い含めてある。

「……相変わらずの忠犬ぶりだな」

悪びれない凜に対し、事態を静観していたバートがようやく口を開いた。

忠犬。

カミヤの前に立つ二人の少女をそう評したのはからかいの類ではなく、本心からだ。聞いたカミヤが少し不快そうな顔をする。

気にした様子もなく、呼ばれた当人である少女はバートを見た。

「それで、あなたは来ないのですか？」

「……やめておく」

「部下がやられているのに？ まあ、腰抜けのあなたらしい判断だとは思いますが」

誰がその手に乗るか。あからさまな挑発で、先にこちらに攻撃させようという腹なのは分かっている。今すぐにでもバートを叩きのめしたいという強烈な敵意が、少女の眼光には宿っている。

この時点でバートは、彼女達がカミヤに先制攻撃を禁じられているのだと看破していた。でなければ攻撃されない理由がない。バートの知る限り、谷でカミヤと行動を共にしていた少女達は皆、カミヤの言う事には絶対に従う。

忠犬という呼び名を考えたのも、そもそもバートではない。獵犬、あるいは忠犬。時にはカミヤの犬だとか。死の谷にいた頃、仲間達はカミヤに従う四人の少女の事を、そんな風に渾名していた。さすがに不愉快そうな反応をするカミヤの前では皆、口にするのをなるべく控えていたが、バートは中々の確な言葉だと思っている。

あれは、いつだったか。死の谷にいた頃の話だ。

入るのは比較的楽だが、出られない。死の谷とはそういう場所だからあんな地獄にも、外から人間がやって来る事がままあった。追放された罪人や、無茶な依頼を受けた間抜けな冒険者などだ。気付いたらここにいたという、カミヤのような訳の分からん輩も何人かいたようだが。

あの地獄は間違いなく、人間が一人で生きていける場所ではない。様々な事情でやって来た奴らは皆、本来なら個々に死んでいくはずだった。それが偶然にも出会いを重ね、いつしか生き残るための集団が形成されたのだと聞いている。バートも途中で合流した人間なので、最初の経緯はよく知らないが。非力な人間でも、徒党を組めばなんとかかんとか、生き残る事くらいは出来るらしかった。

それでも毎日が必死だ。幸運に見放されればすぐにでも全滅する、死と隣り合わせの戦いの日々だ。

新たな遭難者を見つければ協力者は増えるが、魔物との戦いで死んでいく者も当然いる。

そしてとうとう、ある日の魔物の襲撃で、かなりの人数がやられた時があった。

死者多数。何より最悪なのが、集団をまとめていた凄腕の剣士がくたばった事だった。

元々地獄での生活で荒んできていた皆の心の均衡は一気に崩れた。おかしな空気になりつつあった。不安や苛立ちの矛先は、集団内でほとんど役に立っていなかった四人の子供へと向けられる事になる。

生き残るために協力してただけで、罪人や盗賊も中にはいるのだ。特に素行の悪い奴の主導で、何人かの男達がある晩行動を起こした。戦いで全く役に立っていない四人の少女がそのターゲットだった。

早い話がまあ、彼女たちを性欲の捌け口にしようと思いついたのだ。まだ十三か四のガキだろ、という意見はおかしな空気の前に封殺される。役立たずのクセに貴重な食料を消費しているのだ、せめてその体で役立つてもらうのは当然と、主導した男が言う。色々と限界だった男達も彼に乘せられた。白状してしまうと、バートもその中の一人であったりした。

結果的にそれは未遂に終わる。止めたのはカミヤだった。

「なら、こいつらをちゃんと戦力に数えられるようにすれば文句はないな？」

カミヤは四人の少女達と同年齢くらいの少年だったが、四人とは違い早い段階から戦いの才能を発揮し、既に最前線で戦う一人に数えられていた。集団内ではかなり役に立っている方で、死んだまとめ役の男からの信頼も厚く、まだ子供とはいえ発言力は高い。そのカミヤにそう言われてしまったのは、不埒を働こうとしていた男達も一旦引き下がるしか無かった。

まあ、どうせ無理だろう。バートを含め、男達は高を括っていた。四人は明らかに、戦いに向く性格をしていない。素人で、女で、子供。足手まとい以外の何者でもない。しっかりと訓練を積める環境にあつたとしても、果たしてこの谷でまともに戦えるレベルに彼女達を鍛え上げられるかはほとんど疑問である。

四人の少女はカミヤの弟子的な扱いとなり、以後カミヤは彼女達を連れて魔物と戦うようになる。形だけ見れば女を困い込んでいるとも取れるその行動に対し、集団内の男達は揶揄するような事を色々言っていたようだ。だがそんな事よりも。バートが心配していたのは、貴重な戦力であるカミヤが足を引っ張られて命を落としてはしないかという事だった。

しかし一体、どういうカラクリか。

カミヤも少女達も死ぬ事なく、日々は過ぎ去る。

いつの間にもやら少女達は戦士の顔つきになり、むしろおっかない印象をバートに抱かせるようになる。カミヤが戦闘の技術を教えるのが余程上手いのか、少女達が恩人であるカミヤの指導に応えようと相当頑張ったのか。色々な歯車が上手く噛み合ったのだらう。子供達は頼りになる戦闘集団へと変貌を遂げ、もはや四人をただの女子供と侮る者はいなくなつた。

だがまあ、当然の事ながら、一部の男達に襲われかけた一件は尾を引いたわけで。四人の少女は優秀な戦力になつたが、扱いは事この上無かつた。集団内の男が近寄ればあからさまに距離を取り、話しかければ警戒と猜疑に満ちた視線が返ってくる。まともに話せるのはカミヤだけだ。なのでバート達他の遭難者も無理に彼女達と交流しようとはせず、扱いはカミヤに一任する事で集団はなんとか安定を保っていたのである。

だから当時の谷の生き残り達は、彼女達それぞれの内面などろくに知らない。しかし外から見ているからこそ、案外よく分かる事もあつたりする。

それは例えば、カミヤが傍にいる時といない時での、彼女達の態度の違いだとか。カミヤに対してしか絶対に向けない、信頼に満ち溢れた微笑だとか。カミヤを悪く言つた奴に対する虫でも見るかのような視線だとか。カミヤがいない場所であるうと全力で発揮されている、彼への忠誠心だとか。そういった諸々だ。

カミヤの忠実なる獵犬。

誰が言い出した忘れたが、四人の少女達の渾名がそのようなものになつたのは、至極当然の事だとバートは思っている。多分納得していなかつたのはカミヤくらいのものだらう。当の少女達ですら、その渾名を耳にして嫌そうな顔をした事など一度も無かつたように思う。

「おい、手当てしてやれ。あいつらの相手はするな」
五体満足な部下達にバートはそう指示を出す。戸惑いつつも部下達が、やられた奴らの介抱に向かった。

バートの眼前では、ほとんど一人で自慢の部下を五人ばかり無力化させた少女が立ちこちらを睨んでいる。腰抜けと挑発されようが、この相手に挑む気には全くなれなかった。

「……すまねえな。最初に止めとくべきだった」

負傷した部下達に謝る。カミヤ達の登場があまりに予想外すぎて、動揺したバートは様子見を選んでしまった。完全に無駄な犠牲である。

「ああチクシヨウ！　うちの組織に喧嘩売った三人組がカミヤだと知ってたら、待ち伏せなんてやらずにとっとと逃げてたものを」

「……随分俺達を買ってくれてるんだな？」

カミヤが少し意外そうに言うが、こちらこそ何を言うのかと問いたい気分だ。

「当たり前だ。俺の中で絶対に敵に回したくない第一位だぞ」

勝てるはずがない。バートはそう確信している。

カミヤの戦闘における天才っぷりは、谷にいた頃からよく知っている。

そのカミヤから教えを受けただけの四人の少女の内、当時最も弱かったこのルウという少女にすら、バートは勝てる自信が無い。

「組織を潰すって言うなら好きにしてくれ。俺は止めん」

手を上げ、バートは素直に降参だと告げる。

組織の顔役として許される行動ではないだろう。だがバートは、己は命のためならプライドなどドブに捨てる男だと自負している。命を何よりも優先するその考えこそがバートが死の谷で学んだものであり、今ここでこうしていられる理由なのだから。

だから何も、己に恥じる事は無かった。

あのやたら歴戦の戦士っぽい傷跡の男が、鋼に対しては戦うまでもなく降参してしまった。

伊織達も驚いたが、彼の部下らしき精鋭達はもっと驚いているようだった。

「バ、バートさん……！？ こいつらがギルドを潰すのを止めないって……」

「あ？ 言った通りだぞ。お前らもこれ以上戦うのはやめとけ。相手が悪過ぎる」

バートに対する不審と、ここまで言うのだからこの相手は本当にやばいのだろうという鋼達に対する畏怖。そういうのがないまぜになった表情で、男達は味方の手当てにのろのろと戻った。

「こいつら、何者なんですか？」

比較的軽傷な、手当てを受けている一人がバートに問いかける。

伊織も興味津々に聞き耳を立てた。バートと鋼達はどうかやら知り合いらしい、という事しかまだ、状況を見守る伊織達には分かっていないのだ。

「……俺が死の谷にいた頃、一緒に戦った奴らだ」

「ええっ！？ こんなガキ達か？ だってバートさんが谷にいたのって二、三年前の話じゃ」

「ああ、まだ体も出来上がってねえようなガキだったぜ、当時はな。死の谷にいた奴らの中じゃぶっちぎりで最年少だ。年なんてもんは本物の強さには関係ねえってのがよく分かる奴らだったよ。特にカミヤはな」

そこまで彼らのやり取りを聞いた伊織・省吾・マルケウスの三名は、まじまじと鋼達に視線を移す。面倒な奴らに聞かれちゃったという表情を鋼は隠しもしなかった。

「えっと、神谷君達は死の谷にも行った事があるわけ？ ルデスってことは別に」

「ああ、まあ……。つーか、最初に死の谷に落ちて、そこから脱出してそのままルデスになって流れが正解というか」

「つまり貴様は、嘘をついていたのか？」

マルケウスの詰問口調に、面倒そうに頷く鋼。どうも乗り気じゃないというか、谷の事は隠しておきたかったようだ。

「……どうせ、こっちの世界じゃほとんど信じてもらえんような話だし。目立つのも嫌だったし。山はともかくあの谷にはいい思い出なんて全然ねえし。だから敢えて言わなかったんだよ。亜竜山脈に半年いたのもほんとだしな」

「……は？ 半年？ ちよつと待て、初耳だぞそれも！」

魔物の住処にそんな長い期間滞在して、どうして無事でいられたのだとマルケウスは言い募る。彼がどうしてそこまで動揺したのか最初分からなかった伊織は、それを聞いて確かにと思い直した。例えば日本にいて、登山家が山で遭難して半年後生きて戻ってきたなんてニュースなど聞いた事がない。軽く考えていたけども、鋼達がかつて置かれた状況から生還できたのはかなり奇跡的な事なのだ。

「んな話は全部後でいいだろうが後で。……ん？」

マルケウスの応対に辟易していた鋼が、伊織達の後方に顔を向けた。

つられて伊織も振り返る。伊織達三人がこの部屋にやって来る際に通った通路には、今でもその時の追っ手達が控えていた。室内の状況を戸惑ったように様子見していた無法者達だけど、何やら騒がしくなってきた。

そして今更ながら気付いたけども、鋼達の事をバートに報告しに来た顔を腫らした男が部屋からいなくなっている。

「こっちですラグルの旦那！」

騒がしくなった通路の向こうから、声と共に複数の足音。

追っ手達をかき分けて、新手の集団が現れようとしていた。

「……面倒な奴がきやがった」

「バートが嫌そうな顔で呟く。鋼が訊ねた。

「呼ばれてるラグルとかいうの、強いのか？」

「俺は直接やりあった事はないからよくは知らん。弱くはねえはずだ。多分俺と互角くれーか？」

「せこい犯罪組織のくせに、バートと同等の人材は他にもいるらしい。」

「その情報を聞いた鋼が無言で何やら考え込む。その間に、迫る足音はとうとうこの部屋に達してしまった。」

「まず現れたのは、禿頭の巨漢だ。」

「おう？ おいバートお！ そのガキどもが侵入者だろお！？ 何をちんたらやってやがんだ！」

「野太い濁声だみこえをあげたその男を見て、伊織はう、と思わず呻く。

「無法者というイメージを集約させたような男であった。こう、言っちゃ悪いがいかにも知性があまり無さそうな顔つきと口調で、筋骨隆々の上所うしろ持している得物は斧だ。剣士や戦いというものに憧れを抱く伊織ではあるけど、こういった山賊っぽい乱暴者とは関わるのも遠慮したい。」

「いや、こういった手合いの者ともいつか実戦で剣を交わしてみたいとは思っけども。」

「ああ、わりーなラグル。俺は降りる事にした」

「……ああ？」

「何を言っただか理解できないという様子で、巨漢が首を傾げた。ラグルの後からまた何人か、武器を所持した男達が部屋にやって来る。その中にはさっきの、顔を腫らした男も混じっている。」

「このガキ達とは戦わねえと言っただんだ」

「は、はああ！？ バートの旦那、何を言っただですか！？」

「顔を腫らした男が叫ぶ。他の男達も驚愕と当惑の入り混じった表情でざわめきだす。」

「それを止めたのは、がんっ！ という斧を床に叩きつける音だっ

た。

「おいバートお……！ オルトムじゃあるめえし、まさかおめえがんな腑抜けた事言うとはな」

ラグルの斧が床に突き刺さっている。見た目通りの剛力なのだろう。

「まあそりゃ、納得できねーわな。だが俺が一番大事なのは俺の命でな。勝てる見込みが無さそうなんで、俺はこいつらとは敵対しないと決めた」

バートさんが勝てないって、と再びざわめきだす男達。

ラグルが殺気で目をぎらぎら光らせて、どのざわめきよりも大きく声を出した。

「この玉無し野郎が！！ そのガキどもを始末したら次はおめえの番だ、覚えとけよお！？」

「お前らが勝てるとは思えんが、そんなじゃそろそろ俺は退散するかね。なんせこいつらの目的は組織の壊滅らしいからな」

さらりと伊織達の目的までもすりかえられた。マルケウスが何か言おうとしたのを、省吾がまた口を塞いで防ぐ。省吾がそうした理由を考えてみて伊織にも思い至った。人質の救出が目的だと素直に言ってしまうえば、それこそ人質の命を盾に色々要求されかねない。

「そんな数人のガキに俺達が壊滅させられる！？ バートてめえ、ヤクでもやって狂ったか？」

「おいバート、退散する前に案内して欲しい場所がある」

ラグル達を無視して鋼がバートに小声で言う。

「……案内？」

「あなたには貸しがあったら？ ここはヒナとルウに任せて大丈夫だから、俺がある場所に案内してくれ」

貸しという言葉が出た途端、かなり渋い顔をするバート。

「……それを出されたら、こつちとしても断れねえ」

「だから出したんだよ。……ヒナ、お前は主に敵集団への攻撃。ルウはそのフォローと、省吾達を守ってやれ。この場はお前ら二人に

任せる」

「了解」「はい」

即座に頷く二人だけでも、え、大丈夫なの？ というのがこちらの本音である。

さつきも鋼は動かず二人だけでバートの部下を倒したけど、今度は更に一人減るのだ。凜が守りに入れば、日向がほとんど一人で戦う羽目になる。これはもしかすると、あまり戦力になれなくても伊織も手伝ったほうがいいのではないか。抜き身のまま持っていた長剣に目を落とし伊織が胸をわくわくさせていると、怪訝そうにこちらを見る鋼の視線に気付いた。

「お前らは何もしくない。二人に任せとけ。……ルウ、勝手にこいつらが動くようなら無理に守らなくていい」

「分かりました」

「無視してんじゃねえっ！！」

怒声に伊織達が振り向けば、ラグルが背中に差していた別の斧を手に取ったところだった。

床に突き刺さる斧と比べてそちらは小ぶりだ。もしかして手投げ斧というやつではないだろうか。

伊織の予測を裏付けるようにラグルはそれを投擲した。明らかに《身体強化》の魔力光を肩に宿らせながら。

剛速球。まさにそんな勢いで、空気を掻き分け回転する斧が飛来する。

「ひっ」

雪奈が短く悲鳴をあげる間に、日向が躊躇無く斧の前に立ちはだかった。伊織の動体視力をもってしても見切れない、縦回転している斧を掴み取ってしまう。

そんな芸当にもそろそろ伊織は驚かなくなってきた。バートが恐れる通り、日向も凜もこれくらい当然やってのけるのだ。それを最初から理解している鋼も、全く斧など気にする事なく平然としていた。

日向が斧を投げ返す。

プロ野球選手の投球並み、ラグルの投擲とほぼ同じ速度だ。自身に迫る手投げ斧を、ラグルは床から引き抜いた大斧で迎え撃つ。甲高い音をさせながら、手投げ斧は床に転がった。

「なるほど、こりゃただのガキじゃねえ」

警戒したように目を細めるラグルを完全に無視する形で、今度は鋼は日向の背に歩み寄った。その背中に手をつける。

「ヒナ、念のために少し魔力をやる。手加減なしでやれ」
「了解」

そういう風に魔力は受け渡しが出来らしかった。伊織はその方面の知識がまだほとんど無いけども、魔力というものが尽きれば魔術が使えなくなる事くらいは知っている。

感心する伊織は、室内の妙な空気に気付いた。ラグルの傍の男達も、バートも、マルケウスも省吾も雪奈も。誰もが変なものを見る目で鋼と日向を見ている。何をやってるんだという表情だ。鋼の発言から、魔力を譲渡しているのだと分かるだろうに。

「ああ？ 何をやってやがる。お前らとつとかかれえっ！」

ラグルだけは周囲の雰囲気の変化に気付かず、そう号令をかける気を取り直したように男達はそれぞれの得物を握り締めた。

敵集団がこちらに向けて走り出す。その一歩目が踏み出された瞬間、鋼の前から日向の姿が消失した。

「なっ！」

男達の誰かが動揺の声をあげ、倒れる。

男達が散らばり、何とか応戦しようとする。その光景を伊織は戦慄の思いで眺めていた。

「速過ぎでしょ!？」

伊織の目をして、最初消失したと錯覚した。実際は日向は、物凄い速度で男達に向かって駆け出したただけだ。

以前街中で《火矢》の襲撃に遭った時、凜の動きを省吾や雪奈は目で追えていなかったのを思い出す。似た事が今、自分の身に起き

たのだ。注意して思い返せば、日向が動いた瞬間を伊織は思い出せる。目には映っていたのに、あのスピードに伊織の意識が追いつかなかったのだ。

処理が追いつかない速さで目の前の状況が次々に動けば、人の脳は途中経過を省いてしまう。対抗するには高い集中を維持して、その速度の世界に意識を置き続ける必要がある。

鋼は日向に手加減なしでやれと事前に言った。つまりはそういう事なのだ。今の日向の速さを見れば嫌でも思い知らされる。彼女は今までずっと、手加減していたのだ。

「そのチビ、毒使いです！ 斬られたらしばらく動けなくなる！」
「言うのが遅えよバカが！！」

顔を腫らした男が皆に叫び、罵声を返されている。バートの部下と同じくラグルの部下も精鋭っぽい動きなのに、日向は彼らの間を駆け回り翻弄しながら敵の数を減らしていた。

伊織の視界の手前では、繰り広げられる戦いなど眼中に無いというように鋼と凜が向かい合っている。凜が鋼の胸に手を置く形で。今度は何やら、凜から鋼へと魔力を渡していたらしい。日向の戦いぶりからそちらに伊織が意識を移した時には、既にそれが完了して手が離れるところだった。

「コウ、お気をつけて。特にその男に」
「俺かよ」

凜が鋼に声をかけ、バートがぼやく。そんなやり取りに苦笑しながら、鋼はバートを連れて部屋から出て行った。伊織達が進んできたのと反対側の通路からだ。よっぽど信頼しているのだろう、日向の方には特に何も視線を向ける事は無かった。

状況が変化しすぎて何がなんだか、といった様子のマルケウスが、我に返ったように伊織や省吾に訊ねてくる。

「い、いいのが行かせて！？」

「ええんちゃう？ 鋼は考え無しに別れたんとちゃうと思うよ。それにわいらついて行ったところで足手まといっぱいし」

「だ、だが。カガミとムライの二人だけにこの場を任せていいものか？ カミヤが抜けるなら、せめて僕達が。微力ながら、協力できる事があるのではないか？」

「いえ、必要ありません。その場を動かさないで頂けると助かります。にももなく割り込んできた凜の声に、マルケウスはぎくりと口を閉ざした。足手まといだと暗に言っている割には、言い辛そうな態度でもない。淡々と凜はそう告げながら、魔法陣を指先に浮かべていた。

伊織の知らない、ガラスの弾丸のような魔術が放たれる。日向と戦っている男達の一人に命中したようだ。

「な、なんか二人ともキャラ変わってへん？」

声を潜めて言う省吾にうんうんと頷く伊織とマルケウス。日向は普段の態度は何なのだと言いたくなるほどの無口な少女と化しているし、凜は非常に攻撃的な性格に変わっている気がする。結構毒舌だし。今も凜は魔法陣を次々浮かべ、日向を的確に援護し始めていた。

「……日向ちゃんは、戦う時はあんな風になるって神谷君が言っていました」

「そういう切り替えて重要なのかもね」

雪奈がおずおずと口を挟み、伊織が頷く。気弱だったり明るいだけでは、死の谷や亜竜の山を生き残れなかったという事なのだろう。「そういえば、さっきの何？ 神谷君が各務さんに魔力をあげた時、皆変な目で見てなかった？」

「あ、ああ。変なというか、あり得んからな。魔力を他者に渡すというのは不可能だ。どういう意味で神谷があ言ったのか、気になつてな」

「え、そうなの？」

皆知っているという事は、知っていて当然の常識に属する知識らしかった。知らなかったのが自分とあのラグルという男だけだったというのは、実に屈辱的である。

「意味も何も、そのままの意味ですよ」

透明な弾丸を撃ち続けながら凜が口を挟んできた。《魔弾》を複数展開して尚喋る余裕があるのか!? とマルケウスが別のところで驚愕している。

「私達はコウに対して、魔力の拒絶が起きませんから」

「な、なに? そんな事が起こるものなのか?」

「少なくとも私達の身には起こっています。私とヒナちゃんの組み合わせでも無理ですし、コウに対してだけですけど。何度もあの人に救われた命ですしね。拒絶する必要がないと、体の方も分かっているでしょう」

どこか誇らしげに、どこか嬉しそうに凜が語る。

……… なんとというか。ここはご馳走様と言っておくべきだろうか。

「な、なんだかロマンチックですね!」

雪奈がそう言うのと凜はこくりと頷いて、うふふと笑う。完全に恋する乙女の顔である。

何が怖いって、そんな表情のまま凜が的確に、《魔弾》を男達に撃ち込み続けている事だった。

「案内って誘拐した娘のどこかよ。組織を潰すってのは嘘で、本命はそっちだったのか?」

「一応そうだが、人質がどうなっても闇ギルドは潰す気だぞ? 周りでちよろちよろ鬱陶しいし。気に入ってる軽食屋にはちよっかい出してくるし」

「そんな程度の理由でうちの組織は潰されんのかよ……。くそ、カミヤが関わっていると知ってたら誘拐なんて絶対に提案せんかったものを」

「お前の発案かよ」

小走りで闇ギルド本拠内を駆け抜けながら、鋼は先導させているバートと緊張感の無い会話を交わしていた。誘拐がバートの案と知っても、今更こちらにも恨むような気持ちは湧いて来ない。バートはもう敵にならないと、鋼の勸は告げていた。何もかも正直に教えてくれるのはそういう理由だろう。

さらっと今回の件のあらましを鋼は聞いた。

学園の近場という良い立地条件の土地を手に入れたい、とある有力な貴族だか商人だかがギルドに依頼を出したのが始まりだそうだが、様々な条件を勘案して、満月亭を立ち退かせるという作戦になった。それで地味に嫌がらせを始め、相手が強情ならこちらも強引な手段に切り替えていく方針になった。最初の頃はバートは一切関わっていないらしいので、彼もそれほど詳しくは知らないらしい。

そして依頼の期日が迫ってきたある日。依頼を引き受けていた男達が、違約金を払ってでもやめたいとギルドに打診してきた。酒場で鋼が十人ばかりのした直後の話である。仕方ないので彼らにはペナルティーを課し、ギルドは別の誰かに依頼を引き継がせようとした。

ところが引き受ける者が出てこず、調べてみると酒場の一件に行き当たったという。鋼の酒場での暴れっぷり、凜の《火矢》^{わじ}驚掴みなどの話が、おっかない騎士候補の噂としてギルドの闇傭兵達の間で広がっていたのだ。満月亭に手を出すとそいつらがやって来る、という話が主に酒場の目撃者達から広まり、無法者達を躊躇させていた。

いくら腕っ節が強かろうが、まだ子供とも言える少年達を怖がって依頼を失敗となれば闇ギルドの信用は地に落ちる。だが期日も相当厳しいところまで迫っていたので、これ以上の失態を重ねる前にとギルドは依頼人に断りを入れた。そういう状況に一旦はなつていたらしい。

それでは何故満月亭の娘が誘拐されたか。その原因は明確にバートにあるらしい。

面子を潰された形の闇ギルドだが、妨害した少年達は騎士教育学園の生徒で、日本人という微妙な立場。そちらへ直接報復するのはまずいだろうという意見が出たので、バートは間接的な報復を提案した。もう依頼されてはいないが、満月亭をやはり潰してはどうだろうか。

市民の誘拐などの重犯罪は、何度も繰り返せばまず間違いなく警備隊に本格的に目をつけられるので、普段なら闇ギルドでも自重する方針にある。だが組織の利益を度外視するなら、実はそういう強引な手段も取る事は可能だった。

店を潰して常連の学園生徒達に間接的な復讐をしつつ、手に入れた土地の権利書は元々の依頼人にタダ同然でくれてやる。そうする事でそれなりの権力を持つ依頼人から、重犯罪の誘拐をお目こぼししてもらおう。信用も回復するだろう。金銭的な得にはならないが、そのような計画らしい。全貌を聞いてむしろ鋼も感心してしまった。「中々上手く出来てる話だったんだな……」

「……お前が感心してどうするよ。ほらついたぞ、この先の部屋だ」
バートが示したドアの前には、人質の見張り役らしい男が立っていた。「バートさん、どうしたんです？」とか訊いてきたその男を、問答無用で鋼は殴りつけて気絶させる。

「……バート、部屋に入る前に一つ話がある」

「ここじゃ目立つ。入ってからじゃ駄目なのかよ」

「ああ。わざわざバートと二人だけで別行動を取った最大の理由が、むしろこの話をしたいからだ」

鋼の言葉にうげ、とバートが嫌そうな顔をした。

「あなたへの貸しは、ほんとと言うところちに使ってもらいたい。この話を守ってくれるなら、あの件についてはチャラだ」

「……一体何の話だったんだ」

「そう警戒しなくても、たいした話じゃねえから安心してくれ」

貸し、というのは。バートと最後に別れた際の状況の事である。

魔物の大群に囲まれ絶体絶命の窮地だったあの時。鋼は死ぬ覚悟

で、皆を逃がすための囹役を引き受けた。

鋼の戦友の少女達は、鋼にその役目を引き受けさせた他の奴らを恨んでいるが。そうしないと全滅していたと思うし、だから鋼は正直、あまりバートや他の谷での協力者を恨んでいるわけではない。だがバートの対応を見るに、多少は気に病んでくれていたようだった。

「口止めを頼みたい」

恨んではないが、これくらいは頼んでもいいだろう。鋼は用件を口にした。

「あんたは、谷で俺と一緒に行動してた四人の名前を全員知ってるからな。ある奴の名前を、これから先誰に対しても秘密にして欲しい」

もし約束出来ないなら、ここで死んでもらう。その程度には目に殺気を込め、鋼はバートを静かに見やった。

ホールのような広い室内は、呆然とした空気に包まれていた。男達が倒れている。二人や三人ではない。二十人足らずもの、凶器を携えていた無法者達だ。

足を折られ、気を失い、あるいは戦意を喪失し。そうして戦えなくなった男達は、意識ある者は這ってでもそこから離れようとしている。彼らの中心では現在も戦闘が継続中だ。立っているのはもはやその二人だけ、一対一の戦いが演じられている。

斧を持った禿頭の巨漢と、ナイフを持つ小さな少女。

ただし、倒れた男達と戦う二人を囲む離れた外側には、他にも立っている人間はたくさんいる。騎士学校の生徒達や、ギルドに所属する閻傭兵達だ。彼らは皆、息を詰めて一対一の戦いを見守るだけの観客と化していた。

「嘘だ……、ラグルの旦那が……」

観客の一人、閻傭兵ギルドに所属するある男はぼつりとそう呟いた。

皆の視線の先では、息を乱す事なく暗殺者のように無表情で立つ少女と、肩で息をしている苦しそうな巨漢が向き合っている。

戦況はギルド側の大多数の予想を覆して、ラグルが劣勢だった。劣勢どころか、ただの一撃も有効打を与えられていなかった。毒を使うという話の少女は手のナイフを全く振るわず、打撃だけで戦っているというのに。明らかにその光景は、ラグルよりも少女が格上である事を示していた。

閻傭兵達にとっては悪夢に等しい光景でもある。

ラグルは腕っ節だけで組織の幹部にまで上り詰めた男で、無法者の中でも輪をかけて乱暴だが実力は本物だ。閻傭兵ギルドの人員で最も強いのは彼かバートだと言われており、荒事に関しては誰からも頼りにされている。組織に身を寄せる無法者達にとって、背後に

控えているラグルやバートといった実力者の存在は、もはや精神的な支柱になつていると言つても過言ではない。

だからこの光景はあつてはならないのだ。

バートが諦め、ラグルが勝てない敵が現れるなど、無法者達は想像した事もない。ラグルもバートも、彼ら雑兵が束になつても勝てない相手なのだ。その二人が勝てない少女に対し、もはやどうしたらいいか誰も分からない。ラグルを援護しようにも男達の力量では戦力の足しにすらならないのではないか。そんな予感がほとんどの男達を縛り、ただただ戦況を傍観させていた。

それでも幾人かはラグルに助太刀しようとしたが、そうしようと動いた途端、奥にいる魔術に長けた少女に狙い撃ちにされる。

「くそつ。どうにかしてまずあの女に近づけないか？」

「知らねえのかよ？ あの女近距離戦も滅茶苦茶に強えぞ」

そんな会話が交わされる度、諦めの心境が男達を支配していく。まだ戦える者は多く残っているし、中には魔術を扱える者だっている。それでも彼らが一斉に攻勢に移らないのは、敵意を見せた者から少女達の容赦ない攻撃に晒されると知っているからだ。というより、少し様子見していれば嫌でも学習させられる。今もラグルの助太刀に動いた二人の男が、《魔弾》により倒れたところだった。

「バートという男は互角くらいと言っていたが、買い被りだったようだな」

「そうなん？ 強化で動きが速くなり過ぎてて、正直どっちが強いとか見ても分からんわ。各務ちゃんが圧倒的なんはさすがに分かるけども」

「ああ。まさか力ガミがこれほどとは思わなかった。《身体強化》があまりにも凄まじい」

日向とラグルの戦いを観戦しながら、マルケウスと省吾がそんな会話をしているのを凜は耳にした。

外から見ている分には、防戦一方のラグルはそこまで強いようには見えない。現在のバートの実力を凜は目にしていないけども、マルケウスはラグルの実力をそれよりも随分下だと判断したようだ。

残念ながら、的外れな意見でしょうけど。

凜はこっそり内心で思う。しかしそれも、仕方ない事だ。マルケウス達は知らない。知らなければ、目の前の状況を勘違いしても仕方が無い。強化に物を言わせた日向が力押しで攻め、ぎりぎりですれを防ぐラグルは無駄のある動きを繰り返し消耗していく。目に映る事実だけを描写すれば、そのような流れの戦いである。

実際は凜は驚嘆している。予想以上にラグルが強いからだ。手加減なしの日向の攻撃を何度も防ぐ。

それがどれだけ異常な事か。

「私はあのラグルって人が、バートって人に明らかに劣るようには思えないんだけど……」

ぼつりと、自分でも自信の無さそうな声で伊織が言った。

「そうか？ あのラグルという男は見たところ、強化が上手いだけだ。もっと強化に優れたカガミが相手とはいえ、毎回ぎりぎりしか防げていない。動きに無駄があるという事ではないか？」

「そう、ただ……。なんだかあの人が、そんな弱い人に思えないのよね。それに……。ええと、上手く言えないけど。あの戦い、何か変じゃない？」

「変？ そんなようには感じないが」

伊織の意見に、マルケウスを始め省吾と雪奈も首を傾げる。三人が鈍いのではないと凜は思った。伊織の直感と観察眼が、飛び抜けて優れているのだ。

「例えば、どこが変だと思います？」

「……やっぱり何かあるのね？」

凜が会話に割って入った事で、伊織は自分の直感に確信を持った

ようだった。

「何か、ラグルって人の動きが不自然な気がして。見ても分かるくらい完全に戦いに集中してるのに、その割りに少し反応が遅いよな。……もしかして各務さん、強化以外に何か相手に魔術を使っていたりしない？」

「さすがに相手の動きを鈍くするような都合の良い魔術などないぞ。それにあんな速度の戦いの中で、強化以外の魔術を組み立てる余裕は無いだろう」

伊織の推測にマルケウスが反論する。こんな敵地の真ん中でわざわざ真相を教える必要も無いだろうから、凜はお茶を濁しておいた。会話に興じる凜達に隙を見出したか、動こうとしている闇ギルドの男がいたので視線をやって牽制しつつ。あとは凜も口を閉ざし、日向とラグルの戦いの行方を見守る事にした。

日向とラグルの戦闘は、そろそろ終着を迎えようとしていた。ラグルの動きは精彩を欠いてきている。疲労で判断力が鈍ってきているのだろう、無駄に決まっているのに後ろに下がり距離を稼ごうとする。強化の性能で勝っている日向の脚力は当然易々とそれについて行った。密着し、斧の振り辛い至近距離で左手で殴りかかる。全く呆れた事に、ラグルはぎりぎりまで打点を逸らしてみせた。凜からすれば驚きの反応だ。殴られはしたものの、寸前で体を自ら浮かしダメージを最小限に留めた。支えの無いラグルの体は大きく飛ばされるも、倒れる事なく足を踏みしめ着地してみせる。

なんとという反応速度。いやこの場合、闘争本能というべきか。凜は確かに目撃していた。密着された瞬間、ラグルは日向のナイフを持つ右手に対し、構えようとしたのを。

伊織の推測は全くの正解を突いている。

日向が使う最も恐るべき魔術は《身体強化》ではない。そもそも今かかっている《加護》はそれ単体で敵にとっては最上級の脅威だろうけど、これは『彼』に与えられたものだ。『彼』と共に過ごし

た四人全員に言える事だけど、それぞれ本来の得意魔術は別にある。日向の場合、《隐身》の術式がそれにあたる。

大抵の人が地味と思うはずの、なんてことのないマイナーな術式だ。術者の姿を少しだけぼやけさせて、夜間や暗所で視認される可能性を減らすというのがその効果である。難易度はそれほど高くないけど、好んで習得する人もとても少ない、恐らく騎士学校では習わないような類のものだ。

その《隐身》と、身の回りの音を打ち消す《無音》、元々の自力での《身体強化》、そして《電撃》と《薬物生成》。日向が実践レベルで使える魔術はその五種類だ。それ以外ほとんどまともに使える魔術が無い代わり、その五種類だけに絞り特訓した日向は接近戦の動きの最中でもそれらを発動できる。

「このガキ……！　なんだ？　何の魔術を使ってやがる！？」

距離が空いた事で僅かな猶予を得たラグルが、息も絶え絶えに叫ぶ。もちろん「彼」に手加減なしでやれと言われている日向は、一切構う事なく距離を詰めた。

迎撃しようとラグルが斧を振りかぶる。さすがに他の男達よりも強化はかなり上手く、相当な速度で迫る日向にもなんとか対応できている動きだった。

斧が叩きつけられる。

しかしタイミングが早過ぎた。日向が到着する一瞬前の空間を、ラグルの斧が切り裂いていく。その目には驚愕がありありと浮かんでいた。

外野の目からは、ラグルが消耗と焦りから敵との距離を見誤り、盛大に自爆したように映っている。

避ける必要の無くなった斧を無視し日向は懐に入り込む。ラグルが慌てて体勢を立て直そうとするも、疲労の蓄積した肉体では致命的な遅れが出た。顎に掌底が叩き込まれ、ラグルの体がぐらつく。それでも倒れないのは、どうやら強化の出力を瞬間的に引き上げ、意識が飛ばされるのを咄嗟に防いだらしかった。

相手のタフさを見て取った日向がすぐさまナイフで斬りつける。見ていた男達の一人が「旦那、《解毒》を！」と叫び、ラグルも瞬間的に浅く斬られた胸に手を添える。どうやら《解毒》が使えるらしい。本当にしぶとい男である。

それでももう、ラグルの勝ちは一つも無くなった。

「かつ、は……っ!!」

ラグルが口から血を吐き、とうとう膝をつく。男達が騒然となった。斬られたらしばらく動けなくなると先程皆に警告した男が、周囲から問い詰められる。その男も何がなんだか分かっていない様子だ。

《薬物生成》でただの麻痺毒が生成できるなら、それ以外の毒だって生成出来てもおかしくないと気付かなかつたのだろうか？

本日日向が多用していたのは、処置せずとも人の身で耐えられる、相当に軽い毒である。むしろそちらが例外的であり、本来彼女が使う毒物はこの通り強力な効果をもたらすものだ。ルデスの魔物にも通用する代物であり、瞬時に解毒しなければラグルは今頃絶命していたはずだった。

膝をつくラグルの背後をとった日向は、その首筋に《電撃》を打ち込む。短く呻き、ラグルはとうとう意識を手放し倒れた。

それにしても、えげつない。

いくらしぶとかつたとはいえ、消耗している体に打撃と毒と電流を受けたのだ。このままラグルが眠ったようにぼっくり逝ったとしても何ら不思議ではない。

「ラグルさんも、負けた……。もう終わりだ……。！」

絶望の滲む声音で言った一人の男が武器を手放すと、半数以上の男達も諦めたようにそれに倣った。無駄な戦いを避けられて良かったと凜は密かに安堵する。死なせないよう加減して戦うというのはとても面倒で、難しい事だ。男達が全員での徹底抗戦を唱えていたら、こちらも手加減できずに何人もの死者が出たかもしれない。

いくら犯罪組織が相手でも殺人は殺人であり、今後の面倒を避け

るためにも仕方ない状況以外はなるべく殺すなど『彼』に言われている。無法者達の命などどうでもいいけども、高威力の大魔術をまとめて叩き込んで終わりというわけにはいかないのだ。面倒な戦いを避けられたのは本当に良かった。

「日向ちゃん、やっぱり物凄く強いんですね……」

「ああ、本当に常識外れだ。あれだけの強化に、毒と《電撃》。絶対に力ガミとは近距離で戦いたくはないな」

「多分それだけじゃないわよ。あの人も言ってたでしょ、『何の魔術を使つてやがる！？』つて。ねえ、各務さん」

ラグルを倒しこちらへ戻ってきていた日向に伊織が訊ねる。

「強化とか毒以外に相手に使ってる魔術あったでしょ？ 私、魔術の名前なんて全然知らないけど……。相手の感覚を狂わすか、幻覚を見せる。そのどっちじゃない？」

伊織の推測に、日向は表情を変えないままぱちと瞬きした。表情筋には一切現れていなくても、彼女は驚いているのだと凜には分かった。

そんな魔術があつてたまるか！ とすかさず言ったマルケウスは、次の日向の答えを聞いてフリーズする。

「……戦ってる相手以外には、全く効果がないはずなんだけど。なんで分かったの？」

「や、やっぱりそうだったのね……。いくらなんでも反則過ぎるから最初はちよつと自信無かつたんだけど、戦うとこ見てたらそれ以外考えられなくて……。だって、明らかに戦い慣れてる相手が攻撃を空振りするなんて、いくらなんでも不自然でしょ」

それだけでそこまで言い当てるなんて。凜も言葉が出ない。伊織の目と直感は驚異的だ。

マルケウスと省吾も、言葉を失いかなりの驚愕を顔に浮かべていた。雪奈は『何それすごい！』的なわくわくした表情だけだ。

「あのラグルつて人以外は、どの相手に対しても各務さん、絶対に一撃で決めてたしね。相手もド素人じゃないんだから、格上の相手

でも一回くらい攻撃を防いだっておかしくないのに。ラグルって人も各務さんの攻撃避ける時は、ほんとに寸前でしかちゃんと見切れて無かったわ。瞳の焦点とか見ても、直前まで違う攻撃に見えてるようにしか思えないし。どういう原理かは知らないけど、攻撃を別の攻撃に見せかけて正面から不意打ち出来る魔術なのね？」

根拠を次々に挙げ、核心に迫る伊織。日向もこの場で更に詳しく解説したりはしないものの、その推測でいたい合っていると素直に認めた。彼女のあれは原理が分かっているように対処できる攻撃ではないから、頑なに秘密にする必要も無いのだった。

……凜も思う。日向のそれは、あまりに反則じみた魔術の使い方だ。

日向は脳に干渉して、幻覚を見せているわけではない。そんな事は不可能だ。魔術で人体へ直接干渉すれば、魔力の拒絶現象が起きてしまうのだから。彼女の場合は単に、《隠身》の魔術で光に干渉しているだけだ。

ただし凜が同じ魔術を使っても、日向と同じ事は引き起こせない。あの術式は光の波長を弱めてばやかす程度の効果しか無く、別に光を好き勝手に操れるわけではないからだ。それを幻覚の域にまで高める日向が少々おかしいのであり、彼女は《隠身》の使い方が天才的に器用なのだった。

原理は一応、聞いてみれば理解は出来るのだ。

あまりにも当たり前の常識として、人間は近くにあるものほど鮮明に見える。老眼でもない限り、普通小さな文字は目に近づけて読むものだ。逆に言えばばやけている物体が鮮明になったら、人の目はそれが接近してきたように錯覚してしまう。

日向はそれを利用して、相手の感覚を狂わせる。

最初から気付かれない程度に薄っすらと《隠身》を発動し続け、フェイントの際はそれを解除、本命の攻撃の時は術式の効果を強める。している事といえば基本的にはそれだけらしい。

急に鮮明になったフェイントの動作は、相手にとってはかなり急

速な動きとして映る。

本命の攻撃を近づけながら段階的に少しずつ《隠身》を強めれば、相手は近づいてくる攻撃を実際より遅く感じるだろう。

まあ、言うが易しというやつで、これを不自然に見せず綺麗に錯覚させるのは相当に難易度が高い。神業と言ってもいいほどに。

これを繰り返し、相手の距離感を麻痺させるのだと以前日向は語っていた。相手は次第に自分の感覚が信用できなくなり、《隠身》なしでも違和感がつきまといまともに戦えなくなるといふ。凜も訓練に付き合わされた事があってよく知っている。訓練であっても日向とはもう近距離戦をしたくない。

その《隠身》に、人より数段優れた《身体強化》かそれ以上の《加護》が加わるのだ。反則もいいところである。対人戦の経験が凜達には今ままであまり無くて、これまでは断言出来なかったけど。今日、ラグル以外の全員を日向が一撃で倒した事で、それがはつきりしたと思う。

「一体何なんだお前達は……。全員が一流以上の強化の使い手で、魔力の受け渡しに、幻覚。もはや何でもありだな……」

疲れたようにマルケウスが言うけども、一番ひどいのは『彼』だと、凜は内心で付け足しておいた。我らがリーダーは、《隠身》全開の日向に《身体強化》だけで勝ってみせるのだから。あれこそ意味が分からない。

「なーなー、戦おうとする人いなくなっただけど、どうするん？ ここで鋼を待つんか？」

「そのつもりです。終わったら来いとも言ってますでしたし。っ！？」

返事の最中感じた魔力活性化の気配に、凜は勢い良く振り返った。日向も全く同時に、視線をその壁に向けている。

壁のすぐ向こうというわけではない。気配はそこそこ離れていて、だから他に気づいた様子の人間は室内にはいなかった。大規模な魔術の行使であれば離れた場所でも強い気配が届くけれど、それとも

違う。ただの、建物内の離れた場所での普通の魔力活性化だ。

それでも凜と日向がそれを見逃す事などあり得ない。今も《加護》としてこの身にも宿る、凜達にとって最も馴染みある魔力なのだから。

「いきなりどうしたん！？ 壁の向こうになんかあるんか！？ 敵か！？」

省吾の問いかけに凜は首を横に振る。

「コウが……、少し本気を出して戦ってます」

鋼の『頼み』は無事バートに了承され、何の憂いもなく案内された扉をくぐる。

まず目に入ったのは、適当に積まれた大小様々な木箱やタルだった。倉庫のような場所かと思ひ室内を観察するとすぐに違う事に気付かされる。倉庫には普通、鉄格子なんてものは存在しない。

位置的に不便でほとんど使われていない倉庫を、牢屋に改造してみました、というような部屋だった。

右の壁に面した一番奥まった場所にしっかりと造りの鉄格子の牢があり、その左隣には木の格子で出来たやや簡素な牢がある。歪に空いた残りのスペースには、いかにも雑然と様々な物が放置されていた。木箱やタルならまだしも、足の折れた椅子だとか、粗大ゴミのようなものもちらほら見受けられる。

入室してきた鋼達に、びっくりとした反応で鉄格子の中の少女が顔をあげた。意外にも知らない顔だ。隣の簡易牢に目を移してみれば、鋼の目的の人物はそちらにいた。満月亭の少女は憔悴したように頂垂れ、こちらに対して顔も上げない。

そして彼女達と鋼の間には、最後の砦とばかりに障害が待ち構えていた。

「騎士学校の制服の少年に、バートか。……妙な取り合わせだね」
簡易牢の前に置いたタルに、ダンディな感じに髭を生やした小奇麗な黒髪の男が腰掛けている。

「……オルタム」

バートの呟きで男の名前は知れた。日本人に似た風貌だが、帝国系の血管が入っているのだろう。

オルタムの言葉とこのやり取りで満月亭の少女も顔を上げる。鋼

を見てぽかんとした表情になった。

「はてさて、私は一体どう判断すればいい？ 我々に喧嘩を売ったという少年を、バートが捕縛して連れてきたのか。それともバート……。君が裏切って、その少年をここまで手引きしたのか」

「回りくどいやり取りは無しだ。その子は連れて行かせてもらう。ついでにその隣の牢の子も」

問答無用に鋼が殴りかからないのは、バートを呼び捨てにする事から闇ギルドでは上の地位にいる男なのだろうと推測したからだ。あるいは同格か。男もそこそこの実力者なのかも知れないが、重要なのはそこではない。組織の幹部なら人質以外にも用があるので、気絶させると後々面倒だ。

バートに最初話しかけたオルタムは、割り込んできた鋼に改めて視線を向けてきた。

「報告では三人組と聞いていたのだが。まさか、君だけ別行動かね？ 無謀に思えるが、バートを味方につけているのなら自信過剰とも言えんか……」

「回りくどいのは無しと言っただろ。その子を助けに来た。素直に引き下がってくれると助かるんだが」

「そうもいかん」

オルタムが立ち上がり、手を背後に向かってかざす。

「私も多少、身を守るために魔術を嗜んでいる。これ以上近づけば彼女の命は保障できんよ」

近づこうとしていたのをやめた鋼を見て、オルタムがにんまり笑う。実際のところ躊躇したわけではない。魔力活性化の気配を感じたら即座に飛び出し、魔術の発動前にこの男を取り押さえる自信くらいはある。

何故か男が魔力を活性化させないので、もう少し話をする気分になっただけだ。というか、迂闊過ぎだろうこの男。魔法陣を展開させた状態で待機しているならともかく、その状態では強化が得意な奴なら先に距離を詰められると思う。多少と言うだけあってそれほ

ど魔術は得意でなく、長時間魔法陣を待機させたまま交渉などをする自信が無いのだろう。

「ふふふ、待つていた甲斐があった。組織に喧嘩を売ったのははったりで、本当の目的はやはり人質救出ではないかと念のためここにいたのだよ。どうやら予想が的中したようだ」

「あんたら、その子を誘拐したと脅して、もう身代金は手に入れたはずだろ。最初から解放する気が無かったって事かよ」

「もちろんあるとも。君の態度次第だがね」

一瞬どうするか悩んだ ように見せかけた鋼に、もう一押しとばかりにオルタムが続ける。

「そもそも最初から無謀過ぎたのだよ。君とその連れがいくら騎士候補にしては強いからと言っても、我々は組織だ。それもそこそこ規模のある、ね。首尾よく君が人質の娘を助け出せても、顔に泥を塗られた我々がこれから先も君を見逃すとても？ 我々は警備隊にすら影響力を持つ。そんな組織を相手に、個人が戦う事など出来はしないよ。抵抗をやめて、素直に諦める事だ」

言葉を重ねて相手の心を折ろうとしてくる。腕づくでなんとかしようとした、今までの組織の男達とは違う。交渉役か参謀役かは知らないが、そういう役割の幹部なのだろう。

なるほど確かに、魔法陣を待機させてもいないオルタムの脅し方は迂闊だが、ここで彼をねじ伏せたところであり意味はないのだ。人質を連れ帰っても、面目を潰された闇ギルドからは延々と報復され続けるはず。

だからまあ、力で取り押さえず喋らせているのだが。

「……残念だよ、バート。君程の男が一体どういった取引や報酬でその少年の方についたかは知らないがね。君はもう少し、賢く立ち回れる男だと信じていた。いや、それとも。この自信過剰な少年の鼻っ柱を折ってやるために、味方になったフリをして彼一人だけを上手い事ここへ誘い込んだのかな？」

今ならそういう事出来るのだよ？ オルタムの表情ははっきり

とそうバートに語りかけていた。裏切った奴をもう一度裏切らせようとは、中々ふてぶてしい奴である。

そろそろ、頃合か。

手の中の携帯の、録画をやめる。場違いな小さな電子音が鳴り、オルタムが怪訝そうな顔をした。

「……？ 部屋に入ってきた時から、それを持っていたな」

「あんだ、携帯電話知らねえのか？ 誘拐された子が確かにここに閉じ込められてた、ていう証拠映像だけ期待してたんだが。放つとくと誘拐犯しか言わないような台詞喋りだしだからな。笑いをこらえんのに苦労したぞ」

「な、に？ さすがにケイタイくらいは知っている。しかしこの辺りの地区では使えないはずだ」

「通話かメールかネット以外の機能使うなら、圏外かどうかは関係ねえんだけど。こっちの奴はやっぱり、そういう細かいとこ理解し難いんだらうな」

録画というものをそもそもちゃんと理解しているか謎だが、自らが重大な失態を犯した事は分かったらしい。

「……今すぐそれを、壊したまえ。さもないと彼女の命は保障な！？」

台詞の途中でオルタムが驚きの声をあげたのは、そのタイミングで魔力を活性化させたからだ。反射的に接近した鋼は、一切の反応すら許さず相手の腕を既に掴んでいる。この男は荒事は不得手らしいと、反応速度を見て確信を深めた。

「保障、なんだって？ 続きを聞かせてくれよ」

「くっ……」

「おー、オルタム。俺からも一つ訂正してやる。俺がこいつの側についた理由は、取引でも報酬でもねえぞ。純粹に勝ち目がねえと思っただからだ」

離れた位置からかけられた暢気なバートの声に、オルタムは信じられないような目で再び鋼を見た。

「馬鹿な……。いくらなんでも、まだこんな少年が……」

「所詮ガキだとか学生だとか考えてると痛い目見るぜ？ なんせそいつとその連れは、俺が谷にいた頃に知り合った奴らでな。騎士候補のガキ三人組としか聞いてなくて、俺もさつき直接顔を合わせるまで気付かなかったんだが」

オルタムを説得しだしたバートを鋼は意外に思う。援護はほとんど期待していなかったのだ。

「死の谷からの生還者？ そ、そんなのが何故のんびり学生などをしているのだ！？」

「いや、冒険者になるうにも日本人だから色々制限が……。騎士学校卒業しといたほうが便利なもんで」

「それで一流以上の冒険者の実力があいながら、騎士候補生に混じっているのというのかね。……なんて爆弾を我々は引き当てたのか」
案外あっさりと、オルタムは戦意を喪失したようだった。……バートの現在の実力のほどは見えていないが、相当に信頼されていたという事なのか。

警戒は残しつつも、オルタムから手を離し鋼は簡易牢に手をかけた。所詮は木製、強化の前には呆気ないものだ。容易く格子は鋼の手で折られていき、たちまち一人通るのに十分なほどの穴が空いた。

目を白黒させて成り行きを見ていた満月亭の少女に、手を差し伸べる。

「よお。ついでみたいなものだけど、助けに来たぞ。無事か？

ええと」

そこで鋼は、気付いてしまった。

「……そっぴやお前、名前なんて言うんだ？」

「知らねえのかよ！？」「知らなかったのかね！？」

今更過ぎるにも程がある質問に、バートとオルタムが激しいツッコミを入れた。

満月亭の土地の権利書は商会で売り、その金を身代金として犯人達に渡したと店主から聞いている。その事を突っ込んで訊いてみると、オルタムはその商人がグルなのだと認めた。つまり市場に出してしまったように見せかけて、権利書はまだ組織が管理しているよなものだという。

それを持ち主に返し、鋼達にも以降手を出さない。その条件で、闇傭兵ギルドを潰さず見逃してやると提案すると、オルタムは顔を引きつらせた。

「……少し、調子に乗り過ぎじゃないかね。いくら強かろうが、本当に君に組織を潰すほどの力があるはずが……」

「ああ、ここで待ってたあんたはまだ知らねえのかな。とりあえずここに来るまでで三十人くらいは叩きのめしたぞ。この本拠に来る前にも二十人くらいか。闇傭兵ギルドってのは構成員が何人くらいいるもんなんだ？ 百五十より下だったら、問題なく全滅させられると思うぞ」

「……」
顔の引きつらせ度を二割ほど引き上げて、オルタムはバートを見た。

「実際の人数は知らんが、大勢でかかっても勝てねえと下っ端が泣きついてきたのは確かに見たぞ。それに俺の部下の精鋭メンバー五人がかりでかかってても、こいつの連れ一人に負けたからな。戦うだけ無駄と思つてとつと降参した。お前も傷が浅いうちにすっぱり諦めとけ」

「っーか、あんたに選択の余地なんてねえぞ。権利書を返せ、以降手を出すな。それが俺からの要求。受け入れられなかったら、そうだな……。この本拠の建物潰して帰るわ」

「……。さすがに、はったりだろう？」

むしろそうであってくれという情けない顔で、オルタムが鋼に視線を戻す。

「はったりなわけねえだろ。要求突っぱねるなら俺らに報復するつもりって事だから、当然そんくらいはしねえと帰れねえよ。魔術で片っ端から壊していつて、一時間もあれば瓦礫の山に出来るだろうし」

「……我々は警備隊にも影響力がある。暴行や住居損壊の罪で、君を逮捕させる事だつて出来るわけだが？」

「いやあんた、それはやめといたほうがいいぞ？俺がもし逮捕されたら、正当な理由があったと言つてさっき録った動画提出してやるからな。警備隊に影響力持つてる貴族の依頼人とやらも、あれ見たら手の平返すんじゃないかねえの？誘拐があつた事実とあんたが関わつてる事はもはや言い逃れが効かねえつて分かるし。それでも見捨てられねえ自信があるならやってみるよ。そもそも子供三人に潰されるような組織をわざわざ守つてやるうつて依頼人がいるのか、怪しいもんだが」

動画が無くとも脅迫状の現物が残つていて、人質だつた本人が無事なのだ。証拠は十分揃つていて、それでも鋼達だけ逮捕されるほどに組織の権力が強いとは考えづらい。

がつくりと頂垂れるオルタムと取引を成立させて、鋼は結局闇傭兵ギルドは潰さない事にした。

別に鋼達と無関係なところで活動してくれるならどうでもいいので、組織をきつちり潰す手間を思えばこれでいいだろう。少数の学生に好き勝手暴れられ最後は見逃してもらつたとなれば、闇ギルドの威信は完全に失われるわけで、どうせそのうち勝手に潰れる。

「あと言つておくが。それでも性懲りもなく手え出してきやがつたら、二度目は無いと思え。関わつた奴全員、二度と普通の生活が出来なくなる怪我を負わせてやる。……それでもし、俺の身内を死なせるような事態になつてみる。怪我じゃ済まさん。関わつてなくても構わん。この組織にいた奴一人残らず殺してやるから、その覚悟で来い」

さらつと脅すつもりが、言っている途中で仲間が奇襲され死ぬ場

面を具体的に想像してしまった。なので後半はかなりの殺気を滲ませて言つてやると、オルタムは瞳に恐怖を浮かべ、最大限に顔を引きつらせこくこくと頷いた。

と、いうわけで。

「これでまあ、ほとんどの問題は片付いたか」

「ねえ、あの、カミヤ君」

肩の荷が降りて安堵していると、横から声をかけられた。

声の主はさつき改めて互いに自己紹介しあつた、満月亭の少女リユンである。

「……この子も、助けてあげてくれない？ 私が連れて来られた時にはもうここにいて」

「ああ、元からそのつもりだぞ。鉄格子はちよつとばかし手こずりそうだから、後回しにしてたが」

隣のしつかりした牢には、部屋に入った時最初に見た少女が今も閉じ込められている。リユンと同じく金髪だが、彼女のやや暗い色合いと違い、こちらの少女はかなり明るい色だ。体型は小柄な部類で、年齢的には十代半ばくらいと思われる。

助けてもらえると察して、少女が期待に満ちた眼差しを鋼に送ってくる。ふんわりした雰囲気のが可愛らしい少女だ。それは結構な事だが、それより何より、さつきから鋼はあるモノがずっと気になつていた。

少女の頭上である。

髪の毛の隙間から、ちよこんと飛び出ている三角形の物体がある。

どう見ても耳なのだが、普通耳というものはあそこまで存在感をアピールするほどの大きさはない。そもそも顔の横についているはずではないのか。というか、三角である。

現実を認めるなら、それは狐の耳に見えた。

そして座っている足元、少女の背後の床にはふさふさした金色のものが横たわっているような。もしかあれば少女から直接生えている、狐の尻尾ではないのか。

存在は一応、知っている。ただし目にするのは初めてだ。恐らく少女は獣人だ。

「あ、あの……？」

「ああ悪い。獣人って初めて見たから」

地球では人種が違ってもせいぜい肌や髪の色、顔つきが異なる程度だが、ソリオンでは人種の差異はもつと特徴的だ。通常の間種族から大きく離れた特徴・特性を持つ人種は、厳密には人間ではないという意味で『亜人』とひとまとめに呼ばれており、土地によっては差別や迫害の対象となる。

獣人は最もポピュラーな亜人種であり、人でありながら獣の身体的特徴も持つ人種である。見ての通りこの少女は、その外見を備えている。

「……俺はまだ、セイランの法律にはそれほど詳しくないが。この国じゃ人身売買は禁止されてるはずだよな。まさか獣人に関しては認められてたりしねえよな？」

「しねえな。だがまあ、そういう商売が無いわけでもねえ。トリル方面から人間をさらってきて、この国を通して帝国に売りに行く奴隷商人なんざ案外いる。もちろん奴隷連れて通るだけでも、この国じゃ違法だが」

バートが軽く教えてくれた。違法を承知で活動する、アングラな商売人はどこにでもいるという事だ。

「この子もそういう奴らに売り払うつもりでさらってきたのか？」

「多分そうだが、俺もよく知らん。オルタム、そういうのはてめえの管轄だろ」

「……私も別に、積極的に人さらいをするよう指示しているわけではないのだがね。この国では人を売るのは難しいから。間抜けな下っ端に任せて足がついてはいかんから、商談の場に私が出たりするだけだよ。どこでさらって来たのかも私は知らん。連れてきた者達が、この娘を『精霊憑き』だとか騒いでいたのは知っているがね」

多少緩んでいた鋼の警戒心が、その単語を聞いて瞬時に引き締ま

った。

「……嘘だろ？」

「さて、どうだろうね。私も違うと思ってるが、断言は出来ないな」

檻の中の獣人の少女を改めて見下ろす。隠し切れないこちらの緊張が相手にも伝わり、怯えた様子で首を横に振っていた。

精霊憑き。

そう呼ばれる人間が、こちらの世界では稀まれに生まれる。鋼も知るそれは才能の名だ。まるで精霊に愛されているかのように、人の身に余るほどの圧倒的な魔術の才を持つ者をソリオンではそう呼ぶのだ。

ただの『常識外れの天才』程度の意味ではない。精霊憑きは魔術全般に適性が高いが、特に一つの方面に対しては異常な才能を発揮する点が有名だ。例えば炎系魔術に異常に特化した者は『炎の精霊憑き』と呼ばれたりする。特化した分野の才能がどれほど非常識かを簡単に説明すると、これはニールの受け売りだが一国の軍事力に影響を与えられるレベルだという。

何故そのような異常過ぎる才能が宿るのか判明していないが、精霊憑きが生まれる確率は非常に少ない。同じ時代、一つの国に現れるのは二人か三人程度だとか。それほどに希少で、皆に畏怖される存在が精霊憑きというものだ。間違ってもこんな所に放り込んで拘束していい存在ではない。鋼が「嘘だろ」と思わず訊ねたのは正常な反応である。

「まあ、ほんとに精霊憑きなら大人しく捕まってるわけねえしな……」

それでもなんとなく、鋼は身構えてしまう。もしも本物であれば油断している鋼を殺すくらい屁でもないだろう。相手が己の命を握っているかもしれない可能性は、たとえ可能性だけでも十分警戒に

値する。

よく見れば、リユンとは違いこの少女は手足までも金属製の錠で拘束されていた。精霊憑きだと騒がれる程度には特殊な、攻撃力を備えた魔術を少女が使っているのは間違い無さそうだ。

「お前、名前は？」

「……ミオン、です……」

ぼそりと狐娘が答えた。

「そうか、ミオン。ここで会ったのも何かの縁だ。お前もついでにそこから出してやる」

「あ……、ありがとうございます！」

「まあ、と一転して明るい表情となる囚われのミオン。警戒する必要など微塵も無さそうな、屈託の無い笑顔だった。鋼も安心して肩の力を緩めた。

「まあ、もう好きにしてくれたまえよ……。君が誰を連れて行こうと、今の私には止められん」

オルタムの台詞を聞き流しながら、鋼は鉄格子に手をかけた。それにバートが呆れた声をかける。

「おいおい、一応それ鉄製だぞ。素直に鍵を探したほうがいいんじゃないのか」

「ま、物は試しつて事で」

挑戦した事はないが、なんとなく力づくでこじ開けられる気がする。ている。

問題があるとすれば。

鋼は普段、《身体強化》にあまり魔力を使わない。強化というのは必要な分だけあれば十分で、それ以上の筋力を得ても無駄どころか害にすらなり得るからだ。だが鉄を曲げるとなれば、求められるのは純粹な怪力だ。普段は使わないレベルで強化に魔力を注ぐ必要があるだろう。

唯一心配なのは、その魔力を察知して要らん援軍が来ないかという事だ。鋼の戦友達は鋼の魔力には人一倍敏感で、理由不明だが《

加護』の最中はその察知能力は更に跳ね上がる。

外に漏らす魔力活性化の気配を、なるべく殺す。

それは《身体強化》でだけ鋼が成功させられる、そこそこ高等な魔術のテクニクだ。さすがにこの室内くらいの距離の人間に隠し通すのは無理だが、活性化の気配が広範囲に飛び散らないようする程度は可能だったりする。それに意識を割きながら、鋼は体内で待機状態で留めておいた《身体強化》に再び魔力を注ぎ始めた。

この時、魔力の制御に気を取られていた鋼は気付かなかった。鋼の魔力活性化の気配に、目の前のミオンが怯えるように体を揺すつた事に。

鉄格子を掴む手にぎりぎりと力を込めるが、それでも足りず。鋼はミオンの反応に気付かないまま、魔力光が溢れるほどの魔力を本格的に解放した。

その途端。

「ひゃあああああつ！！！！」

ミオンが絶叫した。

だけでなく、ただの一瞬で彼女の両肩あたりに一つずつ、魔法陣が発生する。それはかなりの速度を誇る戦友達の魔術行使を見慣れている鋼にすら、思考の猶予を許さない程の早業だ。

驚くこちらに対し、二つの魔法陣は一切の容赦なくその役割を果たす。

光り輝く二つの円から、鋼に向かい二条の稲妻が襲い掛かった。

雷より人が速く動ける道理など無い。

だが結果的には鋼は無事で済んだ。驚いて手を離れた瞬間、稲妻が鉄格子に当たりばりばりと音を立てて掻き消えたからだった。

もし手を離すのが少しでも遅れていれば。

見た事の無い稲妻の術式がどれだけの殺傷力を持つのかは知らない。だが電気というものは、かなり電力が高くなければ空中を伝わってくる事は無いはずだ。日向だって触れるほどの距離でないと相手に電流を流せないのだ。今は十分に、人を感電死たらしめる威力があったのではないか。

「……助けてやるうって相手に随分な挨拶じゃねえか」
ぞわり、と。

鋼の奥底から、どす黒い何かが湧き上がってくる。

戦意。殺意。そういった類の『何か』。

死の谷ではいつも鋼と共にあり、日本に帰ってからは全く無縁となった懐かしき感触。

環境への適応によって形作られた、戦闘に特化した自分と言うべきモノ。

「す、すいません！ 本当にすいません！ 驚いて、つい……！」
この期に及んでもミオンに悪意は無く、本心から謝っているように見える。それが更に鋼の苛立ちを加速させた。

「驚いただけで人を殺しにかかるとは、中々いい性格してるなお前」
久しぶりだ。本当に久しぶりに、手加減無しの本格的な《身体強化》を自分自身に施す。

派手ではない、鈍い色の魔力光が腕から漏れ始める。ミオンが畏怖の表情を浮かべた。どれだけ強力な強化なのか、見ただけで相当詳しく把握しているような反応だ。狐の耳と尻尾が生えているよう

な奴だし、通常の人にはない鋭敏な感覚を持っているのかも知れない。まあ、それで反射的に攻撃していい理由にはならないが。

光る両腕で再び鉄格子を掴む。

一息に捻じ曲げ、引き裂いた。

「……は？」

誰かがそんな間拔けな声をあげる。

鋼も少し、拍子抜けしていた。牢に使う鉄の格子でもこの程度なのかと。手の中の捻じ切れた鉄片を眺め、その辺に捨てる。まだ何本も残っている格子をめきめきぐにやぐにやと折り曲げ、通りやすいよう大穴を空けた。

「いや。いやいやいや、いくら全開で強化しても、それはデタラメ過ぎたる……」

呆然とするバートと同じ感想なのか、リユンやオルタムは言葉も無い。室内の誰からも驚愕の気配が伝わってくる。

無言で見下ろすと、獣人の少女は「ひっ」と息を詰まらせた。拘束している錠ががちゃがちゃと音を鳴らし、彼女の体の表面にはパチパチと電流が走る。

「……」

さすがにそのあまりに不自然な現象を目にしては、鋼も冷静にならざるを得ない。

「……完全に無意識に《電撃》の術式を使ってんのか？ それ以前にお前自身はなんで感電しない？」

「わ、わ、分かりません……」

……あり得ないだろうとさっきまでは思っていたが。

震えながら答えるミオンを見て、鋼は認識を改める。本当にこいつは精霊憑きかもしれない、と。

「なるほどな。本物の精霊憑きだったとしても、確かに電気じゃ鉄の錠は壊せねえ」

ぶんぶんと首を横に振り、鋼の言葉を否定するミオン。こちらが的外れなのか、本当に精霊憑きだからこそ否定するのか、その反応

だけでは判断出来ない。

「おい。その鎖切つてやるから、絶対に攻撃してくんじゃねえぞ。またさっきの撃ちやがったら……、分かってんな？」

ぎろりと睨みつけると、ミオンはかなりの勢いでこくこくこくと何度も頷いた。ついでに体を走る電流の量も倍増する。

「おいこら！　んなバチバチしてたら触れねえだろうが！　置いてかれないのかお前は！」

「ううう、ごめんなさい！　見捨てないで下さいっ！」

……どうも恐怖を感じると条件反射的に放電する体質らしい。不便すぎる。

想定以上に電流が強ければ破られる危険性は伴うが、一応《防電》は習得している。体の特定部位あるいは全身を、電気を通さないよう変化させた薄い魔力の皮膜で覆うという魔術だ。少女が落ち着くまで待っているのが面倒になった鋼は、早々にその術式を用いて鎖を外そうかと考え始めていた。

そこまで得意でもなく、ほとんど使った事がない術式なのがやや怖いところだ。早く帰りたい願望と身の安全に対する優先度を秤にかけ、やはり慎重に行くべきかと鋼が思索していると。がちやりとこの室内から発せられたにしては違和感のある硬質な音が背後から聞こえてきた。

振り向けば、同じように室内の奴らが入り口に向かって振り向いたのが目に入る。

開けっ放しにしていた入り口ドアの付近に何者かが立っていた。

「その子から離れる。事情は知らんが、怯えているではないか！」

その人物はびしっとミオンを指差し、それだけ聞けばカッコいい台詞を吐いた。

日本製らしきシャツとカーゴパンツを着た、服装からすれば違和感がある程に引き締まった筋肉の巨漢だった。ただし顔は分からない

い。騎士が装着するようなイメージの、大仰なフルフェイスの金属兜を被っているからだ。先程の硬質な金属音は、立ち止まった時に兜のパーツが音を立てたらしかった。

「へ、変質者……?」

リユンが見たままを言った途端、謎の巨漢はシヨックを受けたようにふらつく。だがすぐに立ち直った。

「俺は通りすがりの正義の味方というやつでな。この辺りで誘拐事件が起きたと小耳に挟んだのだが……、んん? まさかその子が、誘拐された子じゃなかるうな?」

「わざとらし過ぎだろおっさん。いや、変質者と呼ぶべきか?」

「呼ばんでいい!」

変質者が叫ぶが、どっからどう見ても怪しい人である。マッチョが日本の服を着て、中世ヨーロッパ的な兜で顔を隠しているのだ。この格好で日本を歩けば間違いなく通報モノだ。リユンの反応からして、こちらの世界の基準で見てもアウトなのは間違いなし。

「なあ……。もしかしてあいつ、ギルドの幹部とかだったりするの
か?」

組織に関係ない外部の人間らしかったが、一応バートとオルタムに訊いてみた。

「あんな変態みてえな幹部がいて堪^{たま}るか!」

「犯罪行為を行う際、顔を隠す者はそう珍しくはないがね……。さすがにあんな、逆に目立つ頭のおかしな格好を選択する輩は、うちの組織にはいないと信じたい」

二人は即座に否定する。既に変質者はふらつくどころか、がつくりと床に膝をついていた。

それでもめげずにふらふらと立ち上がり、もう一度ミオンを指差す。

「と、とにかく。俺は正義の味方なので、誘拐された少女は連れて行かせてもらう。なあに、妨害しようとしないう限りは、俺からも危害は加えんさ。……とここで」

兜の中の視線が鋼に固定される。いや、そのように感じたというだけで、表情など全く窺い知れないのだが。

「む？ んん？ 騎士学校の制服、だよな？ どうして誘拐犯の一味と……」

「見ての通り。話し合いの結果誘拐犯達は改心して、こうして人質を解放してくれる事になったんだよ。っつーわけで、正義の味方の出番はもう無くなったとこだ」

「……」

兜の男は腕組みをして、考え込むような間を取った。「……こいつか。噂の問題児とやらは」とか、かなり小声で呟いた気がするが、兜のせいで声がかくぐもっていたのでちゃんと聞き取れた自信は無い。「……人質はもう解放されると？」

「ああ」

「ほう？ ついさつき、お前の怒鳴る声と、その人質の少女の『見捨てないで下さい』という声を俺ははつきり聞いているのだがな。どうもお前の言う事は、そのまま信用できん」

「また面倒なとこだけ聞いてやがんなこのおっさん……」

この変質者が来るのがほんの少し早ければ、こうして不審も抱かれなかっただろうに。せつかく誘拐に関しては解決したのに、またもや面倒に見舞われそうな予感に鋼はげんなりした。

「とにかく、候補生一人に任せきりにするわけにも、ここに置いていくわけにもいかんしな。その子と一緒にお前も来てもらおうぞ」

「いやあ、あんたが通りすがりの変質者じゃないと決まったわけでもねえし……」

「だから変質者ではないと……！ 顔を隠さないといけない事情があるのだ！ 俺は誘拐された子の救出を頼まれている。ここで引き下がるわけにはいかんのだ」

「だったら最初からそう言えば良かったのに……」。

しかし、やはりそうか。

あの兜はどう見ても騎士に関係のない一般人が持っている物では

無い。このタイミングで人質救出を頼まれるとなると、この男は恐らくシンド教官の差し金だ。頼まれただけで人質の顔すら知らないから、ミオンを満月亭の娘だと勘違いしていると思われる。

もしミオンの方を救出しに来た彼女の関係者であれば、さすがに彼女に声くらいかけるだろう。多分シンドはリユンの名前を知らないはずで、この男も人質の名前を知らないから『その子』としか呼べないのだ。

ともかく、推測とはいえ状況がはっきりした事で、鋼は思わず顔をしかめた。

この男と一緒に行けば、絶対に面倒な事になる。

鋼としてはこの後、ひっそりとこの場を引き揚げ、この本拠には騎士学校の生徒など来なかったという事にしておきたかったのだ。騎士学校の制服姿の目撃証言が後で出て、学校側から問い詰められても自分達とは関係無いと言い張ればいい。人質を取り戻した謎の人物達は騎士候補の仕業に見せかけるために変装していたのでは？とか何食わぬ顔で言っただけのける自信が鋼にはある。今日の事は寮の門限破りについて叱られる程度で済むはずだ。

だがこのまま兜男に騎士学校のシンドの元にまで連行されてしまえば、言い訳は利かなくなる。セイランでは犯罪者相手に正当防衛で暴力を振るっても罪に問われる事は無いが、だからといって学校側が生徒に何の処分も下さないとは考えづらい。教官に止められていたにもかかわらず犯罪組織の本拠に押し入るといふ暴挙に出たのだ。これが学校側にどれだけ問題行動と見なされるか分からないが、もし退学など言い渡されようものなら目も当てられない。

「逃げようと計算を働かせている者の顔だな」

のしのしとこちらへ歩を進めながら、兜男はこちらの心中を容易く見抜いてみせた。

じっくりと考えている猶予は無い。そしてこの男が本当にシンドの協力者かどうかも確証はないので、逃げ出して後はこの男に人質を任せるといっても躊躇われる。

ならば、残る選択肢は一つだ。

「っ！」

鋼が決断した、まさにその瞬間。兜の男が突如踏み込んでくる。決断と男の急接近に、一切のタイムラグは無かった。完全にこちらを見透かしたかのようなタイミング。物騒な行動を起こそうとした鋼を察知し、先に取り押さえようと動いたのだ。

その速度が尋常では無い。瞬時に《身体強化》を発動させた男の踏み込みを、今から避けるのは不可能に近かった。思考を挟む余地などもはや無く、本能は鋼に迎撃を選択させる。

こちらも強化した身体能力で、伸ばされた腕を払いのける。残ったこちらの右腕は組織の下っ端から奪った長剣を現在も握っていた。鞘に納めたままとはいえ殴りつけるのも気が引けたので、兜男の体を持ち上げるようにその剣ですくい上げる。

もちろん男は踏ん張ろうとした。だがこの場合、持ち上げる側がかなり有利と言える。どれほど強化しても体重は増加しないからだ。だから鋼は疑いなく、易々と持ち上げられるものだと思っていた。相手がいくら強化が得意でも、こちらだって相当に得意なのだから。実際は剣を持つ手にかかる重みに鋼は驚愕させられる事となった。

重っ！？

それでも構わず力を込め、鋼は無理やり男を押し飛ばす。それほどたいした勢いはつかず当然男は平然と着地してみせた。両者の間に再び少しの距離が空いただけだった。

そうしてお互いが、どちらも戸惑ったように相手を見据えながら様子見を選ぶ。

今度は男も不用意に近づいて来ないし、鋼も警戒のレベルを最大にまで引き上げている。

「……おいおいおい。本気で踏ん張って飛ばされるとは思わなかったぜ」

「ありや飛ばされて当然の状況だろ……」

有利なはずの勝負を、強化された相手の筋力が想像以上で覆され

かけた。恐らくはそういう事だ。

凜の自力での《身体強化》より、少なくとも上。相手の技量を鋼はそう分析する。ふざけた格好をしているが、この兜男は鋼が今まで会った人間では間違いなくトップクラスの強化の使い手だ。

ならば、魔術以外の要素はどうか。

「むう!?」

今度は鋼から奇襲をかける。強化と純粋な体術、どちらも最大限に組み合わせた本気の一步で懐に潜り込む。一般人はもちろん、多少戦い慣れしている程度の者でも消えたように錯覚するであろう、渾身の速度だ。

もちろん馬鹿正直にスピードだけに頼り切った攻撃はしない。見切るのが困難であろうその速度の中で更に鋼はフェイントを織り込んだ。鞘に入った長剣で殴る素振りを見せながら、本命として右足の蹴りを叩き込んだのだ。

目がいい。速い。力がある。そういった個々の強化性能がいくらか高くても、それだけでは防ぎきれない攻撃だ。各身体能力がかなり優秀である事を完全に前提とした、その領域内での更なる駆け引きだ。これが通用するのならまだ楽だったのだが……。

やはり、男は防いでみせる。

フェイントにも反応したが、こちらの蹴りも見逃さない。蹴りに対して男も反射的に蹴りを繰り出し、互いの攻撃がぶつかり相殺する。強化で硬度すら高めた互いの足からは棍棒でもぶつけ合ったような鈍く重い音が辺りに鳴り響いた。

驚いて攻撃の手を緩めるような真似はさすがにしない。防がれたなら次、それを避けられればまた次と、手足を用いて男に打撃を浴びせていくのだが、これがまた見事に思い通りに行かなかった。動きに緩急をつけ、フェイントも織り交せて、鋼はいまや本気で戦っている。なのに全く兜男のガードを崩せない。技術も強化も負けているわけでは無さそうだが、こちらがペースを握れるほど圧倒的に勝っているわけでも無いようだった。

兜男も守るだけでなく、隙を見て反撃してくる。そのまま戦闘は高速の打撃が飛び交う乱打戦へと突入した。

「ちよ、な、なんでいきなり戦ってるのよ!」

リユンの疑問の叫びを二人の耳は聞き流す。鋼も兜男も今戦っている相手の拳動に完全に集中していた。そうせずに勝てるほど甘い相手ではないのはもはや明らかだ。

「これで騎士候補とか、悪い冗談にしか思えんな……!」

「そういうお前も、ただの変質者じゃねえな」

「だから違うと言っているだろう!？」

喋っているのが隙と思わせて、相手に誘いをかけているのだが、相手もそれを分かっているから乗ってこず、更なる会話で返す。

そういった駆け引きが密かに展開されながら、殴り合いつつ声を掛け合う二人。拮抗した戦いだった。リユンはもはや口を噤み、息を詰めてその戦いを大人しく眺めている。バートにオルタム、ミオンも同様だ。

唐突に始まった殺意だけは無い戦いを止められる者はこの場にはいなかった。

「ヒナ。どう思いますか」

余裕の無さを押し隠した表情で凜が日向に問いかければ、無機質な声音で答えが返ってくる。

「……魔力をこれだけ使って鋼がまだ倒せないなら、相手はかなりの強敵」

「はい。これ以上長引くのは危険かも知れません。……私が援護に行きます」

凜の宣言は、この場で騎士候補達を守る味方が一人減る事を意味していた。雪奈が不安そうな顔をしたのも無理も無い。広間にはま

だ組織の人員が何人も控えており、凜達騎士学校の生徒を遠巻きに見守っているのだ。

この場を取り仕切っているのか、凜は少しだけ悩んだ。指示を出し決定を下すのはいつだって『彼』の役目で、彼女自身はこうした事には不慣れだったからだ。

だけど『彼』に関する問題で、《加護》を受けている凜が遠慮するなどそれこそあり得ない事だった。

「ヒナは皆さんを連れてこの場から先に離脱して下さい。私はコウと合流して、お手伝いを」

「……うん。それが妥当と思う」

魔力活性化の気配により、凜は『彼』の居場所を間違えない。合流しようとして行き違うなんて事は起こり得ないから、言いつけを破ってこの場を離れてもそれほど問題ではないように思えた。

「なあ。鋼はまだ大丈夫なんよな？」

周囲には聞き取られないよう身を寄せ、騎士学校の面々にだけ聞こえる声で省吾が訊いて来る。

「長引くのは危険っちゅう事は、鋼は強いけど魔力少ないんやろ？」

「わいは鋼の気配感じ取れやんけど、まだ全然無事なんか？」

省吾なりに『彼』を心配してくれているようだ。凜はほんわかした気持ちになりながら、しかし一つ勘違いしている省吾に訂正する。

「コウは別に、魔力が少ないわけではありませんよ」

「あ、そうなん？」

むしろ男性の平均を大きく上回る魔力量だったりする。『彼』が魔力をなるべく使わないのは全く別の理由からだ。

「あの人は、戦いとなるとちょっとだけ熱くなり過ぎるところがあります。魔力を本格的に消費するような激しい戦闘を続けたり、本当の意味で命に危険が迫ったりすると、その……。手加減を忘れて、相手を殺してしまうかもしれず」

実際は戦闘行為が付随していなくても、魔力を消費する行動というだけで『彼』の意識は研ぎ澄まされ、切り替わり始めるらしい。

「神谷君も戦闘モードがあるのね……」

「はい……」

戦っている相手を殺すだけなら別に構わないとさえ凜は思っけど、『彼』の場合周囲の人間に巻き添えが出てしまう可能性があるのだった。より正確に言つと、巻き添えを厭わず戦うようになる。例えば攻撃する際、別の誰かを巻き込みそうだからやめる、という事を『彼』はしなくなるのだ。

伊織の戦闘モードという表現は的を射ている。その時の『彼』なら、無力化された相手であっても自身の確実な安全のためなら、敵の息の根を迷わず止められるだろう。

過酷な環境で培われた凶暴性と容赦の無さは、『彼』の内に確かに根付いているものだ。

普段の『彼』はそういうのを気に病む性格なので、いつもは慎重にその凶暴性を封じ、自分を律している。しかし戦いが長引くような強敵に対し、いつまでその自制を保てるか。

「ヒナ。後はお願いします」

「ん」

了承をもらい、目礼で皆に別れを告げ、凜はさつき『彼』とバートが行った通路に向かう。進路の付近にいた男達が必要以上に道を空けた。

魔力活性化の気配が届いてから数分が経過していた。手遅れでない事を祈りながら、凜は広間を後にした。

どうして二人が戦っているのか、いまだに満月亭の少女リユンには分からなかった。

ただ、物凄い戦いだという事は分かる。速過ぎて何をやっているか全然見えないのである。

リユンを助けに来てくれたあの少年は、以前店でこういった事には慣れていると言っていた。入学したての騎士候補にしては、と頭に付くものだと思っていたリユンは先程から驚愕させられっぱなしだ。

リユンを助けに来る途中、五十人ほど倒してきたとか何でもない事のように言う。木の格子はもちろん、鉄格子すら素手で破壊する。これほどに常識外れな存在を、リユンは今まで生きてきて他に知らない。

そして彼とまともにやり合えるという事は、兜の人も非常識な強さなのだろう。恐る恐る、リユンは自分を誘拐した組織のメンバー二人の様子を窺う。バートとかオルタムとか呼ばれていた男達は強張った表情で二人の戦いを眺めるだけで、こちらに注意を払う様子など全く無い。あの二人が戦っている隙にリユンを連れて逃げ出すとか、そういった思惑は無さそうだ。

すごい戦いだと分かってもどれくらいすごい戦いかは分からない素人だからこそ、この場においてはリユンが最も冷静だ。驚きはしても他の人達ほどでは無い。リユンはこそこそと移動し、いまだ囚われの身であるミオンの傍にしゃがみこむ。

「こうして面と向かって話すのは初めてね」

「は、はい。……あの」

今朝買い出しに行った帰りでリユンはここに連れ去られてきた。それから今まで同じ境遇だった彼女とは何度も言葉を交わしている。

壁が二つの牢屋を隔てていたので、今までは会話は声だけが頼りだった。

「あの兜の人ってあなたの知り合いじゃないの？ 戦うのやめるように言ってもらえない？」

「いえ、その、知らない人です……。助けに来てくれるような知り合いも元々いませんし……」

寂しい答えをリユンに返しつつも、ミオンの関心のほとんどは助けに来てくれた少年カミヤと兜男の戦いに向いているようだった。そちらから全く視線を逸らさない。

「うーん。なんでこんな事になってるのか、よく分からないわね。

今は話を聞けそうな感じじゃないし。でも一応、今のうちにどうにかあなたの拘束を解いておいたほうがいいのかも……。無理かな」

「あの。それよりも、なんとかしてあの人を止められませんか！？」
言い募る獣人の少女の態度はどこか必死だった。

「私も出来れば止めたいけど……。刃物を抜いてるわけでもないし、気が済むまでやらせておけばいいんじゃないの？」

「だ、駄目です！」

迷いなく断言したミオンは、よくよく見ればその顔も青ざめていた。相当な焦りようだ。

「あの、その。さっきからあの子の魔力が……。！ は、早く止めないといー！」

「魔力？ あの人がどつち？」

「あの子カミヤって名乗ってた黒い髪の人です！ 変です、こんなのおかしい……！」

台詞の後半は独り言のように呟いて、リユンには見えない何かを否定するようにミオンは首を横に振っている。彼女の言うおかしい魔力とやらをリユンは全く感じ取れないけど、軽く受け流すのは憚はばかられる真剣さと切実さだった。

そもそも、どうしてこんな無意味な戦いに興じているのか。

当事者である二人、神谷鋼と、兜の男　　ディーン・グレイルは、無意識の底でともに同じ疑問を抱いていた。

なまじ、どちらも《身体強化》が常人より圧倒的に得意だけに、主導権を己が握っていると勘違いしていた事が原因であろう。怪我をさせず穏便に相手を無力化し、発生する諸々の面倒は自分一人で上手く処理する自信があつたからこそ、相手に手を出すまでの躊躇が少なかった。

今二人は、軽率な判断で始めてしまったこの戦闘によって、己の自惚れと世界の広さを思い知らされていた。

強い。

ディーンは戦いにほぼ全ての集中を注ぎながらも、思考の片隅では戦慄を抱いていた。

己の歳の半分もいかないような少年に対し攻めきれない。騎士になつて十五年ほど経つが、いまだかつて無い経験だ。

シンドが手を焼くのも当然と思えた。いくら生徒といえどここまでの強さがあれば、教師に止められても構わず無茶をするだろうし、実際に大抵の状況をなんとかしてしまえるはずだ。

これほどの逸材が、騎士候補の学生に埋もれているとは。

こうして身をもって味わわなければ、ディーンは信じなかつただろう。己と互角の十代の少年の存在を。ディーンは王国騎士団の一隊『牙狼隊』の副隊長であり、これでも己の実力にそれなりの自信を持っている。相応の実力を認められた者だけが就ける責任ある立場だ。本来なら騎士にもなっていない候補生に苦戦するなど、絶対にあつてはいけない。

だがこうして殴り合っていると、素直な気持ちでそれを認める事が出来た。

この少年の強さは本物だ、と。
懐いたのは、将来が楽しみな才能溢れる若者に対する期待や感嘆ではなく。同等の戦士に対する敬意のようなものだ。

デーンは相手はまだ子供だという侮りを完全に捨てた。ほとんど手加減などしていたつもりは無いが、更に己の拳動から甘さを無くしていく。もちろん少年に対して敵意も殺意も無いから、己の剣を抜きはしないが。戦意を漲らせて、余計な思考を削ぎ落としていく。

強化魔術の純粋な性能では僅かに負けている。

戦闘技術はこちらが多少勝っている。

そして実戦経験に関しては、恐らく同程度。……生きてきた年数の差を鑑みれば、ぞつとする推測だが。

以上の分析による結論としては、互いの実力はほぼ拮抗していると言えた。手加減なしとは言っても、デーンはいまだ手段を選ばないほどの全力を出しているわけでも無いのだが、この少年もまだ底を見せてはいないと直感は告げていた。

調子に乗っていた事を、認めねばなるまい。

遠慮が無くなってきた兜男の拳を咄嗟に受け止め、腕を痺れさせながら鋼は思う。

こちらの世界にやって来てから、ろくな強化の使い手を見ないものだから勘違いしつつあった。死の谷やルデスで魔物相手に生き残ってきた鋼は、人間相手であればもはやほとんど敵なしなのかも知れないと。

思い上がりもいいところだ。

これが、戦闘を本職にしている人間か。

兜男は相当に強かった。やはり所詮、闇傭兵ギルドの兵隊達は多少凶悪なチンピラ程度でしかなかったと気付かされる。本来戦闘のプロとはこのような者を言うのだろう。

「ぐっ！」

戦うほどに兜男の動きは鋭さを増してきている。鋼も相手の行動パターンや思考の傾向を学習し、戦いの流れを支配しようとしているが成果は芳しくなかった。相手もまたこちらの動きを学習し、対応を変えてきている。それに兜男は簡単に次を読ませるほど単純な戦士ではない。

少し、押されつつあった。

鋼の右手にはいまだに長剣が鞘ごと握られている。不用意にこれで殴りかかれれば一撃で壊される恐れがあり、徒手空拳の戦闘において非常に邪魔なので正直なところ、捨てたいのだ。さりとして兜男は腰に剣を差していつでも抜ける状態なので、相手がいざ抜いた時対応できるよう捨てるわけにもいかなかった。

その不利分で、鋼はじわじわ追い詰められつつある。どうにかして巻き返さないとこのままではジリ貧だ。だが押されている状況から起死回生の一手を放つのは、いかにも分かりやすい予測しやすい選択肢であり、この相手にそれを仕掛けるのはリスクに過ぎる。

それでも、分の悪い勝負だろうと打って出るしか無い。

「っ！」

短く息を吐き、鞘に入った状態の長剣を兜男に突き入れる。

勢いの乗った一点突破の攻撃は、いかに相手が強化しているようとからえば悶絶は必至。だからこそ全身全霊の速度をそこに乗せた。

ぎいん、と。鉄でもぶっ叩いたような鈍い音を耳にして、鋼は失敗を悟った。

突きが兜男を直撃する寸前。上から思いつきり落とされた拳骨が、長剣の軌道を曲げたのだ。見切られていた、という事だろう。

誰かから奪い、一度も抜かなかった長剣は今の一撃で微妙に斜め

に曲がってしまった。

「うむ。これで抜けなくなったな。……それにしても凄まじい速度だった」

即座の反撃を警戒し下がった鋼を追いはせず、兜男は仕切り直すようにその声をかけてくる。

鋼は無視した。油断を誘うための企みかも知れない。会話に乗る利点も特に無い。体の各部に不調は無いか確かめ、兜男の筋肉の動き出す気配を注意して観察し、奇襲を警戒する。

「……何か、最初と雰囲気が違うな？」

指摘された事に対する自覚はある。だが、だからといって警戒を解く理由にはなりはしなかった。

こちらを観察するような僅かな間の後。

兜男が腰の剣に手をかけた。

……後になって、冷静に考えてみれば。

相手からはこれまで一度も、敵意や殺意の類は感じなかった。だからその動きは剣を抜くためでは無く、恐らく腰から外そうとしたのだ。こちらの武器が無効化された以上、相手も武器を所持し続ける必要は無かった。鋼の警戒を少しでも解こうとしての動きだったのだ。

だがそうと分かったのも、後になっての話だ。この時の鋼には、彼が己の武器を抜こうとしているように見えた。

こちらの武器が抜けなくなったのを見て、今が好機と判断し止めを差しに来ようとする敵が鋼の目には映っていた。素手であれだけ強い男が、剣を手に襲い掛かってくる事がどれだけ脅威か。

長らく忘れていた、懐かしき感触。

命の危機。

それは鋼の意識の表層の、薄っぺらい思惑を削ぎ落とす。戦うにしても武器を使わず、なるべく穏便に済ませようという打算。同じ部

屋にいるバートやリオン達が、何かやらかさないかという心配。切り札を人に見せるにあたっての躊躇。

必要のない余計なものが鋼から剥がれ落ちていく。この『今』が、命を懸けた敵との駆け引き、ただそれだけが、この場における世界の全てであり、不要なものを省いた鋼に残されたものだった。

入りかけていたスイッチが入り、意識が切り替わる。

致命的に足りていなかった危機感が補われ、己の優先順位から一位以外のものが全て弾かれる。

死の谷で鋼に芽生えた、人ではなく獣としての自らの意識がこの瞬間目を覚ましたのだった。

思考する。

兜の男は強敵であり、剣を抜かせてしまえば更に厄介な敵となるのは目に見えている。剣を抜かれても本気になった鋼が遅れを取るとは限らないが、実際に戦ってみて試そうという気にはならない。

最も確実に相手に勝つ方法とは、相手に何もさせない事だ。

意識の切り替えと、勝利のための思考。ここまででまだ一秒の十分の一ほどの時間しか経っていなかった。兜男も腰の剣に手をかけただけでまだ抜いてはいない。だから思考は、剣を抜く前に倒すという結論を出した。

鋼は《身体強化》以外にも、一つだけ大いに得意な魔術的技術がある。

魔力の塊をただ放出する、というニールによると『魔術じゃないらしい攻撃手段だ。魔力を固形化し弾丸のように放つ《魔弾》という魔術に似ているが、どうやら違うらしい。本来のプロセスを踏まないとても原始的なスキルであり、それを魔術と呼称するのは魔術師として抵抗があるそうだ。

確かに鋼自身も、それを弾丸のようにには感じない。手が空いていなかったり敵に届かないといった状況で、仕方ないので魔力で殴りつけるという感覚だ。《身体強化》に物を言わし素手で殴りつける

方が早いのなら使う意味が無いので、この魔力放出は威力よりも速度を優先して鍛え上げた。

無意識だったが、恐らくは速度のために術式を色々省略したのだろう。結果、形としては正しい魔術では無くなったようだが、これは鋼の切り札と言えるまでに実用的な攻撃手段となった。

それを、放つ。

兜男は避けられなかった。

「ぐうっ!？」

魔力放出は鋼が全力で殴りかかるのと同程度の速度である。

ただし、魔術に本来ある発動までの時間がほぼ無く、鋼自身にも予備動作が無く、腕の長さの10〜20倍ほどの射程がある。

避けられはしなかったものの、さすが兜男は両手でのガードは間に合った。しかし短く叩いた事からも分かる通り、速度優先のこの魔力のパンチは速度が乗っているので威力もそこまで控えめではない。全力で手で殴りつけるより、僅かにマシな程度だ。強化を使っていない相手であればこれだけで即死する可能性が高い、そういう攻撃だった。

すかさず放った二発目を受け止め切れず、兜男は「かはっ」と息を吐き出しながら後方の壁へと吹っ飛んだ。

ここで一旦攻撃をやめ、様子を見るほど鋼は甘くも愚かでもない。敵が無防備になっている好機を逃すような奴は、あらゆる能力において人間より強靱な魔物相手に勝利する事など出来はしない。

壁にぶつかりダメージを負う男に容赦せず三発目。魔力パンチは攻撃範囲が最低でも三十センチ以上あり、人の拳より相当に巨大なので避けるのは困難だ。兜男もはや避けようとはせず、攻撃をくらった直後の体に鞭打って、強化した己の拳で迎え撃った。

衝撃がぶつかり合い、ぱあんと快音が鳴った。防がれたのを見て取った鋼はすぐに次の攻撃のために魔力を練り上げ始める。発動までに少し時間をかける代わりに、威力を高めるくらい造作も無い。魔力放出はかなりの応用が利く能力だ。

「な、めるなあっ!!」

一瞬の隙を兜男も見逃さず、これまで使わなかった《身体強化》以外の魔術を発動させる。

魔法陣が正面に展開し赤く発光する。どんな魔術であろうと構わずに発動前に叩き潰す気でいた鋼は、驚異的な展開速度に眉をひそめた。正規の魔術でない鋼の魔力放出に比肩し得るとは、恐らくは相手の魔術行使も相当に常識外れだ。本格的に魔術に詳しいわけではない鋼にはどういった仕組みなのか推測も出来ない。

赤い魔法陣が発動し、赤い色の《障壁》らしき魔術が兜男を守るように現れた。

本来《障壁》とは魔術戦における最も汎用的に使われている防御のための魔術で、半透明のガラスのような見た目の壁を盾として設置するものだ。ちなみにその材質は《魔弾》と同じく魔力を固形化させたものであり、実際はガラスのように脆いわけではない。

兜男が発動させたものは普通の《障壁》とは違い、炎を混ぜ込んで水晶の中に閉じ込めたかのような赤い色合いの半透明の壁だった。そして見る者に威圧感を与えるほどに分厚かった。見た事の無い魔術であり、《障壁》とは別物と考えた方がよさそうだ。

鋼は念のために更に魔力を上乗せし、先端を尖らせた形状にして四発目となる魔力放出を行う。

ほとんど同時に兜男も新たな魔法陣を起動し、《圧風》らしきその術式でもって赤い障壁をこちらに撃ち出して来た。

互いの奥の手が二人の間で激突する。

「なっ!?!」

驚愕の声は重なった。

鋼の魔力の杭は赤い障壁を砕いた。が、貫通はせずにその場でひしゃげ四散する。固形化が解かれて魔素となつて空气中に散つただ。つまり結果は相殺だった。

鋼は貫通できず攻撃を止められた事に、相手は恐らくただの一撃で障壁が壊された事に、それぞれ驚き一瞬の隙を作った。それだけ

両者にとって絶対の自信を持つ切り札だったのだ。

互いが動きを止めただけなら、それが戦局に影響を及ぼしはしなかっただろう。

だが今、鋼がほんの一瞬とはいえ驚愕の声を上げている間に、赤い障壁の破片が降り注ぎ目前まで迫っていた。

大きく退いて全てを完全に避けるタイミングは逸している。鋼の勝負勘は微かな警鐘を鳴らしたが、向かってくる大きな破片だけを手で振り払い、小さな破片は無視すると決める。

「っ!？」

触れた拳が焼かれる痛みで、赤い障壁の欠片が高温を宿しているのだと知った。

それでもただの火傷程度で、戦闘に支障が出るような負傷ではない。構わず問題のある大きさの破片だけを迎撃すると、制服を焦がす小さな破片を振り落とし鋼は一步下がった。仕返しよりも未知の魔術への警戒が勝った。相殺したかに思えたが、こんな仕掛けが施されているとは予想外だ。

ほんの一瞬とはいえ、驚きから鋼が硬直してしまったのは未熟であり不覚だった。あとほんの少し余裕があれば、素手を使わずとも再度の魔術放出で破片を蹴散らし、ついでに敵を攻撃出来る好機だったのに。

獣の意識は思考する。

まだ、甘い。

思わず動きを止めてしまったのは、まだ鋼の意識全てが戦闘本能に支配されていない事を意味している。これでは二年前の領域には程遠い。

自身の内にある魔力がうねりを上げる。

ならば、もっと近づけばいい。

「駄目ですコウっ!！」

戦友の少女の叫びに鋼ははっとなった。

横から飛び込んで来た馴染みの少女に気付けば抱き締められていた。

たとえ理性の全てを失った獣に成り下がろうとも、彼女を敵だとは間違える事はない。戦闘本能はあらゆる他者を警戒するが、共に戦った戦友達はその例外だ。触れた場所から伝わってくる心地よい体温と魔力は、絶対の味方の存在を強く感じさせ、今の状態の鋼であっても安らいだ気持ちにさせた。

「ル、ウ……」

「駄目です。あなたに傷を負わせたあの相手にやり返したい気持ちには、よく分かります。だから、私が代わりに戦いますから。これ以上戦わないで下さい。この部屋にいる全員を殺してしまいます」
燻^{くすぶ}っていた殺意や敵意が少しずつ萎む。それでも戦いで高揚していた精神は、容易に落ち着いてはくれないが。ある程度の理性と冷静さを、鋼は取り戻す事が出来た。

「いや、いい……。成り行きで戦いはしたが、多分、その男は敵じゃない……」

今の今まで敵と認識し戦っていた相手をそう評するのに、少しだけ抵抗を感じた。本能に引きずられた影響ははまだ色濃い。それを見て取った凜は氣遣わしげな表情をした後、鋼から体は離さずに首を巡らせて兜男の方を向いた。

「……事情は知りませんが、どんな事情であつても今は聞き入れる気はありません。この場から立ち去って頂けますか？」

やや硬質で高圧的な物言いだ。彼女もまた、鋼と本気の戦闘を行っていた男に対する敵意を抑え込んでいるのだろう。

今度は完全に剣を抜く気でないような、腰に手をかけた体勢で止まっていた兜男は考え込むように沈黙を返した。拒否の意思表示ではなく迷っているのだと雰囲気からなんとなく察せられた。

「それとも、次は私と戦ってみますか？」

問いかけと同時。

凜の正面、上空、周囲にある空間に、幾つもの光が生み出される。複数の魔術を同時に展開させ即時待機、それを短時間で数回連続で行う事で、一秒程度の時間で二十もの魔法陣が発生したのだ。

「この方を苦戦させるような相手に、私も手加減は出来ませんが」
多少魔術を学んだような者が無理やり複数展開したような、小さな規模のしょぼくれた魔法陣では無い。光の強さと陣の大きさを見れば、それぞれが単発で放つのに問題ない威力を備えているのは明白だった。

凜はこちらに体を密着させたままなので、鋼も魔法陣に囲まれた中央から光の海と化した室内を眺める事が出来たが、壮観の一言に尽きる。

彼女は戦友の中でも最も魔術に優れた少女だ。その圧倒的な才能の片鱗を目の当たりにし、兜男は息を呑んだようだった。腰にかけて手を離し、戦意を失った事を示す。

「……………大人しく、去るとしよう」

「はい。それではお帰り下さい」

顔も知らないこの男が、兜の奥でため息をついたのが鋼には見えたような気がした。

「全く、今日はなんて日だ……………」

こちらを刺激しないように、慎重な足取りで兜男は出口へと歩き出す。やはりあちらもかなり消耗していたのか、最初見た時と比べて精彩を欠いた動きに見えた。

「……………最後にこれだけはもう一度確認しておくぞ。お前達は確かに人質を救出しに来たのだな？ 俺が何も関わらずとも、人質は元いた場所に無事に帰されるのだな？」

「ああ、約束する。この組織とも話をつけたから、今後の安全も保障する」

「ならば、いい」

そんなやり取りを経て、兜男は部屋から出て行く。視界から消える直前、鋼は苦笑と共に謝っておいた。

「悪いな、正義の味方の出番を奪っちゃった」

「ふん」

鼻を鳴らし、こちらは振り返らずに軽く手を挙げ、今度こそ名も知らぬ男は立ち去った。

待機状態の魔法陣が解除され、室内は通常の状態へと戻る。

しばらくは誰も何も言わなかった。それぞれが把握している情報に違いはあれども、これでようやく一段落ついたというのがこの場の全員に共通する認識であるようだ。張り詰めていた緊張が解けて、気の抜けたような空気が訪れる。

「……ルウ？」

こちらに抱きついたまま弛緩していた凜に、鋼は気まずげに呼びかける。

彼女の体型はなんとというか人よりも凹凸が激しかったりするので、制服越しでも分かる自己主張の強い部分が当たっているし、そうではなくとも異性と密着したままの状態は色々と気恥ずかしい。脅威が去った事でようやく、この現状に対する自覚が生まれていた。

対して凜はまだ自覚が無いようで、きよとんとした顔で呼びかけた鋼を見上げる。

「……っ！？ す、すすすすいません！」

それがかなりの至近距離である事に気付き、今の状態にもようやく思い当たったらしい。ぼつと火が出たかのように顔を真っ赤にした凜が、慌てて鋼から離れた。

室内の他の全員が、なんだか白い目をこちらに向けている気がする。

なんともまあ、締まらない最後になってしまったが。とにかくこれで、面倒な問題は粗方片付いたと思いたい。一つ息をつき気持ちを切り替え、鋼はミオンの拘束具を解除しようと再び壊れた牢へと足を向ける。

かくして、闇ギルドと満月亭にまつわる一連の事件は幕を下ろしたのだった。

「コウの《魔槍》が相打ち、ですか？」

「ああ。なんか知らんが予想以上に頑丈でな、その赤い障壁。咄嗟に発動させたクセして貫通出来んかった」

校庭の片隅に座り、鋼は昨日戦った謎の兜男について話していた。聞き手の凜は信じられないと言わんばかりの、呆れと驚きが入り混じった表情だ。

「……本当に昨日のあの男、人間なんですか？」

「いや俺と張り合ったら即人間じゃねえって……」

熟練の戦士なら切り札の一つや二つ持っていておかしくないだろうと鋼は納得していたのだが、凜はまず相手の正体に疑問を持ったようだ。

「ですがコウの《魔槍》の障壁貫通力は普通じゃありません。『骨頭』の《障壁》すら割るんですよ？ それを人間が咄嗟に張った魔術で防ぐなど……」

彼女の言う『骨頭』とはルデス山脈に生息している 竜骨ガシラとかいう魔物の、鋼達の間で使われる呼び名である。

魔物の癖に《障壁》を使うそいつは、他にも魔力放出による急加速や魔力の砲弾のようなものを口から放つ特技を持っており、10メートル級の巨体もあいつてかなりの強敵だ。

先端を尖らせ杭の形状にする鋼の魔力放出はその敵の攻略のために編み出された技だった。

いかに強力な《障壁》といえど高密度の鋼の魔力を一点に集約してぶつけられれば、魔力の拒絶現象も手伝ってその部分に穴が空くのは順当な結果である。魔物の強大な魔力による《障壁》ですらそうなるのだから、出力的には数段劣るはずの人間の魔術があれを防

いだのはかなり凄い事なのだ。

「そりゃ工夫すりゃ色々やり様があるんだろう。お前だって銃の原理で物を撃ち出して風魔術の弱点の貫通力補ったりしてるじゃねえか。日向は《隐身》を幻覚みたいに使っしな。赤い障壁もどうやってか展開の速さと防御力を両立させてるっただけの話だろ」

「そんな良いところ取りの工夫があれば皆使ってると思うんですけど……」

「どうやら『兜男は人間じゃない』という予想は凜にとって根強いものらしい。いやまあ、その可能性も十分あり得るのが異世界の恐ろしいところである訳だが。」

「……っーかお前、普通に《魔槍》とか呼んでるが。ニールが前に『そんな魔術っぽい呼び方は認めん！』とかゴネて、あれの呼び方は魔力放出に落ち着かなかったか？」

「だってややこしいじゃないですか。魔力で殴るのも、杭の形にして障壁破るのも、足から放出して急加速するのも、全部『魔力放出』だなんて……。別に私達は正しく魔術かどうかなんてどうでも良かったので、皆ルデスにいた頃からこっちの呼び方使ってたよ。あの人が聞いていなければ」

「哀れニール……」

聞けば、皆というのは戦友の少女全員であるらしい。説明が面倒になるので、彼女達同士で鋼の技について話す時に別の呼び方を使っていたとか。魔力パンチは《魔砲》、魔力の杭は《魔槍》、魔力での加速はそのまま《加速》。一度その呼び名が定着しかけてニールがゴネだしたのを知っているので、一応鋼もそれぞれの呼び名を耳にした事はある。

「まあそっちの方が分かりやすいのは確かか」

「それよりも、コウ。まだどうして火傷を負ったのか聞いてませんよ?」

凜が話の続きを催促する。鋼の手の火傷の原因を凜が執拗に訊いてきたのが、そもそのこの会話の始まりだ。

「あー、それでだな。赤い障壁は貫通出来んかったが、相殺して砕きはしたんだ。ただその障壁、攻撃にも使えんのか俺の方に飛んできててな。砕いても破片がバラバラと来たもんで、手で払ったらこうなった」

「砕いたのに物理的に残ったんですか……？　しかも、高温だった」と

「ああ。あれなら大抵の攻撃には耐えるだろうから、本来は攻防一体で使うんだろう。敵の魔術をあれで防いでから、残った障壁をそのまま相手にぶつけて攻撃を返しつつ、ついでに熱の追加ダメージつてとこか」

「……それほどの魔術を瞬時に発動させられるなら、やっぱりあの兜男、人間では無いのでは？」

「いや、どうだろうな。あれの正体が現役の騎士とかなら、やっぱり人間なんじゃねえのか？　色々凄いのには戦闘のプロだからって理由で」

「……納得できません。たとえ騎士のエリートであっても、ただの人間にコウが苦戦させられるなんて……」

「いやどう考えても、鋼を苦戦させる人間なんて何人でもいるだろう。ちなみに日向や凜と本気で戦ったとしても、状況次第では普通に鋼は負けると思う。」

「日向もそうだが、お前ら俺の評価高過ぎたる……」

「そんな事無いと思いますけど……。ねえ、ヒナちゃん」

「ねー」

それまでろくに話にも加わらず、芝生でごろんと転がっていた日向が気の抜けた相槌を寄越した。昨日の反動か、今日はいつにも増してだらけきっている。まあ昨日の今日なので、本日の朝練は無しで構わないのだが。学園に毎朝不法侵入するのは鋼達の恒例となりつつあって、今日もいつものように集まっただけだ。

「……あの、ところでコウ。手の火傷を見せて頂けませんか？」

おずおずと、凜が問いかけてくる。

「どうせすぐに治るような傷だぞ？」

「それでも、です。治させて下さい。コウは滅多に怪我なんてしませんから、こんな時でないと使えませんし……」

「ん。じゃあ頼む」

鋼が手を差し出すと、なんだか嬉しそうな顔で凜は「はい」と頷きその手を取った。

その後。

兜男が立ち去り、リユンとついでにミオンを救出した鋼は、凜を連れて闇ギルドの本拠から脱出した。

遠巻きにこちらを眺める男達はいても、その進路に立ち塞がるうという輩は一人もいなかった。組織の顔役、つまり実質のトップであるらしいバートとオルタムが本拠の入り口まで同行し、鋼達が帰るのを黙って見過ごした点がやはり大きいのだろう。

やって来た時とは違い至極あっさりとした鋼達は脱出を果たし、貧民街の地区を出たところで先に離脱していた日向達五人とも合流し、

その足で無事、リユンを満月亭に送り届ける事が出来た。

母を既に亡くし、父子二人で切り盛りしている店なのだそうだ。

家族の再会が叶った場面を詳しく語るのは野暮というものだろう。とにかくまあ、闇ギルドの本拠に押し入るといって一連の騒動から一夜が明けていた。

近付いて来る気配と足音に気付き、気を抜いていた鋼は顔を上げた。

まだうつすらと朝靄あひやが残っているような時間帯だ。今までこのよ
うな早朝に校庭に人が来た事など無かったが、気まぐれに見回る警備員でもいるのかも知れないと目を凝らすと。霧の向こうにおぼろげながら人の姿が二つ確認できた。

これが教師や護衛官であればすぐさま退散するところだが、背格好からして大人ではない。

「というか見覚えのある生徒な気がしてならなかったので、逃げずに待つ事にした。」

「え？　なんで神谷君達がここにいるのよ？」

「どういう事だ、お前達の寮は学園の外だろう！？」

やって来たのは有坂とマルだった。それぞれ練習用の剣らしきものを手にしている。

「よお。また珍しい組み合わせだな」

「別に示し合わせて来たわけじゃないんだけどね。寮生活だと体が鈍る一方だから素振りでもしようと思ったら、おんなじ事考えてたマルケウス君とさつきそこでばったり会って」

有坂が分かりやすい説明をしてくれる。昨日まで鋼達の他に誰も来なかった校庭に、今日になって二人も来たのは恐らく偶然ではない。身近で起きた自らも首を突っ込んだ誘拐事件に、二人とも思うところがあったのだろう。

「考える事は一緒か。俺達も朝練にこの場所を使わせてもらってる」
「……そもそも学園って侵入者対策の魔法とかあったんじゃないの？」
「まあ、カミヤ君達の事だから平然と破ってきててももう驚かないけど……」

「ザルもいとこだぞ。多少腕の立つ魔術師なら問題なく侵入できる程度だな」

「多少腕の立つ魔術師に当然のように自分達も含めるのね……」

「いや、俺と日向は入れてない。ただこいつはそこの魔術師よりは相当優秀だ」

凜を指し示して言うとなんだか複雑な表情で有坂は頷いた。魔術なしの試合で苦戦させられた相手が、そもそも魔術の方が得意だという事に微妙な心情になったのだろう。

その凜は現在、極度の集中状態にあるのでこのやり取りにも全く気付いた様子が無い。

「んんっ、ごほんっ」

マルがわざとらしく咳払いをした。らしくなく、落ち着かなさげにきよどきよどと辺りに視線をやったりしている。

「なんだ？」

「マルケウス君は『それは一体何をやっているのだ！？ 朝から破廉恥な！』と言いたいのよ。……全くもう、朝から見せつけてくれるじゃない」

有坂の翻訳を聞いてようやく思い当たった。今の状況を言っているのだろう。

凜は鋼のすぐ傍の芝生に腰を下ろしていて、鋼の火傷を治療中だ。両手で抱え込むように鋼の手を取り、更に顔も近づけそこに額をくっつけている。何も耳に入らないほど目を閉じて集中しているのは、それだけ難易度の高い試みをしているからである。

「有坂はともかく、マルなら活性化の気配で魔術を使ってるって分かるだろう……」

「ま、魔術を使うにしてもそのような格好で発動する必要は……… 終わりました」

マルが言い辛そうに指摘するのをぶった切る形で、凜がぽつりと呟いて目を開ける。

顔を離して彼女が静かに見下ろした先、鋼の手からは火傷の跡が綺麗さっぱり消え去っていた。

「問題なく治療できたと思います」

「さすが。火傷くらいならもう跡形も無く治しやがるな」

ありがとだと告げて軽く頭をぽんぽんと撫でると、凜は目を細めて「えへへ」と控えめな笑顔を見せる。

そこへ再び横からマルが「ごほんっ！」と咳払いを入れてきて、存在に気付いていなかった凜は飛び上がった。驚いた。

「え、え！？ い、いつの間になんですか！？」

「ついさっきからよ。村井さん、あんまり集中してるものだから気付かなかったけど」

「有坂さんまで……」

「ねえ。ところで今の何？ 治療とか跡形も無く治すとか。RPGでお馴染みのあの魔法？」

「は、はい、そのようなものです……」

「ん？ 見られたらまずいものだったの？ ……ああ、いや、そういえば。村井さんって元々こういう性格だったかしら……」

おどおどした様子で答える凜に違和感があるのか、有坂が首を傾げる。《加護》が抜けた今日の凜は元来の人見知りする性格に戻っている。

「アールピージー、というのは一体何だ？」

「うーんとね。向こうの世界の娯楽というか、……ゲームって言うて通じるのかな？ そういうのがあって、その中によく、怪我をぱつと治したり出来る回復魔法っていう架空の魔術が出てくるの」

日向の解説を聞いたマルは妙に感心したようだった。

「どこにでもそういう発想はあるものだな。こちらの世界でも、怪我や病気をたちどころに治してしまう賢者などは空想の話によく出てくる定番のようなものだ。他にも単身で竜を討ち取る英雄や、天候さえも操ってしまう偉大な魔術師だとか。そういったあり得ない設定を盛り込んだ古い物語や戯曲がいくつもある」

「ルウちゃんが今やってたのはその治療の魔術だから、あり得なくはないけどね」

「ふん。僕を担ごうとしても無駄だぞ。他者への治療は魔術の難題の一つだ。成功させた魔術師は間違いなく歴史に残るような、古来より研究されてきた分野だからな」

日本人は勘違いしがちだが、魔術というものは何でも解決できる万能のツールというわけではない。優秀な魔術師を何人も集めて、条件を整えたとしても、不可能な事は案外多い。あくまでも魔力を利用した個人技術に過ぎないのだ。

個人の素質・適性により可能性には大きな幅が出るものの、魔力の性質や魔術のルールにはどうしても縛られる。最も有名な一例が

魔力の拒絶現象で、違う魔力同士は打ち消し合うために人は他の生物へ魔術で直接干渉する事が出来ない。攻撃魔術に火や風がよく利用されるのは、そういった現象に魔力を一旦置き換えてから敵にぶつける事で拒絶現象を回避するためだ。

他にも体から離れたり魔術に使われた魔力は徐々に分解され、魔素に戻ってしまうというのも制約の一つだ。これは魔力を別の現象や物質に置き換えたとしても同じで、だから超遠距離から魔術で相手を攻撃したり、罨のような魔術を設置して長時間残すというのは難しい。普通は途中で消えてしまうし、そうでなくとも威力は相当下がる。めいいっぱい魔力を注ぎ込めば多少は違っだろうが、魔素への分解は加速度的に進むのでやはり限界が存在する。

そういった不可能に思われている事象をいかにルールの裏を突いて実現させるか。それこそが、学者としての魔術師達が血道を上げて研究している大きなテーマの一つなのだった。

「治療とか回復の魔術ってそんなにあり得ないの？」
有坂がマルに訊く。

「あり得んな。現代医療では魔術で生み出した皮膚で傷口を上から塞いだり、《薬物生成》での投薬を術式の効果時間が切れる度に行う、というのが精々でな。そちらの世界の医療技術の方がずっと凄まじい。やはり魔術の治療での一番の問題点は、魔力の拒絶、で…」

…
「言っていて自分で気付いたらしいマルが、恐る恐るといった表情で鋼と凜に視線を送ってきた。

「……まさか」

「ん？ マルに言ったっけか？ 俺とこいつらの間じゃ魔力の拒絶が起きねえの」

「……昨日まけに聞いてる。もしか、本当に」

「ああ。マジで今、火傷してたのをルウに治してもらったとこだよ。もう驚き疲れてどのような顔をすればいいか分からない、という感じにマルは「そうか……」とだけ言って口を閉ざした。かつて二

ールに初めて見せた時と同じ反応だった。

「……まだ術式の研究途中で、『治癒』の魔術などとは呼べないものですけど。コウが怪我をする度にこの術式で治させてもらって、少しずつ改良を加えていってます。今は表面的な火傷程度なら治せるようになりました」

凜が加えて解説する。二年半前、谷を脱出しニールに出会って少し経った頃から彼女はこの術式の研究を始めた。

細胞を直接魔力でいじるといふ慎重さと繊細さが求められる作業だが、手探りで少しずつ試すうち、凜はその感覚を自分の物にしつつあった。それから二年のブランクがあったので実は少し心配していたのだが、全くの杞憂だったようだ。

「……もし大怪我すら治せるようになったとしたら、魔学史に名が残るのではないか？」

「理論上なら、時間さえかければひどい怪我でも治せるとは思いますが。コウは大怪我などしないものですから試した事が無いんです。実際やってみればまた問題点が出てくるでしょうし……」

ちなみに大怪我とは言わないまでも、自分でざっくりと体を傷付けて術式の実験台になるというアイデアをかつて鋼は出した事があるが、彼女が強硬に反対したので実行されなかった。鋼が大怪我を負わない限りこの術式は永遠に完成しない可能性がある。

「ていうかマル君。ルウちゃんのこれは鋼専用術式だから、歴史に名前は残らないんじゃないかな」

「むう、そうか。個人のための専用術式をわざわざ開発するというのも、それはそれで何やら言いたい事がある気がするが……。それよりもカガミ。お前も僕をその呼び方で呼ぶのか……？」

マルの後半の疑問を日向はにこにこ笑って黙殺した。

「それにしても。神谷君達が常識外れなのはもう慣れたけど、まさか朝練なんてやってたとはねえ……」

有坂は有坂で、何故かしみじみと嘆息していた。

「別にそっちは常識外れって訳じゃないと思うが……。有坂だって

そのつもりでここに来たんだろ？」

「そうなんだけどね。ほら、昨日私って全然役立たずだったじゃない？ それでようやく危機感抱いて、寮をこっそり抜け出してでも修行しないとなあと思って朝から来てみれば、既に神谷君達は毎日訓練してたわけで。魔術とかで負けてても仕方ないって思えるけど、意識の持ちようからして負けてたのは結構悔しいものなのよ」

「まあ、有坂が負けず嫌いなのはなんとなく分かるが」

「というわけで！」

声を張り上げ、有坂は練習用の剣をこちらに差し出した。

「三人の誰でもいいんだけど、私の訓練に付き合ってくれない？」

「む。それなら僕も頼みたい。恥ずかしながら、昨日の事で己の未熟を思い知ったからな。……カミヤ達が来なければどうなっていたか。僕にも稽古をつけてもらえないか？」

省吾や有坂を巻き込んだ反省からか、殊勝な態度でそこにマルも加わる。

学園の校庭で密やかに行う訓練のメンバーが、三人から五人に増えた瞬間であった。

昨日も来たばかりの教官の準備室に、鋼達七人の姿があつた。

「さて、お前達……」

シンドが迫力と凄みをその眼光に寄せ、低い声音で問いかけてくる。

「朝一番にここに呼ばれた理由は分かっているな？」

その視線の鋭さはもはや睨んでいると表現しても間違ではない。彼を怒らせる事をした自覚が一応鋼にもあるので、なんともばつの悪い気持ちを味わう。顔にはそれを出さないが。

「ええと、なんですか？ 正直、分からないんですけど……」

戸惑つたように鋼が答えれば、『しらばつくれるな』と言いたげな目がこちらに向けられる。ますます困惑したように演じて見せると、シンドも苛立ちをにじませて鋼の目をじつと覗き込んでくる。

今こそ魔物相手のサバイバル生活で鍛えられた度胸と凶太さが試される時である。本当に心当たりは無いとばかりに鋼は全力でしらばつくれた。

「あの、教官？」

「……昨日相談された誘拐事件、解決したそうだ」

「らしいですね！ 今朝登校する前に店に様子を見に行つて、俺達も知つたんです。誰が助けたのか知りませんが本当に良かった……」
情感溢れる安堵のため息さえ鋼が漏らしてみせると、いくらなんでもわざとらし過ぎないかという視線がマルや有坂の立っている辺りから飛んできた気がした。もちろん気にしないが。

鋼の他に呼び出されている六人は、日向・凜・省吾・有坂・片平・マルである。昨日の兜男がシンドに情報を伝えたにしても、あの男に直接向き合つた鋼と凜以外も呼ばれている。昨日この七人は寮の

門限までに帰るのが間に合わなかった。それを知ったシンドが、事件解決のタイミングから事実を推測したのだからと思われた。

「お前達は昨日、放課後に出かけていて門限までに帰らなかったぞうだな？」

「ええ、まあ。寮監から聞いたんすか？ このメンバーで親睦を深めようと出かけてたんですが、ついつい時間を忘れてしまつて……」

「ほお？ あんな事件の最中だったというのに、お前達は暢気のんきに街を散策していたと？」

「教官に余計な事はするなと釘を差されてましたからね。だからといって放課後真っ直ぐに寮に帰つても鬱屈した気分になりそうだったので、気分を入れ替えようと俺が皆を誘つたんです。まあ確かにあの店の前を通つて様子を窺つたりもしましたし、そういう思惑があつたのも否定しませんが」

既にその設定で、簡単にだが全員で口裏合わせも済ませている。

マルは嘘をつく事にかなり抵抗があつたようだが言葉を尽くして丸め込んである。それに多少ボロが出ようと、はっきりした証拠でも無い限りはとぼけられるはずだという魂胆であつた。

「……昨日、貧民街に近づいたか？」

「どこですか、それ？ 変な場所には行ってないので、多分そこにも近づかなかつたと思いますが」

「ほお。それはそれは。そこで昨日、騎士学校の生徒の目撃証言があるんだが？」

兜男からの情報に違いない。それだつて確たる証拠という訳でも無く、実際に見ていないシンドは話を聞いてそれが綱だと推定しただけだろう。

「えっ。そう言われても、ほんとに心当たりなんて無いんですが……。誰か別の生徒か、生徒に成りすました誰かじゃないんすか？」

「……本当に、お前達ではないと？ カミヤに似た特徴の男子生徒の話も出ている。もしそれがお前達なら、正直に白状するなら今の内だぞ？」

「いやあ、単に似てるか、見間違いでしょう。俺達じゃないです。なんなら目撃者の人をここに呼んでくれたって構いません」

「……」
鋼の提案に苦虫を噛み潰したような顔をするシッド。そりゃそうだろう。兜男も鋼達と同じく、あの時あの場所にはいけない人物だったはずだ。あの男が言っていた顔を隠さないといけない事情とやらはそれしか考えられない。

この場にあの男を呼んで鋼が嘘をついていると証明するのは、向こうにとつても望ましい展開ではないのだ。

「ガンサリット。本当か？ お前達は事件解決に関係していないと、断言できるのだな？」

鋼が相手では埒が明かないと踏んだのか、次に矛先が向けられたのはマルだった。

「は……、は、い。もちろんです、教官」

少し焦ったような、若干不自然な声音だったもののマルはきつぱりと疑いを否定してみせた。正義感の強いこの少年の事、教官に問い詰められるとあっさり白状してしまう危惧があったが、この通り抜かりは無い。

嘘をつく事に対し、鋼は事前にマルをこういう風に説得していた。鋼達が独断での人質救出を認めてしまえば、たとえそれが正義の行いであろうとシッド教官はその立場から、こちらに何らかの処分を下さなければいけなくなる。重要なのはシッドが事件の真偽を知っているかどうかではなく、鋼達がそれを認めるかどうかだ。こちらが認めない限り、シッドも処分を下さなくて済む。彼は正義感が強い立派な教官なので、正義を行った生徒に処分を言い渡すのは辛いだろう。

そこらに『正義』という言葉を散りばめつつ、この嘘は教官のためにつく嘘だと言いかせると最終的には頑固なマルも聞き分けてくれたのだった。多少騙しているような気分にもなったが、犯罪行為に手を染めたわけでも無いのだし許される詭弁だろう。馬鹿正直

に認めて損をするなんてそれこそ馬鹿らしい。

「……」

やや意外そうな顔をした後、シンドは次の標的を見定めるかのよう
に他のメンバーを見渡した。省吾はいつもの通りのんびりという
か、平然とした態度だった。有坂はそれなりに真面目な顔で立って
いるが教官の視線に小揺るぎもしない。鋼から余計なボロは出すな
と言いついて聞かせてある日向と凜は言うに及ばず。片平だけは居心地悪
そうに身じろぎしたものの、それでも教官から目を逸らさなかった。
実は、この場を誤魔化しきれたなら凜から片平に魔術を教えてや
るように頼んでやろうと裏取引をしており、今回の件に限り片平は
メンバーの中でも鉄壁だ。追及し易そうに見えてその実、片平はシ
ンドに一切の情報を漏らしはしないだろう。

様子を窺うように片平をじつと見つめたシンドは、普段の気弱な
性格の彼女に似合わない強情さを感じ取ったかそのまま諦めたよう
に視線を外す。鋼は一気に畳み掛けた。

「状況だけ見ると俺達が怪しまれるのは分かります。でも信じて下
さい教官、俺達じゃありません。目撃証言も見間違いか、学校の生
徒の仕業に見せかけようと何者かが変装してたんじゃ？」

「……あくまでもお前はそう主張するのだな？」

「もちろん。俺達じゃないのは事実ですから。それに誘拐された子
を助けたいとはそりゃ思っていました。いくらなんでも誘拐犯達の
元に直接乗り込むなんてのは……。俺も他の奴らも、そんな命知ら
ずじゃないですよ」

マルや有坂が「うっ……」とでも言いたげな顔をしたが無視。多
分シンドも気付いていたがいちいち指摘する事でもない。

「……。話は分かった。誤解から時間を取らせたようだな。もう行
つていいぞ、お前達」

勝った。追及はかわせたようだ。

呼び出されたそれぞれが安堵から一息ついたところに、シンドの
言葉が続いた。

「ただし、カミヤは残れ。個人的な話がある」

当然、別の用件で留まらせたわけではなかった。

心配するような視線をカミヤに向けつつ、六人が退室していった後。準備室にはシンドとカミヤの二人だけが残される。

「まだるっこしい物言いはなしだ」

この少年にはそれで通じるはずだと、シンドはそう前置きして言った。

「……何故待てなかった？」

低い声でそれだけを問うと、先程からの白々しい演技とは違いカミヤも真面目な表情になった。

ぴんと空気が張り詰める中、カミヤはどこか自嘲するように答えを返した。

「結局は……、こつちから頼っておいて、教官を完全には信用できなかったって事でしょうね。教官は解決のために手を尽くしてくれる人だとは思いつつも、それで何もかもが上手く解決するかは別問題なわけで」

「……自分の方が、何もかも上手く解決できる自信があったと？」

「まあ、言葉を飾らずに言っ飛ばせばそういう事かも知れませんが、ちよつとした偶然で相手の組織の事を知っちゃまったんですよ。で、こりゃ厄介な相手だし、つい手を出したくなつたと言いますか……」

「……」
ここは普通なら、なんて無謀な事をしたのだと教師としては叱る場面だ。しかしシンドは、デイン・グレイルから彼が現場で見聞きした状況を既に聞き及んでいた。この少年は本当に犯罪組織から一人助けだせる実力がある。だからカミヤの不遜な台詞にも、安易に自信過剰だと断ずる事は出来ない。

「……厄介な相手だと分かっていたなら。どうして他に何人も巻き込んだ」

「それを言われると痛いんですが。俺も最初は、慣れてないような奴は置いてく気だったんです。それがまあ、色々あって……」

つまり、全てがこの少年の主導というわけではなく、それぞれの生徒達が自主的に参加した救出劇だったというわけか。

あまりにも多い問題児の数に、今にも頭痛がしてきそうだ。

「……お前が。結局は全て自分達でやってしまうなら。頼られた俺は一体何なんだ……!？」

問題児に頼られたと奮起して、警備隊の知り合いを当たり、騎士の先輩を呼び出して。今回の一件ではシシドはとんだ道化だった。

それなら最初から頼るなという感情的な言葉だけは、なんとかシシドは呑み込んだ。それは教師が言っただけの事ではないからだ。それでもこの、腹に据えかねる苛立ちの感情が消えて無くなる訳でもない。

対してカミヤは深く頭を下げた。

「本当に、すみません。頼っておいて完全に信じ切れなかった俺が身勝手でした」

それだけ言っただけで頭を上げようとしな。それでシシドもそれ以上、感情に任せた真似は出来なかった。

「……顔を上げてくれ。俺も大人気ない所を見せた」
おこなげ

「いえ。俺も少し、調子に乗ってたんです。多少腕の立つ騎士候補に解決出来て、本職の人に解決出来ないはずがないのに。教官に任せきりにするのは荷が重いかもと、悔ってました」

「……」
思いのほか反省の色濃いカミヤに、シシドは黙り込んだ。

非常に複雑な心境であった。本当の事を言えば、昨日の一件はシシド個人には荷が重い事件と言えたからだ。先輩騎士、ディーナがパルミナに滞在していたのはこの上なく僥倖ウレシキハズレだったのだ。

しかし、ここで素直に荷が重い事件だと認めるのは……っ！

「それで、教官にとって荷が重い事件だと思つた癖に、自分達では解決出来ると自惚れて……。確かにそう苦勞も無かつたですが、樂勝なのは本職の騎士にとつても同じだと気付かず、要らぬ世話を焼きました。待つていれば解決した事件だというのに」

「……」

そう苦勞も無かつたとか、樂勝だとか、なにやらとんでもない事をさらつと言われ、シシドの背を冷や汗が伝う。

「ま、まあ、軽率な判断だつたとは言えるが、自分で問題を解決しようという、その心意気は悪いものでもない」

「そう言つてもらえると助かります。この際告白しますが、俺はこつちの世界の常識に疎いんです。以前こつちに來た時は一度も人里に寄り付かなかつたもんで、騎士がどれくらい強いのかとか、そういうのがさっぱりで。騎士といつても、ルデスで生き残つた俺達よりは弱いんじゃないかと昨日までは疑つてました。すみません」

いや、それは疑いではなく事実だ。とは今更言えなかつた。

ディーンがやたらと強い少年、恐らくはこのカミヤと、成り行き上拳を交えたのもシシドは聞いている。そのディーンが本職の騎士で、シシドが差し向けた人質救出のための刺客だとカミヤも勘付いているのだらう。

それで本職の騎士の強さを知つたカミヤが、悔つていた事をこうして謝つていようなのだが……。

もしかしなくてもカミヤは、ディーンが騎士の標準的な強さだと勘違いしているのではなからうか。

シシドはぼんやりと、事の顛末を知らせるためにやつて來たディーンとの昨夜の会話を思い返していた。

パルミナ騎士教育学園の教員用宿舎。

マイトック＝シシドに割り当てられている彼の私室に、二人の男の姿があつた。

「何から言えばいいか……。事件は解決したんだが、俺の出番は無かった」

「はい？」

解決という言葉に安堵しながらも、尊敬する先輩騎士の言っている意味が分からずシシドは首を傾げた。

「おう、そうだ。先に聞いときたいんだが、お前が言ってた例の問題児、どういう奴だ？ 見た目とか」

もうその時点で嫌な予感をひしひし感じつつ、カミヤの外見や印象をシシドは説明していく。聞いたディーンは「やっぱりそいつかとため息をついた。

「んじゃあ、今日の事を最初から説明してくが。色々ツテ使って、誘拐犯の闇ギルド本拠地を突き止めて、侵入してきたんだが……。誘拐犯のアジトは既に混乱状態でな。そこらに傷ついた男が倒れてて介抱されてたり、慌しく走ってる奴が何人もいたりで」

語られたのは初っ端からの意外な展開だった。

「しょぼいチンピラなんざ何人かかってこようがたいした障害にはならねえし、元々正面から突破するつもりだったんだが。俺を迎え撃つどころじゃない様子だった。なんか知らんがこりや絶好の機会だと思つて、その辺の奴を締め上げて人質の場所を聞き出して、すぐそこへ向かったんだ。で、そこに先客がいた」

「先客……？ まさか」

「多分お前が考えてる通り。騎士学校の制服着た少年がいてな。しかも聞いてみれば闇ギルドと和解して、堂々と人質を連れ帰ろうとしてるところだった」

「ま、待つてください、なんですかその状況!？」

「まあ、信じられねえのは分かるよ。推測になるが、どうも俺がやるつもりだった事を先にやってみたいでな。正面から押し入って暴れ回って、ついに相手にも人質を連れ帰るのを認めさせたって感じの状況だったんだと思う」

「そんな無茶苦茶が出来るのはディーン先輩だけです！」

「ところがそうでもない。その少年にも出来る筈だ」

デインはあくまで真顔で、冗談の類を言っているようには見えなかった。

「俺はその少年を見つけた時、制服からもしやお前の言っていた問題児かと推測した。まあその真偽はどうあれ、こんな少年を置いてくのはまずかろうと思っただけ。人質と一緒に連れ帰って、お前の元に届けようとしたんだが……。出来なかった」

「それはまた、一体どういう理由で？」

「どうい理由も何も、そのままの意味だ。出来なかったんだよ。抵抗されてな」

「抵抗されたくらいで諦めて、置いてきたんですか……!?!」

「だからっ。そのままの意味で受け取ってくれよ！ 嫌がられたから連れてくのをやめたとか、そんな程度の話をしてるんじゃないかな。力づくで取り押さえようにも、あんまりに強かったんで無理だった」

今度こそシンドはその思考ごと硬直した。何らかの理由でデインが連れて来られなかったとして、それはシンドが検討すらしなかった一番あり得ない可能性だったからだ。

「言つとくが、中途半端に強くて下手すると怪我させそうだから諦めた、とかでもねえぞ。もちろん剣は抜かなかったが、成り行き上本当に全力でやり合った。なんなんだ、あの少年は？ 全く手加減なんてしなかったが、俺と互角だったぞ？」

「……。いや。いやいや、嘘でしょう？ ちよつとくらい、先輩も手加減したでしょう？」

「嘘なんかつく意味ないだろうが。手加減どころか《紅蓮壁^{くれんへき}》使わされたからな。あれ使わんと負けてた」

「いや何やってるんですか先輩!? 本気過ぎでしょう!? 成り行き上とか言ってますけど殺し合いでもしてたんですか!?!」

この国ではデイン「グレイル」の名はかなり知れ渡っているが、彼の切り札である『紅蓮』の名を冠する複数の術式も、知っている

人は知っている程度には有名だ。《紅蓮壁》はディーンが独自に開発した個人魔術の一つで、彼の他に使い手はいないとされている。と、いうか。本当に信じられなかった。この先輩騎士に切り札を切らせるほど追い詰めるなんて事は、騎士候補の剣術指南を任されているシンドでさえ恐らくは無理だ。それを教え子である騎士候補が成し遂げるなど、もはや笑い話にもならない。

何せこの人、ディーン・グレイルはセイラン王国騎士団の中でも有事の際には戦場の最前線を任される牙狼隊の副隊長を務めるほどの人物なのだ。王国の騎士全体で見ても五指に入る程の実力者である。

「まあ、マイト。お前には同情する」

哀れみの含まれた声で、ディーンはシンドの愛称を呼んだ。

「騎士団の副隊長と互角でやり合えるような生徒に剣を教えなきゃならんとか、俺なら絶対嫌だ」

「俺も嫌ですよ！ というか、先輩と互角というのが未だに俺は信じ切れないんですけど！ それ俺よりも明らかに強いじゃないですか!？」

「いやあ、言いたくないが……。その少年、お前よりも強いぞ。得意なのは格闘で、剣術が苦手というならまあ、教える意味はあるだろうが……」

とにかくこれ以上この話題を続けるのは精神衛生上よくないと思っただので、シンドは強引に話を戻す事にした。

「そ、それで、どうなっただんです？ 手強くて連れ帰れなかったのなら、先輩から引き下がったんですか？」

「ああ、終盤はそのカミヤ？ とかいう少年も、かなり本気になっててな。そいつの切り札らしい凄まじい魔術が連続して飛んでくるし、途中で少年の仲間らしい制服姿の女子生徒も乱入してくるしで、撤退するしか無かった」

ディーンに凄まじいと言わしめる魔術とやらも非常に気になったが。それより訊かねばならない部分をシンドは優先した。

「その女子生徒の外見を教えてください」

そうしてデインから聞き出した女子生徒の特徴は、カミヤとよく共に行動しているムライの姿をシンドに想起させた。

「……そちらの女子の方も、心当たりがあります」

「そうか……。ほんとにお前の所の騎士候補、どうなってるんだ？ そいつも相当やばかったぞ。現時点で宮廷魔術師に採用されてもおかしくないような使い手だった」

「……。そうですか……」

シンドはもう、驚くのも深く考えるのもやめる事にした。

その二人はルデス山脈で一年間生き延びたらしい迷い子の日本人だと教えると、正直なところ半信半疑だったシンドとは違い、むしろデインは深く納得したようだった。

その晩、デインは最後に「まあ、あの問題児は俺でも手に負えないだろうし、……お前もめげずに、頑張れよ？」というなんとも言えない励ましを残して帰って行った。

翌朝、裏付けを取ろうと朝早くから二つの寮を訪ねたシンドは、寮監から事件当日、門限を破った生徒が七人もいた事を知らされる。少しばかり多いこの問題児達に、これから先何度悩まされるのだろう。想像したシンドは春先から暗澹とした気持ちになったのだった。

「それじゃ、色々は無事に終わった事を祝して！」

「乾杯！」

日向が音頭を取り、何人もの声が続いて唱和する。

中身は酒ではなくジュースだが、それぞれの杯がぶつかり合い打ち鳴らされた。

シシドの呼び出しも乗り切り、その日の昼間である。満月亭に集合した鋼達七人は用意された料理を前に乾杯していた。店を営む親子からせめてものささやかなお礼として、昼食をご馳走させて欲しいと提案があったのだ。現在店は貸し切り状態となっており、宴会らしきものが開催されている。

「む、これでいいのか？」

このような砕けた場で乾杯などした事がないというマルが、見よう見まねで木のコップをぶつけに行く。

ちなみにマルの外出時、原則的に同行する護衛官のターレイは今日も一応この場に来ているが、マルからは離れ給仕役に徹していた。リユンや店主に恐縮されながらも二人を手伝っている。

マルによると昨日寮に帰った直後に彼に見つかり、外で何をやっていて門限に間に合わなかったのか即座に看破された挙句、きつい説教を受けたと聞いているのだが。マル本人にも鋼達に対しても、彼の態度は特に不自然ではなく昨日以前と同じように見えた。デキる執事というのは感情を表に出さず、きっちりと区別して仕事に持ち込まないのだろう。実際腹の底ではこちらの事を『坊ちゃんに悪影響を与える悪い友人』くらいに思っているもおかしくない訳で、あまり本音は知りたくないと思つて鋼は思う。

「これが夜で、寮に門限が無けりや酒でも持ってきたんだがな」

「あはは、それいいわね！ マル君が認めなさそうだけどね」

「アリサカ、お前まで僕の事をその呼び方で……」

マルの控えめな抗議の声は誰もが無かったものとして扱った。

「有坂ちゃん、こっちの国は未成年の飲酒は禁止されてないで？」

「え、そうなの!？」

「わいが落ちたトリルもそうやったし、ソリオンやったらほとんどどの国でもそうちゃうかな。法律でわざわざアレコレ定めてないんよ。酒も煙草も自己責任やな」

「それじゃあ私、こっちじゃ堂々と日本酒飲んでいいのね!？」

「おい日本じゃ飲んでたのかよ。しかもチヨイスが中学生の趣味じ

やねえ……」

物凄くいい笑顔でいきいきと訊ね返した有坂に鋼が反射的に突っ込んだ。

「も、もちろん飲んだ事なんてないわよ？」

「嘘くせえ……」

まあ、それはともかく。

酒など無くても学生がこれだけ集まれば、騒がしくなるのは当然なわけで。わいわいと七人は好き勝手な事を言いながら料理をつまむ。並んだ料理はどれも手が込んでいて、腕によりをかけて作ってくれたのだとよく分かる品々だった。日本にいた頃料理が趣味の一つだった凜は何やら刺激されたようで、いくつかの料理の作り方を是非教えて欲しいとリユンに頼みに行っていた。

授業のスケジュールにも丁度よく、今日は昼休みが長い日だ。休み時間いっぱいまで鋼達はここで過ごすつもりである。

そのうち、厨房での手伝いが終わったらしいリユンが鋼達の元へとやって来た。

「改めて御礼を言います。本当に皆さん、助けてくれてありがとうございます。ございました」

店員モードなのか敬語で、リユンは深く頭を下げた。すぐにリユンの父親、満月亭の店主も厨房の方からやって来て何度も感謝の気持ち言葉をしてくれる。

気持ちは分からないでもないが、昨日もこっちが恐縮した程繰り返し何度も礼を言われている。

その時マルは律儀にも「自分は役立たずで何も出来なかったのが、礼ならこのカミヤ達三人に」と自分から言い出したりしたのだが、助けようとして犯罪組織にまで乗り込んできてくれたのには変わらないと、やはり何度も頭を下げられていた。

昨日はそういう経緯があったので、今日は早々に手を打ちこちらからも言葉を重ねてなんとか頭を上げてもらった。むずがゆいと感じ

じていたのは同じなのかマルや他のメンバー達も率先して説得に回ってくれたので、不毛な恐縮合戦は短時間で終了した。

「あ。ちよつと待つてくれる？」

敬語をやめてもらい、普通の喋り方になったリユンがそう言つてこの場を離れる。厨房や居住スペースへと続く通路から密やかに顔を覗かせていた少女に気付いたのだろう。

離れた位置から店内の様子をちらちら見ていた獣人の少女が、リユンによって引っぱり出されてくる。

「ミオンちゃん、今日こそちゃんとお礼言つんでしよう？　ほらほら」

「リユンさん、あのっ、まだ心の準備が！」

連れて来られた狐耳と尻尾を持つ少女が鋼を前にした途端びくうと体を強張らせた。その瞬間尻尾の毛が逆立ったくらいであった。

どうもこの狐娘は救出の際に脅しつけたのが原因か、鋼に苦手意識を抱いているらしかった。もしくは単に怖がっているのか。昨日もずっとそのような様子だったので、錠を壊して以降は鋼からは関わらず話しかけず、彼女についてはリユンに一任していた。詳しい事は知らないが身寄りが無いのか、昨晚はこの店に泊まらせてもらったようだ。

「あの！　た、た……。助けられて、ありがとうございました！」
ミオンは口をぱくぱくさせてもったかと思えば、大きな声で礼を言つて頭をがばつと下げる。もはやこのまま土下座に移行しても違和感が無いほどの勢いだった。見るからにテンパっている。

そのまま頭を上げないどころか一切の動きを見せず硬直してしまつたので、さすがに鋼が声をかけようとした矢先。いきなり電源の入ったロボットみたいな拳動で彼女は飛び上がり、「すみませんすみません！」とか喚きながら素早く撤退して行った。もはや何に對してのすいませんなのか、彼女自身も分かっていないのではないだろうか。

「いや、まあ……。ちゃんと礼は聞いたし、他は気にしない方向で

いいか」

「ごめんねカミヤ君。やっぱり目の前で素手で鉄格子を引き裂いたのがよっぽど衝撃的だったのか、今もカミヤ君を前にすると異様に緊張するみたいで」

リユンが代わりに軽く謝る。背後では省吾達が「え、素手で……？」、「鉄格子を……」とかひそひそ囁きあっていたが、それも気にしない方向で行く。

「あ、そうそう。ミオンちゃん、うちで住み込みで働いてもらう事になったの」

「へえ。……あいつ、帰るとこ無いのか？」

「うん。難民だって」

そういえば、ミオンには精霊憑きだという疑いも残っていたんだと今更ながら鋼は思い出す。

すっかり失念していたので彼女の電流体質についてはまだ日向や凜にも話していない。だがリユンはその時見ていて知っているはずなので、それを承知の上で満月亭で引き取ると決めたのだろう。ならば鋼がとやかく言うものでもない。

ちなみにミオンがこの店で雇われると聞いて一番喜んだのは片平だった。異世界らしいもの全般に憧れを抱く彼女は当然獣人という種族もその対象らしく、昨日もミオンの耳と尻尾を見て「狐っ子ですか!!」と目の色を変えて喜んでいたくらいだ。獣人というのはこちらの世界ではやや肩身が狭い種族と聞いているが、偏見の無い日本人の出入りが多いこの職場はミオンにとって悪くない環境と言えるだろう。

「何度か顔を合わせてたらミオンちゃんもさすがにカミヤ君に慣れてくると思うし、それまではさつきみたいな事があっても気を悪くしないであげてね？ 昨日もあの子、カミヤ君にちゃんとお礼言えてないって悩んでいたの」

「まあ、怖がらせるような事しちまったのも確かだしな。別にあんな程度で気を悪くしたりはしねえから安心しろって後でそっちから

伝えといてくれるか？」

「分かったわ」

リユンは快く頷いたが、その後ろでは再びミオンがこそつと通路から顔を出しており狐耳をびくびくさせていた。鋼の言葉は直接伝わったようだ。目が合った途端また通路の向こうに引っ込んでしまったが。

その怯えた小動物じみたミオンの挙措を片平も目撃したらしく、「……持って帰りたい」とか不穏な呟きが小声で発せられたのだが、鋼は努めて聞かなかつた事にした。

何はともあれ。

ようやくここからだ、鋼は密かに決意を新たにしていた。

無茶をやらかす友人ができ、行きつけの店ができ、新たな環境にもそろそろ慣れてきた。多少の波乱はあったものの、周りをうるちよろしていた問題も無事解決した。これ以上ないほどの異世界生活のスタートだと言えるだろう。

もうそろそろ、己の目的のために動き始めていい頃合だ。

これから二年は学生という立場に縛られ、自由には動けないが。この期間を全て勉強と修行だけに費やすつもりはない。

いまだ再会が叶っていない最後の戦友の少女。『彼女』を探すための、打てるだけの布石をこの二年間の内に打っておきたい。

絶対に見つけてみせる。たとえ自ら失踪したのだとしても。

改めて鋼は、そう己に誓った。

幼少のみぎりより、セイラン王国第二王女、ヒータトネットゥエルニア・セイリアス殿下は病弱であらせられる。

王家かかりつけの医師団によって原因ははっきりしている。呼吸器の大病を患っておられるのだ。

その病状は少しの運動がお体に障るほどで、月日を経ても回復の兆しは見られない。それどころか伏せっている時間は徐々に増えつつあった。これまで小康状態を保っていた肺の病の進行が、殿下の御年おいたわが十を過ぎた頃から早まってきている。

御勞おいたわしい。

そして己の無力が腹立たしい。病に対し、剣と騎士の誓いは余りに無意味であった。

殿下の御命を守れずして、何のための近衛か！

ヴェルニア殿下のご病気は難しいものではあるが、不治というわけでは無い。手立てが残されていないわけでは無いのだ。

だから。

私 王国騎士団飛燕隊、ヴェルニア殿下専属分隊長、カシユヴァーニル・ルイツは決断し、自ら総帥閣下に上申した。

ある任務を授けて欲しいと。

「突進が来るぞ！ 散開しろ！」

カシユヴァーの指示を受け隊員達が素早く散らばる。

騎士の集団を蹴散らそうとしていた 陸亜竜 はすかさず目標を

一人に定め直し、改めて突撃を敢行する。

四足歩行の魔物に相応しく、恐るべき突進速度だ。たとえ肉体を魔術で強化しその上から鎧で覆ったとしても直撃を受ければ死は免れまい。迫り来る巨体はちっぽけな人間にとつて『死』そのものだ。だからといって、それを前にして恐怖に竦^{すく}み、死を待っただけの弱卒はここには一人もいない。

「援護しろおっ！！」

カシユヴァーが号令をかけるまでも無く、狙われた騎士と周囲の騎士達は既に魔術の準備を終えていた。

まず狙われている一人が《障壁》を目前に展開し、その横や斜め後方に陣取る他の騎士数人が《圧風》を発動させる。

風を何発もぶつけられ亜竜の突進の勢いが僅かに減衰した隙に、狙われていた騎士は《障壁》を置き土産に、足を全力で強化して横っ飛びに退避する。

直前まで引き付けての回避だが、亜竜はそれにさえも反応し進路を曲げようとした。そこで《障壁》にぶち当たるが、構わずに砕きながら魔物は進む。全くもって呆れた突進力だった。

だが風と壁、二重の障害でさすがに目に見えて速度が落ちている。いかに 陸亜竜 の突撃といえど、狙われた騎士は余裕をもって回避を成功させた。風を唸らせながら巨体が直前まで彼のいた地点を通り過ぎていく。

陸亜竜。

このルデスの地が正式名称よりも『亜竜山脈』と通名で呼ばれ恐れられているのは、ここが『亜竜』どもの住み処だからである。そう一括りにされて呼ばれている強大な魔物がこの地には数種類生息しており、その内の一つが今カシユヴァー達が戦っているこの魔物だ。

竜に似て竜でないもの。竜もどき。それが亜竜だ。もつとも本物の竜など半分伝説上の存在であり、実態も生態も全く知られていないものだから、人が竜と聞いて思い浮かべる魔物の姿はむしろこち

らが一般的だろう。

陸亜竜 は、ごつごつとした岩のような鱗で覆われた巨大過ぎる蜥蜴とかけのような姿をしている。突進力に優れるが強靭な牙や鉤爪も持つっており、そちらも要注意だ。知能もそこまで悪くない上、体表は硬くて攻撃が通りづらい。更には炎まで吐くときている。人間にとつて厄介な要素を全て盛り込んだような、うんざりする程優秀な生物だ。

「魔術師、頼む！」

攻撃を避けられ咄嗟に減速した 陸亜竜 に、味方の宮廷魔術師三人による魔術攻撃が襲い掛かる。《穿風》が岩の鱗を切り裂き、《火矢》と《火炎》がその傷口ごと焼き炙り、普通のものより大きな《魔弾》が顔に叩き込まれ怯ませる。

戦場で活躍する事を視野に入れて国に召し抱えられる宮廷魔術師という人種は、大抵は火力の高さを『売り』としている。それが十全に生かせない現在の状況をカシユヴァーは少しだけ勿体なく感じた。魔術師達はわざわざ魔術の威力を抑えて戦っている。何度この山脈で魔物と交戦するか分からないので、魔力は出来得る限り温存しなければいけないからだ。

結果、本職の魔術師といえどもその攻撃では決定打に成りえない。しかしそれで十分だ。魔術の一斉攻撃は、負傷を与え大きく怯ませる事には成功していた。

「総員かかれえっ！！」

カシユヴァーは叫びを上げながら、いの一に苦鳴をあげる。陸亜竜 へと斬り込んでいく。この好機を逃すわけにいかないのは一目瞭然で、命令されるまでもなく部下達も即座に続く。

陸亜竜 は愚かではない。どの個人が魔術で攻撃してきたか判断するくらい知能があると、カシユヴァーは事前の下調べで聞き及んでいる。後方で支援する魔術師を先に片付けよう、程度の思考は難なくこなす。そしてこの巨体を《障壁》などの魔術で物理的に押し留める事は、いかに優れた魔術師でも無理というものだ。

ここで立て直され、魔術師に狙いを定められる事態は絶対に避けなければいけない。はつきり弱点と言えるほど魔術師の機動力は低くないが、それでもやはり近接戦に慣れた騎士には劣る。奴の突進を回避するのは騎士でも援護が無ければ厳しいのだ。亜竜に狙われたが最後、《身体強化》の適性が高くない魔術師の末路は死しか無い。

どれほど血を吐き努力しても、人と強大な魔物の間にある理不尽なまでの能力差は埋まらない。

けれども。だからこそ。

人間は作戦を立て、連携を取り、集団で強敵に立ち向かう。揺るがぬ忠義と誇りが、死の脅威を前にしても冷静な結束を騎士達にもたらず。

勝利の天秤はカシユヴァー達に傾いた。

ここはルデス山脈。別名、亜竜山脈。

「順調でありますねカシユヴァー殿！ 冒険者も恐れる亜竜山脈であつても、我々は十分通用しています！ かの 陸亜竜 相手にも損害を出さずに勝利を掴めました」

「うむ。姫様の『皆で生きて帰れ』というお言葉を、我々が守り通せる可能性も見えてきたかもしれん。油断は努々禁物だが……」

ヴェルニア殿下専属分隊副隊長 つまりはカシユヴァーの副官である女性騎士レイキアが興奮したようにまくし立てるのに、カシユヴァーも同意の頷きを返した。

陸亜竜 を屠ったカシユヴァー達の集団は行軍を再開している。軍と言つても離れたつて歩くのは十八名であるが、いずれも精鋭揃いの頼もしき同士達だ。内訳は王族警護を任される飛燕隊隊士十五名と宮廷魔術師三名という構成であつた。

ちなみに糧食などを乗せた二台の馬車も同行している。その御者

は十八名には含んでいない。

魔物からこの大きな的を守るのは容易ではなく、集団の機動力も大きく削がれる事になるが、ある程度の人数が長旅をする上で馬車は必須だ。

糧食を積むだけなら一台で十分なところを、カシユヴァーは馬車を二台用意させていた。この山を攻略するため事前の下調べで熟練の冒険者から話を聞いて、その人物のアドバイスを聞き入れたからだった。守る対象が二つに増える難しさを吞んでも、準備出来るだけのものを準備しろと彼は語った。でなければ死ぬだろうと。

例えば馬車には糧食の他に数匹の家畜を積んでいる。大型の魔物から逃げ切れないと判断したならこれを囿として放つのだ。

実際に現地で行動してみると、こういった対策の重要性がカシユヴァーにもはつきりと実感できた。魔力の温存はここでは至上命題だ。魔術師は無論の事、騎士も《身体強化》があるからこそまだ善戦できるのであって、魔術無しではこの魔物相手に勝機は万に一つもない。だが魔術に頼り続ける限りいつか必ず魔力は尽きる。魔術に頼らない手段をいくつ用意しているかが、ここでの生存の鍵を握っているのだ。

勿論、この魔物相手に勝利できる実力がある事が生存のための最低条件だが。

「陸亜竜 は強敵だが、この山には他にも強敵がまだまだいる。けして気を抜くな」

「はい隊長！」

木々が疎らに生い茂るなだらかな山岳地帯を集団は進んでいる。

亜竜山脈は広大な土地なので、進路には他の選択肢も取れる。もつと木々が深い森のような場所や、岩ばかりが並ぶ足場の悪い道を行くのも可能だ。木が多ければ 陸亜竜 の突進力は大いに削がれるし、斜面が続く岩場でも広さが足りず、大型の魔物より小回りの効く人間は有利に戦えるだろう。

そこを行かないのは勿論理由があって、馬車で進みづらいという

のもその一つだがそれだけではない。

平野が 陸亜竜 にとつて有利な地形であるように、他の地形もそこを得意とする厄介な魔物達がこの山脈にはそれぞれ存在しているのだ。

森林地帯では 群狼 が、険しい山岳地帯では 空亜竜 が。それぞれ頻繁に出没するらしい。どちらも 陸亜竜 に比肩し得る恐るべき魔物達だ。いずれともカシユヴァーは戦った事は無いが、凶悪な魔物として名高い存在である。

餌を求めてか山脈内ならどの地域にもこれらの魔物は現れる可能性があるが、やはり自らが得意とする地形に最も多く出没するようだ。経験者の話を聞き、自分達にとつても比較的楽だからと選んだのが 陸亜竜 の多いこのルートなのだった。

「竜脈草はまだこの辺りには無いのでしょうか」

レイキアがあちこちの木々の根元に視線を移し変えながら訊いてくる。

「うむ。恐らく探してみても、期待薄だろうな。学者も冒険者も、山脈の奥深くに分け入らないと無いはずだと言っておった。半日ほど北上した辺りから、ようやく稀まれに見つかるようになる」と

レイキアの言う、竜脈草。それを探し出し、良好な状態で持ち帰るのが今回の任務だった。

魔力的な作用で何らかの効果を起こす薬草には様々な種類があるが、効果の強さに比例して人の魔力に対して起こる拒絶反応も強まるのが通常だ。

摘み取ってから長時間安置すれば魔力は散っていき、効果が衰える代わりに拒絶反応も抑えられるので、これを利用して患者の体でも耐えられるようにしてから薬草治療というものは行われる。必然、患者の肉体が副作用に耐えられないほど衰弱していれば、効果の薄い治療しか望めない。

しかし薬草の種類の中には、効果の強さの割に拒絶がそれほど強

くない、というものも少数ながら存在している。大抵は希少で市場に出回る数が少ない高級品だ。

竜脈草はその最たるものとして知られている最高クラスの薬草である。

過去セイラン王家でも何度か入手しており、ヴェルニア王女殿下の難病にも大いに効果があると証明されている代物だった。ただ、如何せんこの薬草は貴重過ぎる。そもそも運が良ければ市場に出回るような程度のものではない。最大の問題は、何故カルデス山脈の奥地にしか生えない事であった。

竜脈草がある程度の量あれば、王女殿下の病気は完治できると王家かかりつけの医師団は保証している。

にも関わらずヴェルニア殿下がいつまでも快復せず、それどころか病状が悪化の一途を辿るばかりである理由は、ここ数年ただの一つも竜脈草が国内に出回らないからだった。

セイラン王家は竜脈草があればどこよりも高く買い取ると、国内に触れを出している。ギルドにも依頼を出し、竜脈草を持ち帰った者に高額報酬を約束している。

しかしそれでも尚、『亜竜山脈』の悪名が勝つ。

一流の冒険者ほどよく知っているものだ。巨万の富よりもずっと、命の方が大切だと。それにルデスに挑める実力ある者達であれば、他にいくらでも仕事はあり、食うには困らない。そして金に目がくらむような二流以下の者達なら、そもそも竜脈草を入手できる可能性は絶無と断言している。

かつてはルデスを攻略しようという気概と実力を兼ね備えた集団も存在したのだが、彼らは竜脈草の入手と引き換えに多くの仲間を失い、高額報酬を受け取りそのまま引退してしまった。

それ以来、亜竜山脈に挑戦しようという傭兵や冒険者は絶えて久しいのだった。

だからこそ、ヴェルニア王女殿下の近衛騎士であるカシユヴァー

達が新たな挑戦者となっている。

亜竜山脈の行軍は苦難の連続だった。

狼でありながら数種類の魔術を使い分け、しかも群れで連携して襲いかかってくる 群狼 は、騎士達にとってかなり相性の悪い相手であった。死者を出さずになんとか切り抜けたものの、そのために大いに魔力を消費させられてしまった。

陸亜竜 の体を二回りほど小さくし、前足の代わりに翼を生やしたような姿の 空亜竜 からも二匹同時に強襲を受けた。 陸亜竜

のような一点突破の突進力はないし炎も吐かないが、その翼でもって空を自在に飛ぶかなり厄介な魔物だ。剣だけで撃墜するのは難しく、本来であれば離れた位置を攻撃出来る魔術を連発せねば勝てないだろう。魔力の消耗を抑えたかったカシユヴァー達は用意していた弓矢でひたすらに応戦し、時間はかかったがなんとか逃げ帰らせるのに成功した。

群狼 や 空亜竜 ほどの強敵では無かったが、それ以外の魔物とも幾度も遭遇を重ねながら、カシユヴァー達は山脈の奥に向かい北上を続ける。

その日は竜脈草を見つけるに至らず、野営を行った。

それは賭けとも言える判断だった。かつてこの山脈に挑戦した者達は、半数ほどはここで夜を明かすのを避けたという。半日北上して竜脈草を見つけられなければ、急いで引き返し麓に戻った方が手間はかかるが安全なのだ。誰だつてこの山脈の凶悪な魔物と、視界が限られる夜に戦いたくはない。

しかしこの地で無事に夜を明かす事が出来れば、探索に割ける時間もぐつと伸び、より北を目指せる。竜脈草を発見出来る確率は大幅に上がるのだ。

カシユヴァー達は賭けに勝った。魔物の襲撃はあったが、夜間であつてもなんとか撃退できる程度のたいした敵ではなく。そうして無事に、探索一日目を終える事が出来たのだった。

探索二日目。

朝も早くから歩き出したカシユヴァー達はすぐにまた魔物と遭遇したのだが、危なげなくそれも倒し。探索は実に順調に進んでいた。「……厄介な魔物と遭遇する頻度は、話で聞いていた程ではないようだな」

「この調子だと山脈を突っ切つて、死の谷に出てしまつかもしれませんね！」

それはさすがに無いだろうが、調子のいい副隊長の発言に思わずカシユヴァーも苦笑する。

もちろん油断はしていないつもりだが、昨日よりは幾分か気を楽にしていた。

過酷な山歩きを続け、魔物とは連続で戦い、当然疲労は溜まつている。昨夜遅くにも魔物の襲撃があり、安眠など望めない環境、交代での見張りの役目もあつて睡眠も十分には取れていない。群狼に消費させられた魔力も回復しきつてはいない。

それでもこうして十八名、全員が生存して二日目を迎える事が出来た。かの悪名高き亜竜山脈でだ。その事実が全員の心を軽くしているのだと、カシユヴァーは騎士達の表情から見て取った。

「このまま 竜骨ガシラ とは遭遇せず、任務を達成出来ればいいのだが……」

カシユヴァーのその呟きは、不安というよりは願望を口にしたものだ。それはこの山脈の食物連鎖の頂点に立つ魔物の名だった。

「やはりカシユヴァー殿は、我々でも 竜骨ガシラ を相手取るのは厳しいと思われませんか？」

「うむ。厳しいだろうと予想している。私も話でしか聞いた事の無

い魔物だが……。遭遇した冒険者が皆、陸亜竜よりは間違いなく強いと揃って断言しているのだ。伝え聞く数々の逸話も、そう誇張されたものではあるまいよ」

いわく、並の魔術師では撃ち抜く事も出来ない《障壁》を瞬時に展開できる。

いわく、口から砲弾のようなものを発射したり、自身が砲弾となつて同じ速度で飛ぶ事が出来る。

それでいて 陸亜竜 をも超える巨体というから、まず人間が勝てるような存在でない、というのが冒険者達の共通した見解だった。大きな犠牲を出しつつも勝利したという話は無いわけではないが、死傷者を出さずに勝利したという話は全く聞かない。竜骨ガシラと一度でも遭遇してしまえば、二度とルデスの地を踏む気は失せるだろうとカシユヴァーはある冒険者に確信めいた口調で予言された。

だがそれでも、犠牲を出しても、例え自分が死ぬ事になろうともカシユヴァーに諦めるつもりは毛頭無かった。敬愛する王女殿下の命と未来がかかっているのだから。

同行する騎士達、宮廷魔術師達も気持ちは同じだ。死地を共にする覚悟がある者だけを選抜し、連れてきている。だから今更、亜竜の王とも呼ばれる 竜骨ガシラ に怖気づく者はこの場にはいないだろう。

それでも斥候として一団の少し前を進んでいた騎士の一人がこう叫びを上げると、痺れるような緊張感がカシユヴァー達の間を駆け巡った。

「正面に魔物！ 『竜骨』です！」

王国騎士団飛燕隊と、山脈の覇者である魔物が相見えた瞬間であつた。

なんとという巨体か。

一目見てカシユヴァーはそんな感想を抱く。遠目でもその威容が感じ取れるほど 竜骨ガシラ は大きな魔物だった。昨日交戦した陸亜竜 より更に、一回りか二回りは大きい。全長は騎士の中でも長身のカシユヴァーの五倍位あるだろうか。

ずんぐりとした体格の四足獣で、表皮は見ていて気分が悪くなるような生々しい紫色だ。いや、確かあれは、聞いた話によると筋肉が剥き出しになっているのだったか。奇怪な事に、その外側を覆うように肋骨のような骨格があり、骨の内側に筋肉があるという状態である。

魔物は魔素や魔力を変質させて何らかの作用を起こし、往々にして人間の常識から逸脱した姿を取る事があるが、 竜骨ガシラ もその典型といえた。倒した者から聞いた貴重な情報によると肉の内側には更にちゃんと骨があるらしい。密度の高い筋肉と二重骨格によつて、外見からは計り知れない耐久力を備えていると聞いている。亜竜の頭蓋骨じみた黄色がかつた骨格が頭部も保護しており、それが名前の由来だとは一目で知れた。

「気を抜かず全力でかかれ！ 『竜骨』相手に魔力を節約する必要はない！」

魔物を一般的な略称で呼びつつ注意を喚起する。 竜骨ガシラ もとい竜骨はまだかなり離れた位置におりその程度の猶予はあつた。待ち伏せや奇襲を受けなかつたのは幸運だろう。お互い正面からばつたり遭遇したのが今の状況らしかつた。

少しだけ散会した騎士達がじりじりと距離を詰めていく。

対して竜骨の方も、のしのしとゆつたりとした動きでこちらへ歩

いてきた。思ったよりもかなり慎重だ。

「総員警戒を怠るな！ 不意打ちや駆け引きが出来る程度には知恵のある魔物だ！」

カシユヴァーが再度注意を促すのと、竜骨が足を止めるのはほぼ同時だった。

彼我の距離はまだ50メルチ（＝ほぼ50メートル）ほどある。そこで魔物はばかりと口を開いた。

ぞろりと生え揃った牙の隙間から、ぞっとするような暗闇が覗き見えた。

「砲弾っ！！」

カシユヴァーの声に反応し、すぐさま《障壁》を展開したのは騎士のおよそ半数に過ぎなかった。残り半分は無駄な魔術行使を嫌ったか、自分が狙われていると確定するまでは様子見するつもりだったのだろう。

竜骨の口から、白みがかった半透明の球体 《魔弾》と似た原理で固めているのであろう魔力の塊が放たれる。

連続で、五つ。共通して《障壁》をまだ張っていないかった、それぞれ別の騎士を狙っていた。

陸亜竜 の突進に勝る魔力砲弾の速度に咄嗟に反応できず、騎士の一人が吹き飛ばされる。二人は横に飛びそれを回避した。狙われた残りの二人は、準備していた《障壁》を瞬時に展開し砲弾に間に合わせた。

間に合わせたのだが。

薄紙でも破るかのように魔力砲弾が《障壁》を貫通した。

「ぐはっ」「かっ」

二人の騎士が打ちのめされ、後方へと吹き飛ばす。他の騎士達に走りかけた動揺を「奴に隙を見せるな！」とカシユヴァーが一喝し抑えた。間を置かず竜骨が再度口を開く。

今度は騎士も魔術師も全員が目前に障壁を張り、更には回避のために身構えたのだが、いつまで経っても攻撃が飛んで来ない。

「……？」

一人の騎士が恐る恐る《障壁》を解除する。

途端、竜骨はその騎士に狙いを定めたかのごとく顔を向け、より大きく口を開いた。

「うわあっ！」

慌てて騎士がその場を飛びのく。しかしやはり、砲弾は飛んでこなかった。

口を閉じた 竜骨ガシラ が、カシユヴァーの目にはニタリと笑ったように見えた。

遊ばれているのだ。

「馬鹿にしゃがって！！」

宮廷魔術師の一人が一抱え程もある大きさの《火矢》を放つが、さすがに距離が遠い。横を向いて跳躍した竜骨は易々とそれをかわした。敵が着地した地点に二発目、三発目と攻撃が放たれていくが、全て避けられてしまう。

「魔力を消耗させる作戦か……！？」

魔術師が攻撃を止めれば、相手も様子を見るようにその場に留まる。竜骨は明らかに積極的に攻める気が無さそうだ。

この魔物は知能が高い。だけでなく、狡猾でいやらしい戦い方を得意とするらしい。魔力切れを狙っている可能性は十分あり得る。

ならばと、騎士達が剣を握り前進する。遠距離からの魔術攻撃は魔力の消費が激しい。消費する魔力と期待できる威力の関係において最も効率的な術式は《身体強化》であり、魔力をあまり使わず戦うのであれば接近戦に持ち込むという判断は妥当なものだ。

だが何か、嫌な予感と言うべき不安がカシユヴァーの胸中に湧き上がってきた。

「まだ近づき過ぎるな！ もうしばらくは離れて魔術で攻撃して様子を見る！」

じりじりと半分ほど距離を詰めたカシユヴァー達は扇状に広がり、敵を包囲していく。その間 竜骨ガシラ は不気味な程その場でじ

つと大人しくしていた。有利な陣形を手に入れたはずなのに、まるで相手にそうさせられているかのような不安感がカシユヴァーの中で更に膨らむ。

自身の王族警護の分隊長に任命される実力、ひいてはそこから来る直感。

それを信じ、カシユヴァーはあるう事がこの状況で振り返った。

馬車が忍び寄るもう一匹の 竜骨ガシラ に襲われようとしていた。

「目前の一匹から注意を逸らさずに訊け！ 背後に」
冷静さを努めて保ちながら、場の全員に状況を告げようとして、それを阻止するように、最初の一匹がカシユヴァーに対し突進してきた。

「隊長つー！」

すぐさま向き直りカシユヴァーは悟る。避けられない、と。

陸亜竜 を超える巨体が、 陸亜竜 よりも速く迫っていた。いくら戦闘に特化した魔物とはいえ、純粋な身体能力で出しているとは考えづらい常識外れの速度だった。まるで魔物の癖に《身体強化》の魔術まで使っているかのような。

カシユヴァーは待機状態にしていた己の魔術を解放する。

目前の地面から《障壁》が立ち上がる。その前に更に一枚。駄目押しにもう一枚。

透明度の違う、つまり硬度と性質がそれぞれ異なる事を示す《障壁》が三枚、カシユヴァーの前に重ねて現れた。

《多層障壁》。

性質の異なる三枚の壁は、ただ分厚くした一枚の《障壁》よりも比べ物にならない防御力を発揮する。柔らかい壁が最も外側にあると砕けながら衝撃を逃し、二枚目以降にほとんど威力を通さないのは、原理が分からずとも魔術師達の研究で知られている事だった。

それなりに高等な魔術だが、カシュヴァーはそれを待機状態にした上で、更に体からはみ出るはずの魔法陣も『分割収納』して隠していた。そうそう誰にも真似できない難易度の高い芸当だが、これでも騎士団の隊長格。この程度はやってみせる。おかげで完全に魔物の不意をつく形で、一瞬で《多層障壁》が展開出来たのだ。

これだけでなく、カシュヴァーの近くにいた騎士達も僅かな時間に《障壁》を発動させて竜骨の進路上に設置してくれた。彼らは本来魔術よりも近接戦を身上とする騎士だが、《障壁》系統の魔術適性も総じて高い。王族の警護担当である飛燕隊には必須とされる技能なのだ。

だからやはり、《障壁》が脆いのではない。竜骨がおかしいのだ。突撃してくる竜骨を前に、《障壁》が触れる前から砕けていく。

《障壁》 同士の相殺か！

推測もまじえてカシュヴァーはそのカラクリを即座に看破した。事前の情報から《障壁》を使える魔物だと聞いていなければ見破れたかは怪しいところだ。恐らくは突進しながら、《障壁》の前でだけ自身も同じ魔術を展開し、ぶつけ合って魔力ごと消滅させている。背後から馬車が攻撃される音と御者の悲鳴が届いてくるが、構っている余裕は全くない。目と鼻の先まで迫った大きすぎる魔物の肉體は、カシュヴァーの《多層障壁》までも容易く砕いて見せた。

だが僅かに速度が落ちている！

かなりの魔力を注ぎ込んで頑丈な壁にしておいたのは正解だと悟りながら、カシュヴァーは強化された脚力で跳躍した。《多層障壁》は他の騎士達の《障壁》のようにはいかなかったようで、相殺しきれなかったのを寸前に確認している。確かにカシュヴァーの魔術は奴の体にぶつかり、もの一瞬で砕かれはしたが僅かに減速させていた。

それまでの慣性を生かしきれず、確実に今この瞬間、突進の威力は落ちていくはずだった。

それでもそのまま地面にいれば結局は巨体と重量に任せひき潰さ

れていただろうが、カシユヴァーは真上へと飛んでいた。己の剣を抜き放ち竜骨の頭部へと構えを取る。剣にまとわせる形で、既に高密度の《障壁》も展開を終えていた。

亜竜の王と人間である騎士隊長が、正面からぶつかり合った。

「ぐむうっ！」

衝撃が全身を突き抜ける。

ごく当然の結果として、カシユヴァーは空中を跳ね飛ばされた。耐久力重視で《障壁》の硬度をひたすらに高めた弊害で、正面から斬りかかったというのに竜骨には傷一つ与えられていない。だが今はそれでいい。代わりにこちららも、飛ばされはしたが全くの無傷で済んだのだから。

魔物の強さを示すギルドの格付けでも 竜骨ガシラ は最上級に位置している。その突撃を凌いただけでも上出来というものだ。

問題は、他の騎士達に同じ真似が出来るかという点か。

カシユヴァーは一行の中で最も強い。それでこうまで余裕が無いのだから、他の騎士達は竜骨の突進に対処できないかもしれない。

「隊長っ！！！」

一瞬の思索は致命的な隙だった。切羽詰った副官の声をカシユヴァーは聞いていたが、突進をまともに受けてこちらが飛ばされたのだと彼女が勘違いしたのだろうと思っていた。

いまだ空中にいるカシユヴァーは仰け反りながら、意識せず己の飛ぶ先の光景を目にする。

眼下には馬車を蹴倒し足をかけた状態の二匹目がいて、こちらに向かつてパカリと口を開けていたのだ。

「な」

魔力砲弾が射出され、為す術のないカシユヴァーの胴体を直撃した。

生きている。

朦朧とする頭で、全身を巡る鈍い痛みを自覚する。

ぐらつく己の視界には、必死になって立ちほだかる騎士の後ろ姿。いまだ鈍い己の思考をカシユヴァーは叱咤する。早く。一刻も早く。起き上がらねばならない。状況を思い出せないが、その意識だけは強くあつた。

徐々に意識が鮮明になってくる。カシユヴァーの世界に音が戻り始める。

聞こえてくるのは悲鳴ばかりであつた。

魔力砲弾を受けてしまった直前の記憶が、ようやく脳裏に蘇る。

「……ぐ」

戦闘中に意識を手放すなどなんたる不覚か。まず今の状況を把握せねばならない。まだ上手く動かない体をそれでもなんとか動かして視界を確保する。

カシユヴァーの目前で騎士が倒れ伏す。その直線上、離れた位置に 竜骨ガシラ がいた。

その口から魔力砲弾が発射され、こちらへと迫る。

「カシユヴァー殿をやらせはせんっ！！」

叫び、視界の外から新たな騎士が割り込んできた。副官のレイキアだ。剣を構え《障壁》を張り巡らせ、カシユヴァーをかばうように立ちほだかる。

砲弾が一撃で《障壁》を砕く。

貫通してきた魔力砲弾を剣で受け、レイキアは苦悶の声を漏らしながらもそれを逸らしてみせた。見事な剣術だった。

だがすぐに竜骨が二発目を放つ。《障壁》が間に合わず、レイキアはまたもそれを剣で受けた。だが今度は踏ん張れず吹き飛ばされ、カシユヴァーを越えて視界の外へと消えて行った。呆気なく砕けているように見える《障壁》はちゃんと効果を発揮していて、あれが無い状態では砲弾を受け止めきれないのだ。

また別の騎士がこちらと竜骨の間に立ち《障壁》を駆使してなんとか持ち堪えようとしますが、厳しい戦いと言わざるを得ない。あれは障壁貫通力に特化した遠距離攻撃だ。

「馬鹿者、避ける！ その攻撃を受けるのは無謀だ！」

「意識が戻られたんですね隊長！」

騎士がもう一人やってきて、カシユヴァーに肩を貸し立ち上げらせようとしてくれるが。別の角度から撃ち込まれた魔力砲弾を受けて昏倒する。二匹目の 竜骨ガシラ が右斜め前方にいた。先に見つけた方と同じくらいこちらから距離を取り、倒れた馬車を物色している。あれが気まぐれに放った攻撃らしい。

何故わざわざ、一方的に蹂躪できるはずの奴らが遠距離攻撃に徹しているのか。

理由を考えて、ようやくカシユヴァーは今の状況を過たず理解する事が出来た。

奴らは遊んでいる。

よく見てみるまでもなく竜骨達はカシユヴァーしか狙っていない。そしてあの砲弾は、避ける事が出来ても防御しきる事は難しい。

竜骨達は分かっているのだ。カシユヴァーを狙えば、騎士達は自ら盾となり当たりに来るのだと。

「私の事はいい！ 受けるな！！」

必死にカシユヴァーは怒鳴るが騎士達は聞かない。次々と凶弾を受けて倒れていく。

宮廷魔術師達も炎や風の魔術で奴らに攻撃しているものの、その全てが《障壁》で打ち消されていた。距離があるほど魔術は威力が減衰する。いかに宮廷魔術師といえどもここから《障壁》を貫通させるのは容易ではない。

業を煮やした魔術師の一人が完全に立ち止まった。時間をかけて準備すれば、大規模な魔術を展開して奴らの《障壁》を割るのも不可能ではないからだ。結果としてその判断は誤りで、魔術を察知した竜骨がかさず放った魔術砲弾の餌食となってしまうた。

もはや立っている騎士は数人にまで減っていた。そうなっても竜骨達はあくまで、遠距離からじわじわとなぶり殺しにするつもりのようなだった。

表情など無いはずの獣の顔が、愉悦で醜く歪んでいるように見えた。

狡猾で、いやらしい。

遭遇すれば二度とルデスの地を踏む気は失せるだろう。

冒険者達が 竜骨ガシラ について話していた内容が思い出される。

「ぐ、おおおおおおおっ！！」

ふらつく体を叱咤し、痛みを無視して。いまだ握っていた剣を支えにカシュヴァーは立ち上がった。

「負けて、なるものかっ！！ これ以上同士達をやらせはせんっ！！」

真っ先にやられ、部下達に命を削って守ってもらって。

なんと己の、無様な事か。

何よりあんな醜き性根の奴らに、これ以上部下達が傷つけられるのは我慢ならない。

「私が相手だあああああっ！！！！」

魔力砲弾がカシュヴァーに対して放たれる。

もはや、ここまで。私達の勝ちはないだろう。

一国の精鋭を集めても、最強と称されるこの魔物にはまだ届かなかった。それだけの事。

だがそれでも。一矢報いる！

己の全てを込めて斬り上げた剣が砲弾を跳ね上げ逸らす。両腕に激痛が走るが歯を食いしばって堪えた。

「総員、聞け！ まだ動ける者は順次、この場を離脱するのだ！

私はこいつらの相手をするために残る。生き延びた誰かが竜脈草を見つけ、持ち帰れ！ 頼んだぞ！」

「隊長殿！？」

「死ぬ気ですか、カシユヴァー殿！」

考え直すように呼びかける声がそこから発せられたが、もはやカシユヴァーはここを己の死に場所と定めていた。

命に代えても一矢報いる。必ず竜骨に痛手を負わせる。そのくらの気概はないと、騎士達を逃がすための足止めにすらならないだろうから。

殿下と交わした、生きて帰るという約束はどうやら守れそうにない。

覚悟を決め、次の砲撃に備えようとして。

そこでカシユヴァーは、魔物達の様子がおかしい事に気付いた。

竜骨が二匹共、しきりに後方を気にしている。

こちらが怪訝に思う間もなくさまざま竜骨達が真横を向いた。奴らが気にしていた方とも、カシユヴァー達がいる方とも違う方向へと。物色中だった馬車すら捨て置き、迷いなく奴らは撤退を開始した。

走り去っていく。カシユヴァー達は呆然とそれを見届ける。

誰もが何も反応できないでいた。

一旦助かったと思いついて、こちらを絶望させる作戦ではないのか？ そんな事さえカシユヴァーは考えてみた。竜骨ガシラの姿はもはや遠い。疎らに生える木々に隠れるように、とうとう視界の果てに消えてしまった。

「助かった、のか……？ 何故……？」

呆けたようにカシユヴァーは疑問を口にして、それから倒れ伏す仲間達を順繰りに見やる。見たところ皆、息がある。奇跡としか思えなかった。強化と鎧に守られた騎士を死に至らしめるには、ほんの少しだけ魔力砲弾は威力不足だったらしい。

ふらつく足取りで負傷者の元へ行こうとして。カシユヴァーはようやく、疑問の答えが、竜骨達が逃げた原因らしきモノが接近してくるのを感じた。

奴らが気にした方向に目を凝らすと、そこに複数の小さな影が見

えた。

「人……？」

この辺りの主要な魔物達よりずっと小さいその姿が妙に新鮮に感じられた。人の集団がこちらに向かってきている。《身体強化》を使っているのは確実だが、それを差し引いても相当に速い。

「まさかこんなところに人間が……？」

亜竜山脈に挑みに来た冒険者の集団に偶然鉢合わせしたのだろうか。当然そう予測したカシユヴァーだが、その集団がこちらに近づくにつれて訳が分からなくなってしまった。

「子供……？」

騎士の誰かが呟く。

その通り、その五人の集団は全員がまだ子供のように見えた。信じられないものを目にした騎士達が、呆けたようにその場に立ち尽くし彼らの到着をただ待った。

そうしてカシユヴァー達の前に現れたのは、四人の少女を引き連れた十代半ばと思われる黒髪の少年だ。

「珍しい。人がいるなんてな」

こちらの惨状を見回しながら、まるでその辺の野山で人に会った時のような態度で少年が話しかけてくる。

「なあ。さっきまでここに魔物がいなかったか？」

「……つい今しがた、去って行ったところだ。 竜骨ガシラ が二匹いた」

警戒すればいいのか安堵すればいいのかも分からず、奇妙な緊張を感じながらカシユヴァーがそのままを答える。それを聞いた少年が背後の四人を振り返った。一人の黒髪の少女が肩をすくめる。

「逃げたみたいね。私達の魔力を遠距離からでも感じ取れるんじゃないかしら？」

「やっぱそういう事か？ 最近あの骨に会わないのはこちら一帯のを全滅させたからじゃなくて、向こうが俺達から逃げてるだけか」

「そうみたい。これから先、あの魔物にはもう会えないかもね」

最近？ 一帯を全滅？ 向こうが逃げている？

この少年少女は一体何を言っているのか。意味の分からない二人のやり取りにカシユヴァーは困惑する。

いや。本当に意味が分からないわけではない。なんとなく分かる部分もある。カシユヴァーの常識が理解するのを拒んでいるだけだ。

事実、彼らに気付いた竜骨達は一目散に逃げ出した。

非常に信じがたい事ではあるのだが。まさか目の前の少年達は、あの魔物よりもずっと恐ろしい存在なのではないか。

そんな荒唐無稽な考えが浮かび、カシユヴァーは思わず背筋を震わせたのだった。

それにしても本当に若い。

改めて五人を眺めてみて、まだ子供ではないかという印象が強まる。

「どうやら貴殿らには、助けられたようだ」

動ける部下達に被害の確認と負傷者の治療を指示し、カシュヴァーはひとまず彼らに礼を言った。

「別に通りがかっただけで何もしてないが……」

「むう、そうか。ならば、貴殿らが通りがかった事に礼を言わせてもらいたい」

「いやまあ、それも別に要らんが……」

やや不遜な言葉遣いで少年が遠慮の無い受け答えをする。年季の入った貴族であり王都暮らしの長いカシュヴァーにとって、かなりの年の差がある若者にこのような態度を取られるのは実を言うと新鮮な体験であった。

少年はカミヤとだけ名乗り、カシュヴァーも自身の名を告げる。カミヤの後ろに控える四人の少女達の紹介は特に無かったが、こちらも部下をいちいち紹介などしていられないのでお互い様だ。

見たところ銀髪の少女一人を除き全員が黒髪だったので、帝国の冒険者達かと当たりをつける。グレンバルド帝国はセイラン王国の東に隣接する国家であり、両国の北に接する形で東西に横たわるのがこの山脈だ。中々ない偶然だろうが、他国の者と遭遇してもおかしくはない。

冒険者にしても五人は異様に若いとは思うが、あまりそういった業界に詳しくないカシュヴァーは、何らかの事情で幼い時分からそういう生活をしている者もいるのだろうと納得しておいた。

「ところであんた、腕痛くねえのか？」

少年に指を差されカシユヴァーが視線を下ろすと、変色し腫れ上がっていた自分の右腕が目に入る。

「むう、これは。少なくとも、骨にひびが入っている、だろうか……」

こんな状態では竜脈草の探索はより厳しくなるだろう。

ようやく満身創痍の己の現状を思い出し、痛みと疲労にふらつく。「すまない」と少年に告げカシユヴァーは地面に座り込んだ。副官のレイキアが目ざとくそれに気付き、「カシユヴァー殿！」と手当ての為に駆けつけてくる。

別にこの場に用はないし立ち去ってもいいのだが、という顔で迷っていたらしい少年だが、一つ息をつく少女達にも声をかけ、その場に腰を下ろす。ついでに、剣らしきものを持っていたが乱暴な事にそれを地面に突き刺して置く。四人の少女もそれに倣い、彼らはしばしの間騎士達の手当ての様子を眺めていた。

応急処置を施してもらったカシユヴァーは背筋を正して少年達に向き合っていた。

その隣ではレイキアも頭を下げている。

「……改めて礼を言わせてもらいたい。貴殿らのおかげで、多くの騎士の命が守られた」

「いやそんなの別にいいって。さつきも聞いたし」

「だが部下達の命が失われる瀬戸際だったのだ。感謝してもし足りないという事はあるまい。心より感謝している」

「……」

部下の命と聞いて思うところがあったのだろうか。少年は言い返さず口を噤んだ。

「素直にお礼の言葉くらい受け取っておいたら？ どこその男達よりはか助けた甲斐があったみたいで良かったじゃない」

からかうような口調で少女の一人が言い、少年はどこか照れくさ

そつにそつぽを向いた。

本心から感謝しつつも、カシユヴァーはこつも思っていた。それにしても奇妙な子供達だ、と。

少女達は基本的に少年の後ろに控え、あまりこちらに干渉する気が無いのが見て取れる。ただ少女達同士はのんびりとした会話などをかわして、それだけを見てみるとそれなりに年相応の子供らしく思える。

しかし遠目に見た程度だが駆けていた時の強化された脚力は全員相当なものだったし、何より 竜骨ガシラ が逃げ出す相手がただ者であるはずがない。奴らが逃走したのはただの偶然だろうとはどうしても思えなかった。

……それに。

何度か発言している少女から、今も魔術活性化の気配が届いていた。態度からは見えないのだが、警戒を解いている訳ではないと分かる。

ふと。少年が右方に首を巡らせた。

カシユヴァーを大いに驚愕させたのは、同じ瞬間に残りの少女達も全員がその挙動を示したからだ。誰が早かったとかではなく。本当に同時に、五人の子供達が一斉にある方向に顔を向けたのだった。「どうしたのだ？」

「この大きさは……、『トカゲ』ね。一匹よ」

黒髪の少女の言はまるで魔物の姿を見つけたような口ぶりだった。カシユヴァーもそちらに目をやるが特に何も見つけられない。遠くまで見渡せる場所なのでますます意味が分からず、一体彼女は何を言っているのかといぶかしむ。

だがすぐに言葉の正しさが証明された。

五人の視線が共通して向かっている場所をこちらも観察していると、そこに突如魔物がぬつと顔を出したのだ。出所は傾斜となっていてここから見えなかった位置からだった。幸いにもまだまだかなり離れている。

この出来事はカシユヴァーにとってかなり衝撃的であった。

注意力、察知能力というものは護衛が主任務の飛燕隊にとって最も重要な能力の一つだ。それがここまでではつきりと、子供達全員と差があるとは。

その上、現れた魔物も問題であった。

「ト、トカゲどころか 陸亜竜 ではないですか!？」

レイキアが狼狽の声をあげるのも無理はない。でなければカシユヴァーが似たような事を口走ったであろう。

「く、こんな状況で厄介な……」

今は竜骨にやられた負傷者の内、半数ほどの応急処置がようやく終了したところだった。戦えない怪我をした者も少しいる。馬車だつて横倒しになったまま。そしてカシユヴァーも、全力で剣は振れないだろう。

万全には程遠いこのような状態で、果たしてあの強敵を打ち破る事が出来るのか。

ちらりとカシユヴァーは少年達に目をやった。

「助力を期待してもいいのであろうか？」

「あー……。いい、いい。座つとけ。俺達がやるさ」

「しかし……!」

「さつき何もしてないのに感謝されたんだ、その分くらいは実際に助けてやるよ」

手の平をひらひら振りつつ、なんでもない事のようにカミヤは請け負った。本当にたった五人である魔物を仕留められるというのか。困惑しつつもカシユヴァーの中では期待が勝ち、任せてしまう事にした。この場所を堂々とうろついていたのだ。どうにも想像しがたいが、少年達なら 陸亜竜 にも勝つてしまふような気がする。

魔物がこちらに気付き、遠くで突進の構えを取る。

あれはまずい。慌てて全員に避難の指示を与えようとしたカシユヴァーだが。

「つて事で、任せた」

カミヤが放ったその意味不明な一言に思わず口を閉ざした。

四人の少女が一齐に立ち上がる。銀髪の少女が「任された！」と元気良く返し、淑やかな少女が「はい」と控えめに返事し、表情の乏しい小さな少女が「了解」と口にする。先程から魔力を活性化させていた黒髪の少女だけは「全く人使いが荒いんだから」と口を尖らせていたが、特に不満に思っているわけでは無さそうだ。

ようやくカシユヴァーにも理解が及んだ。

「貴殿ら、全員で戦わないのか!？」

「まあな」

信じられない事に、四人の少女を送り出した少年はあくまで悠然と座ったまま本当にその場から動かなかつた。亜竜が突進を開始する。

「何を寛いでいるのだ! 戦闘に参加しないにしても、あの竜の突進は止められん! 総員、回避の準備を!」

「要らん。そもそも今更だろ。怪我人担いだ状態であんたら避けれるのか?」

ぴしゃりと言いつ返し返され言葉に詰まる。その通りだった。いくら退避させても、その怪我人がいる場所を狙われれば同じ事だ。突進に對し回避でしか対処できないカシユヴァー達にとって、この状況そのものが『詰み』の状態と言えた。

「それは……」

「いいから見てな。おっさん、あいつらの強さナメてるだろ」

そこまで言われて、しかも言った本人は何も不安など無いとばかりに座っているのだ。言い返せる言葉があるはずもなく。しばしの逡巡の末カシユヴァーは少年のすぐ近くに腰を下ろした。レイキアや周囲の騎士が驚いた顔をするが、彼女達も恐る恐るそれに倣う。

少女達は気負いのない堂々たる歩調で、緩やかに敵に向かって歩いている。

陸亜竜 の巨体が迫ってきていた。

歩みを止めた少女達の内、銀髪の少女だけが前に出る。

敵に対して少女はあまりに小さかった。避けられはしても、あの程度の少人数で 陸亜竜 の質量を受け止めるのはやはり無理があるように思える。とはいえここまで来れば、少年の言葉を信じて静観するしかない。

「まさか一人で？ そんな、無茶ですよ……！」

レイキアが慌てたように言うが、カミヤは黙って見てるとばかりに無視した。

銀髪の少女の眼前に、彼女自身より一回りほど大きい魔法陣が出現する。同時に持っていた剣を手放した。そこに 陸亜竜 が目をぎらつかせながら接近してくる。

だが、何も起きない。

何かすごい大魔術が飛び出すのだろう。そう期待していたのに、一向にそれが発動せず騎士達が慌てた声をあげた。もはや巨体の影に少女達が呑み込まれようとしている。魔術が発動しても、間合いが近すぎてそのまま押し潰されるような距離にまで敵の突進は近づいていた。

もう、次の瞬間にはぶつかる。

レイキアが痛ましい悲鳴をあげる中、カシユヴァーは努めて冷静に観察を続けていた。カミヤや少女達は全く落ち着いていたからだ。

「……………《竜拳》」

銀髪の少女は聞いた事のない術式名を呟きながら、一步前に踏み込み、右腕を振りかぶる。

何故、とカシユヴァー達は揃って思った。

魔術を使うのではないのか。それではまるで、亜竜に対し殴りかかっているようではないか。

突進してきた巨体と少女の拳が、魔法陣と重なるように接触する。

そうしてカシユヴァー達は、あまりに常識外れな光景の目撃者となつた。

「グギャツ!？」

轟音と共に 陸亜竜 が仰け反つたのである。

「……は?」「……」

一人や二人ではなく、騎士達は皆一様にそう眩くしかなかった。この時ばかりはカシユヴァーも例外ではなかった。

亜竜を殴りつけた少女も衝撃を受け止めきれず、ざあつと地を滑りながら後退する。それだけだった。その程度で、少女には怪我らしい怪我もなく亜竜の突進は止められた。

自分よりずっと小さな存在に力づくで殴られたという異常を 陸亜竜 も認識できているようで、警戒するように少女達から距離を取る。大型の魔物がこのような拳動を取るのを見るのは騎士達にとって初めての事だった。

陸亜竜 が大きく息を吸い込んだ。

そうだ。この魔物は火を吐くのだ。

「炎か……!」

この場において巻き込まれないか咄嗟に心配したカシユヴァーだが、相変わらず気楽な様子のカミヤを見て座り直す。驚きを通り越してなんと反応していいか分からないが、きつとどうせあれも防ぐのだ。次に少女達の前へ、 陸亜竜 に向かって飛び出したのは淑やかな印象の少女だった。そこそこ大きな魔法陣を二つ両の手に展開している。

亜竜が炎の渦を吐き出した瞬間、包み込むように展開された《圧風》らしき魔術がそれらを無理やり押し返す。

自身の炎に巻かれて魔物が絶叫した。

「なるほど……。相手の攻撃を利用して、最小限の魔力で……」

感嘆したようにレイキアが呟いていたが、問題はそこではない。それなりに魔術の修練も積んでいるカシユヴァーは今の攻撃の異常さが良く分かった。離れていても届くというあの炎は、易々と押し

返せるものではないはずだ。それを一方的に返すのだから、今の風魔術には結構な威力が込められていると分かる。それをあの少女は強化を使って駆けながら宮廷魔術師顔負けの速度で展開したのだ。

あんな芸当が可能であればどんな騎士でも彼女には勝てない。大きな魔術を行使する際に隙を作ってしまうのが魔術師という人種の最大の弱点だ。それが彼女には見受けられない。魔術師以外に対処できないような大掛かりな魔術を、敵から逃げながら、或いは追いかけてながら発動できる魔術師。純粋な戦士にとっては悪夢のような存在だろう。

炎に焼かれ悶え苦しむ亜竜に、小柄で表情に乏しい少女が背後から接近する。カシユヴァーが騎士隊長として自信を無くすような、惚れ惚れするほどの速さと身のこなしだった。尻尾の方から魔物の体を駆け上がり、手にしたナイフを背に突きたてる。陸亜竜が苦しむように身を仰け反らせて硬直した。恐らくは《電撃》の術式だ。たまたまカシユヴァーは知っていたが、使い手がほとんどいない珍しい魔術である。

そして最後の少女は既に魔物の懐に潜り込み準備を終えていて、動きを止めた亜竜に至近距離から大きな《穿風》を叩き込んだ。

首にざつくりと大きな傷が入り、喉から呼吸を漏らしながら陸亜竜が死の痛みへのたうつ。そこへ炎を先程押し返した少女が大掛かりな《圧風》を叩き込み、その直後に止めとばかりに銀の少女の飛び蹴りが入った。

斬られ、叩かれ、押し込まれ。流れるような一瞬の連携で、亜竜の首が千切れ飛ぶ。

血を吹き上げながらその胴体が、どうと倒れ伏した。

「言う事なしだ」

カミヤがそう評価を下す。

勝つのを期待はしていたが、ここまで呆気ないものだと予想出来ず、カシユヴァーは絶句していた。

昨日騎士と魔術師が十八人がかりで取り囲み、苦戦しつつも倒し

た魔物が。

ほんの二十秒足らずで絶命し、物言わぬ死体となって転がっていた。

コトコトと、馬車が揺れている。

「カシユヴァー？ 眠っているのですか？」

「いいえ、姫様」

かけられた声にすかさずそう答え、カシユヴァーは閉じていた目を開いた。

揺れの少ない最高級の馬車は客室の装いもそれにふさわしいものだった。絨毯敷きの床の上に丸机と椅子が置かれ、隅には簡素な厨房まで備えている。待機しているのは専属の侍女だ。王族が利用するものなので、快適に過ごせるよう最大限の工夫と配慮がなされている。

気品ある少女がカシユヴァーの向かいに座っていた。

眩い金色の髪に碧い瞳。絵に描いたようなセイラン人貴族らしい容姿の、儂げな雰囲気をもとう少女である。カシユヴァーが仕えるセイラン王国第二王女、ヒータトネットゥヴェルニア・セイリアスその人であった。

たとえ騎士隊長といえども本来なら同席するのは憚られる立場の方だが、ヴェルニア殿下は身分の差にあまり頓着しない。カシユヴァー自身彼女との付き合いが長く、私的な場で距離を取られるのを殿下は嫌がると知っているの、今だけはこうして対面の席に落ち着いているのだった。

「なんだか懐かしい夢でも見ているかのような顔をしていたものから……。眠っているのかと思いました」

「いえ、少し昔の事を思い出していただけです。何か御用でしょう

か？」

「いいえ、眠っていないのならお話したいと思っただけですわ」
いたずらっぽくカシユヴァーの仕える姫は笑う。

「二年前に亜竜山脈で出会い、助けて頂いたという方々の事ですか？」

そのものずばり言い当てられ、カシユヴァーは目をぱちぱちと瞬しはたたかせる。少なからず驚いていた。

「姫様の洞察力には驚かされます」

「ふふ。あなたがそのような顔をして思い出すのは、決まってその時の事ですもの」

そうなのだろうか。いまいちぴんと来なかった。そう頻繁に、あの五人組を思い出してなどいないはずだ。

確かにあの不思議な出会いは、カシユヴァーにとって忘れられない印象的な出来事ではあるかもしれないが……。

あれから二年。

こうして長距離の移動にも耐えられるほど、ヴェルニア殿下は健康な体を手に入れていた。

ひとえに竜脈草のおかげだった。二年前、誰一人欠ける事なくカシユヴァー達はあの薬草を手にも、王都への帰還を果たせたのだ。

この成果を受けて国民は沸き上がり、その後の殿下の病状の快復も知れ渡り、カシユヴァー達分隊の面々は英雄のような扱いを受ける事となった。

その裏に常識外れの五人組の協力者がいた事を知る者は少ない。カシユヴァー達が意図的に隠したわけではないのだが、素性の知れぬ者達の助けが無ければ全滅していたと正直に広めても益は無い。そう判断が下され、五人組については秘される事となったのだ。そうして非の打ち所のない騎士の英雄譚が国民に広まってしまった。

カシユヴァーとしては複雑な心境だった。

「わたくしも会ってみたかったですわ。わたくしと騎士の方々の命をどちらも救って頂いた恩人ですもの」

「一つ救いがあるとすれば。」

それはヴェルニア殿下が真相を知ってくれている事であった。

彼女には全ての経緯を余さず伝えている。カシユヴァー達だけではとても生き残れなかった事。少年達に助けられて以降、情けなくも彼らに頭を下げ、しばらく行動を共にしてもらった事。そのおかげで負傷者がいるにも関わらず、竜脈草を多数確保して安全に山を下りられた事。その全てを。

仕える姫に嘘をつき、情けない実態を隠し、勇敢な騎士に対する不相応な尊敬を受ける。そんな事になればきつと、カシユヴァーの中の騎士の誇りは死んでいた。それなら幻滅される方がずっとまじだった。だから山脈での経緯を、せめてヴェルニア殿下には詳細に語って聞かせたのだった。

「それでもあなた達が、わたくしのために死を覚悟してくれた勇敢で忠実な騎士である事に、何の変わりもありません」

殿下は迷いなくそう言って、感謝と尊敬を向けてくれた。それにカシユヴァーがどれだけ救われた事だろう。

そして以来、恐らく年齢も彼女と近いであろうその不可思議な五人組に殿下も興味を持ったようだった。時折その五人の話のカシユヴァーにせがんでくる程である。

「可能なら私もまた会いたいものですが、どこにいるのかは見当も付きません」

「聞く限り物凄い方達ですものね！ カシユヴァーが竜脈草を探しているとその方達に告げた時、返ってきたという言葉には笑ってしまいました」

「ああ、あれはさすがに、忘れようにも忘れられませんな……」
思い出してカシユヴァーがげんなりした顔になり、ヴェルニア殿下は心底おかしそうに笑う。

「『竜脈草？ ああ、あれを探してんのか。俺達もよく食うよ。あ

の結構美味い草だろ?』でしたっけ。本当に凄い方達ですよね!」
あんまりに常識外れであるからか。あの五人組の話は、共に亜竜山脈に赴いた同僚達との間でも盛り上がる話題だったりする。面識の無い殿下ですらこの通り楽しそうに話すのだ。そういう所もまた、不可思議な連中だと言っべきだろうか。

「殿下」

第二王女殿下専属のカシユヴァーとも付き合いの長い侍女が、御者台から何事か告げられてこちらにやって来た。

「あと半刻ほどでパルミナに到着するそうです。そろそろ御準備を」
「分かりました。カシユヴァー、この話は今日はここまでですね」
「は。では私は御者台の方へ」

立ち上がり馬車の前へと移動しながら。つい二年前をしみじみと思い出し、カシユヴァーは目頭を熱くする。

本当に。姫様はお元気になられた。

こうして公務の為、王都とパルミナを行き来する事もしばしばだ。病に伏せている頃からは考えられない程、近頃のヴェルニア殿下は精力的に動き回り王族の務めを立派に果たしていた。いまや若い身でありながら日本との外交における親善大使だ。象徴的な役職であり本当の調整役は別にいるのだが、将来的にはより多くの仕事を彼女も任される事になるだろう。

日本文化の愛好家でもあるヴェルニア殿下にこれほどふさわしい役職はそうは無い。今の立場にやり甲斐を見出しているらしい彼女を見ていると、カシユヴァーも我が事のように嬉しくなる。

何もかも順風満帆だった。

ちなみに王女殿下は、文化交流のためと本人の希望から、来年よりパルミナ騎士教育学園への入学も決まっていた。

ソリオンの暦は地球世界でのそれと読み方・数え方がほぼ一致している。

例えば五月を五の月と言ったり月ごとに日本人には耳慣れない別名があつたりはするが、大概はそのままで通用する。暦に限らずこういった文化の酷似はソリオンではよくあるのだが、それらは元をただせばこちらの世界に落ちてきた日本人からもたらされた概念であつたりする事が多いそうで、全てが奇妙な偶然というわけでもないのだ。

とにかくまあ、どちらの世界基準で見ても暦は五月に突入していた。

パルミナ騎士教育学園に二期生が入学してから一月以上が過ぎていた。

黒板の上をチョークが踊り、軽快な音を立てる。

必修である『魔物対策』の授業中だった。

「さて、魔物と動物、この違いを説明出来る人はいるかな」

担当教師の男性がそう言つて教室内を見渡すが、生徒の一人である神谷鋼はろくに授業も聞かずぼんやりと思案にふけていた。目敏い教師は当然その様子を見咎める。

「こら。その……、カミヤ君、だったな。ちゃんと聞いているか？」

「あ、すみません。一応は聞いて……、いや、うん、多分聞いてました」

「私からすればそれは聞いていないのと同じだ。では君に説明して

もらおう。魔物と動物、両者の違いはなんだ？」

当てられてしまった。

「ええと……」

そもそもからして、地球での『動物』にあたる存在がこちらの世界では『魔物』と呼ばれていると、鋼はこの時までなんとなく思っていたくらいである。無論答えなど知らない。一年間の異世界経験があろうとも、ちゃんと学んでいるわけでもない鋼のこちらの知識は色々と偏っていた。

ただ、魔物との交戦経験だけは無駄に豊富なのでそれらを参考に答えを考えてみる。

「魔力強度の差、ですか？」

教師の目が意外そうな色を宿した。

「随分専門的な用語を知っているね？ 正解だ。そして、授業はちゃんと聞くように」

ぼんやりしていた事は軽い注意で済まされ、教師が解説を続けていく。

「魔物と動物の違いについて、よくある答えとして『魔力を持っているかどうか』、というのがただのだけでもそれは間違いだ。生き物である限り多かれ少なかれ魔力は必ず持っている。無害な小動物や、辺りに生えている雑草であってもね。あるいは『魔力容量の差』を理由に挙げる人も多い。実際に魔物と動物では、平均して魔物の方がかなり魔力容量に優れているから、こちらの答えはけして間違いとは言えないものだ。しかし正解とも言い切れない。魔物と動物を区別する定義は別にある」

教師のチョークによって、黒板に『魔力の変質』と板書される。

「魔物とは、自らの魔力を変質させて定着させた生物の事を言う。つまり人や動物の魔力と、魔物の魔力はその性質からして別種のものなんだ。魔力はその持ち主の肉体に宿り循環している、個人用の魔素だというのはもう魔術の授業でも習っている事と思う。魔物の魔力はこの循環が強固で、体内に留まろうとする性質が強い。これ

はつまり、外から別の魔力をぶつけられても『魔力の拒絶現象』が起き辛い事を示している。この性質がどれだけ強いかを、魔物研究の分野では魔力強度と呼んでいるんだ」

教卓から見えない場所をつんつんと隣の席から突つつかれ、鋼はそちらに座る日向にさりげなく目をやった。あまり勉強には自信がない幼馴染が小首を傾げてこちらを見ている。自分の知っている知識と違う、と言いたいのだろう。気にするなと適当に首を横に振り、鋼は視線を前に戻した。

魔力強度について鋼達はかなり詳しい。

今の教師の説明が最新の研究で公に判明している魔物の魔力の実態なのだろうが、恐らく鋼達はそれよりも先の正確な知識を持っている。ルデスの奥に引きこもり、魔術と魔物について研究を続ける高位魔術師と生活を共にしていたからだ。魔物の情報は戦いにおいても有用だから、鋼達もその研究に手を貸していた。

「この魔力強度が高ければ、死後もしばらくの間は魔力が残る事となる。魔力の拒絶現象ももう別の授業で習っているね？ 魔力が残留した状態の魔物の肉は人体にとって有害だ。原因が魔力にあると分かっていたいなかった昔は、魔物の肉には全て毒があると考えられていた。実際これは毒ではないから、魔力さえどうにかすれば魔物の肉も食べられると現在では判明している」

ただし完全に魔力を抜くのは難しく、更に独特の味わいのせいで魔物料理はあまり一般的ではないけども。教師は説明の最後にそう付け加える。

正直なところ、鋼はあまり真面目にこの授業を聞く気になれなかった。

習うまでもなく魔物の食い方くらい心得ている。しかし実地で得た知識とここで学ぶ内容には所々違いがあるのだ。机の上で学んだ事と実際に試して正しいと実感した事柄ではあまり前者を信じる気にはなれなかった。魔物学者になりたいわけではなく、欲しいのは役立つ情報だ。

やはり、学業はある程度でいいか。
最近よく思うのはそのような事だ。先程注意された時もぼんやりとそれを考えていた。

では学業よりも優先すべきなのは何か。

「いいバイト無いもんかねえ……」

金稼ぎ、というのが鋼の結論であった。

就学中に失踪している『彼女』を探すのは難しいにしても、下準備くらいは進めておきたい。必要なのは情報と人脈で、どちらにしても資金があればあるだけいいはずだった。

「そんな鋼ってお金に困ってるん？ 前の休みも日雇いのバイト見つけて行ったとか言うてなかった？」

満月亭での鋼の呟きに省吾が反応する。

「普通に過ごす分には仕送りで十分なんだけどな。卒業までに金を貯めときたいんだ」

「神谷君達なら卒業してから冒険者やった方が手っ取り早く貯まるんじゃない？」

「多分そうなんだよな。だから給料が良くねえ仕事はあんまりやる気がな……。とはいえ給料が良い仕事なんて都合よく見つからねえし、どうしたもんかと」

有坂の疑問に頷いて、鋼はため息をついた。魔物を狩るのは得意中の得意である。冒険者・傭兵仲介ギルドでそういった仕事を探したほうが、ちまちまとアルバイトをするよりは相当効率的に金が貯まるはずだった。ただしパルミナから外に出られない日本人である鋼達には取れない選択肢だ。

「この前の資材運んだりするバイトは給料良かったって喜んでなかった？」

「ああ。あれくらいがあるといいんだが、ありや常時募集してる

仕事じゃねえし。来週の記念式典あるだろ。あれの準備やら会場設営やらの人手が不足してて、急遽募集かけただけらしい。式典の日までそういう仕事は結構あるみたいなんだが、学校があるからな……。いいバイト見つけても次の休みくらいしか出れん」

「式典って国交樹立記念日のやつですよね！ 親善大使の王女様も来るっていう、あの」

意気込んだ様子の片平も会話に加わってくる。異世界オタクである彼女の興味を引いたポイントは、この国の王女がやって来るという部分に違いない。

この式典の準備の為、今月に入ってパルミナの街は急激に活気付いてきていた。

来週の半ばの国交樹立記念日に行われる式典に合わせ、街をあげての祭りのような状態になるのだ。パルミナの街では日本文化主体の、門の向こう側の門出市ではセイラン文化主体の、二国共同の催しとなる。このお祭り騒ぎは式典の日以降も数日は続き、その間かなりの観光客で賑わうらしい。

「去年は門出市のお祭り行ったけど、すごい人の数やったなあ……」

「あ、私も行きました！ 生きてる魔物見ましたよ！」

日本からの通行制限があるパルミナの街は日本の一般市民にとって容易く訪れられる場所ではないが、門出市であれば比較的簡単に許可が降りる。省吾と片平は観光客として祭りに行った事があるようだった。

「私は行った事ないわね。神谷君達はあるの？」

「一応な。ほんとはパルミナまで来てクーとか探したかったんだが無理だった」

「クーちゃんも去年は門出市行きたかったけど無理で、こっちのお祭りを見て回ったって言ってたね」

有坂の問いかけに鋼と日向が頷く。省吾と片平と、合わせて五人。それがこの場に座っている全員だった。

マルは今日は満月亭に来ていない。貴族同士の付き合いもあって、

元々毎日昼食を共にしているわけではないのだ。

そして凧はというと。

「お待たせしました」

厨房の方からこちらにそう声をかけつつ、制服の上にエプロンを着けた凧がやって来る。同席してはいなかったが一緒に店には来ていた。かねてより趣味の一つが料理である彼女は、この一ヶ月の間は度々この店でこちらの料理を教えてもらうようになっていて、それで本日は晴れて厨房の一部を借りて実践を行っていたのだった。

店の混雑時を避けて昼食にしてはやや早い時間にはなってしまったが、無事に完成したらしい。彼女の後ろから料理の皿を手にしたリユンとミオンも顔を出す。いつもより店の食事は少なめにしてもらって、凧の料理がテーブルの中央にでんと置かれる形だ。茶色いソースに彩られた謎の肉が大きな皿に乗っている。希望を訊かれて鋼がリクエストした魔物料理というやつである。

「ど、どうぞ……」

ちなみに相変わらずミオンは鋼に対してだけびくびくした様子なのだが、そろそろこちらにも慣れてきて気にならなくなっていた。まあいい加減そつちも慣れるよとは思うが。

「ルウの料理食うのも久しぶりだな」

「はい。入学してからはコウに作って差し上げる機会がありませんでしたし……」

エプロンを外しながらいそいそと鋼の隣に座る凧を有坂がじつと見つめる。

「……日本にいた頃はよく神谷君に料理作ってたの？」

「はい。向こうでは一人暮らしだった私をコウもヒナちゃんも気にかけてくれて、よく家に招いてくださって。お返しに私の家に招待した時はお二人の好きなものを作って、夕食を一緒にしたりしていました。お料理は私の趣味ですし……」

「へー。あなた達ってやっぱり仲良いわよね。お互いの家に招待しあって手料理振舞うとか、私の周りじゃ初めて聞いたわ」

「そ、そうですね？ そうなんでしょうか……」

何を今更照れているのか、凜はもじもじと指先を動かして赤面したりしている。からかいまじりの有坂に鋼も一応言い返しておいた。「仲良いのは否定せんが、そこまで珍しいか？ 学校の弁当もたまに作ってもらったりしてたが、幼馴染なんだしそうおかしい事でもないと思ってたんだが……」

そこで省吾がさっと手を挙げた。

「……あ、ちよっと待ってくれる？ さすがのわいも何かイラっと来る発言やった今のは」

「いやいやなんでだよ。漫画とかでもよくある話じゃねえか」

「え、本気で言ってる？」

何故だか正気を疑われるような目で見られて不安に駆られたものの、とりあえず料理が冷めてしまうという事でこの話題は流れた。

六人は昼食に手を付け始める。魔物料理の肉は鋼が思っていたよりもずつと食べ易かった。

「変わった味やなあ。うまいけども」

「ちよつと硬くて食べ辛いかもです」

「昔食べた猪の肉に似てるわね」

以上が省吾・片平・有坂それぞれの感想だった。

「美味いな。前にこつちで食ってたような魔物の肉に比べたら相当食い易い」

「うんうん。お腹壊さないために《解毒》術式展開しながら食べたりにしてたもんね。《消毒》も欠かせなかつたし」

「あそこは魔力毒とは別に毒を持つてる魔物が多かつたですから……」

鋼達三人にとっては食べ辛いなんて感想は欠片もなく、しみじみと過去の苦勞に想いを馳せながら次々に魔物肉をナイフで切り分けていく。その会話は若干皆に引かれていたが。

そうして魔物料理も含め全て平らげて、食後の休憩中ふと凜に訊いてみた。

「そついや今食った魔物はなんて奴なんだ？」

「グルウ、というこの国では最も多いだろつ魔物の肉らしいです」

「ふうん。聞いた事ねえな」

「ルデスや谷にはいませんからね」

「ねえ、ちよつといい？」

魔物についての話題に有坂が入ってくる。

「亜竜とか魔狼とか、私が知ってるのつて漢字表記の魔物ばかりなんだけどさ。そのグルウつていうの漢字じゃないわよね？」

「あ、はい。魔物は漢字表記のものとカタカナ表記のものがあるんです。名前の違いで分類があるわけではありませんけど。こちらの世界では漢字は古い時代の言葉ですから、名付けられた時代が昔の魔物なら漢字表記である事が多いそうです」

さすが凜の解説は詳しかった。片平が慌ててメモらしきものを取っている。

なんととはなしにそれを眺めていて、鋼は自分に注がれる視線に気付いた。

店の奥に目をやれば、通路の先からミオンが顔を出してこちらを見ている。一ヶ月前ならこちらが気付き次第すぐに引つ込んだこの臆病な狐娘は、最近は離れた位置からなら観察を続けられるくらいにはなつていた。

誘拐事件の解決後からずつとこんな調子の付き合いが続いている。二人きりになつてちゃんと話をしてみたいとは思うのだが、その機会は未だに得られないままだ。結局精霊憑きかどうかの確証もない。多分、違つのではないかと鋼は予想しているが、自信をもって断言出来るほどではなかつた。

「ん、電話か」

ポケットの振動に気付いて鋼は携帯電話を取り出した。話していた五人がちらりとこちらに視線を超越す。

見下ろした先、着信相手の名前にはクーという文字があつた。

その日の昼前。

魔物討伐のために数日かけて遠出していた冒険者の青年ロア＝レ
ーダルは、仲間達と共にパルミナの門に並んでいた。

日本人も移住してきているパルミナの街は、出入りすることに簡
素な入国審査のようなものを受けなければいけない。そのために行
列の最後尾にロア達は立っていた。

「空いてるし、こりゃ十分もかからんな」

門の方向を見て仲間の一人、冷静な男ヨキが予測する。こちらの
世界の人に関しては出入りの多い街なので、入国審査といってもこ
くごく簡素なものだ。朝や夕方といった混雑する時間帯は一時間も
待たされたりする事があるが、今は昼なので短い時間で済む。冒険
者ギルドが発行している通行証を見せれば一発だ。

「運が良いね。祭りが近いからか、最近は変な時間に混んでたりす
るもんなあ」

そんな事を言っただけでロアは仲間達と笑いあう。いつも通りの、堅実
に仕事を終えた後の平和なひと時であった。

この瞬間までは。

「ん？」

仲間と喋るため振り向く形となっていたロアは、ついそんな声を
漏らした。

己の視界に影を見たのである。全く同時に魔力活性化の気配が届
き、すたんつという軽やかな着地音も聞こえてくる。

つい一秒前まで最後尾だったはずのロア達の後方に、新たな最後
尾が一瞬で出来ていた。

しかも何やら見覚えのあり過ぎる冒険者であった。

「は」「え？」「銀の……」

気配や音で気付いた仲間達も振り返り、それぞれ驚愕と困惑がな
いままになつた表情を浮かべた。

銀の騎士と渾名される絶世の美女が、連れもなく一人毅然とそこ
に立っていたのだ。

ロアも困惑しきり、目の前の存在とその上空へと何度も視線を行
き来させる。

彼女が出現した瞬間を目の当たりにしたはずのロアはこの美貌の
冒険者が視界の上から降ってきたように感じたのだが、気のせいか
もしれないと思い直した。上を見ても何も無い。空しかない。彼女
が空を飛んできたというのでないならば、ロアの目の錯覚だろう。
そして長距離飛行は魔術をもつてしても不可能というのはあまりに
も自明な常識であつた。

「え、どつから来たんだ？」

「上、から……？ 降つて……」

ロア達の前に並ぶ人々の中にも決定的瞬間を目撃した者がちらほ
らいるらしく、しきりに上を見上げている者がいた。まるで本当に
空から落ちてきたような反応に、ロアは自分の常識と状況証拠、ど
ちらを信じるべきなのか分からなくなる。

周囲を騒がせるだけ騒がせて静かな混乱に陥れた元凶の少女は、
背負い袋をがさごと調べて何かを探していた。説明して欲しいと
いう周りの視線に気付いた様子はない。そのままケイタイとかいう
日本製の四角い道具を取り出して難しい顔でびこびこ操作を始め
たかと思えば、満足したように頷いてそれを耳に当てた。

「コウか！？ 私だ、帰ってきたぞ！」

あれが離れた相手との会話を可能にする道具だとは知っている。
そのはしゃいだ声とうきうきした笑顔を見れば、もはや名前を思い
出すまでもなくロアの脳裏に冒険者ギルドで会った少年の顔が浮か
び上がった。彼女が一体どこからやって来てこの場に現れたのか、
とてつもなく気になつたロア達ではあるが、こうなつては聞き出す
事も出来そうにない。

行列は消化されていき、ロア達の番がきても楽しそうにダリアク
レインはお喋りを続けていた。あの嬉しそうな様子の彼女を中断さ
せてまで疑問をぶつけようという気概の人間は、ついで一人も現れ
なかった。

「……書類に不備は無いようだな」

こちらが提出した紙を手に、シンドがため息でもつきたそうなのシンドの低さで確認を終える。

ここは授業の合間に訪ねた教官の準備室で、向かい合うシンドはどことなく不機嫌そうだった。

「そんな不満そうに言わんでも。……もしかして、何か問題あります?」

「特には無い。制度上は何も問題がないから、あとは学長に提出すれば受理されるだろう。が、なにせ前例が無い事だ」

「前例が無いのはそんなにまずいっすかね?」

「何事にも伝統と格式を重んじる貴族の生徒もいるからな。突っかかるきっかけ位にはなる。問題があってもその程度で、これが二ホンの一生徒なら俺もそう心配はしないが……」

「ああ、なるほど。その前例の無い生徒が俺なもんで、また何か大きな問題に発展しやしないかと、今から気が気でないってトコですか」

「よくもまあ他人事のように……」

苦りきった顔で呆れられてしまったが、彼のそういう表情を最近見慣れてきた鋼は平然と受け流した。

シンドは軽く咳払いして、鋼の隣に立つ人物に対しては口調を改める。

「すいません、お待たせしました」

「ああ、大丈夫。このくらい待ったうちに入らない」

シンドは正面から彼女を直視するのをなんとなく避けている風に見えて、少し面白かった。

「それでは、これからよろしくお願いします。カミヤが何か無茶をしようとしたら、止めてもらえると助かります」

「承知した。……コウが無茶するような機会などそう無いとは思いますが」

「いえ……。中々、目が離せない生徒です」

この人は犯罪組織に乗り込んだ例の一件については知らないのか、というような視線が鋼に向けられる。軽く肩をすくめつつ頷いておいた。

現在学長室には来客が来ているそう。この書類はこちらで学長に渡しておくと言ったシンドに後の事は託し、鋼達二人は準備室を出た。

話しながら廊下を歩く。行き交う生徒達が皆、鋼の同行者に目を留めては振り返ってくる。

学内にいるクーの姿は相当に目立っていた。

「お、省吾達がいるな」

クーを引きつれ教室に戻ろうとしていた鋼は、その途上でぱつたりと友人を発見する。省吾と有坂、そしてそれぞれのルームメイトという組み合わせの四人が進路上にいる。

声をかけようと近づけば、有坂も目を丸くして意外そうな声をあげた。

「え、神谷君と……、クーさん？　なんで学校に？」

クーと面識のある有坂と省吾は多少驚いてるだけだが、初対面のあとの二人はぼかんとしていた。やたらと存在感のある美女の登場に、驚きで言葉もないという様子だ。

「丁度良かった。改めて紹介しとく」

言って鋼がクーの肩を軽く叩けば、意図を読んだ彼女は一步前に出た。

どこか自慢げというか誇らしげな表情でクーは胸を張る。

「今日からコウの護衛官となった、ダリア「クーレルだ。よろしく頼む」

「へ？」「護衛官？」

有坂と省吾が訊き返す。ああ、と頷いたクーに続いて鋼も説明を加える。

「貴族が連れて来てる護衛の人は学園じゃ護衛官って扱いだろ？あれの手続きを今済ませてきた」
そう。

クーことダリアクレインは、正式に鋼の護衛扱いとして学園に通える事となった。

昨日パルミナに帰ってきたクーがその提案を持ちかけてきた時は、そんな事が可能なのかといぶかしんだものだ。だが結局、一日準備に駆けずり回るだけでそれが成し遂げられてしまった。どうもルデスに様子見に帰った際に授かったニールの入れ知恵らしい。

クーだけ学園の生徒でないから、二年間は鋼達とあまり行動を共に出来ない。そういつた不満を漏らしたところ、ニールが色々と手配してくれたのだという。魔術協会が保証する正式な身分証明と、高位の魔術師であるニール個人からの推薦状を携えてクーはこちらに帰ってきたのだった。人里離れて暮らすニールでも協会というものには一応所属しており、コネもあるのだそう。

あとは鋼が日本の実家に連絡して承認を得てそちらの名義も貸してもらいつつ、しかるべき書類を用意するだけで済んだ。

ちなみにやはりダリアクレインという本名そのままは若干まずいので、気を利かせたニールが用意した名前が『ダリア「クーレル」』である。これからはそちらの名前を使うそうなので、偽名というより改名だ。

「え、じゃあ、ほんとに？」

「日本人でも護衛官って連れて来ていいものなん？」

「ああ。俺もちよつとだけ調べたが、制度上は何の問題もなかった。

日本人に護衛官がつくのは学園でも初めてらしいがな」

仮にも貴族の子女が通う学園なので、どこぞで雇っただけの護衛を連れて来ても認められたかは怪しいところだ。ちゃんとした身分証明がありニールという後見人もいて、鋼の実家が責任を負うという形なので、本来鋼の家とは何の関係もないクーでも認められたのである。

「あれ？ でも男子生徒に女性の護衛官って認められるの？ 寮に入れないんじゃない……」

「いや、寮は駄目だが問題ないらしい」

たとえ鋼の護衛官でもクーが男子寮へ立ち入るのは厳禁だ。その代わり護衛官も寮生活を共にするので、寮にいる間は男子生徒は男性護衛官が、女子生徒は女性護衛官が、雇い主でなくともそれぞれ警護を担当する。そういった制度が騎士教育学園では取られている。

それに元々貴族が一人もいない学園から離れた第二男子寮・女子寮に関しては、学園自体に雇われた護衛官が派遣されて常駐しているくらいなので、性差があるから寮では護衛できない、という問題はたいしたものではないのだ。

鋼も調べてみて初めて知ったそれらの事情を語ると二人とも納得したようだった。それでもこの展開への驚きが冷めやらないのか、いまだ少し呆然としているようだ。

「そちらの二人もコウの学友かな？ よろしく頼むよ」

「え、あ、はい！ こちらこそよろしくお願いします！ 私、魚住真紀って言います！」

有坂のルームメイトの魚住がやたらと挙動不審な態度で挨拶を返す。一ヶ月そこそこの付き合いでもっと遠慮のない快活な奴だと思っていたのだが、その彼女ですらキョドらせるとは。クーの容姿恐るべしと言っべきか。

最後の一人、省吾のルームメイトも大いに緊張しているようだった。

「よ、よろしくお願いします。ウチはケンネル＝レゾナというモン

です」

関西弁らしきものを喋っているが、省吾とは別。こちらの世界ではトリルなま訛りと呼ばれる方言であり、ケネルはトリル共和国からの留学生だ。緑髪の外人顔の少年の口から関西弁が飛び出すものだから、入学当初は鋼も違和感が凄かった。どういう相似か、トリルの方言は日本の関西弁とほぼ同じものなのだ。省吾と同室になった理由にその方言が関わっているかは定かではない。

ケネルとも一ヶ月そこそこの付き合いなので鋼もその人となりは把握している。魚住と並ぶやたらと快活で明るい、むしろ騒がしい類の性格なのだが、まるで別人のように大人しい自己紹介だった。「それにしても驚いたわ……。しばらく見ないと思つてたらいきなり護衛官だもの」

「まあな。といってもあんまり俺の護衛つてつもりは無いんだがな。俺の受けてる授業なら一緒に受けてもいいらしいから、クラスメイトが一人増えた程度に思つてくれ」

生徒として入学するよりは手段的に楽だったから、護衛官という体裁を取っただけだとはさすがに公然と言いつらい。ちなみに単独で冒険者稼業を長く続けていたクーは資金的にかなりの余裕があり、諸々の費用はそこから出ている。実態としても鋼が雇ったとは言いがたく、独力で入学してきた転校生といった感覚でこちらとしても扱うつもりだ。

「実を言うとな。日向にもルウにも、この件については伏せてたんだ。今から教室行くんだが、ついてこねえか？ あの二人の驚く顔が見られるぞ」

「いい性格してるわね……。道理で私も聞かされてなかったはずだわ」

出歩いていたのはたいした用事では無かったようで、結局四人もついてくる事になった。

教室でクーから新たな名での自己紹介を受けた凜の顔は、本当に見物だったとだけ言っておこう。

そういうわけで、鋼の学園生活にクーという護衛官が加わる事となったのだった。

「全くもう、何かこそそそしていると思ったら、私達を驚かそうと秘密にしていたなんて……」

「いい刺激になったろ？」

その日の放課後。

いざ帰ろうという段になっても愚痴らしきものをこぼす凜に悪びれず言い返しながら、鋼は学園の前庭を歩いていた。

既に学園敷地内の第一寮で暮らす、省吾・有坂・マルケウスといった面々とは別れた後だ。第二寮へと帰路につくのは鋼・日向・凜・クー・片平の五人である。クーは第二女子寮に住まうのが決定していた。

男一人に女四人なので鋼はこの時間になるといつも微妙に肩身の狭さを感じている。多分片平がいるからだろう。不思議と、谷と山脈を共にした戦友だけであればそういった感覚を抱いた事はないのだが。

「日向がそこまで驚いてなかったっぽいのが悔しかったがな」

「そんな事ないよ！。すごいびっくりしたよ？」

「確かに日向ちゃん、なんだか普通の反応でしたよね……」

「『へえ、そうなんだ！ びっくりしたよ。よろしくねクーちゃん！』みたいな感じだったからな……」

クーがその時の日向を真似て言う。本当にそんな感じに、さらっとした反応だった。むしろ片平の方が驚いているように見えたくらいだ。

ほんとにこの幼馴染は。ちびっこい背丈を視界の端に映しながら鋼は思う。鈍いのか鋭いのか、本当によく分からない。些細な事で

大袈裟に驚いたりする癖に、異様な察しの良さを見せる時もある。今回の事も、クーが護衛官として現れても想定していたかのようにある程度は落ち着いていた。

「ん……？　ね、ねえ鋼！　あれ見て！」

その日向が突然慌てたように前方を指差しだったので、鋼は一体何事かと反射的にそちらを向いた。クーに対する時よりも明らかに驚いている。

向いた先には校門付近に立つシンド教官の姿があった。

誰かを見送りに来ているようだ。校門から去ろうとしている人物に何かを言いながら頭を下げている。あれが学長室の来客だろうか？

そんな推測はその人物の顔を見た瞬間、何もかも吹き飛んだ。

「あのおっさん……！！」

知った顔だったのだ。

来客を見送り、シンドは肩の荷が降りた気分だった。

やはり緊張するものだ。同じ騎士の立場とはいえ、身分が違いすぎる。

相手は知名度でいえば『紅蓮の騎士』、デイン・グレイルにも勝るであろう、伝説の騎士。そして飛燕隊の分隊長である。

王城と王族を守護する飛燕隊といえば、最も荣誉ある騎士のერთ集团と言われている。その性質上平民が所属する事は許されず、権力を振りかざすだけの貴族もお断りという、血筋と実力、双方が必要とされる騎士隊だ。

加えて分隊長ともなれば、雲の上の人と表現しても過言ではないほどの地位にいとと言える。セイラン王国では一人の王族につき一つの分隊が警護を担当する。ある王族を守護する複数の騎士の中で、分隊長とはその最高位にいる責任者なのだ。

彼が来客した用件は明日の警備計画の打ち合わせだった。警備上の理由からまだ公的には伏せられているが、明日はヴェルニア王女殿下の学校見学が予定されているのだ。

その打ち合わせも無事に終わったところである。

また明日はより一層気を引き締めなければなるまいが、本日はもう緊張する必要もないとシシドは一息ついていた。そんな時にこちらの背後から、一人の男子生徒が追い抜くように隣を通り過ぎていく。

その生徒がカミヤであり、その目的が明らかに今見送った客人であると気付いた瞬間、シシドを先程とは比べ物にならない緊迫感が襲った。

また何かやらかすつもりか!?

そうして、カミヤは正門を抜け、かの騎士に追いつき声をかけたのである。

「よう、おっさん!」

……ああ。

あまりに礼を欠いたカミヤの挨拶に、シシドは半ば呆然としてしまった。

相手は貴族である。第二王女の近衛であり、英雄とも呼ばれる伝説の騎士である。発言力・影響力でいえば、この学園の学長より上かもしれない、そういう立場の相手である。

いや、だが間に合う。

かの騎士の性格は狭量なものではなかった。今すぐにカミヤに追いつき無礼を謝らせる。そうすればきっと、万事問題なく収まるはず。

奮起し、駆け出そうとしたシシドは見た。

かの騎士の予想外の反応を。

「カミヤ殿ではないか!」

なんだか旧友に再会したような口ぶりで、かの騎士　カシユヴ
アーニル・ルイーツは笑みを浮かべたのだ。

訳が分からず足を止めたシシドの横を、ムライとカガミ、そして
カミヤの護衛官の女性が通り抜けていく。彼女達も声をかければ、
ルイーツ卿も驚いたようにそちらを見て、そして親しげに言葉を交
わしだした。

「……………」

どういった状況か咄嗟に理解できず、シシドは立ち尽くす。

その隣にカミヤ達とよく一緒にいる女子生徒カタヒラが並んだ。

「あの、知り合いだそうですね……………」

シシドの心境を察してくれたのか彼女はそう教えてくれた。

「そう、か……………」

カタヒラは特に知り合いではないのか、カミヤ達には混ざらず様
子見しているようだった。なんとなくシシドも一緒になって、騎士
とカミヤの歓談を眺める。

半ば伝説と化しているかの騎士の逸話を思い出す。亜竜山脈に落
ちた迷い子であるカミヤ達なら、そこで知り合いになる機会もあっ
たのかもしれない。そういう事で納得しておいた。

ルイーツ卿は敬語だというのにカミヤ達が普段の口調で話しかけ
ている事がかなり気になったが。シシドは努めて、深く考えるのを
やめた。カミヤとの付き合い方においてこの心構えは重要なのであ
る。

なんだかどつと疲れた。

この光景を見なかつた事にして学園に戻るか、シシドは真剣に検
討を始めた。

しかし昨日は懐かしい顔と再会したものだ。

早朝の訓練の時間。いつもの無断で使っている校庭の芝に腰を下ろしながら、鋼はルデスで会ったおっさん、カシユヴァーとの経緯を思い返していた。

二年ほど前、ルデスで骨頭にやられかけていた集団のリーダー。それがあの壮年の男性だ。当時は彼らの正体を雇われ冒険者と説明されていたのだが、どうやらこの国の騎士だったらしい。デリケートな任務だとかで、二年前は正体を隠していたのだと昨日謝られた。まあ、その任務とやらを手伝わされた鋼達に謝る気持ちは分からないでもない。手伝いを引き受けた時点で、見返りとして予備の武器などもらっていたので特に不満もないが。

「なあなあアコウ。あれは何の訓練をやっているんだ？」

早朝訓練に初めて顔を出したクーも含め、戦友の少女達が鋼の付近に集まって座っている。クーが興味津々な様子で指差すのは有坂とマルの試合の光景だった。

「強化使った戦闘の訓練ってとこか」

「ああ、なんか言われてみれば覚えがあるな！」

覚えがあるのは当然で、ルデスでクー達にもさせた事がある訓練だ。

視線の先では有坂とマルがのろのろとした動きで訓練用の剣を交わしている。試合と呼ぶのはやや違和感のある低速の戦いだ。もちろんこれはそうさせているのであり、そしてその実態は真剣勝負であった。

はつきりと剣の形すら視認できるような遅い動きだけで戦えと、二人には制限を課している。互いの動きを見てあまり速度に差を出

すなとも。そんな形式で戦って果たして決着がつくのかとやる前のマルは疑問を呈したが、これは案外高度な駆け引きを要求するルーナなのだと思ってもって実感している事だろう。

相手の剣がこちらの体に届きそうな状況を作ってしまったら、防衛も低速で行わなければいけないためその時点でほぼ決着となる。何手も先を読んで『詰み』の状態を回避しつつ、相手を追い詰める必要があるのだ。

実戦では速度は違えど誰もが普通に行っている駆け引きであり、無意識にこれを実行するのが上手い者もいるだろうが、意識して訓練する事にはやはり意義がある。加えてこの戦いでは《身体強化》の魔術を解禁しているので、遅く動いても力押しで決着をつけてしまつのも可能だった。

「先を読むのに集中すれば強化が疎かになり、単純な力押しに対処できなくなる。かといって強化に頼りすぎれば、気付けば詰みの状態に持っていかれる。私もあれは苦労した」

「お前はああいう駆け引きが滅茶苦茶へたくソだったから……」
元々は駆け引きなど不要とばかりに力押しで戦うクーのために考えた訓練だ。当時を鑑みれば有坂やマルの方が余程そこら辺は出来ている。

「あの二人は強いのか？」

「強いぞ。有坂なんて魔術に初めて触れてからまだ一ヶ月くらいだつてのに、あれくらいは出来るようになった。《身体強化》の適性が高いらしい。マルも元から剣も強化も鍛えてたみたいで戦い方のバランスがいいし」

「コウが認めるほどか……。あの二人が一緒になってかかってきたら、私でも負けるか？」

軽い気持ちで『強い』と鋼は評したのだが、クーはかなり驚嘆していた。その反応を見て即座に鋼は訂正しておく。

「いやお前、強いつて言ってもな……。さすがにお前ら基準で言ったんじゃねえから」

「そうなのか」

はつきりと言うのは避けるが、今の有坂とマルが五人ずついて十人でかかってもクーは本気を出す事なく勝つだろう。入学してから一ヶ月と少し、自分達の強さが常識からやや外れたレベルにある事を鋼も理解してきている。戦闘の本職である騎士と同等以上と分かっているのだ、騎士候補生の一年生と比べるのは色々と間違っている。

なんだか不思議そうな顔で、クーはじつとこちらの顔を覗き込んでくる。

「……なんだよ？」

「なんと言ったか。ああ、そうだ。コウは丸くなったな」「は？」

思わず訊き返すも、凜も日向もその意味が通じているらしく横でうんうんと頷いていた。

「コウの基準で弱いなら、容赦なく弱いと言うのが以前のコウだと思っ」

「日本に帰ってからは丸くなったよねー」

「……剣の扱いを教えてもらった時のコウはとても厳しかったです。満場一致でそんな事を言われてしまった。確かにまあ、自分でも覚えがありすぎた。心の余裕の無かった当時、鋼の言動は傲慢で色々といひものも多かったと記憶している。」

「悪かったよあん時は……」

「悪くなどない！ おかげで私達は誰一人欠ける事なく生き残れたのだからな」

クーが断言すればまたもや横で頷く凜と日向。どう答えていいものやら。微妙なむず痒さを感じつつ、曖昧に頷いておいた。

「ところでコウは、何か訓練しないでもいいのか？ あの二人を見ているだけか？」

「今日はいい。頭の中で魔術のイメトレするくらいで」

「イメトレ？」

「頭の中だけで練習って意味だよ」

そんな会話をしていると、何やら不安そうな面持ちで凜がこちらを見つめていた。

「……あの。最近、あんまり魔術の訓練を実際にやらなくなりましてよな？」

「そうか？ 特に自覚はねえが」

自然体を意識してそう返事をする、言いたかないんだけど、といった気まずい様子で日向も続いた。

「こういう時に平然と嘘ついちゃうのが、鋼の悪い所」

「やっぱりそうなんですね？ ヒナちゃんも言うなら間違いないでしょうし」

「ん、何の話だ？」

意味が分からないクーだけが周りを見回して訊ねる。だが彼女も鋼の事情を知っている。すぐにどういう事が察したようで、クーも深刻な表情を作った。

「まさか。ちゃんと『食事』をしてないのか？」

「……私の知る限り、入学してから一度もありません」

「お前らは大袈裟なんだよ。んな心配せんでもいい。一昨日魔物料理も食ったし」

鋼には秘密がある。それは鋼だけでなく、この面子は色々と隠さないといけない事が多いのだが。

三人を心配させているのは、鋼が以前の異世界で獲得した困った性質に因よるものだった。

「でも売ってる魔物の肉って魔力抜いたやつなんじゃなかった？」

日向が余計な事を言い添える。だが丁度良く有坂とマルの訓練試合が終わったので、この話はここまでだと視線で伝えて鋼は立ち上がった。

実際、凜やクーがそこまで深刻そうに話すほど悪い状態でもない。一月前、兜のおっさんとやり合った際に魔力を使いすぎたというだけで、『食事』なしでも徐々に体調は回復してきている。それはも

ちろん、なるべく普段から魔力を使わないよう努力を続けてきた賜物なのだ。

色々鋭いところのある日向はそのあたりを見抜いているらしく、鋼の嘘を暴きはしたもののあまり心配はしていなさそうだ。全く困ったもので、この幼馴染が相手では強がる事も出来やしなかった。

その日、学園全体にどことなく浮ついた雰囲気があった。

気のせいではなく、少し騎士学校内で過ごせばすぐに目につくいつもの違いとして、いかにもな姿をした騎士らしき人物がそこらに立っていた。学園では普段から、護衛対象に常に張り付いているわけではない護衛官が好き勝手にうろついたりするのだが、それとは違いあからさまに堅苦しい空気を発散させている。

考え方が違うのだろう。周囲に溶け込んで護衛するのではなく、逆に存在を主張する事で敵を威圧しようという目論見だ。堂々たる振る舞いを求められる公人の護衛としては、こちらの方がふさわしい姿には違いない。

いかにも騎士らしい姿の人物達は本物の騎士で、現在学園にはVIPが訪れていた。

正式な通告が学園側からあったわけではないが隠す気もないらしく、朝から生徒の間ではこの噂で持ちきりだ。来週の記念式典にも出席予定のある親善大使、第二女王ヴェルニア殿下とやらがどうやら来訪しているらしい。

「来年この学校に入学するかもってという話も出てるんですよ。本当ならすごい事ですよね！」

「ああなるほど。来年入学する学校に見学に来たって事か」

「生徒の間で出てるだけの噂話ですけど……。情報の出所は貴族の生徒だって話もあって、皆盛り上がってますよ」

どこから聞き出してきたのかややハイテンションな片平がそんな情報も教えてくれた。威圧感を振りまく騎士達にめげず、嗜好きな生徒は今日も元気に活動しているのだろう。

「王女様が後輩とか妙な感じね……」

「護衛の騎士の人らが護衛官するんかな？ 何人増えるんやるか」
有坂と省吾も少しは興味があるようで、マルを抜いたいつもの面子で王女を話題にしつつ次の授業場所へ向かっているところだ。二つ目の授業だがいまだに王女には遭遇していない。授業を見学するにしても上級生のものを見に行っているのだと思われる。

ふと、廊下の曲がり角に立っていた青年騎士の前を通った際、彼と鋼の目が合う。

「カミヤ君じゃないか！」

なんとなく見覚えのある顔だなーと思っていたら声をかけられてしまった。

「あー……。なんて名前だったっけか」

「レイゴル、とかそんな名前だった気がします」

凜が小声で後ろから補足してくれた。

「それだ。おっさんの副官っぽい人の、弟だったっけか」

ルデス山脈で出会い、昨日再会したカシユヴァーの、十数人いた仲間の一人だ。カシユヴァーが騎士であれば当然彼の仲間達もそうなのだろう。王女の警護に駆り出されるのだから、それなりに出世しているようだ。

「僕なんかを覚えてくれたのかい？ いやあ、嬉しいねえ」

「あんたも俺らの顔覚えてたじゃん」

「いや君らの事はちょっと、忘れようにも忘れられないからね。隊長からも学園にいるのは聞いていたし」

騎士レイゴルは鋼の後ろ、日向や凜やクーに視線を移す。

「うわお……。あの時から分かった事だけど、美人揃いになっちゃってまあ」

褒められた一人である凜が居心地悪そうに鋼の背中に隠れた。

「あつと、ごめんね？ 再会したばかりなのに、ちょっと不躰ぶじつけな言い方だったかな」

そこまで言つてレイゴルは気付いたようだ。有坂や省吾、それに廊下を行き交つていた他の生徒の関心を自分達が引いている事に。んんつと咳払いをして、彼は話し方を改めた。

「注目を集めてしまった。すまない、カミヤ殿」

「ん、ああ……。殿なんて付けなくてもいいぞ？」

「我が隊の隊長はそう呼んでいますので、お気になさらず。……人の目がある場所では威厳を保つのも、僕らの大切な仕事なのさ」

台詞の後半は声をひそめ、どこか悪戯あくげっぽくレイゴルは言う。喋り方一つでがらつと印象が変わる青年だ。案外堅苦しいと思つていた騎士達も、付き合つてみれば気さくな人物は多いのかも知れない。「……二年前の助力、自分からも感謝を。長々と引き止めてしまつてすまなかつた。それでは」

最後にまた堅苦しい口調で別れを告げながらも、レイゴルの目は親しみを帯びていた。鋼達も軽い返事を返しその場を後にする。すかさず有坂と省吾が訊いてきた。

「なんで騎士の人と知り合いなわけ？」

「隊長つて人とも面識あるみたいな会話やつたしなあ？」

「ルデスで会つたんだよ……」

面倒なのでそうとだけ説明しつつ、あとははぐらかしたのだが。移動する先々でレイゴルのように声をかけてくる騎士が何人もいた。今日学園に来ている騎士は、二年前にルデスにもいた者の割合が何故だか妙に多いようだった。

午前の授業が終わりいつもの満月亭で昼食を取っていると、マルが妙な面持ちで問いを發した。

「カミヤ。聞いた話なのだが、飛燕隊の方々と知り合いなのか？」

「飛燕隊？」

学園のそこらに立っていた騎士達の事だろうとは思いつつも、初耳の単語だけ鋼は聞き返す。

「知り合いなのに、飛燕隊の名前は知らないのか？」

「いやまあ、そういうのちゃんと調べた事ねえしな。ルウは知っているか？」

「確か……、セイラン王国の、王族や王城を守る騎士隊の名前だったと思います」

マルもそれに頷いた。

「ムライはこちらの国の事をよく調べているな。今日学園に来ていたのは、第二王女ヴェルニア殿下の警護を担当する方々だ」

「王女の警護ね……。結構エリートっぽいじゃねえか。あのおっさん、昨日正体明かした時もそんな事欠片も言っただろ」

「何を言っている？ それとカミヤ、王女殿下のお名前を出す時は、せめて『殿下』か『様』を付けるべきだぞ」

「へいへい、分かったよ……」

面倒だから王女でいいだろ、という本音を隠し素直に頷いたのは、乱暴な言葉遣いを少しは改める機会かと思っただからだ。敬語なんて慣れだとシンドにも言われているし、鋼も直したくないわけではない。

「俺は本来、王族だろうが皇族だろうが関係なく接するというポリシーがあるんだがな……」

「なんだその取って付けたようなポリシーとやらは。今カミヤが考えただろう」

「で、飛燕隊の話じゃなかったのか？」

「うむ。そうだった」

話題が戻される。

「生徒の間で密かに話題になっているぞ。カミヤが騎士の方々と、何やら話していたと」

「どんだけ噂が駆け巡るの早いんだよ……!!」

頭を抱える鋼に、やんわりと省吾が突っ込みを入れた。

「いや、あんだだけ学園中で騎士の人らに声かけられてたら、トータ
ルやと目撃者かなり多いと思うんで？」

「ほんとに何人も話しかけられてたわよねえ……。まあもう神谷君
達の事だから、少々の事じゃ私は驚かなくなっただけ。学校の皆に
とっては違うでしょうしね」

「いきなりクーさんみたいなすごい護衛官も連れてくるし、神谷さ
んって元から注目されてましたからね……」

有坂と片平からも口々に言われ、鋼はもう色々諦めた。確かに
ここ最近、周囲から妙に注視されていると感じてはいたのだ。剣技
でも魔術でも、素人のクラスメイトよりは鋼達はずっと上のレベル
にいる。たとえそれが本人としては苦手な分野であってもだ。よっ
ぽど上手く手を抜かない限り、授業で目立ってしまうのは避けられ
ない。

「ん？ 私をすごい護衛官だと言ってくれたが、学校の者達は私の
実力など知らないだろう？」

「いやクーちゃん、実力とかじゃなくてね？ 外見的な意味だと思
うんだ」

「外見？ 私の外見は何やらすごいのか？」

日向が教えてやってもクーは本気で意味が分かっていない。自分
の外見につくづく無頓着なのだ。

「ほんとにこいつは……。マル、説明してやってくれ」

「何故僕なのだ！？」

狼狽するマルが面白かったので眺めていると、「説明してくれ」
とクーの矛先もそちらに向かう。そうはいないレベルの美貌にじっ
と見つめられ、いよいよマルケウスは追い詰められていく。

「そ、それは……。あなたがとても、う、う、うっ、……。い、言え
るかあ！」

叫んだ部分だけは顔を逸らし、鋼に向けた台詞である。言い切れ
なかったが面白かったので鋼としては満足だ。

限界を迎えた彼に代わりクーに教えてやる。

「お前がそこらじゃお目にかかれないほど美人なもんで、注目されんだよと皆は言ってるんだよ」

言った途端、有坂達がひそひそと「さらつと言ったわよ面と向かって……」「さすが神谷さんです……」「これは『鋼女たらし疑惑』がいよいよ強まったなあ」とか聞こえる程度の声で話していたがとにかく無視した。

クーはきよとんとしていた。

「美人？ 私がか？」

「全く自覚ねえのかよ……。それを訊き返すのが嫌味になる程度には綺麗な顔してるからな、お前」

「そうなのか。いや、全く自覚していなかったわけではなかったが。あまり意識もしてないのでな。面と向かって言われると照れるな」

「照れてるように見えねえぞおい」

1パーセントくらいは照れてるのかもしれないが、全くもって平静なクーだった。

「ったく。よく知ってる俺でも油断するるときつとするかもしれないってくらいなのに。本人には全くどうでもいい話か」

それこそ油断していたのだろう。少女達を前に無駄に強がる傾向のある鋼は、あんまりこういった事は言わないのだが。ついそう漏らしてしまった。

「コ、コウでもどきつとするのか……？」

何やらクーが物凄く驚いた顔でこつちを見る。……こいつ、年頃の男を一体なんだと思ってるのか。

「いや、しちや悪いか？ 俺ってサイボーグとでも思われてんじやねえだろうな……」

なんとなく言った自分の例えに、本当にそんな感じかもしれないと思いき直し鋼は内心凹んだ。三年前から二年前にかけてはひたすらに戦いの日々で、色気のある展開など無いどころか生き残ろうと必死だった鋼はかなり厳しく彼女達と接していた。

……そういう経緯があるからこそ、今でも彼女達に対してあまり

照れ臭さなどの感情を抱かず、性別が違えども上手く付き合えるの
だろうか。

「そ、そうか……。な、なるほど……」

サイボーグ云々は耳に入らなかつたのかさらつと無視され、クー
は何故だか急に落ち着きをなくしていた。そわそわしながら意味な
く辺りを見渡したり、鋼に視線を戻したりしている。

有坂達がさつきよりも声をひそめ、椅子を寄せてひそひそと話し
出した。

「え、この反応どういふ」「どういふも何も、そういう事じゃ

」「疑惑がとうとう確定してもたな。それにしても」

声が小さくちゃんと聞き取れないが、ろくな事を言われてないの
は分かるので鋼は努力して聞き流した。

「ちよつと失礼」

タイミングがいいのか悪いのか。

そんな時、鋼達の輪の外から声がかけられた。

そちらを見るとたつた今店に入って来たばかりらしい青年の姿が
あつた。

というか、レイゴルだつた。

先程の軽装ながらも一応鎧姿だつた時とは違い、私服姿だ。木綿
だか絹だか材質のよく分からないシャツとズボンで、こちらの平民
によく見られる格好である。知らない者が見れば騎士とは分からな
いだろう。

「ごめんね、騎士学校の生徒さん達だね？ こちらのカミヤ君を、
ちよつとばかし貸してもらいたいんだ」

「昨日この場所聞かれたから、来るかも知れんとは思つてたが。

おっさんの差し金か？」

「そうなんだ。悪いんだけど、これからちよつと時間もらえるかな
？」

「まあもう食い終わってるし、次の授業までまだまだあるから大丈夫なんだが……。俺だけか？」

「ああ、ごめんね、言葉が足りなかった。あの時共にいた彼女達も出来れば一緒に来て欲しい、というお達しさ」

聞き耳を立てているこの場の面々に配慮してか、レイゴルはどこか言葉を選んでいいる節がある。場所を移してまで話をしたいのであればルデス山脈関連の内容だろう。特に断る理由も見当たらなかった。

「……悪いな皆、先に学校に戻っててくれ。何やら用事らしいんで行ってくる」

興味深げな様子 of 他の皆を置いて鋼は席を立った。レイゴルが騎士だと知っているマル以外は「後で詳しい話聞かせてもらうから」といった決意すらその目に宿っているように見えて、少し引く。

日向と凜とクーを連れて、鋼はレイゴルの先導に従い満月亭を後にした。

「そういえば亜竜山脈の時はもう一人女の子がいたと思うんだけど。あの子とは合流できないのかい？ 出来れば全員招待したいし、少しくらいなら待てるよ？」

満月亭を出てすぐレイゴルからそんな提案があったのだが、鋼は首を横に振ってそれに答えた。

「……あいつはそもそも今、この街にいないくな」

「そうなのか。それはしょうがないね」

それから十分ほど彼について歩き。

案内された場所は、日本人街の中でも学園方向に近い、日本企業が出資している系列のあるホテルだった。

思っていたよりも大仰な場所に連れて来られたが、それでも高級ホテルというわけではない。一国の姫を護衛する飛燕隊の騎士が、果たしてこんなところに宿を取っているのだろうか？ 護衛対象と同じ場所に泊まるのが自然ではないのか。

疑問と僅かばかりの警戒を抱きながらも、鋼達四人は一階のある客室へと招待されたのだった。

「よく来てくれた。一方的に呼び立てる形になってしまい、すまない」

部屋のドアをレイゴルがノックし、許可をもらって入室した鋼達にまず投げかけられたのは謝罪の言葉だった。

声の主はカシュヴァーであり、その点について驚くべき要素があったわけではない。ルデスで会った時にも見た、彼の副官らしいレイキアという女性もいたが予想の範囲内だ。鋼が咄嗟に返答できな

かったのは、室内にいた最後の一人　三人目の存在を認めただからだ。

ふわりとした光沢ある金色の髪を持つ、碧眼の少女がいた。

まとう空気がその辺の一般人のものではない。高貴とても表現すべきだろうか。ぞんざいに扱うのは憚られる、強い存在感を持つ少女だった。学園で何人も貴族の生徒を見ているが、これこそ本物だと鋼に感じさせた。

どこか優しげな目鼻立ち。室内で彼女だけが椅子に座り、微笑みをたたえて行儀良く佇んでいる。鋼は彼女を知っていた。

面識があるわけではない。知り合いでもない。だがパルミナにやってくる前、セイラン王国と外交が始まった日本において、何度かテレビで見た顔だった。

「お呼び立てしたのはわたしなのです。ご足労、感謝致します」

立ち上がりペこりと会釈したその少女は、セイラン王国第二王女ヴェルニアその人であった。

「初めまして。ヒータットネット「ヴェルニア・セイリアスと申します」

それがフルネームらしい。驚く頭をどうにか働かせ、鋼は目上に名乗られた時の正しい対応をした。

「神谷鋼と申します、王女様」

「まあ、これはご丁寧に、ありがとうございます」

ヴェルニアは何故か意外そうな、それでいてどこか楽しそうな顔になった。心外だ。礼儀を知らない乱暴な口調だからそのつもりで、とか騎士に言われてたんじゃないだろうな。そんな事を思いつつも、鋼もさすがに安易には顔に出さない。

続いて凜が一步前に出た。

「お初にお目にかかります、村井凜と申します。お会い出来て光栄です、ヴェルニア様」

貴族の作法に則った、いや鋼にそれを判断できる知識など無いのだが、とにかく貴族っぽい所作で凜は制服のロングスカートを摘み、

丁寧なお辞儀を送った。かなりいいとこの育ちである凜だから、ヴェルニアから見ても恐らく堂に入ったものだったのだろう。鋼に対する時よりも更に驚いた風だった。

それから日向とかなり敬語が拙いクーも挨拶と返礼を済ませ、話題は呼び出された用件へと移る。

「二年前の事で、こうして直接お礼を申し上げたかったのです」

「お礼、ですか。彼ら騎士達を助けはしましたが、王女様に直に会ってまで感謝される心当たりはないんですが」

「まあ、もしかしてご存知ないのですか？」

「何をですか？」

「わたくしの病の事です」

「いえ……、病気なのですか？」

「以前はそうでした。竜脈草により、こうして完治できましたわ。騎士達とあなた方のおかげです」

自分が重病であり竜脈草が必要だった事、それを入手するため力シユヴァー達一行はル德斯へと赴いた経緯を王女は説明してくれた。セイランの市井では有名な逸話らしい。思ったよりもあの人助けは大きな影響をこの国に与えていたようだ。

「あなた方はわたくしとわたくしの騎士達の命の恩人。改めて御礼申し上げます」

そう言つてヴェルニアは深々と頭を下げた。凜はこの相手に頭を下げさせていいものかと戸惑ったようだが、鋼は素直に受け取っておく事にした。そうすべき場面だろう。王族の立場としては下げるべきではない頭だろうが、それでも実行したのはそれだけ配下の騎士達を大切に思っているから。そんな気がした。

「まあ、当時手伝った謝礼は既にもらってますし、今更謝礼金寄越せなんて言わないんで安心して下さい。今日の用件はそれだけですか」

早々に話を切り上げようとする鋼に、王女も騎士三人も焦ったような顔をした。

「命を助けて頂いたのです。言葉で謝意を示しただけで帰らせては王族の名折れ。せめて恩義に報いたいです。何かお望みのもの、もしくは何かお困りの事はございませんか」

面倒な事になった、というのが訊かれた鋼の最初の感想だった。

王族の名折れとまで言われては、それさえも突っぱねてこのまま帰るのはいい感情を残さないだろう。しかし正直、この提案には魅力を感じない。

「コウ、それなら依頼してみてもどうだ？　リ　」
「クー」

振り返り呼びかけた言葉は、口を滑らそうとしたクーの台詞を途中で縫いとめた。ほとんど睨むのに近い鋼の視線を受け、表情をなくして彼女は黙り込む。

そうして王女達に向き直り、鋼は意識して穏やかな口調を作った。「王女様に直接言葉をかけてもらった事からして、育ちの悪い俺達には十分過ぎる榮譽ですよ。これ以上の望みはありません」

それは明確な拒絶だった。言葉の裏の意味が理解できないはずがない、貴族社会で育ってきた王女と騎士達は、はっきりと表情を硬くしている。

恩を売ったのがただの貴族ならまだ良かった。望みを聞かれたら、鋼は『彼女』の搜索を依頼していただろう。

だが王族は駄目だ。

軽々しくパイプを作っている存在ではない。王女の名前で調査が行われ、首尾よく『彼女』を見つけたとしても、王族が直々に関わったという事実はあらゆる興味を引きつけるだろう。

それは避けなければいけない。鋼達にはどうしても隠さなければいけない秘密が一つあるからだ。

明るみになれば、この国にすらいられなくなる秘密が。

それはただの一般人に知られたところで誤魔化しが効く事なのだが、相手が王族となると非常にまずい事態になる。

「……しかし、姫様はそれではご納得いかない様子。なんでもいい

のだ、何か無いだろうか」

カシユヴァーに問われても少し考えてみるが、お金、くらいしか浮かぶものがない。もし要求して大金が用意されたとして、それは王女のポケットマネーから捻出されるのだろうか。

あつて困るものではないが……。『彼女』を探すための資金にしても、鋼達がパルミナから出られないからアルバイトで悩むのであつて、卒業後は解決するであろう問題だ。切実に欲しいというわけでもなし、やはり断りたいのだが。

何か気に障るような発言をしてしまったのだろうか、という不安そうな表情をそれほど隠せていない王女をちらりと見る。

内心でだけため息をつき、鋼は少し本音を見せる事にした。

「……俺達は日本人で、違ふ奴もいますが、二年はこの街を離れられないんです。気を悪くしないで聞いて欲しいんですが、王女様に直接何か褒美をもらつて、学内で目立つのは避けたいんですよ。王女様と繋がりがあるのか、と近寄ってくる人間だっているでしょうし」

なので、強く欲しいと思うものも無いから、謝礼は辞退したい。

そのような旨を鋼が語ると王女一行はほつとしたようだった。

「それではそのように配慮致します。内々に、となると国の予算は使えませんので、わたくし個人に出来る事はやや限られてしましますが……」

「……あの、国の予算使う気だったんですか？」

「当然です。出来る限りはご希望に沿つつもりですよ？」

にっこりと王女は笑う。

いやちよつと、そこまでの意気込みで恩返しされても重たいというか。迷つた末に鋼は言った。

「国民が働いて納めた税金は、国と国民のために使つてやって下さい」

「まあ。ありがとうございます。ご心配なさらずとも、国の事を疎かにするつもりはありません。使つた予算分は、わたくしのこれか

らの働きできつちり取り戻し、補填させて頂くつもりですわ。カミヤ様ご一行への謝礼として、ある程度の予算を割くのは既に承認されておりましたし……」

「え？ あのちよつと、王女様？ 何か今、聞き捨てならない事が……」

「はい、その。目立ちたくないという事でしたので申し訳ないのですけど、二年前の騎士達の報告もありまして、わたくしや議会の関係者にはあなた方の事は知られておりますわ。……あの、目立たないよう、話を広めるなど触れを出した方がいいでしょうか？」

冗談で言っているのかと思いきや、王女の顔は本気だった。この王女、かなり素でボケているというか天然らしい。

それは逆効果なのでカシユヴァーにやんわりと窘められ、少し顔を赤くした王女は居心地悪そうに身を縮めた。誤魔化そうと思っただのか、話題を変える。

「あ、あの！ それでは、何か謝礼については後で考えますので。良ければ亜竜山脈のお話をお聞かせ願えませんか？」

「それはまた、どうしてです？」
「わたくしにとって憧れなのです！ 亜竜山脈を散策するような気楽さで探検するカミヤ様達のお話は、何度わたくしの励みになったでしょう。是非ともご本人の口から山脈での話をお聞きしたいのです」

瞳をキラキラさせながら、興奮を隠し切れないという様子でヴェルニアは話をせがんでくる。なんたる事か。王族と関わり合いになるのは御免だというのに、これは完全に気に入られていないだろうか。

仕方が無い、か。

鋼はいよいよ観念してこの状況を受け入れる事にした。なんとなく、彼女とはこの場で別れてこれつきりとは出来ない気がする。

ただ、せめてもの抵抗というか最後の悪あがきとして、つい意地の悪い事を口走ってしまった。

「話すのは構いませんが、その代わり王女様の話も聞かせて下さい。病気だった頃の苦労話とか」

騎士達が一斉に眉をひそめる。レイキアが険しい顔で口を開いた。「カミヤ殿。殿下に対し少々、氣遣いの足りぬ発言ではありませんか？」

「……へえ？ あんたはそう思うのか？」

礼儀をかなぐり捨てて鋼が揶揄するように問い返すと、怒るべきなのかその意味を考えるべきなのか、判断がつかずに戸惑ったような顔を女騎士は浮かべた。それでも何か言い返そうとしたらしいレイキアを、カシユヴァーが手振りで抑えるよう示す。

騎士の分隊長は言わんとする事を察したようだ。

そして、王女も。

「いえ。すみません、カミヤ様。無礼はこちらでした。先にこちらが問いかけた事も、全く同じ意味ですものね。あなた方はほとんどが二ホン人。望んで亜竜山脈にいたのではないと、こちらも察せられますのに。あなた方の過去の苦難を想像せず、軽々しい質問をしてしまいました。お許しください」

「ああ、いえ。怒ったわけではないんです、王女様。頭を上げて下さい」

ここまで殊勝な態度を取られるとは思っていなかったのも、鋼は逆に慌ててしまった。この王女、王族というものの一般的イメージとは異なり随分と腰が低い。

「ただ、今の俺の質問で怒られるようだったら、こちらも王女様の質問に怒ってみせるべきだろうか、そのような事を思った次第で。実際に気分を害したりはしていません」

「まあ。カミヤ様は思ったより意地悪でいらっしやいますのね」

王女が口を尖らせて言う。そこに刺々しさは感じられなかった。

「すいません、王女様。以後なるべく控えるようにしますのでお許しを。そして王女様から謝罪の言葉を頂いたので、こちらも謝罪すべきですね。過去の病気の事、軽々しく口にして申し訳ありません」

「頭を上げて下さいカミヤ様。わたくしも気分を害したわけではありませんか」

まるで決められた台本の台詞を諳そつんじるように、王女はどこか楽しそうに頭を下げたこちらにそう声をかけた。先程とは逆の構図であり、互いに分かった上での言葉遊びだ。鋼は顔を上げ、目が合った王女とほんの僅かにだが笑いあった。

ああもう。

鋼の悪癖というか。ついつい試すような真似をしてしまったが。

この王女、ちょっと気に入ってしまったたかもしれない。

いきなりの和やかムード到来に、レイキアはとても不可思議そうな顔をしていた。なるほど、マルと同じ系統の空気の読めない直情型騎士なのだろう。脳内で勝手に失礼な決めつけをしつつ、鋼は連れの少女達を振り返る。王女に対する鋼の感情を背後からでも察しているらしく、皆意外そうにこちらを見ていた。

「ルデスの話俺が勝手に出しても構わないか？」

「それは、はい。お任せします」

当然隠すべき事は隠す。言外の意味も察し少女達が頷いたので、鋼は王女の期待に沿うよう、適当な話を二、三聞かせてやる事に決めた。

とはいえ昼休みは有限である。

王女のお付きの騎士三人や鋼の連れ達も合わせてしばらくルデスの話に花を咲かせていたのだが、そろそろ帰らねばならない時間が迫っていた。

そろそろお暇すると告げると、王女は残念そうに頷き、そして突如慌てだした。

「謝礼を何にするか考えていませんでした!」

そつえば鋼も特に考えていなかった。

議会の関係者に鋼達の事は知られているというし、目立たぬよう断るといふのも今更な話に思えた。適当に何かあっても困らないものをもらえばいいだろうか。

「あの、コウ」

悩んでいると、背後から近づいて来た凜から控えめな声がかげられた。

これを要求してはどうか、という提案がそつと耳打ちされる。吐息が微妙にくすぐったいが、そんなものを聞くにつれて全く気にならなくなった。

「へえ。なるほどな……」

「あ、あの、なんとなく思いついただけですから。コウの考えを優先して下さい」

「いや、俺のよりずっと名案だ」

恐らく鋼が悩み続けたとして、やはり金しかないか、という結論に辿り着いたと思う。凜が出したアイデアはそれよりも有用な報酬となり得るものだ。

「決まったのですか？」

何故だか嬉しそうに訊ねてくるヴェルニアに、鋼は望みを口にした。

聞いた彼女は、驚きと納得が入り混じった表情でしばらく考え込み「用意できると思います」と答えたのだった。

41 きな臭い気配

「あ、あの」

日向の後ろからおずおずとかけられる声。

「どしたのルウちゃん？」

日向は凜に問いかけながらも、だいたいのところは察しがついていた。自分が鋭いわけではないだろう。彼女がとても分かり易いのだ。

「どう、思いました？ その、コウと、王女殿下について……」

「どうと言われても、別に普通の人だっただろう？」

クーが率先して答えるも、それが凜の望む答えではないと日向は分かっている。今学園の廊下を一緒に歩いているのは日向・凜・クーの三人だけで、これは最近では結構珍しい状況だった。コウがない隙にどうしても凜は訊いてみたかったのだろう。

「クーちゃん。ルウちゃんはね、鋼が王女様となんだか気が合ってた風だったから、それがずっと引つかかっているんだよ」

「ヒ、ヒナちゃん！ そ、それは間違っているとは言いませんけど、もう少しあの、直接的でない物言いをですね……。というかどうしてそこまで分かるんですか！？」

「いやうん、あれから様子もちよっとおかしかったし、バレバレだったと思うのだけど。」

「まあルウちゃんが危機感覚えるのもちよっと分かるよ。初対面なお互い何か、通じ合ってた感じだったし」

「確かに何か、よく分からないところで二人とも笑っていたりしていたな。だがそれでルウが危機感を覚えるとはどういう意味だ？」

「……クーちゃん、それ本気で言ってる？」

「ん？」

クーが首を傾げる。滅茶苦茶美人だというのに、全くこの子は。彼女はこの手の話題にはびっくりするくらい鈍感なのだ。鋼に好意を抱いてはいても、意識しての恋愛感情ではないのだと日向は見ている。

彼女にも分かるよう噛み砕いて説明してみる。

「つまりね、クーちゃん。想像してみて。鋼があの子と仲良くなったとするでしょ？ 普段から会いに行くような、とっても仲の良い友達になっちゃったら、クーちゃんと鋼と一緒に過ごす時間が今よりは減っちゃうでしょ？ どう思う？」

「それは面白くないな……」

「それをルウちゃんは心配してるの」

なるほどなと真面目に頷くクーに、丁寧に解説するのやめませんか？ と言う恥ずかしげな凜。笑って流す日向。三人にとって至って平常運転の会話の光景である。王女様云々を人に聞かれたくないのでやや声は落としているのに、廊下にいる他の生徒達から注目されているのは、会話の内容を聞かれたからではないだろうと日向は思った。

日向から見て、凜もクーもとびきりの美少女だ。

クーはちよつと他ではお目にかかれない凄絶な美貌の持ち主だし、凜も家庭的でお淑やかな雰囲気を持ちながら、美人でその上胸だつて大きい。二人とも男の子からすればつい目で追ってしまう存在のはずだ。日向がそこに加わりいい感じに引き立て役となっている事もあり、生徒達の無遠慮な視線が集中しているのだと想像できる。

鋼や、他の皆がいればここまであからさまな視線じゃないんだけど。

やっぱりこの面子だけだと変に目立ってしまうのだろう。

「まあとにかく、大丈夫だよルウちゃん。気が合った女の子であっても、鋼がほいほい手を出すような性格じゃないのはルウちゃんだつてよく知ってるでしょ？ 偉い人には嫌われるよりは好かれる方がいいだろうし、何も問題ないよ」

凜はこちらの台詞にぎこちなく頷く。分かってはいても心から納得は出来ない、といった心境だろうか。鋼の評価については当然反論はない。

省吾を始めとする周囲の友人達は、戦友が全員女の子で鋼に対して皆好意的、という彼の境遇を時折からかいのネタにしているけども、実際のところ彼が女の子にだらしないという事実は無い。省吾達も本気でそう思っているわけではないだろう。だけど、恐らく友人達が思っているよりも鋼の性格はその対極だ。

あの少年はむしろ、同世代の平均と比べてもかなり禁欲的な方である。

「それにしても次の休日が楽しみだな！」

クーが生き生きした様子で話題を変え、日向と凜は頷いた。次の学校が休みの日、このメンバーに鋼を入れた四人で出かける事になっているのだ。

「ぬか喜びにならないといいけど……」

凜をも上回る喜びようの終始ご機嫌なクーに、友達としてはやや心配になる。予定が中止になる可能性もまだあるというのに、どんな想像を今から働かせているのやら。

「王女に頼んだあれは問題なければ明日届くんだろうか？」

「もしくは明後日だね。休日には間に合わせますって言ってくださいまし」

『あれ』とは、凜のアイデアでヴェルニア王女に提案されたとあるモノの事だ。

それが届き次第予定は確定し、休日は晴れて四人でお出かけとなる。

あ、と日向はここで己の迂闊さに気付き、口を半開きにして硬直した。こちらの反応に怪訝そうな顔をするクーのすぐ後ろに、丁度通りがかったシイド教官が歩いてきたところだったのだ。

明らかにクーが王女と言った瞬間を聞いていたようで、彼は顔を引きつらせていた。反対に日向はほっと安堵する。一般生徒に聞か

れてしまったかと一瞬焦ったのだが、この人ならまあいいかと思っただ。細かい配慮が出来る人で鋼も色々ぶっちゃけてる相手らしいし。

目が合ったので「聞こえちゃったみたいですけど気にしないでいいですよ」という意思を込めてにつこりと愛想笑いしてみれば、何故か教官は冷や汗でも流しそうな余裕の無い態度で小さく頷いた。

「ふふ、次の休みが楽しみだ。次に王女に会った時は礼を言わねばな」

「そだね。王女様がこの街に滞在中はもう一回くらい呼ばれるかも。また会いたいって言ってたしね」

シンドの存在を気にせず会話を続けると、先程よりも早足になった教官はよろよろと廊下を直進して去って行った。こうして彼の心労がまた一つ増えたのだった。

週末、鋼は平民を装って満月亭にやって来たレイゴルから、頼んでいたものを受け取る事となる。

謝礼金代わりに鋼達が王女に要求したのは、とある権利であった。届けられたのは通行証だ。

冒険者に発行されるものとだいたい同じもので、パルミナから外へ、もしくは外からパルミナに入る際にこれがあればすんなり審査が通るようになる。つまり端的に言うと、国境を越える事が出来るアイテムであった。

ちなみに学園の卒業時に与えられる正式な身分の保証と同等のものではない。あまりに特別扱いは鋼達にとっても王女にとっても外聞が悪く目立ち過ぎるため、身分の保証は不完全なものにしてもらった。これはパルミナに限定した特殊な通行証である。

例えるなら冒険者仮免許といったところだろうか。

セイラン国内を旅行、または別都市に移住するには不十分なものだが、ギルドから依頼を受けて周辺に魔物を狩りに行くくらいなら問題はないという代物だ。もちろん原則としてついて回る『日本の物を持ち出さない』ルールは厳守しなければならぬし、破れば重罪に課せられる。

兎にも角にも、こうして鋼達は一般の日本人にとっては恐らく初となる、街からの外出許可を手に入れたのだった。

友人達にもひとまず行き先は伏せ、寮の外出許可をもらうのに適当な方便をでっち上げ。

休日。

連れ たつて出かけた鋼達は、冒険者・傭兵仲介ギルドの看板を揃って見上げていた。

「ここへ来るのも久しぶりだな……」

一ヶ月前、ルデスに旅立ってから一度も来ていないというクーが懐かしげに呟く。鋼は一度来ているが日向と凜は初めてだ。物珍しげに二人はパルミナ支部と書かれたギルドの建物を眺めている。

時刻は早朝だが、思ったより人の通りはある。もちろん混雑しているとはまではいかないが、こういった稼業の人間達は朝も早くから活動を始めているようだ。

ギルドに入ってみれば依頼の張り出されたボード前に冒険者らしき人間が数人集っていた。四人が足を踏み入れた途端、鋼が予め覚悟していた通りにギルド内から一斉に注目を浴びる事となった。

「おい見ろ、やっぱ生きてたみたいだぞ。『銀の騎士』だ」

「ガキばっか、女ばっかだな。連れてんのは『銀』の関係者か？」

冒険者達の間で密やかに会話が交わされ、その一部が漏れ聞こえてくる。それは席につき朝食を取っているいくつかの集団からも例外ではなく。思わず萎縮する凜の背を日向が励ますように支え、後押しする。場違いな三人の学生と有名な銀の騎士という取り合わせ

が目立たないはずがない。今後のためにも早々に慣れておくべきだろう。クーが平然と視線を無視するのを鋼も見習う事にした。

四人はそろそろとボードに向かう。元いた冒険者達がさりげなくこちらから距離を置いた。

「クー、お前に任せた。言ってた通り、今日中に終われる手頃な奴を頼む」

「了解した。冒険者なら私の方が先輩だからな、任せてくれ」

得意げにクーが胸を張る。こうして彼女一人に任せてしまうのであれば、あとの三人がボード前までついてくる必要もないのだが。

クーから離れた誰かがその隙に他の冒険者からちよっかいをかけられても面倒だ。

鋼達はここへ、冒険者として依頼を受けに来た。

もちろんクーを除いた三人はギルドに認可された便利屋、いわゆる『冒険者』ではない。学生という身分、日本人国籍、年齢等を鑑みれば、冒険者のライセンスを鋼達三人が取得するのは難しいと思われる。孤児だろうが外国から逃げてきた犯罪者だろうが、とりあえず審査は通る、みたいな話を聞いた事もあるのだが、通常パルミナから外へ出られない日本人はさすがに例外だろう。冒険者としてそれはいくらなんでも話にならない。

公的にはクー単独で依頼を受けて、通行証を所持する後の三人は堂々と彼女と共に外出し、四人で依頼を果たす。今日の予定はそういう手筈になっていた。

「ふーむ……、憑き獅子の討伐か……」

依頼の数々を見て何やら葛藤しているクーを横目に、鋼もボードに目を移す。

『小規模の 魔狼 の群れの討伐』

『はぐれ 憑き獅子 の討伐』

『至急・ 紅孔雀 の羽根五匹分求む』

『テナ川流域の調査依頼・ ガイス 大量発生について』

ギルドに仲介された依頼の案件が並んでいる。確か 魔狼 は畑

を荒らす魔物の代表格といふべき有名な奴だ。それ以外は知らない魔物の名前ばかりで興味深い。

他にも商隊の護衛だとか、『セリヤ草』とかいう植物を取って来いだとか、様々な種類の依頼がある。

「決めた。これにしよう」

そう言つてクーがボードから剥がしたのは『はぐれ 憑き獅子の討伐』と書かれた紙だった。どうやらこれをギルドの窓口に行けば、正式に依頼の受諾となるらしい。

「チツ、取られたか」

背後から舌打ち交じりの声がかかる。

振り返ると傷跡の走る男の顔がそこにあつた。相手が軽く手を拳げる。

「よお」

「バート？ こんなとこで何やってんだよ？」

「そりゃこつちの台詞だつつうの。俺はしばらく前から傭兵やってんだ。正規のな」

闇傭兵ギルドの件で一悶着あつた男、バートが鋼達のすぐ後ろに立っていた。鋼達の後に建物に入ってきたようだ。一月ぶりの再会だった。

彼の向こうには何人か、見覚えがある気もする荒事に慣れた雰囲気、気の男達が並んでいる。多分バート直属の部下だった男達ではなからうか。闇傭兵ギルドを鋼達が蹂躪したあの一件以来、何人かで正規ギルドの傭兵に鞍替えしたのだろう。

「取られて悔しい程度には割りのいい依頼なのか、これ？」

「そこそこな。獅子は油断は出来ねえ魔物だが、その分報酬もたけえ」

その時クーが「バート？」と呟きを漏らした。闇ギルド壊滅の経緯は簡潔にクーにも教えていたのだが、予想外の出来事に驚いているようだ。彼女にとってはバートとは死の谷以来の再会である。

「この街で会つたとは聞いていたが……、まさか傭兵とはな」

「……そう睨まないでくれ。あん時は悪かったと思ってんだ、これでも」

「……まあ、コウや皆が許したのならそれでいいさ、私は」

渋々といった様子で頷いたクーに対し少しは緊張していたようで、バートが小さく息をつく。ボードの前を占拠し続けるのはいい加減問題なので鋼達は少し移動した。

「それにしても……、生きてたんだな。先月カミヤの傍にいなかったもんだから、俺はてっきり……」

クーに目をやりながら再度口を開いたバートが、最後まで続けず口ごもる。

「谷で死んだと思っていたか？」

「最後に見た状況を考えたらそれが自然だったもんでな。俺の方からは訊き辛い話題だし」

「あいにくこの通り、ぴんぴんしているぞ。全員でちゃんと生き残ったさ」

「全員かよ。ほんつと無茶苦茶だな、お前らは」

憎まれ口を叩きながらも苦笑を浮かべたバートは、鋼からは安堵したように見えた。善人とは言えない傷跡の男は、多分根っからの悪人でもないのだ。

「にしてもカミヤ、なんで朝からこんな所にいる？ 依頼を受けたところで外に出れるのはそいつだけじゃねえのか」

「ちよつとしたツテがあつてな。俺らも外に出れるんで、四人でこれから魔物退治だ」

「……おいおい。ニホン人なのに許可下りたつてののか？ どこがちよつとした」ツテだよそりゃあ……」

気を利かせたのかクーが「私は依頼を受けてくるから、待っていてくれ」と言い残しギルドの窓口へと向かう。こちらの『ツテ』に顔をしかめるバートに、丁度いい機会なので鋼からも訊ねてみた。

「あれから闇ギルドはどうなった？ 俺も多少は情報収集してみたが、内情を知ってるなら教えてもらいたい」

「内情って言ってもな……。あれ以来組織の影響力は落ちまくって、しょぼくれた規模になりながらも一応は存続してる、としか言いようがねえな。残ってるのはほとんど、組織がないと食うのに困るような行き場のねえ奴らばっかだ。それ以上の事は知らん」

「いや、助かる。そんだけ聞ければ十分だ」

教えてもらった情報を心に留め、鋼はちらりと凜の様子を窺った。この中で最もバートを嫌っている少女は彼をいないものと扱っているようで、ギルド内を観察しては日向と雑談している。ちなみに朗らかに話す日向の態度を見て、無表情の彼女しか知らないバートは反応に困ったような表情をしていた。

バートの部下も待っている。そろそろ話を切り上げようかという雰囲気になり、最後にバートが「念のために教えとくが」と前置きして不穏な情報を教えてくれた。

「最近この街にきな臭い連中が出入りしてるらしくてな。街中でも一応、ちよつとは気を張ってた方がいいぞ」

「きな臭い連中？ そりやまたどういふ集団だよ」

「さあな。宗教団体だか市民団体だか、聞き慣れん単語をオルタムが言ってたが……。あいつから来た情報だからな、それなりに警戒が必要な連中なんだろうよ」

闇ギルドが健在だったなら、非法組織の類であれば牽制するなりしてでかい顔はさせないのだが。そんな愚痴をオルタムが漏らしていたぞとバートが言うのを聞いて、鋼は先月の一件をちよつとばかり反省した。バートはあの髭男といまだ付き合っているらしい。

とにかくその怪しげな連中が今、野放しになっているとの事だった。とってもこの話だけ聞いて何か判断するには情報が少なすぎる。バートも似たような感想のようだ。

「別に闇ギルドってわけでもなく、ちゃんと名前のある団体らしい。正直話を聞いても何が危ねえのかよく分からなかったな。オルタムもはつきりした事は分かかってねえみたいだったが、とにかくなんかきな臭いんだと。街の裏側で何やら動いてる気配があるとかで。あ

いつのそつという嗅覚は結構信用できるからな。俺も一応警戒しておくつもりだ」

「俺も心に留めとくよ。来週は国交樹立の記念式典だしな、マジでなんかあってもおかしくないか。……わざわざありがとな」

「おう。んじゃ、取られる前にいい依頼探すとするか」

軽い挨拶で別れを済まし、バートは仲間達に声をかけてボードの方へ向かった。

少しして、手続きを済ませたクーがこちらに戻ってきた。正式に依頼を受諾し詳しい説明も聞いてきたらしい。

目的の魔物が出るのはパルミナの東にある小さな集落周辺との事で、余計な口を叩かず鋼達はさっさとギルドを出た。寮の門限があるせいで日帰りで仕事を終わらせる必要がある。時間の無駄は許されないのだ。

街の入り口へと四人で歩きながら、クーから依頼についての詳細を聞く。

目標は 憑き獅子 という魔物の討伐。

鋼にとって初めての魔物退治のアルバイトはこうして始まったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7255s/>

ソリオンの八ガネ

2011年10月26日02時28分発行